

博士論文

明治神宮外苑における競技場の  
軸線からみた配置計画に関する研究

令和元年度

筑波大学大学院 人間総合科学研究科  
博士後期課程 芸術専攻

今 和俊

筑波大学





## 目次

### 第1章 序論

1.1	研究の背景	1
1.2	研究の目的と意義	5
1.3	既往研究と本研究の位置付け	6
1.3.1	明治期から戦災復興期における都市計画に関する既往研究	
1.3.2	明治神宮外苑に関する既往研究	
1.3.3	明治神宮外苑競技場に関する既往研究	
1.3.4	国立霞ヶ丘陸上競技場に関する既往研究	
1.3.5	本研究の位置付け	
1.4	研究の方法	13
1.5	本章のまとめ	16

### 第2章 明治神宮外苑の成立前史

2.1	青山練兵場と明治天皇のゆかり	21
2.1.1	明治天皇の聖蹟	
2.1.2	下屋敷跡地から青山練兵場へ	
2.1.3	日本大博覧会構想から明治天皇大喪儀へ	
2.1.4	明治聖代記念事業と明治神宮の創建運動	
2.2	社会情勢と識者等の懸念	30
2.2.1	明治天皇の教育に関する勅語	
2.2.2	国内情勢と帰一協会	
2.2.3	国際情勢と日本の立場	
2.3	教育者・嘉納治五郎の体育と阪谷芳郎の「明治神宮御造営ノ由来」	32
2.3.1	嘉納治五郎の諸外国歴訪・ドイツ	
2.3.2	嘉納治五郎の諸外国歴訪・イギリス	
2.3.3	嘉納治五郎の道德教育と競技場建設の建議	
2.3.4	阪谷芳郎の「明治神宮御造営ノ由来」	
2.4	皇室と体育	37
2.4.1	皇太子裕仁親王の欧州歴訪・イギリス	
2.4.2	体育御奨励の令旨	
2.5	本章のまとめ	40

## 第3章 明治神宮外苑競技場の成立

3.1 明治神宮外苑造営構想	45
3.1.1 競技場の建設構想	
3.1.2 明治神宮外苑の造営計画	
3.1.3 競技場及び主要道路の配置計画の検討過程	
3.2 明治神宮外苑競技場の計画	52
3.2.1 嘉納治五郎と小林政一が参照した主な競技場	
3.2.2 明治神宮外苑競技場の建設	
3.2.3 明治神宮外苑の造営	
3.2.4 明治神宮外苑競技場の方位の検証	
3.3 本章のまとめ	72

## 第4章 国立霞ヶ丘陸上競技場の成立

4.1 明治神宮外苑競技場と第12回オリンピック東京大会	77
4.1.1 オリンピック競技大会の招致	
4.1.2 競技場の建設地	
4.2 戦中・戦後の明治神宮外苑と明治神宮外苑競技場	82
4.2.1 戦中の体育大会について	
4.2.2 戦時体制下の明治神宮外苑と明治神宮外苑競技場	
4.2.3 明治神宮外苑競技場からナイルキニック・スタジアムへ	
4.3 国立霞ヶ丘陸上競技場の建設	88
4.3.1 国際大会の招致と競技場の建設地	
4.3.2 国立霞ヶ丘陸上競技場の計画	
4.3.3 第3回アジア競技大会と第14回国民体育大会東京大会の開催	
4.4 国立霞ヶ丘陸上競技場の改修	99
4.4.1 国立霞ヶ丘陸上競技場の改修計画	
4.4.2 第18回オリンピック東京大会の開催	
4.4.3 国立霞ヶ丘陸上競技場の方位の検証	
4.5 本章のまとめ	118

## 第5章 結論

5.1 各章のまとめ	…………… 125
5.1.1 第1章のまとめ	
5.1.2 第2章のまとめ	
5.1.3 第3章のまとめ	
5.1.4 第4章のまとめ	
5.2 結語及び今後の展望と課題	…………… 129
5.2.1 結語	
5.2.2 今後の展望と課題	

## 謝辞

本研究に関する研究業績

参考文献リスト

## 資料編

明治神宮外苑競技場図面，国立霞ヶ丘陸上競技場図面

神社奉祀調査会委員一覧，明治神宮造営局職員一覧，国立競技場拡充計画協議会委員一覧

略式年表



第1章

序 論



## 1.1 研究の背景

19世紀末のパリ大学ソルボンヌ大における会議でフランスのピエール・ド・クーベルタンが古代ギリシャのオリンピアの祭典をもとにして世界的なスポーツ大会を開催することを提唱し、決議された。第1回オリンピック競技大会は、1896（明治29）年にアテネ（ギリシャ）で開催された。我国は1912（明治45）年、ストックホルム（スウェーデン）で開催された第5回オリンピック競技大会に初参加して以後、オリンピック競技大会において有力な参加国としての地位を築いてきた。

こうした中で、第32回オリンピック競技大会〔2020（令和2）年〕の招致に向けて、明治神宮外苑（以下「外苑」という。）に新国立競技場の建設を計画してオリンピック競技大会の招致に至った。しかし、新国立競技場の建設に関して開催された国際設計競技によるデザイン案<sup>注1)</sup>が発表されて以降、その計画や規模が巨大な施設であるがゆえに、外苑の歴史や景観との関係、膨大な建設費用、競技場建設後の運営方法に至るまで多くの問題を提起することになった。こうしたことから様々なレベルでのシンポジウムや建築家等による企画展が開催されるなど、各所で新国立競技場をめぐる議論が展開される。結果として国際設計協議によるデザイン案は白紙化され、公募型プロポーザル方式で新たにデザイン案を募り、応募された計2案から、A案<sup>注2)</sup>に決定した。

新国立競技場の前身の国立霞ヶ丘陸上競技場（以下「国立競技場」という。）は、建設に際して明治神宮当局から高さの制限などの要望が挙げられる中、オリンピック競技大会の招致を前提に1958（昭和33）年に建設され、同年5月から6月にかけて第3回アジア競技大会が開催された他、1964（昭和39）年に開催されたアジアで初のオリンピック競技大会（第18回大会）のメイン会場であった。その後、さまざまな国際大会が開催された他、コンサート会場としても利用されて来たが、時間の経過とともに施設の老朽化や新たな競技場の国際基準にそぐわないことなどから、大規模な国際競技大会の開催が難しくなっていた。こうしたなかで、第32回オリンピック競技大会〔2020（令和2）年〕の招致に関連して、検討の結果、国立競技場を取り壊すことが決定したのであった。

一方、国立競技場の前身は、明治神宮外苑競技場（以下「外苑競技場」という。）である。外苑競技場は乗馬で身心鍛錬に励まれた明治天皇の「叡慮」に沿い、「時代の進運」と嘉納治五郎<sup>注3)</sup>の提言によって建設されたもので、当時、東洋一の陸上競技場といわれた日本で最初の本格的な陸上競技場である。1924（大正13）年に建設され、現在の国民体育大会の始まりといえる「第1回明治神宮競技大会」が開催された他、第12回オリンピック競技大会〔1940（昭和15）年、開催予定であったが戦争の影響により中止〕の開催候補地であった。「月島」、「外苑競技場改造」、「代々木」、「駒沢」などを候補地とする競技場建設計画があったが、「外苑競技場改造」の計画は外苑の風致という観点から議論となった。

国立競技場の前身が外苑競技場であったことから分かるように、国立競技場の敷地は明治

神宮に付属する外苑の敷地であった。外苑は、我国のスポーツ界の聖地であることは言うまでもないことではあるが、複雑な歴史が積み重なった外苑における競技施設の計画過程について検討することは重要な課題である。外苑に競技施設が建設された背景として藤田は「現在でも同様だが、「オリンピック」といふ大きな政治的・経済的効果が見込まれる巨大スポーツイベントの将来的誘致を視野に入れた国際的文脈に基づき、それに不可欠なインフラとしての「競技場」といふ近代西洋の最新施設を導入することが目的であった。」<sup>1)</sup>と指摘している。

他方、明治天皇と昭憲皇太后を祭神とするのが明治神宮（内苑）である。明治神宮は、明治天皇の崩御〔1912（明治45）年7月30日〕を受け、在京有志が永久に崇敬追慕の誠を捧げ奉ろうと明治神宮創建を政府に請願し、帝国議会で可決されたことで造営されることになった。明治神宮は内・外苑に分ち、1920（大正9）年、明治神宮（内苑）は代々木御料地に国費で創建され、外苑は1926（昭和元）年、青山練兵場に明治という時代の「聖徳」を記念するために献費で造成された。青山練兵場は観兵式に明治天皇が頻繁に訪れていただけでなく、明治天皇大喪儀の式場であった。山口は、外苑を含む形で造営された明治神宮を「国民による国民のための神社！」<sup>2)</sup>と評し、青井は外苑を「「神聖」と「開放」の両方を担保すべき両義的な場所」<sup>3)</sup>と摘指している。

外苑以外にも、全国各地の公園や地名などからその場所が明治天皇ゆかりの地であったことが伺い知ることができる。というのも、明治天皇は各地を行幸あるいは巡幸し、先々では行在所や御野立所、御小休所（図1-1-1）などが設けられ、これらの行在所や御野立所、御小休所などは、後に明治天皇の聖蹟として史蹟名勝天然記念物法〔1919（大正8）4月10日公布〕に基づいて主に1933（昭和8）年から1939（昭和14）年にかけて国の文化財に指定されたことによる（全国377件・東京府15件）<sup>註4)</sup>。戦後、明治天皇の聖蹟は史跡指定を全国的に解除〔1948（昭和23）年6月29日告示〕されたが、現在もその場所に記念碑や案内板が建てられている場合が多い<sup>註5)</sup>。小田部は明治天皇の足跡そのものには「明治以後の天皇家と地域との関係のあり方が集約されている」<sup>4)</sup>と指摘している。

また、外苑は青山通りにある青山口から軸線となる並木道（ヴィスタ）の正面に聖徳記念絵画館が位置する（図1-1-2）。外苑の空間構成について長谷川は「青山練兵場と近接する甲武鐵道とその引き込み線の存在、そして青山北町と千日谷の変化を背景に、敷地の利用形態を決定付ける天皇の位置（玉座もしくは葬場殿）が敷地東側から北側へと移動し、それに伴い主軸が東西方向から南北方向へと変化したことにより、日本大博覧会構想と類似した幾何学的な配置計画でありながら、南北方向を主軸とする外苑の空間構成ができ上がった」<sup>5)</sup>と指摘している。

この他にも、当時実施には至らなかったが、軸線となる並木道（ヴィスタ）の先に記念建造物を配置する手法で構想された官庁集中計画（図1-1-3、図1-1-4、図1-1-5）や大東亜建設忠霊神域計画（図1-1-6）があった。

近代化という社会の変革に伴い、明治期において各地で都市改造や官公庁施設が新たに建設され、東京では銀座煉瓦街の建設などがあった。藤森<sup>6)</sup>は、明治期の東京における銀座煉瓦





図 1-1-1 明治天皇御嶽神社御小休所  
(出典:筆者撮影)



図 1-1-2 明治神宮外苑青山口からの並木道  
(出典:明治神宮奉賛会:明治神宮外苑志,明治神宮奉賛会,1937)

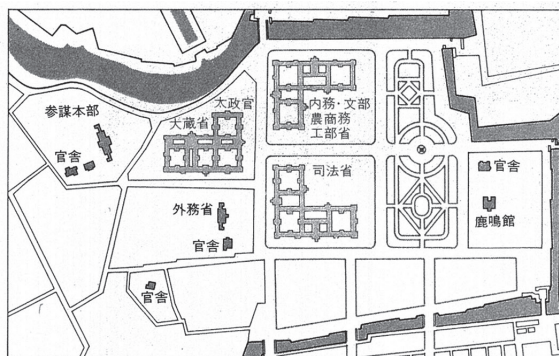
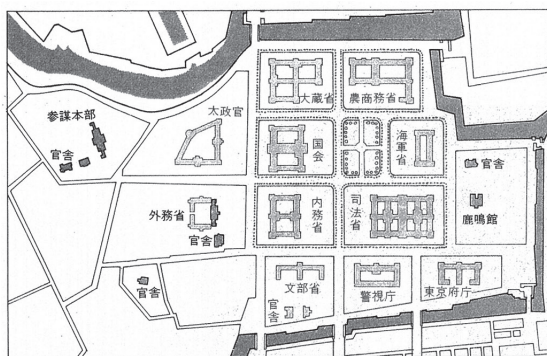


図 1-1-3 明治 18 年 官庁集中計画 コンドル第 1 案 (左) 第 2 案 (右)  
(出典:藤森照信:明治の東京計画,岩波書店,1990)

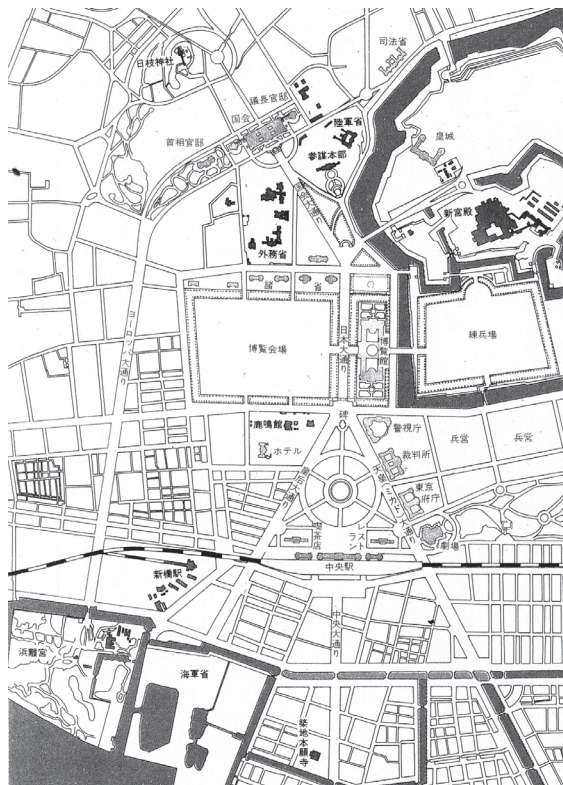


図 1-1-4 明治 19 年 官庁集中計画  
ベックマン案  
(出典:藤森照信:明治の東京計画,岩波書店,1990)

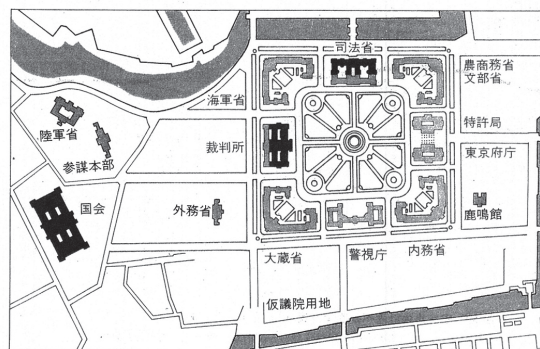
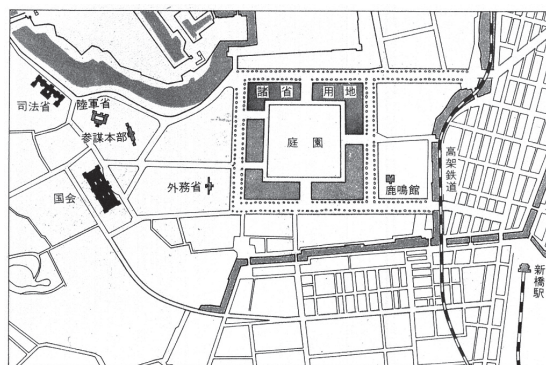


図 1-1-5 明治 20 年 官庁集中計画  
ホープレヒト案 (上) エデン案 (下)  
(出典:藤森照信:明治の東京計画,岩波書店,1990)

街計画をはじめ防火計画、市区改正計画、官庁集中計画について検討し、官庁集中計画を明治固有の時代精神であった欧化主義のバロック都市計画案としている。

一方、地方都市においては府県庁舎などの官公庁施設が設置された。その際、それまで政治機能を担ってきた城郭に代わって官公庁施設が集積して、新たに官庁街を形成した都市もあった。また、近代に建設された都市施設として、広大な土地を有する城郭周辺に軍事施設が設置された軍都もあった。松浦<sup>7)</sup>は軍都における官庁街の都市デザイン手法として「広小路等の既存の城下町基盤をうまく活用する形でヴィスタの焦点に官庁街を形成したり、既存の小広場に面する形で官庁街が形成されるなど、各都市独自の都市デザイン手法が存在した」としている。さらに松浦<sup>7)</sup>は「官庁街の形成は、鉄道駅の設置と共に、明治期における城下町都市の新たな都市骨格を形成・強化する重要な役割を果たし、城郭・官庁街・鉄道駅を連絡する街路整備によって、近代都市軸が形成された」としている。

明治・大正期の都市計画において、バロック様式の軸線となる並木道（ヴィスタ）の正面に記念建造物を配置する都市計画手法は一般的かつ重要な設計手法の一つであった<sup>8)</sup>。また、戦後には広島平和公園計画（図1-1-7）などにこの設計手法が用いられている。

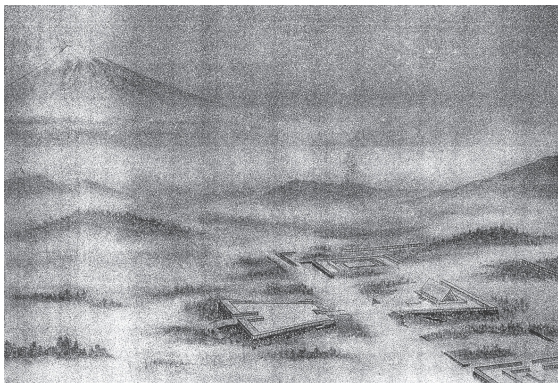


図1-1-6 大東亜建設忠霊神域計画 鳥観図  
(出典:丹下健三, 藤森照信:丹下健三, 新建築社, 2002)

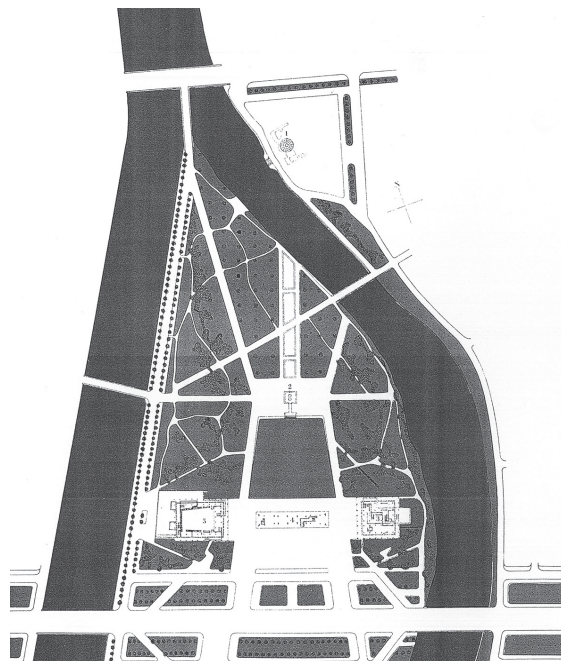


図1-1-7 広島平和記念会館総合計画  
(出典:丹下健三, 藤森照信:丹下健三, 新建築社, 2002)



## 1.2 研究の目的と意義

本節では、研究の目的と意義を示す。この敷地が青山練兵場当時、観兵式に明治天皇が頻繁に訪れていた他、明治天皇大喪儀の式場として葬場殿が設けられたことで国民追慕の霊域として崇められることになっていた<sup>9)</sup>。こうした中で明治神宮は創建されることになり、外苑は青山練兵場に造営されることになった。

外苑の造営に深く関わった阪谷芳郎<sup>注6)</sup>の謹話が当時の新聞<sup>10)</sup>に記載されている。その中で阪谷は、外苑に設ける記念建造物について「此處に出来る建造物は心ずしも急いで工事に着手するには及ばぬ、假令三十年五十年或は百年以上後世に於て其事業を完成し又は開始する事決して不可ではない、唯其趣旨が明治天皇を記念すると云ふにあれば夫れで十分である。」と述べている。また阪谷は、1916（大正6）年3月4日、麻布区役所楼上で演説している。その中で阪谷は、「要するに青山練兵場全体の場所は之を一つの記念碑と看做して、其場所に記念として物を言はせると云う事が一つの理想に成つて居ります、此理想が実現さるれば明治年代の人が先帝先皇后の御洪恩に報ずる為に造った物であると千年の後に遺して恥しくあるまいと思ふ」<sup>11)</sup>と述べている。

外苑はバロック様式の一般的かつ重要な設計手法である軸線となる並木道（ヴィスタ）を設けた設計手法で造営されており、幾何学的秩序を基礎として施設を配置したものと考えられることから、外苑における主要施設や主要道路の配置計画は明治天皇を記念することを意図して計画・デザインされたものと推察される。

一方、戦後、建設されることになった国立競技場は建設に際して「立地的にも一つのモニュメンタルな建造物として位置付けられ」<sup>12)</sup>ているが、その計画過程や計画の意図については必ずしも十分に検討されていない。複雑な歴史が積み重なった外苑における競技施設の計画過程の変遷について検討することは重要な課題である。

そこで本研究では、外苑競技場及び国立競技場を研究対象とし、外苑競技場及び国立競技場の配置計画のプロセスについて、

- ①青山練兵場から外苑への変容の過程
- ②外苑競技場の建設経緯と建設計画の変遷
- ③国立競技場の建設計画及び施設改修の変遷
- ④外苑競技場及び国立競技場の配置計画における軸線の位置付け

以上の4点を主に考察する。そしてこれらの考察を通して、明治・大正期から戦後にかけての外苑での競技場計画における軸線の扱われ方の変化について明らかにすることを本研究の目的とする。

従って、研究対象時期は、この土地の明治天皇のゆかりから青山練兵場が開設された1887（明治20）年から国立競技場で第18回オリンピック東京大会が開催された1964（昭和39）年までとした。

外苑競技場及び国立競技場の配置計画のプロセスについて明らかにし、その中での軸線の位置付けについて検証することは、近代の都市計画において重要な設計手法であった軸線の扱われ方が現代への過渡期においてどの様に変化したのかを示す点において学術的意義が有る。

### 1.3 既往研究と本研究の位置付け

本節では、既往研究の整理から本研究の位置付けを行う。まず、明治・大正期における都市計画に関する研究の蓄積を概観し、本研究で取り扱う外苑競技場及び国立競技場があった外苑に関する研究の蓄積を概観した上で、外苑の造営や外苑競技場の建設に至る経緯や建設計画の変遷、競技場の利用に関する研究の蓄積を整理する。また、国立競技場の建設及び施設改修やオリンピック競技大会に関する研究の蓄積を整理する。以上のような研究の蓄積を把握した上で、本研究の位置付けを示す。

#### 1.3.1 明治期から戦災復興期における都市計画に関する既往研究

明治期から戦災復興期において東京で計画された都市計画に関して、越沢<sup>13)</sup><sup>14)</sup>は、明治の東京市区改正、帝都復興事業(図1-3-1、図1-3-2)から現代に至る都市計画の系譜を検討している。そして、日本の近代造園、都市計画の黎明期につくられた外苑については、欧州の都市デザインの手法に則った並木道がつくられたが、今日、造営当初の姿をかるうじて伝えているのは4列の銀杏並木のみであると指摘している。

佐々木<sup>15)</sup>は、欧米都市デザインモデルがどのように日本の都市に取り込まれ変容させてきたか、東京及び大阪を対象として検討し、ヴィスタ(並木道)が構成された赤坂離宮、東京駅、聖徳記念絵画館は皇室と密接に関わる建築で、最高の権威付けが必要とされた場所にヴィスタによる街路景が採用されていることを指摘している。そして、ヴィスタ(並木道)は一点透視的な空間認識が実体化されたものである景の構図上の特徴として受容するのではなく、軸線を有したシンメトリーな平面図のパタンとして解釈されたとしている。また、外苑については、全体を支配する形式的秩序を持たないまま軸線を有した完結性の高い形が相互の関連性がなく配置されているとしている。

西村ら<sup>16)</sup>は、国会議事堂へのヴィスタ(並木道)の形成史について検討し、国会議事堂への眺望景観の重要性について論じている。岡村ら<sup>17)</sup>は、国会議事堂へのヴィスタ(並木道)の構想(図1-3-3)から実現までを通史として整理して、計画されたヴィスタ(並木道)を構成する細部の具体的デザインについて検討し、実現したヴィスタ(並木道)は非常に簡素なもので、成長の余地を残していると指摘している。

田北ら<sup>18)</sup>は、戦災復興期までの樹木を用いたみち空間や公園配置パターンの通時的展開とデザイン手法の変移について検討し、みち空間デザインにおける意味付与の在り方について論

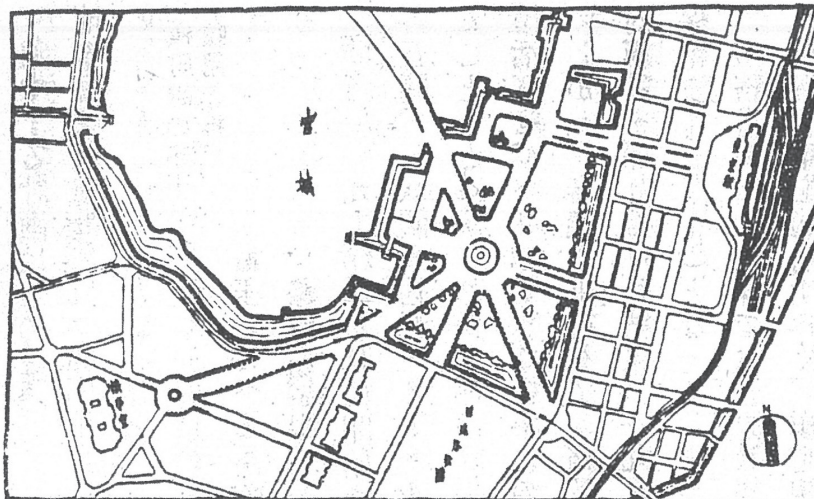


図 1-3-1 大正 10 年 帝都中枢地計画  
 (出典：越沢明：東京の都市計画，岩波書店 1991)

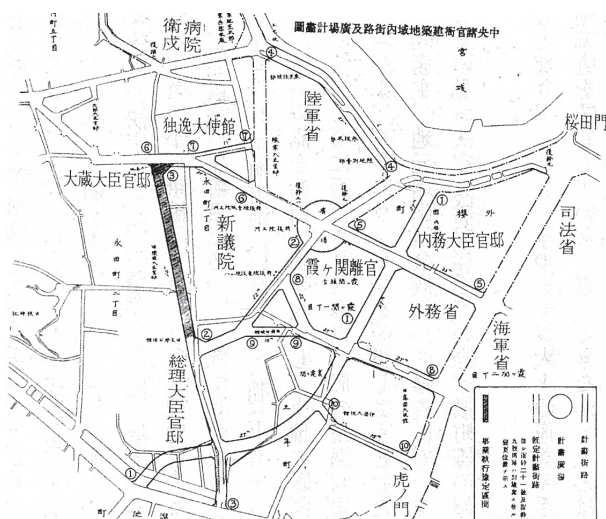


図 1-3-2 昭和 4 年 中央官衙建築敷地内街路及び広場  
 (出典：越沢明：東京の都市計画，岩波書店 1991)



図 1-3-3 昭和 33 年 東京都市計画霞ヶ関団地の官公庁施設決定図  
 (出典：建設大臣官庁官庁営繕部監修，霞ヶ関 100 年 中央衙の形成，公共建築協会，1995)

じている。その中で、外苑において記念建造物の前に格式高い広闊な空間を設け、その前に軸線を強調した並木道（ヴィスタ）を配する日本独自のヴィスタ型景観が実現し、戦災復興期において公園を市街地郊外に設置したことがヴィスタ型景観を創出させることとなったとしている。しかし、明治・大正期から昭和初期における外苑の軸線の扱われ方については必ずしも十分な検討はされていない。

一方、地方都市においては府県庁舎などの官庁施設が設置されて官庁街が形成されている。佐藤ら<sup>19)</sup>は、山形と宇都宮を事例として、三島通庸による明治初期の地方都市の近代都市づくり経緯を評価する方法について検討し、近世からの歴史的な継承性とそのプロセスの多様性を計画意図の集積の結果として解読することにより現代の都市づくりが向かう方向性について論じている。そして、城下町都市の歴史の継承性は、都市の全体構成をどのように継承したかという視点で捉えられ、山形と宇都宮の事例では井桁とグリッドが重なる合理的なパターンが選択され混乱なく受け入れられたとしている。

野中<sup>20)</sup>は、三島通庸による山形での官庁街建設の計画意図について検討している。三島の立地計画の意図としては、県庁舎を基点とする官庁街の構想であった。施設計画と配置計画の意図としては、官庁街を構成する施設とその配置には巡幸を想定した意図があった。景観に関する計画意図としては、擬洋風建築を道路の両側と正面に配置して一群の官庁街を形成することで西洋的な都市景観の創出を図り、擬洋風建築が建ち並ぶ文明開化の装いは近代社会の都市空間への投影であったとしている。

越沢<sup>21)</sup>は、1930年代から1940年代にかけて構想された函館、札幌、帯広における都市計画について検討し、戦後、全国的な戦災復興計画の見直しや縮小されたこれらの都市計画の市街地構成原理や街路設計の思想について述べ、とりわけ帯広の計画はバロック都市計画の再現とあってよく古典的な街路景観の設計手法を北海道の大地に適用したものであるとしている。

八尾ら<sup>22)</sup>は、大正期から昭和初期にかけての大阪公園計画の策定過程について検討し、公園系統計画の成立と計画を主導した大屋霊城の計画策定における役割について論じ、郊外の大公園と都市中心部を大道路によって結ぶ放射分散式公園系統の考えに基づき計画に反映されたとしている。

中野<sup>23)</sup>は、松江の官庁街形成過程について検討し、明治5年の初代県庁舎から昭和34年の五代目県庁舎に至るプロセスについて明らかにしている。そして、そのプロセスは当初計画を継承しながら修正していくのではなく、多面的議論を段階的に積み上げていくというものであり、県職員と中央の専門家との協働によりモダニズム建築の傑作が計画的に配置される美しい官庁街が誕生したと結論付けている。



### 1.3.2 明治神宮外苑に関する既往研究

明治神宮史に関しては、宗教史をはじめ社会史、都市史、建築史など多様な観点から学術的な研究が蓄積されている<sup>注7)</sup>。本研究で取り扱う外苑競技場及び国立競技場があった外苑に関する研究の蓄積を概観すると、これまで外苑史に関する記録としては、『明治神宮外苑奉獻概要報告』<sup>24)</sup>、『明治神宮外苑志』<sup>25)</sup>、『半世紀を迎えた栄光の神宮球場』<sup>26)</sup>、『明治神宮外苑七十年誌』<sup>27)</sup>、『明治神宮叢書』<sup>28)</sup>などが編纂されており、外苑造営の経緯から現代までの沿革が概観できる。

学術的な研究としては、明治神宮史のほとんどが内苑に着目した宗教学からの言及が蓄積されてきた中で、平成に入り山口によって明治神宮史研究に関する新たな論点が提示される。山口<sup>29)</sup>は当時の新聞・雑誌、帝国議会議事録や公文書などを参照し、明治天皇の崩御から様々な記念事業が構想される中、明治天皇大喪儀を経て起った明治天皇陵墓の誘致運動から明治天皇を祀る神社創建構想への転換、構想されていた記念事業や日本大博覧会を融合させ日本大博覧会会場予定地の代々木と青山を転用して内苑・外苑とする明治神宮造営構想の具体案とした覚書の作成、社名や社格、鎮座地をめぐる経緯など、内苑・外苑あわせた明治神宮創建について言及し、外苑を含めた明治神宮史研究の魁けとなった。

明治神宮の鎮座地の選定については大丸<sup>30)</sup>や山口<sup>31)</sup><sup>32)</sup>は明治神宮創建構想の過程でさまざまな候補地が建議・請願される中、最終的にどのような経緯によって現在の場所に明治神宮が創建されたのかについて論考している。また、明治五十年を前提として計画された日本大博覧会構想と明治神宮造営構想との関係について、古川<sup>33)</sup>小路田<sup>34)</sup>、布川<sup>35)</sup>が論じている。近年では長谷川<sup>36)</sup>が、明治中期に青山練兵場が設置されて以降の軍事儀礼や明治末期に構想された日本大博覧会構想の計画、明治天皇大喪儀及び造営された外苑の利用形態から外苑の成立過程を建築史・都市史的観点から通史的に検討している。

この他にも前述の山口<sup>37)</sup>は、①なぜ神社がつけられたのか、②なぜあそこにあるのか、③どうして外苑があるのか、という3つの課題を設定し、明治神宮創建に至る経緯や明治神宮内苑及び外苑の造営過程について簡潔に示している。佐藤<sup>38)</sup>は山口の研究手法を継承し、公文書や明治神宮所蔵資料や当時の新聞を含めて、当時の東京市民の動向と新聞紙上の明治神宮創建論を整理した上で、阪谷芳郎・渋沢栄一<sup>注8)</sup>・中野武宮<sup>注9)</sup>ら東京の政財界代表者が取り組んだ明治神宮創建運動と神社奉祀調査会の審議内容について検討している。また、外苑の造成経緯に関して、阪谷芳郎の思想的背景について考察している。

近年では、藤田<sup>39)</sup>は、近代神苑や公園の展開から明治神宮内外苑の造営過程を検討し、「外苑」という概念の創出に至ったのかについて検討している。また藤田<sup>40)</sup>は、明治神宮造営史という観点から明治天皇大葬儀の青山葬場殿という空間に焦点を当て、明治神宮造営までを概観してその空間的議を検討し、明治神宮外苑全体の空間こそが明治という時代の「記憶」を表象する機能を担うものと論じている。

この他にも、例えば青井<sup>41)</sup>は紀元二千六百年記念日本万国博覧会やオリンピック会場予定

地であった外苑について検討し、外苑を「神聖」と「開放」という両義的な性格を有する場所であると論考している。今泉<sup>42)43)</sup>は明治神宮造営に関わった様々な分野の専門家に着目し、彼らによって「創られた明治神宮の伝統」について論じているが、これらの既往研究では明治・大正期から昭和初期の外苑における軸線の扱われ方についての検討はなされていない。

### 1.3.3 明治神宮外苑競技場に関する既往研究

これまで外苑競技場に関する記録としては、『明治神宮外苑志』<sup>24)</sup>の他に『明治神宮外苑競技場概要』<sup>44)</sup>、『明治神宮外苑工事概要』<sup>45)</sup>などがある。また、外苑の造営や外苑競技場の建設に関わった小林政一<sup>注10)</sup>の『明治神宮外苑工事に就て 第一輯』<sup>46)</sup>から、外苑競技場の計画から建設に至る沿革は概観できる。

外苑競技場などの競技施設の建設に関する検討として、佐藤<sup>47)</sup>は、阪谷芳郎の『明治神宮奉賛会日記』<sup>48)</sup>などを手がかりに、明治神宮の造営経緯、とりわけ外苑について、聖徳記念絵画館と競技場・野球場・相撲場・水泳場を比較しながら検討し、「風致」という観点から阪谷芳郎の外苑の創建以来の精神方針について論じているが、競技場の建設経緯に関しては大日本体育協会会長の嘉納治五郎による提言のみにとどまっている。

藤田<sup>49)50)</sup>は、外苑造営における競技場建設構想に焦点を当て、競技場の建設経緯やその位置付け、さらには明治神宮に付属する外苑に建設されたことの意義について詳細に検討し、将来的なオリンピック競技大会招致という国際的文脈と神社境内の馬場や神前スポーツという日本の文脈が結びつき、近代西洋の最新施設として導入された競技場の意義について論じている。

真田<sup>51)</sup>は、嘉納が外苑の造営に際して競技場の建設を提言したことについて検討し、国民的な競技会を行うことでフェアプレー精神を全国に広める、ということを目指して嘉納は競技場の建設を提案したと論じている。こうした外苑競技場の建設構想や計画経緯についてはこれらの既往研究しか見当たらず、明治・大正期の外苑における軸線の取り扱われ方については検討されていない。

一方で、明治神宮競技大会に関する体育史・スポーツ社会学からの研究が蓄積されている。入江ら<sup>52)53)</sup>は、体育史研究における神宮大会の性格規定や明治神宮体育大会創始の社会的背景と明治神宮造営の目的から戦後の国民体育大会に至る展開の過程と天皇制との位相について論じている。加賀<sup>54)55)</sup>は、明治神宮競技大会の歴史的背景となった時代状況との関連や戦時体制下での明治神宮競技大会の歴史的社会的役割を検討し、明治神宮競技大会が果たした歴史的社会的役割について論じている。太田ら<sup>56)</sup>は、明治神宮体育大会の開催経緯及び発展過程を検証し、明治神宮体育大会が開催されたことの意味について論考している。山本<sup>57)</sup>は、大正から昭和にかけての外苑という空間が当時の文化的状況の中でどのような位置を占めていたのかについて論考している。千代島<sup>58)</sup>は、明治神宮内外苑の建設経緯や外苑競技場の建設を期に開催された明治神宮競技大会について検討し、明治神宮競技大会の参加選手選出地域について論じている。



近年では、藤田<sup>59)</sup>は、神宮競技問題に焦点を当て、「明治神宮競技大会」から「明治神宮体育大会」に名称や主催する組織の変更をしなければならなかったのかについて検討している。また、藤田<sup>60)</sup>は、明治神宮体育大会の第四回大会と第五回大会が開催された昭和初年の時期を対象として、明治神宮体育大会の性格を確認した上で、この時期における重要課題であった「学生参加問題」の展開とその最終的解決の意義、さらには第五回大会における「天覧」の文化史的・社会史的意義を検討し、明治神宮体育大会固有の体育・スポーツ史的意義に就いて論考している。この他、第12回オリンピック競技大会に関する体育史・スポーツ社会学からの検討もされている。記録としては『報告書』<sup>61)</sup>や『第十二回オリンピック東京大会東京市報告書』<sup>62)</sup>がある。学術的研究としては、中村<sup>63)</sup><sup>64)</sup><sup>65)</sup>や橋本<sup>66)</sup>はオリンピック競技大会の招致から返上に至るまでを通史的に検討している。坂上<sup>67)</sup>は、戦時期の体育・スポーツ政策に関して、厚生省の運動施設拡充政策について論じ、高嶋<sup>68)</sup>は、戦時下でのスポーツについて論じている。山本<sup>69)</sup>や藤田<sup>70)</sup>は1940(昭和15)年に開催予定であった第12回オリンピック競技大会までに構想された明治神宮外苑拡張構想について再検討しているが、これ等の既往研究では最終的に開催予定地となった駒沢競技場の配置計画に関する検討はなされていない。

#### 1.3.4 国立霞ヶ丘陸上競技場に関する既往研究

これまで国立競技場に関する記録としては、『国立競技場十年史』<sup>71)</sup>の他に『国立競技場の30年 - オリンピックからJリーグまで -』<sup>72)</sup>、『国立競技場50年の歩み』<sup>73)</sup>、『SAYONARA 国立競技場56年の軌跡 1958-2014』<sup>74)</sup>などから、国立競技場の計画から建設及び施設改修と、開催された第18回オリンピック競技大会後の利用状況など現在に至る沿革が概観できる。また、国立競技場で開催された国際大会に関する記録としては『第3回アジア競技大会報告書』<sup>75)</sup>、『第18回オリンピック競技大会公式報告書 上』<sup>76)</sup>、『第18回オリンピック競技大会東京都報告書』<sup>77)</sup>がある。

学術的研究としては、片木<sup>78)</sup>は都市計画という観点から、1940(昭和15)年の第12回オリンピック東京大会招致から1964(昭和39)年の第18回オリンピック大会招致と開催を契機に外苑競技場の改造計画や国立競技場の建設過程を通史的に検討している。西澤<sup>79)</sup>は国立競技場の軸線について論考し、建設当時の北側スタンドの電光掲示板と南側スタンドの炬火台を対峙させる南北軸から、施設改修の際に炬火台を東側増設スタンド最上部に移設させたことで国立競技場の東西軸が暗示されたことに加え、国立競技場の東西軸と明治神宮野球場の本塁とバックスクリーンとを結ぶ軸線の延長線とが絵画館と青山口とを結ぶ軸線上の一点で交わると指摘している。しかしながら、これらの軸線に関する指摘についての具体的な検証はなされておらず、国立競技場の建設計画及び改修計画の意図や外苑の空間構成が十分に明らかになったとは言えない。西澤の論考はこれまであまり指摘されてこなかった施設の配置や空間構成に注目を促すものといえるが、国立競技場の計画についての検討はこれらの既往研究しか見当たらず、戦後の外苑における軸線の扱われ方について検討されていない。

### 1.3.5 本研究の位置付け

以上のような学術的蓄積を踏まえ、本項ではそれぞれの分野からみた研究の位置付けを整理した上で、本研究の位置付けを行う。

#### (1)明治期から戦争復興期における都市計画に関する既往研究からの位置付け

近代日本における都市計画及び造園計画の黎明期において、軸線となる並木道（ヴィスタ）を設けたバロック様式の手法でつくられた空間構成に関する既往研究は多数あるが、それらが対象としている軸線の多くは道路である。本研究は競技場という施設の軸線を対象とする点、また、施設の建て替えに際し軸線の扱われ方がどのように変化したのかを検証する点において独自性があり、学術的意義が有るものと考えられる。

#### (2)明治神宮外苑に関する既往研究からの位置付け

外苑を含めた明治神宮創建過程において、阪谷芳郎の思想的背景に関する検討や嘉納治五郎が競技場の建設の提言に至る背景や経緯に関する検証は極めて少なく、嘉納が阪谷に競技場の建設を提言した背景や経緯に関する具体的な検討は意義が有るものと考えられる。

#### (3)明治神宮外苑競技場に関する既往研究からの位置付け

外苑の造営計画における施設の配置計画に関する研究は極めて少ない。また、造営された外苑の空間構成に関する具体的な検証は行われておらず、外苑競技場の配置計画に関する検証は意義が有るものと考えられる。

#### (4)国立霞ヶ丘陸上競技場に関する既往研究からの位置付け

国立競技場の建設計画及び施設改修計画に関する研究はごくわずかで、国立競技場の建設計画や施設改修計画にはほとんど関心が払われてこなかった為、具体的な検証はなされていない。国立競技場の建設計画及び改修計画に関する検討や国立競技場の配置計画の検証は意義が有るものと考えられる。

#### (5)本研究の位置付け

本研究は、記念建造物の前に格式高い広闊な空間を設け、その前に軸線を強調した並木道（ヴィスタ）を配する日本独自のヴィスタ型景観が実現された<sup>18)</sup>外苑について、その成立前史を含めた造営計画過程を分析するとともに、外苑競技場及び国立競技場の配置計画について検討することにより、明治・大正期から戦後にかけての外苑の施設計画における軸線の扱われ方の変化について明らかにすることは独自性を有しているものと考えられる。

## 1.4 研究の方法

本研究では、外苑競技場及び国立競技場を研究対象とし、外苑の成立前史を含め外苑競技場及び国立競技場の配置計画のプロセスについて検討する。図 1-4-1 に論文の構成を示す。

第 1 章では研究の背景と目的を示し、既往研究の結果から本研究の位置付けを示す。第 2 章で明治神宮外苑の成立前史に関して『明治神宮外苑志』<sup>25)</sup>、外苑の造成に関わった事業家・渋沢栄一の『渋沢栄一傳記資料』<sup>80)</sup>、競技場の建設を提言した嘉納治五郎の『嘉納治五郎著作集』<sup>81)</sup>の他、地図などの資料を手がかりに、土地利用の実態や識者等の思想や言説を渉猟し、それらの内容を当時の世相と関連付けながら識者等の思想的背景を分析することにより外苑競技場が建設されることになった経緯について考察する。また、明治期における青山練兵場での施設計画での軸線の扱われ方について明らかにする。

次に、第 3 章で外苑競技場の成立に関して考察する。外苑の造営構想や外苑競技場の計画について手がかりとなる同時代の資料は、明治神宮奉賛会『明治神宮外苑志』<sup>25)</sup>、明治神宮『明治神宮叢書 第 19 巻 資料編 (3)』<sup>82)</sup>、外苑競技場設計者の小林政一『明治神宮外苑工事に就いて 第一輯』<sup>44)</sup>、国立公文書館所蔵の公文書<sup>83)</sup>などである。

基礎資料を基に外苑の造営計画の変遷を再整理したものが表 1-1 である。1913 (大正 2) 年、明治天皇奉祀に関する事項を調査審議する神社奉祀調査会が内務大臣のもとに組織された。委員には渋沢、阪谷をはじめ、軍人、学者、官僚、神職などの他、特別委員を含め総勢 41 人で構成され、建築家は伊藤忠太<sup>注11)</sup>、佐野利器<sup>注12)</sup>、安藤時蔵<sup>注13)</sup>、建築史家は関野貞<sup>注14)</sup>が選出されて創建する神社の社名を明治神宮とする他、青山練兵場に外苑を造営することを決定した<sup>84)</sup>。外苑の造営計画は、神社奉祀調査会による「外苑計画考案」を経て明治神宮奉賛会によって「外苑計画綱領」としてまとめられた。工事施工を委嘱した明治神宮造営局はこれを基礎として「明治神宮外苑造設大体計画図及説明書」を作成して明治神宮奉賛会に提示し、これを明治神宮奉賛会が了承したことで外苑造営計画の最終案となった<sup>85)</sup>。資料に記載されている競技場に関する事項と造営に関与した建築家らの言説や図版を渉猟して、それらを関連付けながら分析することにより外苑の造営計画における外苑競技場の計画を具体的に検討し、大正期における外苑の競技場計画での軸線の扱われ方について明らかにする。

第 4 章では、国立競技場の成立に関して考察する。国立競技場の建設経緯や建設計画及び施設改修計画について手がかりとなる基礎資料は、明治神宮七十年誌編纂委員会編『明治神宮外苑七十年誌』<sup>27)</sup>、国立競技場『国立競技場十年史』<sup>71)</sup>、日本体育・学校健康センター『国立競技場の 30 年 - オリンピックから J リーグまで -』<sup>72)</sup>、国立競技場 50 年史編集委員会編『国立競技場 50 年の歩み』<sup>73)</sup>、新建築社『新建築』<sup>86) 87)</sup>、第 3 回アジア競技大会及び第 18 回オリンピック東京大会の報告書<sup>75) 76) 77)</sup>などである。

基礎資料を基に外苑競技場と国立競技場の建設及び施設改修の変遷とオリンピック競技大会招致の関連を整理したものが表 1-2 である。資料に記載されている造営後の外苑の歴史的変遷

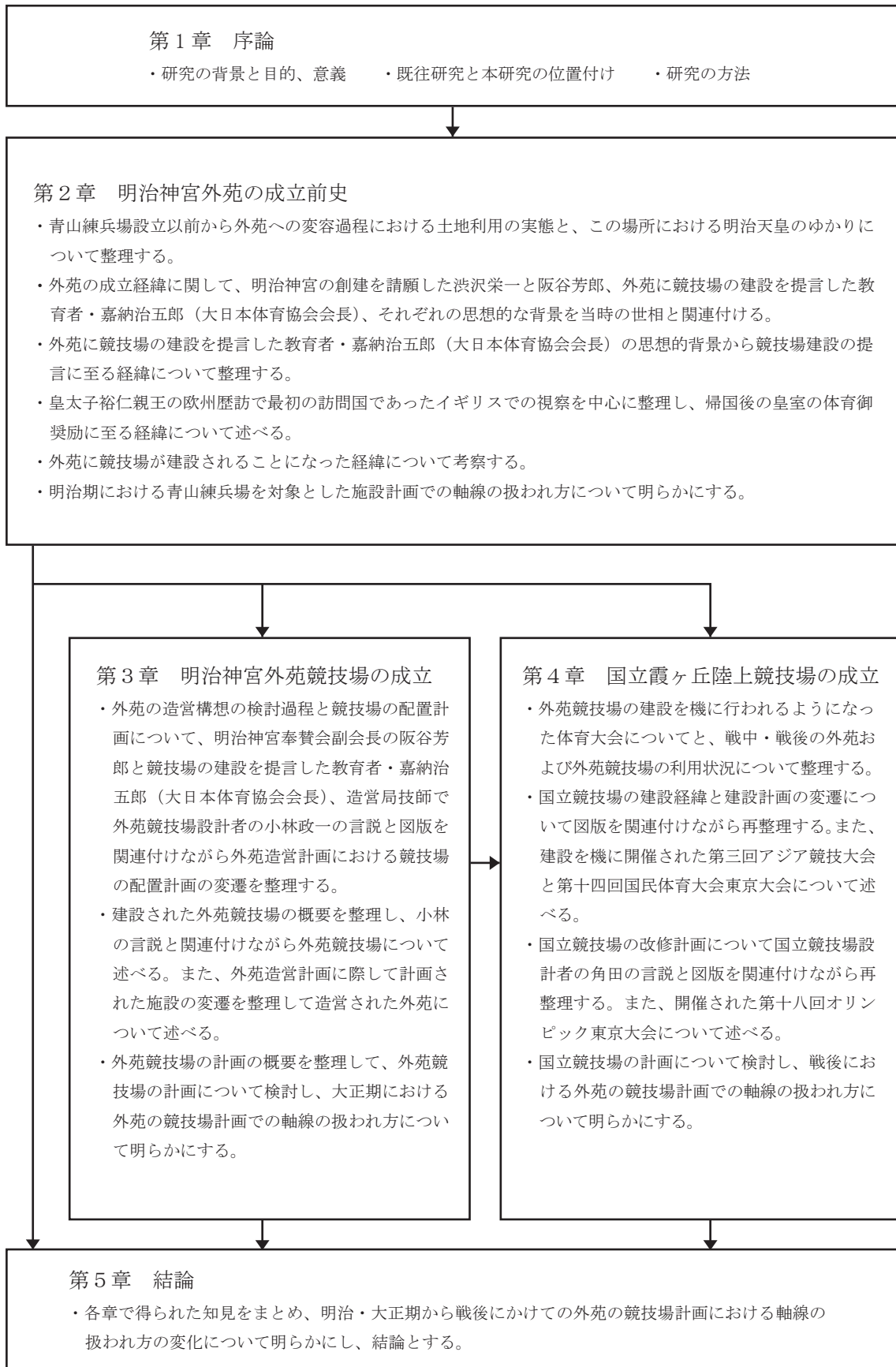


図 1-4-1 論文の構成

や施設に関する事項と国立競技場の建設に関与した建築家らの言説や図版を渉猟して、それらに関連付けながら分析することにより国立競技場の建設計画及び施設改修計画について具体的に検討し、戦後における外苑の施設計画での軸線の扱われ方について明らかにする。

第5章で各章で得られた知見をまとめ、明治・大正期から戦後にかけての外苑の競技場計画における軸線の扱われ方の変化について明らかにし、結論とする。

表 1-1 明治神宮外苑造営計画の変遷

造営計画名称	組織名称	年月	計画案名称
外苑計画考案	神社奉祀調査会	1913（大正2）年-1914（大正3）年	明治神宮外苑之図甲案・乙案
外苑大体計画	明治神宮奉賛会	1917（大正6）年3月	明治神宮外苑之図
外苑計画要領	明治神宮奉賛会	1917（大正6）年10月	外苑計画参考図
	明治神宮造営局	1918（大正7）年12月	明治神宮外苑大体計画図
—	明治神宮奉賛会	1924（大正13）年-1926（昭和元）年	明治神宮外苑平面図

（出典：国立公文書館蔵『神社奉祀調査会経過要領ノ件』、明治神宮『明治神宮叢書、第19巻、資料編(3)』、明治神宮奉賛会『明治神宮外苑志』をもとに作成）

表 1-2 オリンピック競技大会招致と明治神宮外苑競技場及び国立霞ヶ丘陸上競技場の建設と施設改修の変遷

競技場名称	年	建設・施設改修	オリンピック競技大会
明治神宮外苑競技場	1924（大正13）年	建設	—
	1940（昭和15）年	施設改修計画	第12回オリンピック競技大会
国立霞ヶ丘陸上競技場	1955（昭和29）年	建設計画	第17回オリンピック競技大会
	1958（昭和33）年	建設	—
	1964（昭和39）年	施設改修	第18回オリンピック競技大会

（出典：明治神宮奉賛会『明治神宮外苑志』、東京市『第十二回オリンピック東京大会東京市報告書』、東京都『第18回オリンピック競技大会東京都報告書』をもとに作成）

## 1.5 本章のまとめ

本章では、研究の背景で明治・大正期の都市計画において、バロック様式の軸線となる並木道（ヴィスタ）の正面に記念建造物を配置する都市計画手法は一般的かつ重要な設計手法の一つであった<sup>8)</sup>ことを示した。本研究の目的は、既往研究で明治神宮史研究の歴史的経緯を示した上で、外苑競技場及び国立競技場の配置計画のプロセスについて、①青山練兵場から外苑への変容の過程、②外苑に競技場が建設された経緯や外苑競技場の建設計画の変遷、③国立競技場の建設計画及び施設改修の変遷、④外苑競技場及び国立競技場の配置計画における軸線の位置付け、以上の4点について検討することにより、明治・大正期から戦後にかけての外苑での競技場計画における軸線の扱われ方の変化について明らかにすることである。本研究は近代の都市計画において重要な設計手法であった軸線の扱われ方が現代への過渡期においてどのように変化したのかを示す点において学術的意義が有る。

本研究は外苑の成立前史を踏まえた上で、研究の蓄積が充分ではない外苑の造営計画における競技場の建設経緯に関して検討を行う点や、外苑競技場の建設計画の変遷を分析して、外苑競技場の配置計画について検討し、大正期の軸線の扱われ方について明らかにする点で独自性を有しているものと考えられる。また、外苑競技場の配置計画について考察を行った上で、同時代の具体的な資料に基づいて国立競技場の建設計画と施設改修を分析して、国立競技場の配置計画について検討し、戦後の軸線の扱われ方について明らかにする点でも独自性を有しているものと考えられる。

また、本章では研究の方法を示した。関連する既往研究、同時代の資料、建築家らの言説や図版等を渉猟して、それらを関連付けながら分析することにより、第2章では外苑の成立前史について、第3章では外苑競技場の成立について、第4章では国立競技場の成立について考察し、第5章で各章で得られた知見をまとめ、明治・大正期から戦後にかけての施設計画における軸線の扱われ方の変化について明らかにし、結論とする。



## 注：

- 注 1) イギリスを拠点に活躍した女性建築家、ザハ・ハディッドの応募案が最優秀賞に選ばれた。
- 注 2) 隈研吾建築都市設計事務所・大成建設・梓設計による共同企業体による計画案。
- 注 3) 嘉納治五郎：1860年-1938年。日本の柔道家、教育者。講道館柔道の創始者でありスポーツ・教育分野の発展や日本のオリンピック初参加に尽力するなど「柔道の父」、「日本の体育の父」とも呼ばれる。
- 注 4) 東京府における聖蹟の指定と解除については、北原糸子：東京府における明治天皇聖蹟指定と解除の歴史，国立歴史民俗博物館研究報告，第121集，2005に詳しい。
- 注 5) 北原糸子：東京府における明治天皇聖蹟指定と解除の歴史，国立歴史民俗博物館研究報告，第121集，2005／打越孝明：明治天皇聖蹟の現状－明治十一年北陸・東海道巡幸を中心に－，神園，第9号，明治神宮国際神道文化研究所，2013を参照。
- 注 6) 阪谷芳郎：1863年-1941年。日本の大蔵官僚、政治家、子爵、法学博士、大蔵大臣、東京市長、貴族院議員等を歴任。
- 注 7) これまでの明治神宮内苑及び外苑史研究については、佐藤一伯：明治聖徳論研究の課題と展望，宗教研究，日本宗教学会，第81巻，第1号，pp.93-115，2007や藤田大誠：明治神宮史研究の現在－研究史の回顧と展望－，神園，第6巻，明治神宮国際神道文化研究所，pp.110-131，2011に詳しくまとめられている。
- 注 8) 渋沢栄一：1840年-1931年。江戸時代末期から大正初期にかけての日本の武士（幕臣）、官僚、実業家。多種多様な企業の設立・経営に関わり、日本の資本主義の父といわれる。
- 注 9) 中野武宮：1848年-1918年。明治時代及び大正時代の官僚出身の政治家、実業家。
- 注 10) 小林政一：1891年-1973年。工学博士、建築家、構造学者。外苑造営では聖徳記念絵画館、明治神宮外苑競技場、明治神宮野球場などに携わる。明治神宮造営局技師。
- 注 11) 伊藤忠太：1867年-1954年。工学博士、建築家、建築史家。神社奉祀調査会委員、明治神宮造営局参与。
- 注 12) 佐野利器：1880年-1956年。工学博士、建築家、構造学者。鉄骨・鉄筋コンクリート構造学を研究し耐震構造学の基礎を築く。神社奉祀調査会委員、明治神宮造営局参与。
- 注 13) 安藤時蔵：1871年-1917年。内務省神社局技師の後、神社奉祀調査会委員、明治神宮造営局技師。
- 注 14) 関野貞：1868年-1935年。建築史学者。文化財の保存に努める。神社奉祀調査会特別委員、明治神宮造営局評議委員。

## 参考・引用文献：

- 藤田大誠：明治神宮外苑造営における体育・スポーツ施設構想－「明治神宮体育大会」研究序説－，國學院大學人間開発学研究，國學院大學人間開発学会，第4号，pp.57-76，2013
- 山口輝臣：明治神宮の出現，吉川弘文館，2005
- 青井哲人：紀元2600年の空間 万博・オリンピック / 神社・宮城，10+1，第37号，pp.171-186，2004
- 小田部雄二：静岡県明治天皇聖蹟，明治聖徳記念学会紀要，第49号，明治聖徳記念学会，pp.31-56，2012
- 長谷川香：明治神宮外苑の成立過程に関する研究 軍事儀礼・日本大博覧会構想・明治天皇大喪儀，建築史学，建築史学会，pp.54-86，2013
- 藤森照信：明治の東京計画，岩波書店，1982
- 松浦健治郎，裏山益郎：近世城下町を基盤とする軍都5都市における明治期の官庁街形成と都心改編，都市計画論文集，日本都市計画学会，第37巻，pp.499-504，2002
- 村松伸，深見奈緒子，山田協太，内山愉太，編：メガシティ＝Megacities2 メガシティの進化と多様性，東京大学出版会，2016.9
- 明治神宮奉賛会：明治神宮外苑志，明治神宮奉賛会，p.108，1937
- 東京朝日新聞：1914年6月21日
- 阪谷芳郎：明治神宮奉賛会経過（大正五年三月四日麻布区役所楼上にて演説），明治神宮奉賛会通信第四号付録，明治神宮編，明治神宮叢書，第十九巻・資料編（3），明治神宮社務所，pp.1144-1145，2006
- 日本体育・学校健康センター：国立競技場の30年－オリンピックからJリーグまで－，体育施設出版，p.30，1994
- 越沢明：東京都市物語，日本経済評論社，1991
- 越沢明：東京の都市計画，岩波書店，1991

## 第1章

- 15) 佐々木葉：近代都市景観デザインにおける欧米モデルの受容の手法と思想，東京大学学位論文，1993
- 16) 西村幸夫，眺望景観研究会：国会議事堂問題の問いかけるもの，季刊まちづくり1，pp.45-65，2005
- 17) 岡村祐，中島直人：国会議事堂へのヴィスタの構想と形成の過程に関する研究，都市計画論文集，日本都市計画学会，第41巻，pp.941-946，2006
- 18) 田北雅裕，仲間浩一：デザイン手法の通時的変移とその表出的機能のデザイン論上の位置付け－戦災復興期に至る樹木を用いた「みち空間」デザインに着目して－，都市計画論文集，日本都市計画学会，第34巻，pp.205-210，1990
- 19) 佐藤滋，野中勝利：三島通庸の城下町改造とその後の都市骨格の形成－山形と宇都宮を事例に－，都市計画論文集，日本都市計画学会，第28巻，pp.235-240，1993
- 20) 野中勝利：三島通庸による明治初期の山形・官庁街建設における計画意図，日本建築学会計画系論文集，第589号，pp.129-136，2005
- 21) 越沢明：函館、札幌、帯広の都市計画－1930・1940年代の都市計画思想－，日本土木史研究発表会論文集，第9巻，pp.181-192，1989
- 22) 八尾修司，山口敬太，川崎雅史：総合大阪都市計画（1928年）における公園系統計画の成立－大屋霊城の役割とその計画思想の反映－，都市計画論文集，日本都市計画学会，第51巻，第3号，pp.1152-1169，2016
- 23) 中野茂夫：近現代松江の官庁街形成史－官公署・文教施設の配置と県庁周辺整備計画に注目して－，都市計画論文集，第47巻，第3号，pp.733-738，2012
- 24) 明治神宮奉賛会：明治神宮外苑奉献概要報告，明治神宮奉賛会，1926
- 25) 明治神宮奉賛会：明治神宮外苑志，明治神宮奉賛会，1937
- 26) 明治神宮外苑：半世紀を迎えた栄光の神宮球場，明治神宮外苑，1977
- 27) 明治神宮外苑七十年誌編纂委員会：明治神宮外苑七十年誌，明治神宮外苑，1998
- 28) 明治神宮：明治神宮叢書，第1巻～第20巻，明治神宮社務所，2000-2006
- 29) 山口輝臣：明治神宮の成立をめぐる，日本歴史，日本歴史学会，第546号，pp.80-96，1993.11
- 30) 大丸真美：明治神宮の鎮座地について，明治聖徳記念学会紀要，明治聖徳記念学会，第17号，pp.38-66，1996
- 31) 山口輝臣：神社奉祀調査会について（上）－明治神宮計画における「由緒」と「風致」－，海南史学，高知海南史学会，第39号，pp.1-17，2001
- 32) 山口輝臣：何卒御鎮座地に御選定相成度……明治神宮の候補地に映る東京，史淵，九州大学大学院人文科学研究科，第139号，pp.1-35，2002
- 33) 古川隆久：皇紀・万博・オリンピック 皇室ブランドと経済発展，中公新書，1998
- 34) 小路田泰直：日本近代都市とその象徴－「京都」と明治神宮－，水林彪・金子修一・渡辺節夫編，王権のコスモロジー，弘文堂，pp.117-146，1998
- 35) 布川弘：解説 日露戦後における公共空間の構想，資料集 公と私の構造5 日本大博覧会と明治神宮，ゆまに書房，pp.13-20，2003
- 36) 長谷川香：明治神宮外苑の成立過程に関する研究 軍事儀礼・日本大博覧会構想・明治天皇大喪儀，建築史学，建築史学会，pp.54-86，2013
- 37) 山口輝臣：明治神宮の出現，吉川弘文館，2005
- 38) 佐藤一伯：明治神宮創建論の形成と展開，神道宗教，神道宗教学会，第199・200号，pp.403-431，2005
- 39) 藤田大誠：近代神苑の展開と明治神宮内外苑の造営－「公共空間」としての神社境内－，國學院大學研究開発推進センター研究紀要，國學院大學研究開発推進機構研究開発推進センター，第6号，pp.69-128，2012
- 40) 藤田大誠：青山葬場殿から明治神宮外苑へ－明治天皇大喪儀の空間的意義－，明治聖徳記念学会紀要，明治帝徳記念学会，第49号，pp.96-126，2012
- 41) 青井哲人：紀元2600年の空間 万博・オリンピック / 神社・宮城，10+1，第37号，pp.171-186，2004
- 42) 今泉宜子：明治神宮「伝統」を創った大プロジェクト，新潮選書，2013
- 43) 今泉宜子：テキストとしての明治神宮外苑－その歴史に精神的文脈を読む，都市計画，日本都市計画学会，第65巻，第1号，pp.32-35，2013
- 44) 明治神宮奉賛会：明治神宮外苑競技場概要，明治神宮造営局，1924
- 45) 明治神宮奉賛会：明治神宮外苑工事概要，明治神宮造営局，1926



- 46) 小林政一：明治神宮外苑工事に就て 第一輯，小林政一，1929
- 47) 佐藤一伯：明治神宮内外苑の造営と阪谷芳郎 - 近代東京の「神苑」におけるモノと心 -，國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要，國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター，第1号，pp.97-112，2009
- 48) 明治神宮編：明治神宮奉賛会日記，明治神宮叢書 第17巻（資料編1），明治神宮社務所，pp.591-938，2006
- 49) 藤田大誠：明治神宮外苑造営における体育・スポーツ施設構想 - 「明治神宮体育大会」研究序説 -，國學院大學人間開発学研究，國學院大學人間開発学会，第4号，pp.57-76，2013
- 50) 藤田大誠：神宮外苑になぜ競技場が造られたのか，春秋，春秋社，第554号，pp.13-16，2013
- 51) 真田久：日本スポーツの夜明け 明治神宮外苑競技場と嘉納治五郎，SAYONARA 国立競技場 56年軌跡 1958-2014，日本スポーツ振興センター，pp.194-197，2014
- 52) 入江克己，鹿島修：天皇制と明治神宮体育大会（第1報），鳥取大学教育学部研究報告．教育科学，鳥取大学教育学部，第31巻，第2号，pp.335-388，1989
- 53) 入江克己，鹿島修：天皇制と明治神宮体育大会（第2報），鳥取大学教育学部研究報告．教育科学，鳥取大学教育学部，第32巻，第1号，pp.113-144，1989
- 54) 加賀秀雄：わが国における近代スポーツの展開過程に関する実証的研究 - 「明治神宮競技大会」の設立をめぐる -，名古屋文理大学紀要，名古屋文理大学，第2号，pp.135-143，2002
- 55) 加賀秀雄：わが国における近代スポーツの展開過程に関する実証的研究 - 「明治神宮競技大会」の戦時体制下をめぐる -，名古屋文理大学紀要，名古屋文理大学，第3号，pp.117-125，2003
- 56) 太田順康，長瀬聡子：明治神宮体育大会に関する研究 - 明治神宮体育大会と昭和初期のスポーツについて -，大阪教育大学紀要．第IV部門，大阪教育大学，第51巻，第2号，pp.485-499，2003
- 57) 山本拓司：神宮外苑の文化史 - 帝国とスポーツ -，草柳千早，澤井敦，鄭暎惠編，逍遙する記憶 旅と里程標，三和書籍，pp.345-368，2007
- 58) 千代島有里：明治神宮競技大会をめぐる内地と外地 - 明治神宮の創出と外苑の創出 -，福岡大学研究部論集．A，人文科学編，福岡大学研究推進部，第11巻，第5号，pp.67-71，2012
- 59) 藤田大誠：「神宮競技問題」の推移と「明治神宮体育大会」の成立，國學院大學人間開発学研究，國學院大學人間開発学会，第6号，pp.59-73，2014
- 60) 藤田大誠：昭和初年における明治神宮体育大会の歴史的意義，國學院大學人間開発学研究，國學院大學人間開発学会，第8号，pp.55-69，2017
- 61) 第十二回オリンピック東京大会組織委員会：報告書，第十二回オリンピック東京大会組織委員会，1939
- 62) 東京市：第十二回オリンピック東京大会東京市報告書，東京市，1939
- 63) 中村哲夫：第12回オリンピック東京大会研究序説（Ⅰ） - その招致から返上まで -，重大学教育学部研究紀要．人文・社会科学，三重大学教育学部，第36巻，pp.101-112，1985
- 64) 中村哲夫：第12回オリンピック東京大会研究序説（Ⅱ） - その招致から返上まで -，重大学教育学部研究紀要．人文・社会科学，三重大学教育学部，第40巻，pp.129-138，1989
- 65) 中村哲夫：第12回オリンピック東京大会研究序説（Ⅲ） - その招致から返上まで -，重大学教育学部研究紀要．人文・社会科学，三重大学教育学部，第44巻，pp.67-79，1993
- 66) 橋本一夫：幻の東京オリンピック，日本放送出版協会，1994
- 67) 坂上康博，高岡裕之：幻の東京オリンピックとその時代 - 戦時期のスポーツ・都市・身体 -，青弓社，2009
- 68) 高嶋航：戦時下の平和の祭典 - 幻の東京オリンピックと極東スポーツ界 -，京都大學文學部研究紀要，京都大學大學院文學研究科，第49号，pp.25-72，2010
- 69) 山本拓司：幻の東京オリンピックと外苑拡張計画，スポーツ評論，創文企画，第19号，pp.44-57，2008
- 70) 藤田大誠：明治神宮外苑拡張構想と幻の東京オリンピック，國學院大學人間開発学研究，國學院大學人間開発学会，第9号，pp.47-62，2018
- 71) 国立競技場：国立競技場十年史，国立競技場，1969
- 72) 体育施設出版：国立競技場の30年 - オリンピックからJリーグまで -，1994
- 73) 国立競技場50年史編集委員会：国立競技場50年の歩み，日本スポーツ振興センター国立競技場，2012
- 74) 日本スポーツ振興センター：SAYONARA 国立競技場 56年の軌跡 1958-2014，日本スポーツ振興センター，2014
- 75) 第3回アジア競技大会組織委員会：第3回アジア競技大会報告書，第3回アジア競技大会組織委員会，1959

## 第1章

- 76) オリンピック東京大会組織委員会編：第18回オリンピック競技大会公式報告書 上，オリンピック東京大会組織委員会，1966
- 77) 東京都：第18回オリンピック競技大会東京都報告書，東京都，1965
- 78) 片木篤：オリンピック・シティ東京：1940・1964，河出書房新社，2010
- 79) 西澤康彦：建築史家からの問題提起「ヘリテッジ」としての国立競技場を評価し、活用せよ。さもなくばオリンピックの返上を！，建築ジャーナル，第1221号，企業組合建築ジャーナル，pp.20-22，2014
- 80) 渋沢青淵記念財団竜門社編：渋沢栄一伝記資料，渋沢栄一伝記資料刊行会，1962
- 81) 嘉納治五郎：嘉納治五郎著作集，五月書房，1983
- 82) 明治神宮：明治神宮叢書，第19巻，資料編（3），明治神宮社務所，2006
- 83) 神社奉祀調査会経過要領の件：国立公文書館蔵，本館-2A-014-00・纂 01333100.1915
- 84) 同上書
- 85) 今泉直子：明治神宮—「伝統」を創った大プロジェクト，新潮社，pp.201-202，2013.2
- 86) 新建築社：新建築，第33巻，第6号，新建築社，1958
- 87) 新建築社：新建築，第39巻，第10号，新建築社，1964

### 図版典拠：

- 1-1-1 筆者撮影
- 1-1-2 明治神宮奉賛会：明治神宮外苑志，明治神宮奉賛会，1937
- 1-1-3 藤森照信：明治の東京計画，岩波書店 1990
- 1-1-4 藤森照信：明治の東京計画，岩波書店 1990
- 1-1-5 藤森照信：明治の東京計画，岩波書店 1990
- 1-1-6 丹下健三，藤森照信：丹下健三，新建築社，2002
- 1-1-7 丹下健三，藤森照信：丹下健三，新建築社，2002
- 1-3-1 越沢明：東京の都市計画，岩波書店 1991
- 1-3-2 越沢明：東京の都市計画，岩波書店 1991
- 1-3-3 建設大臣官房官庁営繕部監修，霞ヶ関100年 中央衙の形成，公共建築協会，1995

## 第2章

# 明治神宮外苑の成立前史



## 2.1 青山練兵場と明治天皇のゆかり

本節では、明治天皇の聖蹟についてまとめられた『明治天皇聖蹟 東北北海道御巡幸之巻 上』<sup>1)</sup>、『東京府史蹟名勝天然記念物調査報告 第15冊』<sup>2)</sup>を基礎資料として、東京都における明治天皇の聖蹟について述べる。また、外苑の造営経緯から成立についてまとめられた『明治神宮外苑志』<sup>3)</sup>を主な基礎資料として、青山練兵場設立以前から外苑への変容過程における土地利用の実態、この土地における明治天皇のゆかりについて整理する。

### 2.1.1 明治天皇の聖蹟

1868（明治元）年、明治天皇は大阪行幸されて以降、北海道、東北、奥羽、北陸、山梨、東海道、山口、広島、岡山などの各地を行幸あるいは巡幸し、先々では行在所や御野立所、御小休所などが設けられた。こうした中で、1912（明治45）年7月30日、明治天皇は崩御された。

一方、同年12月、徳川頼倫公爵を会長とする史蹟名勝天然記念物保存協会が設立された。同協会は第一次世界大戦が勃発した1914（大正3）年、雑誌『史蹟名勝天然記念物』を創刊し、巻頭で同協会長の徳川頼倫は「郷土の保存を周知せしめ、郷土の美を愛護せしむべき好時期」とした。また、同誌には明治天皇の行幸あるいは巡幸の際の行在所などについて調査した「先帝御遺蹟しらべ」と題する記事が掲載された。その中で、「先帝の御遺蹟に至ては、寔に最も重要な史蹟の一なりと謂う可し」とし、明治天皇に関する史蹟調査を特集するなど、史蹟保存にむけた啓蒙活動が展開された<sup>4)</sup>。

1919（大正8）年4月10日、史蹟名勝天然記念物保存法が公布された。その後、1928（昭和3）年に史蹟名勝天然記念物に関する管理が内務省から文部省宗教局に移管された。1930（昭和5）年、文部省内に西郷従徳を会長とする明治天皇聖蹟保存会が組織され、同会の趣意書には「明治天皇の聖蹟は全国にわたって実に一千個以上の多きに達して居る。是等の御聖蹟中既に保存方法の樹立せられているものもあるが、尚未だ其運びに至らないものも多く、且つ之を此まゝに放任して置けば、久しからずして破壊湮滅に帰する虞れあるものも少なくない」とした上で、明治天皇の御聖徳を顕彰し奉ることは、我が国民精神の振作涵養上最も緊要なる事項であるとして、明治天皇に関する史蹟の調査及び保存が本格的に展開される<sup>5)</sup>。こうして明治天皇の聖蹟は史蹟名勝天然記念物保存法に基づいて、1933（昭和8）年から1939（昭和14）年にかけて主に史蹟指定された（全国370件・東京府15件）。東京府における史蹟指定された明治天皇の聖蹟を表2-1及び図2-1-1に示す。聖蹟指定の基準として、①顕著な聖徳事蹟であること、②行在所たる建物は、原位置がよく保存され、指定に支障がないこと、③一府・県につき2,3件づつ調査の上、選定したこと、④今後も調査を重ね、指定するつもりであるとされた<sup>6)</sup>。

その後、1940（昭和15）年、東京府が調査した『東京府史蹟名勝天然記念物調査報告 第15冊』には、東京府における67件の明治天皇の聖蹟が掲載されている。また、同報告書に付録する『仰ぐ聖駕のみあと』には東京府内だけで193件の聖蹟があり、その内88件の現存また

は記念碑が建てられていたことが報告されており<sup>7)</sup>、東京府において数多くの明治天皇の史蹟は聖蹟として保存されていた。

表 2-1 史蹟指定された東京府における明治天皇の聖蹟一覧

番号	名称	所在地	現況
1	明治天皇行幸所西郷邸	目黒区上目黒八丁目	公園・菅刈公園
2	明治天皇行幸所木戸旧邸	豊島区駒込一丁目	石碑
3	明治天皇行幸所水戸徳川邸旧址	墨田区隅田公園地	隅田公園・石碑
4	明治天皇行幸所対鷗荘及旧址	台東区橋場	石碑
		南多摩郡多摩村	—
5	明治天皇行幸所蒲田梅屋敷	大田区蒲田	聖蹟蒲田梅屋敷公園・石碑
6	明治天皇帝府中行在所	北多摩郡府中町	石碑
7	明治天皇連光寺御小休所	南多摩郡多摩村	石碑
8	明治天皇行幸所寺島邸	港区芝白金猿町	畠山記念館
9	明治天皇行幸所荻窪小休所	杉並区荻窪三丁目	移築・石碑
10	明治天皇日野御小休所址及建物附御膳水	南多摩郡日野町	日野宿本陣・石碑
11	明治天皇小仏峠御小休所及御野立所	南多摩郡浅川町	石碑
12	明治天皇行幸所徳川邸	渋谷区千駄ヶ谷	—
13	明治天皇御嶽神社御小休所址	渋谷区美竹町	神社・石碑
14	明治天皇日本美術協会行幸址	台東区上野公園	上野の森美術館・石碑
15	旧芝離宮址	港区浜崎町	庭園・石碑

(出典：官報 第6435号 文部省告示 第64号をもとに作成)

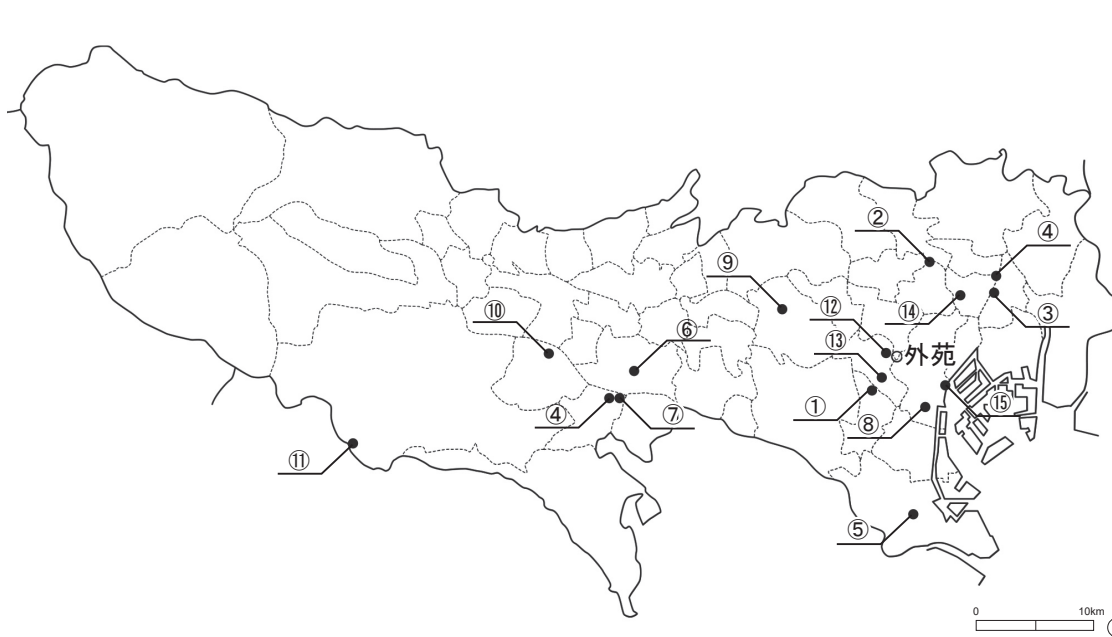


図 2-1-1 史蹟指定された東京府における明治天皇の聖蹟  
(出典：筆者作成)



### 2.1.2 下屋敷跡地から青山練兵場へ<sup>注1)</sup>

後に外苑となる敷地は、文政、嘉永頃の地図には丹波国篠山藩（現在の兵庫県篠山市北新町）藩主、青山忠良<sup>注2)</sup>の下屋敷や、日向飮肥藩（現在の宮崎県日南市）藩主、伊東祐相<sup>注3)</sup>の下屋敷。御家人甲賀組や御手先組、百人組などの組屋敷。御焔硝蔵や御鉄炮場のほかに、寺院や町家などが混在する場所であった<sup>8) 9)</sup>（図 2-1-2）。

1887（明治 20）年、陸軍省は旧幕府所有の御焔硝蔵とその周辺の民有地をまとめて買い上げ、日比谷練兵場に代わる新練兵場として青山練兵場を設けた<sup>8) 9)</sup>。1889（明治 22）年、大日本帝国憲法発布観兵式が挙行され、以降、陸軍の操練や儀礼は青山練兵場で行われることになる<sup>8) 9)</sup>。また同年、明治天皇が初めて近衛兵除隊式を閲兵した。

以後、毎年 1 月に陸軍始の観兵式、10 月には天長節の観兵式が定期的に行なわれた。その際、玉座は常に敷地東側の権田原口付近のエノキを目標にしてその前に設けられていた<sup>8) 9)</sup>（図 2-1-3、図 2-1-4）。1894（明治 27）年には明治天皇大婚二十五年祝典や日清戦争の観兵式が挙行された。1906（明治 39）年 4 月 30 日には、日露戦争の観兵式が当地で挙行された<sup>8) 9)</sup>。こうして青山練兵場は観兵式に明治天皇が頻繁に訪れる地となり、この土地と明治天皇との間に強い結びつきが生まれていった<sup>8) 9)</sup>。



図 2-1-2 開明東京新圖から外苑附近を抽出  
 (出典：明治神宮奉賛会：明治神宮外苑志，明治神宮奉賛会，1937)

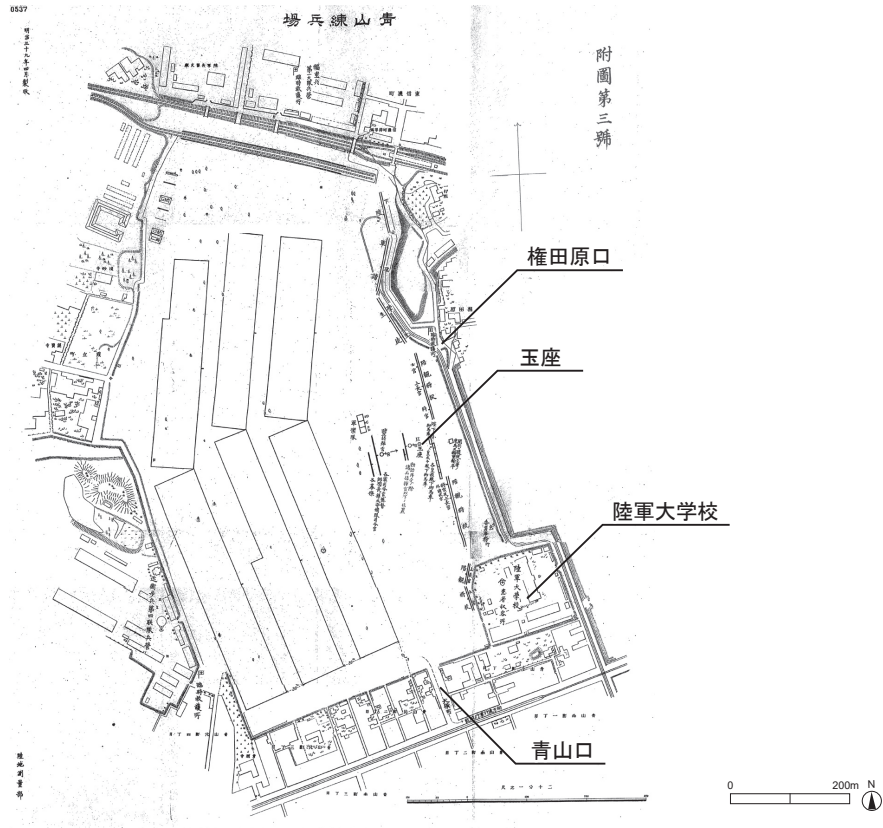


図 2-1-3 青山練兵場

〔出典：海軍省：凱旋及陸軍觀兵式（2），防衛省防衛研究所蔵，海軍省 - 公文備考 - M39-7-632, 1906（名称筆者加筆）〕



図 2-1-4 敷地東側の権田原口付近の玉座と目標となったエノキ

（出典：東洋堂：風俗画報，東洋堂，第 71 卷，第 33 号，1894 年）



### 2.1.3 日本大博覧会構想から明治天皇大喪儀へ<sup>注1)</sup>

1872（明治5）年、明治政府は日本の近代化と国内の団結を計るべく、西暦紀元前660年を元年とする日本独自の紀元法<sup>注4)</sup>の採用を決定した。こうした中で、節目となる年に記念行事が企画されるようになり、1890（明治23）年の記念事業として日本大博覧会が企画されたが、財政難と日露戦争によって延期となった<sup>9)</sup>。

その後、明治天皇即位50周年〔1917（大正6）年〕の開催を目指し、買収費用が最小限で済む国有地の青山練兵場と皇室所有地であった代々木御領地がその会場予定地として選ばれたため、青山練兵場は農務省に移管され、練兵場は代々木へ移転する<sup>8) 9)</sup>。

こうして1911（明治44）年に日本大博覧会の諸施設配置計画に関する大博覧会会場設計競技が開催された。その際、青山会場は道路を幾何学的とし青山口からの線とこれに直交する線に対して相対的に西洋風の施設を配置することとされ<sup>10)</sup>ており、軸線を用いたバロック様式的设计手法で計画することが要件であった。また、青山会場には、①教育及び学術館、②美術館、③水産館、④食料館、⑤冷蔵庫、⑥鑛産館、⑦工業館、⑧機械及び電気館、⑨通運館、⑩陸海軍館、⑪汽罐及び原動力室、⑫式場、⑬余興場地区、⑭外国特別館地区、⑮内国特別館地区を計画することとされた<sup>10)</sup>。

一方、代々木会場は自由な曲線道路に東洋式の施設を配置することとし<sup>10)</sup>、代々木会場には①農業館、②園芸館、③家畜舎、④蠶業館、⑤林業館、⑥工業館、⑦競技場、⑧余興場地区、

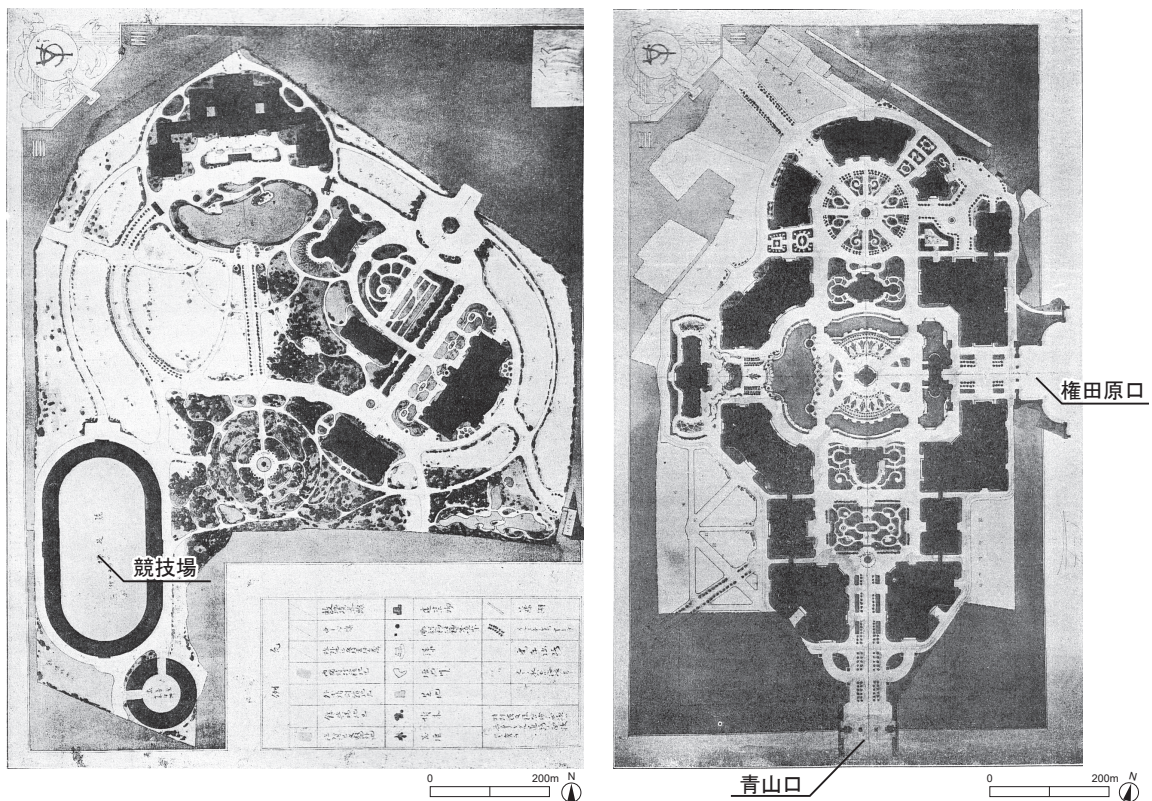


図2-1-5 吉武東里 代々木御領地案（左） 図2-1-6 吉武東里 青山練兵場案（右）  
 [出典：日本大博覧会工事計畫應募説明書：建築雑誌，第26巻，第301号，日本建築学会，1912（名称筆者加筆）]

⑨外国特別館地区、⑩内国特別館地区を計画することとされており、競技場は代々木会場に整備する計画であった<sup>10)</sup>。

最終的に設計競技は宮内省内匠寮技師の吉武東里の案が一等当選となった<sup>9) 10)</sup> (図 2-1-5、図 2-1-6)。その際、代々木会場の競技場は長軸を南北に配して計画された。しかし、同年 11 月 24 日、再び財政難から博覧会の中止が閣議決定された<sup>8) 9)</sup>。

翌 1912 (明治 45) 年 7 月 29 日、明治天皇は即位 50 周年を迎えることなく崩御され、ほどなく大規模な葬儀の準備が進められた<sup>8) 9)</sup>。

宮内省内匠寮技師の木子幸三郎は「鐵道の近くに葬場殿を持つて行けば、御式が済みましてから靈柩列車に移御になりますのに大層御都合が御宜しい、斯く云ふ關係から成るべく奥の方にして概略此邊が宜かろう (後略)」<sup>11)</sup> とした上で、「青山の通りから此處まで参ります間は、今まで練兵場があつた其儘でございますので第一道路がありませぬ、それで此處に向けて御車の御通りになりますのに不都合のないやうな、差支ないやうな (中略) 完全な道路を造りました (中略) 信濃町橋の方から御上が行幸啓になりますので、是から總門に参りますのにも相當道路がございますので、俄に是だけの行幸啓道路を拵へました」<sup>11)</sup> と述べている。

こうして同年 9 月 13 日、青山練兵場において明治天皇大喪儀 (図 2-1-7、図 2-1-8、図 2-1-9) が執り行われた。その際、大喪儀式場は青山口からの直線道路の先に葬場殿を配置する空間構成であった。日本大博覧会構想の際に、青山会場は軸線を用いたバロック様式の設計手法で計画することが要件であったことを含め、明治期における青山練兵場を対象とした施設計画での軸線の扱われ方について明らかになった。



図 2-1-7 明治天皇大喪儀 青山式場  
(出典：小川一真：御大喪儀写真帖，小川一真出版部，1912)



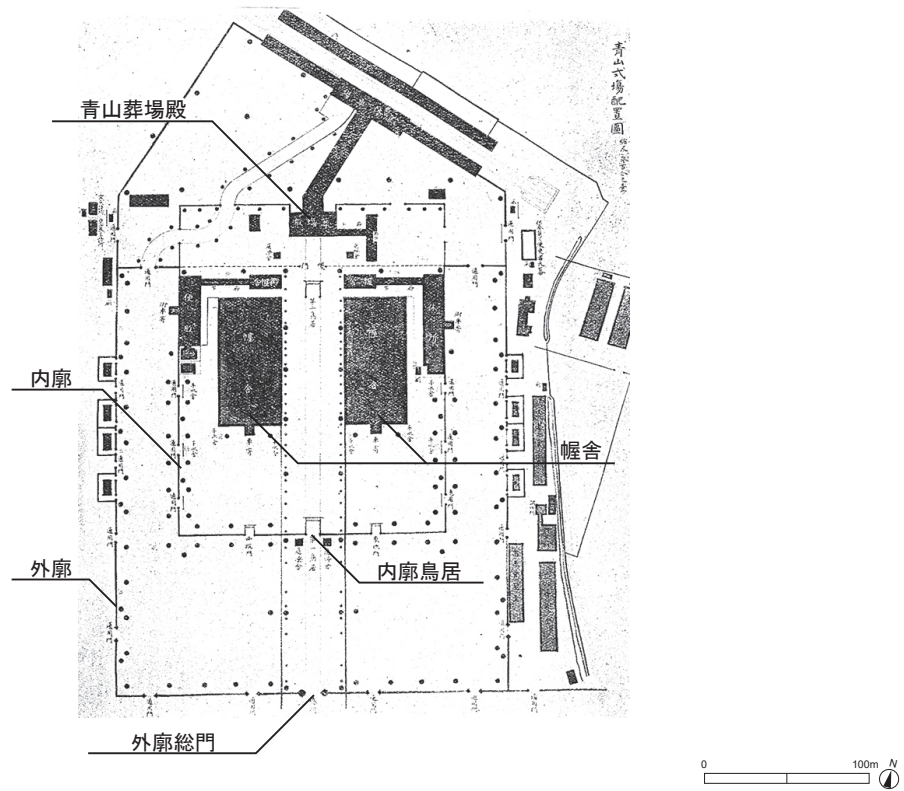


図 2-1-8 明治天皇大喪儀 青山式場配置図

〔出典：木子幸三郎「青山葬場殿建築談」『建築雑誌』，第 26 卷，第 312 号，日本建築学会，1912（名称筆者加筆）〕

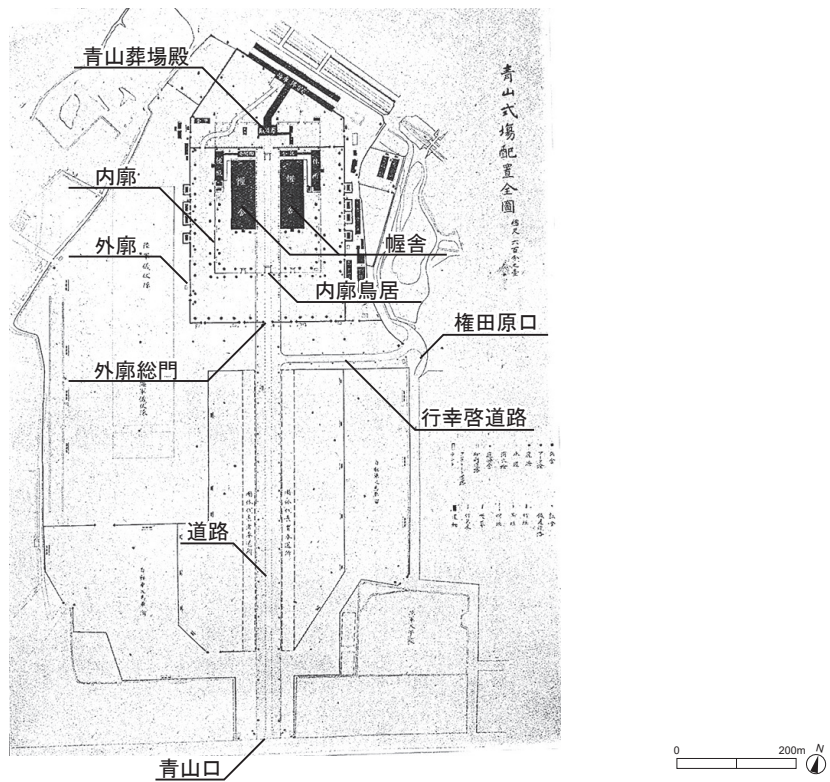


図 2-1-9 明治天皇大喪儀 青山式場配置全図

〔出典：木子幸三郎「青山葬場殿建築談」『建築雑誌』，第 26 卷，第 312 号，日本建築学会，1912（名称筆者加筆）〕

#### 2.1.4 明治聖代記念事業と明治神宮の創建運動<sup>注1)</sup>

明治天皇の崩御を受け、それまで計画されていた明治天皇即位50年大祝典に関する記念事業から明治聖代記念事業に変更され、「明治の聖代は何を以て記念し奉るべきか」が、雑誌「実業之日本」<sup>12)</sup>の誌面において議論された。まず、識者らから提案された記念事業に関する90余種類の考案の中から、国民を通じて実行すべきものとして20種類が選ばれた。その後、総勢167名の識者らは一種ないし三種を選択し回答した。全5回にわたって掲載された回答を表2-2にまとめた。②に「明治神社の建設」は確認できるが「競技施設」は構想されていなかった。

一方、記念事業とは別に、明治天皇崩御直後の1912(大正元)年8月1日、在京有志は東京商業会議所に集まり、委員20名を選定して東京に明治天皇御陵造営を請願することを決定し、渋沢栄一、阪谷芳郎(当時、東京市長)らが代表して政府に請願した。東京市関係者らは「御大葬の際霊柩を安置し奉りたる御跡をば空しく犬馬の荒すに任せて済むべきにあらざるを以て即ち御霊柩安置の御跡を直に神殿として明治神宮を建設し第二の伊勢太廟の如き崇高幽玄の霊域となすべし」<sup>13)</sup>としていた。明治天皇を追慕、敬仰する国民の思いが日増しに強まる中、在京有志は帝都・東京に明治天皇御陵ご造営を政府に請願したが、御料地はすでに京都・伏見桃山に決定しているとして請願は受けられなかった<sup>8) 9)</sup>。

在京有志は改めて会合を開き、「神社奉祀」の議を起し、神宮創建のために代々木御料地に内苑を国費で造営し、明治神宮奉賛会を組織して旧青山練兵場に外苑を献費で造営する「覚書」を作成して請願した。その後、帝国議会において国費で神宮を建設することが満場一致で可決され、明治神宮奉賛会を設立して内苑及び外苑それぞれが造営されることになった<sup>8) 9)</sup>。こうして計画されていた明治天皇即位50年大祝典に関する記念事業は明治聖代記念事業に変更された。

明治天皇大喪儀後の青山練兵場跡地では1913(大正2)年3月28日には貴族院議員と衆議院議員がそろって陸軍飛行機3機・ドイツ製飛行船の観覧式が行われた他<sup>14)</sup>、翌1914(大正3)年3月20日から7月31日まで大正天皇御即位を記念して、上野公園と不忍池の辺で東京大正博覧会が開催され、青山練兵場跡地はその第3会場として使用された。滑走路と格納庫を建設し飛行機2機を陳列展示、戦艦三笠の原寸大模型、3分の1の御即位式模型である紫宸殿、旅順口要塞模型、演芸館、活動写真等が展示されていた<sup>15)</sup>。

この土地特有の明治天皇のゆかりは、青山練兵場開設当初から継続的に行われていた観兵式と明治天皇大喪儀式場として使用されたことであった。また、日本大博覧会会場として構想されるなど、広く一般にも開かれた場所であったことが土地の性格の形成に大きく関係するものと考えられる。一方、明治天皇大喪儀の際に敷設された葬場殿の位置と青山口から葬場殿に至る直線の道路(図2-1-10)は、現在の外苑の空間構成の根幹をなすことになる。



表 2-2 明治聖代記念事業投票数一覧

番号	記念事業種類	投票数
1	先帝陛下の御銅像建設	54
2	科学的研究所の新設	54
3	聖徳館、明治殿、維新功業記念館等の建設	43
4	植林事業	41
5	明治史編纂	30
6	帝国議事堂の建設	21
7	御製五十首を謹寫した冊子を頒布	19
8	無資力の俊才養成の奨学金	17
9	中央工業試験局の新設	15
10	明治頌の作成	14
11	一大博物館、工業大博物館、一大機械館の建設	13
12	一大美術館の建設	13
13	万国大博覧会の開催	8
14	史跡名勝天然記念物保存局の新設	8
15	治肺養生院の新設	8
16	国立感化院の新設	8
17	灌漑治水道路荒蕪地開拓	7
18	本土九州間の大鉄橋建設	6
19	京都に王朝式の大内裏の建設	4
20	宗教塔の建設	3
21	明治神社の建設	9
22	蚕糸館の設置	1
23	言文一致・ローマ字採用	1
24	記念会堂の建設	1
25	病理研究所設立	1
26	国立東洋学院の設立	1
27	明治紀元号の新定と神武紀元号と平称	1
28	軍備完成	1
29	朝鮮に大学を設立	1
30	桃山に拝殿の建設	1

(典拠：『事業之日本』第15巻・第17号～第22号をもとに作成)



図 2-1-10 明治天皇大喪儀の際に敷設された青山口からの直線道路  
(出典：明治神宮奉賛会：明治神宮外苑志，明治神宮奉賛会，1937)

## 2.2 社会情勢と識者等の懸念

本節では、外苑の成立経緯に関して、渋沢栄一等によって設立された帰一協会の『帰一協会会報』<sup>16)</sup> や渋沢の伝記をまとめた『渋沢栄一伝記資料』<sup>17)</sup>、嘉納治五郎の著作を収録した『嘉納治五郎』<sup>18)</sup> や『嘉納治五郎著作集』<sup>19)</sup> を基礎資料として、明治神宮の創建を請願した渋沢と阪谷、外苑に競技場の建設を提言した嘉納、それぞれの思想的な背景を当時の世相と関連付ける。

### 2.2.1 明治天皇の教育に関する勅語

明治時代の教育に関して、明治政府は1872（明治5）年、日本で最初の近代的学校制度を定めた教育法令である学制を公布し、全国的に学校を設置して教育の普及に努めた。しかし、当時は文明開化の風潮により洋学が重んじられ、我が国伝統の倫理道德に関する教育が軽視される傾向にあった。

明治天皇の侍講であった元田永孚<sup>註5)</sup>は進講の中で「當世専ら教育を論じて、知育、徳育、体育、三つの者、兼ね備らんことを云う。然共、其の智と云い、徳と云い、専ら西洋に資りて、我國適當の教則に非ず。我國適當の教則を資らんと欲せば、此の孔子の教則を標準となさゝるべからず」<sup>20)</sup>として知育や徳育、体育の重要性を説いている。

こうした中で1890年（明治23年）明治天皇は、徳育の振興が最も大切であるとされ、道德の普及、教育の向上を熱心に希望されて、「教育に関する勅語」を發布された<sup>21)</sup>。

### 2.2.2 国内情勢と帰一協会

当時の国内情勢として、1910（明治43）年の大逆事件や社会主義思想が勃興してきていた。こうした世相に対して、成瀬仁蔵<sup>註6)</sup>は渋沢や森村市左衛門<sup>註7)</sup>と「現代思想改善」や「宗教統一」のための会合を開いていた<sup>22)</sup>。その後1912（明治45）年、「異なる宗教が相互理解と協力を推進して堅実なる思潮を作りて一国の文明に資す」ことを目的に、「帰一協会」を設立する<sup>23)</sup>。帰一協会の例会では各分野の専門家達による講演と討論が行われた。

渋沢は「現今日本に於いては、諸種の宗教並びに道德主義雜然として、人心の帰着に迷ふこと多し、吾人は如此状態に甘ずべきか、思想界の指導者は之に対して如何に考へらるるか、又東西兩文明の關係も、単に國際の問題にあらずして此の辺に關係なきか」と問いかけた。同年7月10日の例会で阪谷は、「宗教と教育並びに家族に関する談話」について講演している。その中で「明治23年に教育勅語が下賜せられたが、今迄の諸宗教の何れかと牴觸する所なきかを疑問とする。（中略）夫れ故に今日此の勅語の御趣旨と相反する宗教は、日本に其の存在を許さぬのである。（中略）即ち忠孝を無視する宗教は成立すべからざるもの」<sup>24)</sup>としている。

一方、嘉納も1914（大正3）年10月の例会で「教育と宗教的信念との關係」について講演している。その中で、「普通教育では、宗教も教へず、学説も説かず、其の共通の道德を教へ

さえすれば良いのである。(中略) 我國には、さういふやうな道徳が教育勅語といふ形に於て、而も神聖なる形式に於て、明治天皇の下し賜つたものである。(中略) 特に日本の國體に關係して説かれた處は、形式は他の國の道徳と異なつて居るけれども、精神は矢張共通である。(中略) 我國に於ては幸にさういふ權威ある道徳の教があるのであるから、それを國民に教へさへすれば、何も其れ以上に基礎を加える必要は無いのである」<sup>25)</sup>と述べており、国内の世相に対して強い懸念を持っていた渋沢の問いかけに対し、阪谷、嘉納ともに教育勅語を思想の中心としていた。

### 2.2.3 国際情勢と日本の立場

当時の国際情勢の一つに加州問題があった。1913(大正2)年、米国加州において土地所有及び3年以上の賃借を禁止した排日土地法が上程され、日本人移民の排斥運動が起きていた。また、1914(大正3)年には第一次世界大戦が勃発するなど、国際情勢にも強い懸念を持っていた渋沢は「今回の世界戦乱に際し特に我が国民道徳の標準を確定する必要なか」<sup>26)</sup>と問いかけ、答申をまとめることとなった。これに対して阪谷は、「元來個人主義と家族主義との衝突は日本国民道徳を破壊するものなり 故に大にして家族主義と為すべし(忠孝)此の主義を明言されたり」<sup>27)</sup>と提言した。

一方嘉納は、「欧米の優秀な国はいずれも皆白人種であるが、日本人は彼らと人種が異なっているのみならず宗教も言語も風俗習慣歴史も違っているので、彼らから特別扱いをせられ易い。そういう次第で世界の大きな舞台に立って彼らとことを共にして行く上に勝手の悪い場合も少なくない」<sup>28)</sup>とした上で、「国民は一人も残らず武術を心得ていなければならぬ(中略)武ということはあえて争うことでなく外から侵されないようにすることが本体でなければならぬ。一国に国防が必要であるように個人にも自己を防衛するだけの用意がなければならぬ。(中略)一朝外国とことを構えるようなことが生ずれば国民はこぞって国のために戦う決心がなければならぬ。そういう場合に平素武術をもって身心を鍛えておらぬものは往々恐れを懐き、国民の義務を忌避するようなことになる」<sup>29)</sup>と述べてる。

不安定な国際情勢に対して、渋沢、阪谷、嘉納は、それぞれが異なる立場から国際的な日本の立場を憂慮していた。

## 2.3 教育者・嘉納治五郎の体育と 阪谷芳郎の「明治神宮御造営ノ由来」

外苑に競技場の建設を提言したのは教育者・嘉納治五郎である。本節では、嘉納の著作を収録した『嘉納治五郎』<sup>18)</sup>や『嘉納治五郎著作集』<sup>19)</sup>を主な基礎資料とし、嘉納の思想的背景から競技場建設の提言に至る経緯について分析する。

### 2.3.1 嘉納治五郎の諸外国歴訪・ドイツ

外苑の造営に際し、競技場の建設を提言したのは高等師範学校校長の嘉納治五郎である。嘉納はスポーツの実践者としてだけでなく教育者として、体育を教科に用いていた。また、嘉納は1909（明治42）年、日本で最初の国際オリンピック委員会（以下IOC）の委員となり<sup>30)</sup>、IOC総会その他の委員会々議に参加し、オリンピック・ムーブメントの推進に貢献していた。

1912（明治45）年、ストックホルムで開催された第5回オリンピック競技大会にはじめて日本代表選手が参加した。その後、1916（大正5）年にベルリンで開催予定であった第6回オリンピック競技大会は第一次世界大戦の勃発により中止となったが、1920（大正9）年のアントワープで開催された第7回オリンピック競技大会に参加した。大会終了後、嘉納は国際情勢を鑑み、「わが国の国策を立てるため世界の戦後の大勢を見ておく必要があると考え」<sup>31)</sup>、諸外国を歴訪し、それらの国々の識者らと会談した。その際、その国の普通教育、大学教育、実業教育、種々の問題について意見を交換し、体育運動場の実情を視察した<sup>32)</sup>。

嘉納は最初にドイツのベルリンを訪れ、教育行政の中心文部の長官ベッカー博士と会談した。「プロシア政府は従来の教育方針を一変して自治の精神を鼓吹し、知育に偏した従来の教育を改め、体育手工等を奨励し、社会の事実に通曉せしむるため、普通教育に一種の社会学的の学科を加え、従来の如き宗教から遠からしめ、総合的観念を要請することをつとめ、上流の子弟と一般の子弟と学校を異にするような従来の学校組織を改め、漸次国民全体が同様の学校にて普通教育を受け得るようにしよう」<sup>33)</sup>というのがベッカー博士の骨子であった。

また、嘉納は中止となったベルリンで開催予定であった第6回オリンピック大会会場として建設されたドイツスタジアム（図2-3-1、図2-3-2、図2-3-3）を視察した。この競技場はトラック長軸を東西に配し、南側スタンド中央に貴賓席を設け、競馬場や水泳場と同一の場所に造られていた。嘉納は、「他国のスタジアムには見られぬ一つの特長」<sup>34)</sup>があったとした。

その後、嘉納はチェコスロバキア、オーストリアを歴訪し、スイス、フランスを経てイギリスに渡った。

嘉納が視察したドイツスタジアムは、競馬場や水泳場と同一の場所で兼用できるように造られており、外苑の造営計画における競技場の建設計画や建設地選定に大きく影響を及ぼすことになる。





図 2-3-1 ドイツスタジアム  
(出典：牧野正己：競技場建築，丸善，1934)



図 2-3-2 ドイツスタジアム平面図  
〔出典：牧野正己：競技場建築，丸善，1934（名称筆者加筆）〕



図 2-3-3 ドイツスタジアム 南側メインスタンド中央部貴賓席  
(出典：出口林次郎：運動競技場設計，体育運動協会，1935)

### 2.3.2 嘉納治五郎の諸外国歴訪・イギリス

イギリスに渡った嘉納は、同年12月2日にオックスフォードでバリオル・コレージの校長スミス氏と会談した。種々の意見を交換する中で、スミス氏は、「オックスフォードや中等学校において、学生は(中略)学業に熱心でない。しかしわれらは運動場において精神教育をなし、団体のために個人を犠牲にする精神を養い、またわれらは紳士としての行儀作法を教える」<sup>35)</sup>とした。さらにスミス氏はバリオル・コレージの運動場において「戦争のはじまった頃、学校には200人の学生がいたが、いざ戦争と聞いて彼らは誰にも勧められず、また互いに何ら話しあった模様も見えなかったが、200人中160人までが、自ら進んで戦争に出るために各自の家に戻った。後に残った40人中、14人はまた出て行って26人しか残らなくなった。(中略)これは皆この運動場で養われた精神教育の賜である。英国では道徳心は独立の課目としては教えない。しかし、道徳教育は気づかぬ中に若い者の心に浸潤するようにするのである。だから、口では道徳というようなことはあまりいわないのである」<sup>36)</sup>と述べていたことを、嘉納は当時の日記に委しくその談話を自記している。

スミス氏との会談を通して、道徳教育の一環としての体育の有用性を認識した嘉納は後に、「およそ普通教育においては、オックスフォード大学などは非常に手を掛けて、各個学生に対し、人物養成ということにつき、十分に注意しておるのであって、日本のごとく十把一束の取扱をせぬのである」<sup>37)</sup>と述べており、道徳を普通教育の課題として位置付けていた。

### 2.3.3 嘉納治五郎の道徳教育と競技場建設の建議

2.2.2で指摘したように、嘉納は「道徳が教育勅語といふ形に於て、而も神聖なる形式に於て、明治天皇の下し賜つたものである。(中略)我國に於ては幸にさういふ権威ある道徳の教があるのであるから、それを國民に教へさへすれば、何も其れ以上に基礎を加える必要は無いのである」<sup>25)</sup>としていた。こうした中で嘉納は「確固たる強き統一せられたる根柢によってすべての國民の上にほどこされなければならぬものである。(中略)すなわち教育勅語の徹底、(中略)これを実現すべき方法は十分な研究を遂げねばならぬ」<sup>38)</sup>とした。

嘉納は欧州歴訪から帰国後、「如何に論理整然とした議論でも演壇からの説法や教場での講釈のみでは衆人をことごとく実行に誘うことは望み難い。そこで私はこれを体育と結び付けて徹底せしめようと考えている。(中略)諸外国においても体育を精神修養の手段として行うことは普通のことであるが、國民精神を養うためには少数の有志が行う体育でなく國民が普遍的に行う体育でなければならぬ。そういう点から考えると精力善用國民体育程適當のものはない。この体育は表現的に行う部分があるから如何なる道徳思想でもそれを編み入れ、体育の目的を果たすと同時に道徳的精神の涵養に資することが出来る(中略)精力善用國民体育のようなものであれば実行は容易である。容易であるから広く國民は行う。広く國民が行うから精力善用の精神をあまねく國民に徹底せしむることになる。これが國民の精神教育のためにもこの体育が必要な所以である(中略)精力善用は大きいえば國家興隆の基である道徳の源泉ともいい

得られる程社会生活の大原則である」<sup>39)</sup>と結論付けた。

1916(大正5)年5月12日、日本YMCA(キリスト教青年会)のギャレン・フィッシャー、ジョン・デビス、同体育主事のフランクリン・ブラウン等は、嘉納や阪谷ら日本の政、財、教育界の人々と懇談した。その際、阪谷は米国における市営競技場建設に関心を示したとされている<sup>40)</sup>。翌1917(大正6)年、嘉納は名古屋市会議事堂で、「国民の體育に就いて」講演している。嘉納はその中で、「東京に於いて此度明治神宮の外苑と云うものが出来る。其外苑の一部に大きな運動競技場を造って貰いたいと云うことを先般建議したのである。」<sup>41)</sup>と述べている。こうして外苑の造営構想に競技場の建設計画が盛り込まれることになった。

2.3.2で指摘したように、嘉納はイギリス、オックスフォードでスミス氏と会談し、スミス氏は「われらは運動場において精神教育をなし、団体のために個人を犠牲にする精神を養い、またわれらは紳士としての行儀作法を教える」<sup>35)</sup>としていただけでなく、運動場において「英国では道徳心は独立の課目としては教えない。しかし、道徳教育は気づかぬ中に若い者の心に浸潤するようにするのである。だから、口では道徳というようなことはあまりいわないのである」<sup>36)</sup>としていた。こうしたことから、嘉納は教育者として運動場における無言の道徳教育の重要性を認識し、帰国後、「体育」に「道徳思想」として「教育勅語」を編入れ、「国民精神を養う」「道徳教育」として「国民体育の普及」を国策として位置付け、外苑造営に際し「国民精神を養う」無言の道徳教育の場として阪谷に競技場の建設を提言したものと推察される。

#### 2.3.4 阪谷芳郎の「明治神宮御造営ノ由来」

明治神宮外苑の造営に深く関与したのが阪谷芳郎(当時、東京市市長)である。1912年(明治45年)、阪谷は東京市長就任に就いて非公式の交渉を受けていた。その際阪谷は、「勅命ト國民ノ公選トハ原則トシテ辭スルヲ得ス。市ノ爲メニスヘキモノ」として地下道会社、精神教育、明治園(明治五十年記念)、河岸地其他整理、下水処分、上水第二期拡張を挙げていた<sup>42)</sup>。東京市長となった阪谷は神宮の創建決定を受け、「斯くして市民の願いは容れられ、東京府民と共に、永久に神宮奉仕の光榮を有することとなった」<sup>43)</sup>と述べている。

その後、東京市長を辞し明治神宮奉賛会副会長となった阪谷は、1916年(大正5年)1月11日、嘉納と「体育所ノ件」について会談した。さらに、同年3月3日、阪谷は麻布区役所楼上における演説の中で、「(前略)明治神宮の御祭には非常な人出があると云う事も今から予想しなければならぬ、(中略)夫れには競馬とか体育競争とか多くの人か<sup>ママ</sup>一緒に見られるやうに、大競技場を造つたらようかろう(中略)十万人位混雑しないで見えるやうな風に造り、(中略)西洋のスタジアムと云うやうな趣向に夫れを造つたらど<sup>ママ</sup>ふか、(中略)御境内は随分広いのでありますから、先づ十万人位の人が集つて競馬とか体育の競技とかを觀る事の出来る広い馬場を一つ造りたい、(中略)要するに青山練兵場全体の場所は之を一つの記念碑と看做して、其場所に記念として物を言はせると云う事が一つの理想に成つて居ります、此理想が実現さるれば明治年代の人が先帝先皇后の御洪恩に報ずる為<sup>ママ</sup>に造つた物であると千年の後に遺して恥しくあ

るまいと思う」<sup>44)</sup> という競技場の建設構想を述べている。

後に、阪谷は明治神宮鎮座十年祭の行われた1930年（昭和5）11月1日、「明治神宮御造営ノ由来」<sup>45)</sup> について講演している。その中で、明治神宮内外苑を造成した主たる目的は「国体上無言ノ教育ヲ一般国民ニ興フルヲ目的トシ同時ニ敬神ノ念ヲ自然ニ養成セシムル」ことであり、「内外苑相俟テ祭神ノ御聖徳ヲ万世ニ伝フルト共ニ国民ハ常ニ祭神御二柱ノ事ヲ追慕崇拜シ奉リ永久ニ其御余徳ニ浴シ民族ノ繁栄国運ノ隆昌ヲ期セントスルモノ」とした。

2.3.3で指摘したように、嘉納は外苑造営に際し「国民精神を養う」無言の道德教育の場として競技場の建設の提言をしたものと推察され、阪谷は、嘉納の競技場の建設趣旨を了承しただけでなく外苑全体を「国体上無言ノ教育ヲ一般国民ニ興フルヲ目的トシ同時ニ敬神ノ念ヲ自然ニ養成セシム」場と位置付け、これを外苑の造営趣旨としたものと考えられる。

## 2.4 皇室と体育

本節では、皇太子裕仁親王の欧州歴訪についてまとめられた『皇太子殿下御外遊記』<sup>46)</sup>や『皇太子殿下海外御巡遊日誌』<sup>47)</sup>を基礎資料とて、欧州最初の訪問国であったイギリスでの視察を中心に分析し、帰国後の皇室の体育御奨励に至る経緯について述べる。

### 2.4.1 皇太子裕仁親王の欧州歴訪・イギリス<sup>注10) 注11)</sup>

1914(大正3)年、学習院初等科を卒業した裕仁親王(後の昭和天皇)は、学習院中等科には進まず、「御学問所」に通うことになる。将来、天皇となる裕仁親王のための教育機関として、東宮御所の中に設置された学校であり、13歳から19歳までの七年間を「御学問所」で過ごすこととなる。御学問所では「将来大元帥陛下として君臨し給うべき玉体のいやがうえにも健に在はしませと(中略)只管御体育の御向上に」<sup>48)</sup>深く注意が払われていた。

1916(大正5)年11月3日、裕仁親王は立太子礼<sup>注12)</sup>を迎え、皇太子となった。当時の新聞には、運動服姿の皇太子裕仁親王や御学問所の運動場などが紹介された<sup>49)</sup>。こうした中で1921(大正10)年1月、御学問所の最終学年で欧州外遊が決定される。外遊は、君主に必要とされる能力を習得する貴重な実地教育であり、第一次世界大戦後の「民衆の運動思想の動揺」と各国の消長、「治乱興廃」の要因を探る絶好の機会でもあった<sup>50)</sup>。同年3月3日、皇太子裕仁親王一行は横浜港から軍艦「香取」で欧州外遊に出た。また、皇太子裕仁親王は、艦内においても日々海軍将校や侍徒と御運動され、その様子は、同乗した海軍将校や侍徒によって伝えられた。

欧州最初の訪問国であったイギリスでは英国皇太子の案内でゴルフを観戦した他、オックスフォード大学を訪れボート競技を観戦した<sup>50)</sup>。同年5月17日、ボーイスカウト創立者のベーデン・パウエル中将と会談した。パウエル中将は「ボーイスカウトの運動は、少年を軍人に仕立てる予備教育のように考えるものがあるけれども、これは甚だしい誤解であって、実は少年をして名誉と愛国との観念を信条化せしめ、精神・身体共に強靱なる人間に仕上げようとするものである。随って其の訓練の如きは、日本武士道の真髓を採ってこれを行うものである。(中略)何卒殿下におかせられても、十分此の運動について御研究を願ひ上げたい。」<sup>51)</sup>と述べている。また同年5月21日、皇太子裕仁親王は、エディンバラボーイスカウトのラリーを御覧になった。その際、皇太子裕仁親王は「ベーデン・パウエル中将ハ、親シク予ヲ訪ヒテ、此ノ運動ガ世界同胞ノ精神ヲ以テ興リ、而シテ此ノ運動ノ成功ハ、ヤガテ世界永久ノ平和ヲ建設スルニ貢献スルコト、鮮少ナラザルベキヲ告ゲタリ。予ハスクノ如ク美シキ精神ヲ保持シタル本運動ガ、当然収ムベキアラユル成功ヲ贏チ得ルコトヲ切ニ祈ルトトモニ、最近日本ニ於テ、同ジ目的ヲ以テ起リタル少年団運動ガ、時ヲ逐ウテ今日茲ニ見ルガ如キ進歩ノ域ニ達シ、コノ運動ノ目的トスル貴キ使命ヲ実現スルニ協力センコトヲ望ムモノナリ。(後略)」<sup>52)</sup>と述べている。この他イギリスではフェンシングなども観戦した<sup>50)</sup>。その後、フランス、ベルギー、オランダ、イタリアなどを歴訪し帰国の途についた<sup>52)</sup>。

外遊に同行した海軍少佐雪下勝美<sup>注13)</sup>は、皇太子裕仁親王がイギリスで、「彼国人が運動好きにして、其立派なる体軀や紳士的人格は大いに此のスポーツに負う所大なる」<sup>53)</sup>と感じ、「常に日本も運動を奨励せねばならぬ」<sup>53)</sup>と述べたとしている。

欧州歴訪から帰国後の同年11月25日、皇太子裕仁親王は、病状が悪化していた大正天皇に代わって政務を執り行うために、摂政<sup>注14)</sup>に就任した。当日の新聞の見出しには、「摂政の御大任を前に 鐵の如き御すこやかさ ゴルフ、庭球、乗馬、擊劍、弓術、競走、水泳其の他 総べて群を抜く御熟練と御熱心 運動家としての東宮殿下」<sup>50) 54)</sup>と報じられた。

2.3.2及び2.3.3で指摘したように嘉納はイギリスでの視察を通して、運動場で養われる精神教育と紳士としての行儀作法の重要性を認識し、国民体育の普及を考えていた。一方、皇太子裕仁親王もイギリスでの視察やボーイスカウト創立者のベーデン・パウエル中将との会談を通して、イギリス人の体格や紳士的人格はスポーツに負うものと感じ、日本における運動の奨励の重要性を認識したものと推察される。

#### 2.4.2 体育御奨励の令旨

1922(大正11)年11月4日、日本体育協会主催の第十回全日本選手権陸上大会は駒場運動場(東京帝国大学農学部運動場)で開催された。大会二日目の同年11月5日、摂政宮殿下(後の昭和天皇)が臨場した(図2-4-1、図2-4-2)。軍楽隊の演奏で一同君が代を斉唱し、整列した選手及び役員の前で摂政宮殿下は「運動競技ガ身体精神ノ陶冶ニ重大ノ関係アルハ言フヲ俟タズ。近来此種ノ会合益々隆盛ヲ致シ多数ノ青年一場ニ会合シ礼讓ヲ重シ気節ヲ尚ビ相和シテ技ヲ競フハ悦ブベキコトナリ。余ハ本協会ノ青年ガ技術ノ進歩ニ努ムルト共ニ一層修養練磨シテ運動競技ノ精華ヲ發揮セムコトヲ望ム。」<sup>55)</sup>と運動奨励の令旨を読み上げられた。また、十種競技の日本新記録を作った慶応大学の増田弘選手に、摂政宮殿下より下賜された純銀製の東宮賜杯が授与された<sup>57)</sup>。

翌1923(大正12)年5月、大阪の築港運動場で開催された第六回極東選手権競技大会では、大正天皇は極東体育協会に対して純銀製の天皇賜杯を下賜された。なお、この大会で選手権を最も多く獲得した我が国が最初の天皇賜杯保持国となった。さらに翌1924(大正13)年4月には、秩父宮殿下からパリオリンピック競技大会に参加する日本選手団が大会入場式に使用する国旗が大日本体育協会に下賜され、その後のオリンピック競技大会や極東大会等の国際競技大会で、我が国の代表団はこの下賜旗を先頭に入場式に臨んだ<sup>56)</sup>。

2.4.1で指摘したように、皇太子裕仁親王〔摂政宮殿下(後の昭和天皇)〕はイギリスでの視察やボーイスカウト創立者のベーデン・パウエル中将との会談を通して、イギリス人の体格や紳士的人格は運動場で養われるものと認識して運動の奨励を重要視したものと推察され、欧州歴訪から帰国後、さまざまなかたちで体育御奨励されたものと考えられる。



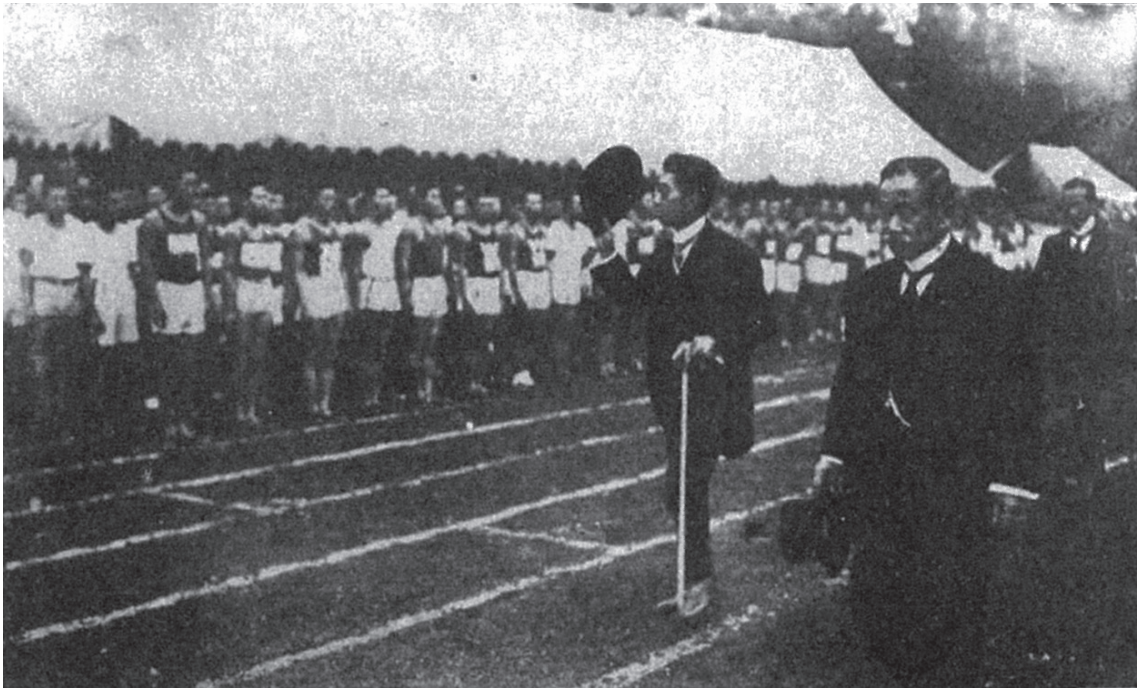


図 2-4-1 第十回全日本選手権陸上大会の観戦に駒場運動場に臨場した摂政宮殿下  
(出典：事業之日本社：実業之日本，第 27 卷，第 3 号，実業之日本社，1924)



図 2-4-2 駒場運動場で第十回全日本選手権陸上大会を観戦する摂政宮殿下  
(出典：大日本体育協会：アスレックス，第 2 卷，第 1 号，大日本体育協会，1923)



## 2.5 本章のまとめ

本章では、まず、青山練兵場設立以前から外苑への変容過程における土地利用や日本大博覧会構想計画の実態と、この土地における明治天皇のゆかりについて整理した。その結果、この土地における明治天皇のゆかりは、青山練兵場開設当初から継続的に行われていた観兵式と明治天皇大喪儀式場として使用されたことであった。また、日本大博覧会会場として構想されるなど、広く一般にも開かれた場所であったことが土地の性格の形成に大きく関係するものと考えられる。その際、青山会場は道路を幾何学的とし青山口からの線とこれに直交する線に対して相対的に西洋風の施設を配置することとされており<sup>10)</sup>、軸線を用いたバロック様式の設計手法で計画することが要件であった。また、明治天皇大喪儀式場は青山口からの直線道路の先に葬場殿を配置する空間構成であったことを含め、明治期における青山練兵場を対象とした施設計画での軸線の扱われ方について明らかになった。

次に、明治神宮の創建を請願した渋沢栄一と阪谷芳郎、外苑に競技場の建設を提言した嘉納治五郎を含め、それぞれの思想的な背景を当時の世相と関連付け整理した。

嘉納は諸外国を歴訪した際、教育者として運動場における無言の道德教育の重要性を認識し、欧州から帰国後、「体育」に「道德思想」として「教育勅語」を編入れ、「国民精神を養う」「道德教育」として「国民体育の普及」を国策として位置付け、外苑造営に際し「国民精神を養う」無言の道德教育の場として阪谷に競技場の建設を提言したものと推察される。

一方、阪谷は東京市長就任以前から「精神教育」や「明治園（明治五十年記念）」を市民の為にすべきものとしていた。また、明治聖代記念事業構想において「明治神社」は構想されていたが、競技施設は構想されなかった。こうした中で嘉納から「国民精神を養う」無言の道德教育の場として競技場建設の提言を受け、競技場の建設趣旨を了承しただけでなく外苑全体を「国体上無言ノ教育ヲ一般国民ニ興フルヲ目的トシ同時ニ敬神ノ念ヲ自然ニ養成セシムル」<sup>45)</sup>場と位置付け、これを外苑の造営趣旨としたものと考えられる。

将来天皇となる裕仁親王（後の昭和天皇）のための教育機関として設置された「御学問所」では、裕仁親王（後の昭和天皇）の体育の御向上に深く注意が払われた他、裕仁親王（後の昭和天皇）は欧州外遊、とりわけイギリスでの視察を通して、イギリス人の体格や紳士の人格は運動場で養われるものと認識し、運動の奨励を重要視したものと推察され、欧州歴訪から帰国後、さまざまなかたちで体育御奨励されたものと考えられる。

注：

- 注 1) 外苑の成立過程に関しては、長谷川香：明治神宮外苑の成立過程に関する研究 軍事儀礼・日本大博覧会構想・明治天皇大喪儀，建築史学，第 61 号，建築史学会，pp.54-86，2013.9 に詳しい。
- 注 2) 青山忠良（あおやまただなが）「別称」青山下野守 1806 年 -1864 年（文化 3 年 - 元治元年）江戸時代後期の大名、老中。丹波篠山藩（現在の兵庫県篠山市北新町）第 5 代藩主。青山家宗家 11 代。
- 注 3) 伊東祐相（いとうすけとも）「別称」伊東修理太夫 1812 年 -1874 年（文化 9 年 - 明治 7 年）日向飢肥藩（現在の宮崎県日南市）の第 13 代藩主。
- 注 4) 日本書記に記された神武天皇即位の年を元年として定められた紀元『日本国語大辞典第 2 版』小学館、2001
- 注 5) 元田永孚：1818 年 -1891 年。熊本藩士、儒学者。男爵。
- 注 6) 成瀬仁蔵：キリスト教牧師（プロテスタント）。日本における女子高等教育の開拓者の 1 人であり、日本女子大学の創設者。
- 注 7) 森村市左衛門：武具商・陶磁器業などを営んだ森村家の歴代当主が襲名した名前。6 代目・市左衛門：1839 年 -1919 年。男爵・従五位。森村財閥の創設者。日本陶器創始者（現・TOTO）。
- 注 8) ニ荒芳徳，澤田節蔵：皇太子殿下御外遊記，朝陽会，1924
- 注 9) 宮内大臣官房庶務課：皇太子殿下海外御巡遊日誌，宮内大臣官房庶務課，1923
- 注 10) 皇太子裕仁親王の御学問所や体育・スポーツについては、坂上康博：昭和天皇とスポーツ〈玉体〉の近代史，吉川弘文館，2016 に詳しい。
- 注 11) 皇太子裕仁親王の欧州歴訪については、波多野勝：裕仁皇太子ヨーロッパ外遊記，草思社，1998 に詳しい。
- 注 12) 立太子礼：公式に皇太子を立てることを立太子。立太子のために行う儀礼を立太子礼。新村出『広辞苑』第五版，岩波書店，1998.11
- 注 13) 雪下勝美：1887 年 -1967 年。日本の海軍軍人。太平洋戦争時にアルゼンチン大使館附武官兼チリ公使館附武官を務めた海軍少将。
- 注 14) 摂政：君主に代って政務を行うこと。また、その官。皇室典範により、天皇が成年に達しないとき、並びに精神・身体の重患または重大な事故の際、成年の皇族が任ぜられる。新村出『広辞苑』第五版，岩波書店，1998.11

参考・引用文献：

- 1) 東京府学務部社寺兵事課編：東京府史蹟名勝天然記念物調査報告 第 15 冊，東京府学務部社寺兵事課，1940
- 2) 明治天皇聖蹟保存会編：明治天皇聖蹟 東北北海道御巡幸之巻 上，明治天皇聖蹟保存会，1931
- 3) 明治神宮奉賛会：明治神宮外苑志，明治神宮奉賛会，1937
- 4) 史蹟名勝天然記念物保存協会編：史蹟名勝天然記念物，第 1 巻，不二出版，2003 復刻版
- 5) 明治天皇聖蹟保存会編：明治天皇聖蹟 東北北海道御巡幸之巻 上，明治天皇聖蹟保存会，1931 / 小田部雄次：静岡県の明治天皇聖蹟，明治聖徳記念学会紀要，復刊第 49 号，明治聖徳記念学会，pp.31-56，2012 を参照。
- 6) 北原糸子：東京府における明治天皇聖蹟指定と解除の歴史，国立歴史民俗博物館研究報告，第 121 集，国立歴史民俗博物館，pp.285-338，2005 / 朴晋雨：明治天皇の「聖蹟」保存について，歴史評論，通巻 478 号，pp.35-51，1990 を参照。
- 7) 東京府学務部社寺兵事課編：東京府史蹟名勝天然記念物調査報告 第 15 冊，東京府学務部社寺兵事課，1940
- 8) 明治神宮奉賛会：明治神宮外苑志，明治神宮奉賛会，1937
- 9) 長谷川香：明治神宮外苑の成立過程に関する研究 軍事儀礼・日本大博覧会構想・明治天皇大喪儀，建築史学，第 61 号，建築史学会，pp.54-86，2013.9
- 10) 日本大博覧会工事計畫應募説明書：建築雑誌，第 26 巻，第 301 号，日本建築学会，pp.43-47，1912
- 11) 木子幸三郎：青山葬場殿建築談，建築雑誌，第 26 巻，第 312 号，日本建築学会，p.553-554，1912
- 12) 事業之日本社：事業之日本，第 15 巻，第 17 号～第 22 号，事業之日本社，1912
- 13) 明治神宮奉祀 第二の伊勢大廟とせん：朝日新聞，大正元年 8 月 3 日
- 14) 滋野清武著・桑野桃華編：通俗飛行機の話，日東堂書店，pp.176-178，1913
- 15) 東京大正博覧会協賛社編：東京大正博覧会遊覧案内，東京大正博覧会協賛社協賛社出版部，1913
- 16) 婦一協会編：婦一協会会報，第一号，婦一協会，1913 / 婦一協会編：婦一協会会報，第六号，婦一協会，1925

## 第2章

- 17) 渋沢青淵記念財団竜門社編：渋沢栄一伝記資料，第43巻，渋沢栄一伝記資料刊行会，1962／渋沢青淵記念財団竜門社編：渋沢栄一伝記資料，第46巻，渋沢栄一伝記資料刊行会，p. 597，1962
- 18) 嘉納先生伝記編纂会編：嘉納治五郎，講道館，1964
- 19) 嘉納治五郎：嘉納治五郎著作集，第一巻，五月書房，1983
- 20) 元田永孚（東野）：経筵進講録，鉄華書院，p. 49，1900
- 21) 明治神宮：大御心 明治天皇御製教育勅語緊解，明治神宮社務所，1973
- 22) 高橋原：帰一協会の理念とその行方ー昭和初期の活動，東京大学宗教学年報，東京大学宗教学研究室，pp. 43-44，2002
- 23) 沖田行司：国際交流を推進する平和主義教育構想，公益の追求者・渋沢栄一 新時代の創造，山川出版，p. 243，1999
- 24) 帰一協会編：帰一協会会報，第一号，帰一協会，p. 29，1913
- 25) 帰一協会編：帰一協会会報，第六号，帰一協会，p. 189，1925
- 26) 渋沢青淵記念財団竜門社編：渋沢栄一伝記資料，第43巻，渋沢栄一伝記資料刊行会，p. 587，1962
- 27) 渋沢青淵記念財団竜門社編：渋沢栄一伝記資料，第46巻，渋沢栄一伝記資料刊行会，p. 597，1962
- 28) 嘉納治五郎：嘉納治五郎著作集，第一巻，五月書房，p. 127，1983
- 29) 同上書，p. 131
- 30) 嘉納先生伝記編纂会編：嘉納治五郎，講道館，pp. 589-591，1964
- 31) 嘉納治五郎：嘉納治五郎著作集 第三巻，五月書房，p. 310，1983
- 32) 嘉納先生伝記編纂会編：嘉納治五郎，講道館，p. 602，1964
- 33) 嘉納治五郎：嘉納治五郎著作集 第三巻，前掲書，p. 319，1983
- 34) 同上書，p. 320
- 35) 同上書，pp. 335-336
- 36) 同上書，p. 337
- 37) 嘉納治五郎著，講道館監修：嘉納治五郎大系，第六巻，本の友社，p. 84，1988
- 38) 嘉納治五郎：嘉納治五郎著作集、第三巻，前掲書，p. 135
- 39) 嘉納治五郎：嘉納治五郎著作集，第一巻，前掲書，pp. 130-132
- 40) 高島航：帝国日本とスポーツ，塙書房，p. 123，2012
- 41) 嘉納治五郎：国民の体育に就いて，愛知教育雑誌，愛知教育会，第356号，pp. 15-16，1917
- 42) 故阪谷芳郎子爵記念事業会編：阪谷芳郎傳，故阪谷芳郎子爵記念事業会，p. 345，1951
- 43) 同上書，p. 355
- 44) 阪谷芳郎：明治神宮奉賛会経過（大正五年三月四日麻布区役所楼上にて演説），明治神宮奉賛会通信第四号付録，明治神宮編，明治神宮叢書，第十九巻・資料編（3），明治神宮社務所，pp. 1144-1145，2006
- 45) 阪谷芳郎：明治神宮御造営ノ由来，明治神宮編，明治神宮叢書，第十七巻・資料編（1），明治神宮社務所，pp. 521-522，2006
- 46) ニ荒芳徳，澤田節藏：皇太子殿下御外遊記，朝陽会，1924
- 47) 宮内大臣官房庶務課：皇太子殿下海外御巡遊日誌，宮内大臣官房庶務課，1923
- 48) 坂上康博：昭和天皇とスポーツ〈玉体〉の近代史，吉川弘文館，p. 90，2016
- 49) 坂上康博：昭和天皇とスポーツ〈玉体〉の近代史，吉川弘文館，p. 92，2016
- 50) 波多野勝：裕仁皇太子ヨーロッパ外遊記，草思社，1998／坂上康博：昭和天皇とスポーツ〈玉体〉の近代史，吉川弘文館，2016などを参照。
- 51) ニ荒芳徳，澤田節藏：皇太子殿下御外遊記，朝陽会，pp. 159-160，1924
- 52) 宮内大臣官房庶務課：皇太子殿下海外御巡遊日誌，宮内大臣官房庶務課，p. 103，1923
- 53) 聖徳奉賛会：再版 聖上御聖徳録，聖徳奉賛会，p. 274，1931
- 54) 東京日日新聞：1921年11月25日
- 55) 日本体育協会：日本体育協会五十年史，日本体育協会，p. 38，1963.10
- 56) 同上書，p. 39，1963.10

図版典拠：

- 2-1-1 筆者作成
- 2-1-2 明治神宮奉賛会：明治神宮外苑志，明治神宮奉賛会，1937
- 2-1-3 海軍省：凱旋及陸軍觀兵式（2），防衛省防衛研究所蔵，海軍省 - 公文備考 -M39-7-632，1906（名称筆者加筆）
- 2-1-4 東洋堂：風俗画報，東洋堂，第71卷，第33号，1894年
- 2-1-5 日本大博覽會工事計畫應募説明書：建築雜誌，第26卷，第301号，日本建築学会，1912（名称筆者加筆）
- 2-1-6 同上書（名称筆者加筆）
- 2-1-7 小川一真：御大喪儀写真帖，小川一真出版部，1912
- 2-1-8 木子幸三郎：青山葬場殿建築談，建築雜誌，第26卷，第312号，日本建築学会，1912（名称筆者加筆）
- 2-1-9 同上書（名称筆者加筆）
- 2-1-10 明治神宮奉賛会：明治神宮外苑志，明治神宮奉賛会，1937
- 2-3-1 牧野正己：競技場建築，丸善，1934
- 2-3-2 同上書
- 2-3-3 出口林次郎：運動競技場設計，体育運動協会，1935
- 2-4-1 事業之日本社：実業之日本，第27卷，第3号，実業之日本社，1924
- 2-4-2 大日本体育協会：アスレチックス，第2卷，第1号，大日本体育協会，1923



### 第3章

## 明治神宮外苑競技場の成立





### 3.1 明治神宮外苑造営構想

本節では、外苑の造営構想の検討過程と、そこでの競技場の配置計画について考察する。競技場の建設を提言した大日本体育協会会長の嘉納治五郎の著作を収録した『嘉納治五郎』<sup>1)</sup>『嘉納治五郎著作集』<sup>2)</sup>、明治神宮造営局技師で外苑競技場設計者の小林政一<sup>注1)</sup>の博士論文『明治神宮外苑工事に就いて 第一輯』<sup>3)</sup>を主な基礎資料として、掲載されている言説と図版を関連付けながら、これまで具体的な指摘はされてこなかった外苑造営計画における競技場の配置計画の変遷を整理する。

#### 3.1.1 競技場の建設構想

2.3.1で指摘したように、嘉納治五郎は1912（明治45）年にストックホルムで開催された第5回オリンピック競技大会参加後、諸外国を歴訪し、体育、運動場の実情を視察して回った。嘉納はドイツにわたり、1916（大正5）年にベルリンで開催予定の第6回オリンピック競技大会（第一次世界大戦のため中止）会場として建設されたドイツスタジアムを視察している。この競技場はトラック長軸を東西に配し、貴賓席は南側スタンド中央に設けられていた他、競馬場と競技場が同一の場所で兼用できるように造られており、当時、他国の競技場にはない特徴があった。その後、スイス、フランス等を経てイギリスに渡った。各国視察後、嘉納は帰国途中の船上で明治天皇崩御の知らせを受けた<sup>4)</sup>。

一方、2.3.4で指摘したように阪谷芳郎は、1916（大正5）年3月3日の麻布区役所楼上での演説の中で、「（前略）明治神宮の御祭には非常な人出があると云う事も今から予想しなければならぬ、（中略）夫れには競馬とか体育競争とか多くの人か<sup>ママ</sup>一緒に見られるやうに、大競技場を造つたらようかろう（中略）十万人位混雑しないで見えるような風に造り、（中略）西洋のスタジアムと云うやうな趣向に夫れを造つたらど<sup>ママ</sup>ふか、（中略）御境内は随分広いのでありますから、先づ十万人位の人が集つて競馬とか体育の競技とかを観る事の出来る広い馬場を一つ造りたい、（中略）要するに青山練兵場全体の場所は之を一つの記念碑と看做して、其場所に記念として物を言はせると云う事が一つの理想に成つて居ります、此理想が実現さるれば明治年代の人が先帝先皇后の御洪恩に報ずる為に造つた物であると千年の後に遺して恥しくあるまいと思う」<sup>5)</sup>と述べており、競技場は明治聖代記念事業の重要な施設として位置付けられた。

後に嘉納は「坂谷男が市長時代に、明治神宮外苑に模範的大運動場を設置して貰いたいと希望を述べておいたら、程経て外苑内に運動場を造るから設計図案を出してくれと云う話だったので、早速夫々専門家<sup>注2)</sup>の意見を聴き、設計図に揃えて設計案を提出した。（中略）少くも三萬人、大きくて十萬人の観衆を収容する事とする」<sup>6)</sup>と述べているだけでなく、競技場の建設地に関して「運動場の場所は目下建築中の學習院女學部の先きの千駄ヶ谷に面した所へ希望しておいた」<sup>6)</sup>としている。また、嘉納は「参考としては端典のストックホルム及び米國のシカゴの大運動場の圖を添へて出した」<sup>6)</sup>とした。一方、造営局技師の小林は、米国における

大学の競技場を多数調査している。とりわけ、最新式スタンドの競技場としてスタンド両翼の塔上に橋を架け、その上に諸室が設けられた米国イリノイ州ノースウェスタン大学の「Dyche stadium」（トラック長軸を南北に配し、西側にメインスタンドを配置。）について、「端部にはスタンドを設けずに解放させることで附近の風光と建物の輪郭が相まって壮大な美観を呈す<sup>7)</sup>と評している。こうして大規模な競技場の計画が進められることになる。

### 3.1.2 明治神宮外苑の造営計画

1913（大正2）年、明治天皇奉祀に関する事項を調査審議する神社奉祀調査会が内務大臣のもとに組織され、委員には渋沢、阪谷をはじめ、軍人、学者、官僚、神職など総勢41人で構成された<sup>注3)</sup>。建築家は伊藤忠太<sup>注4)</sup>、佐野利器<sup>注5)</sup>、安藤時蔵<sup>注6)</sup>、建築史家は関野貞<sup>注7)</sup>が選出され、創建する神社の社名を明治神宮とする他、青山練兵場に外苑を造営することを決定した<sup>8)</sup>。

制作時期は定かでないが、当時の明治神宮境内の状況を示すものを図3-1-1に示す。図には外苑の構成だけが描かれていないことから、外苑の構成を検討していた時期のものと考えられる。また、国立公文書館が所蔵する『神社奉祀調査会経過要領の件』<sup>8)</sup>に収録されている「明治神宮境内及附属外苑之図」から外苑地区を抽出したものを図3-1-2及び図3-1-3示す。図3-1-2には甲案、図3-1-3には乙案と表示されている。

同調査会による1914（大正3）年11月30日までの審議経過を伝えるもので<sup>9)</sup>、同調査会の外苑計画考案の中には「外苑ニ設備スヘキモノノ中既ニ識者間ノ議ニ上レルモノ左ノ如シ」として、以下のものが挙げられた。①記念館、②歴史絵画館、③美術館、④図書館、⑤体育館、⑥公会堂、⑦植物館、⑧奏楽堂、⑨競馬場・競技場、⑩恩賜館（伊藤公爵ニ賜リタル憲法館）、⑪立像街、⑫泉池、⑬樹林及芝生・花壇、⑭記念門、⑮正門及諸門・柵等、⑯休憩所等であった<sup>8)</sup>。

甲案（図3-1-2）及び乙案（図3-1-3）いずれも葬場殿趾と競技場の位置は同様であるが、他の施設の配置はそれぞれ異なる主要道路を基調として計画されている。甲案（図3-1-2）は明治天皇大喪儀の際に敷設された青山口からの直線道路を踏襲したものと考えられる主要道路を基調とし、主に直交する道路により構成された計画となっている。

これに対して乙案（図3-1-3）は、青山口からの大きな弧を描く主要道路を基調とし、その道路が敷地東側の権田原口から明治天皇大葬儀の際に敷設された行幸啓道路を踏襲したものと考えられる道路と接続しており、主に有機的な形状の道路で構成された計画となっている。

2.3.1及び3.1.1で指摘したように、嘉納は競馬場と競技場が同一の場所で兼用できるように造られていたドイツスタジアムを視察している。甲案（図3-1-2）及び乙案（図3-1-3）のいずれも競技場の計画は、ドイツスタジアム同様に同一の場所に競馬場と競技場を建設する計画であったが、ドイツスタジアムの方が長軸を東西に配していたのに対して、計画構想された競馬場および競技場は北北西から南南東に長軸を配している他、3.1.1で指摘したように、

嘉納の提案に従い学習院女学部の北側に競技場を配置することを前提として、基調となる主要道路の配置計画を検討していた時期のものと考えられる。

一方、1915(大正4)年5月、神社奉祀調査会に代わって内務省に明治神宮造営局が設置された。また、同年9月、渋沢、阪谷ら有志によって明治神宮奉賛会<sup>注8)</sup>が組織された。その後、1917(大正6)年2月、同奉賛会は内務省所管の明治神宮造営局<sup>注9)</sup>に外苑の設計及び工事の施工を委嘱して外苑の造営事業が進められることとなる。

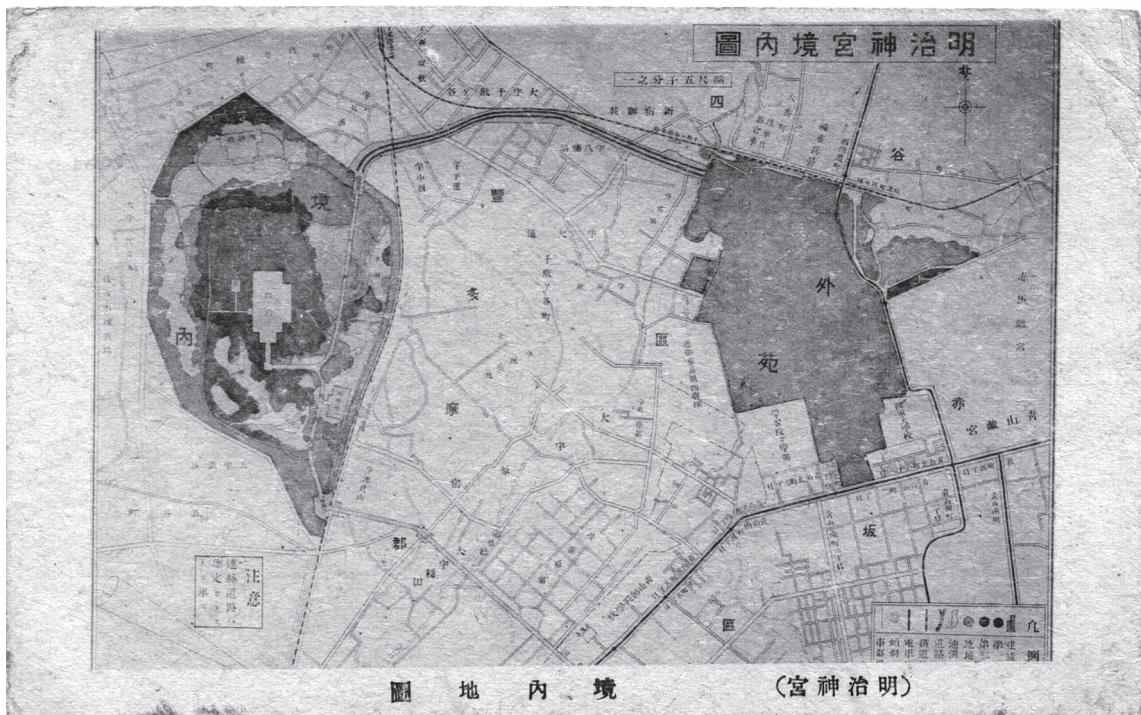


図 3-1-1 明治神宮境内地図  
〔出典：絵葉書（筆者所蔵）〕



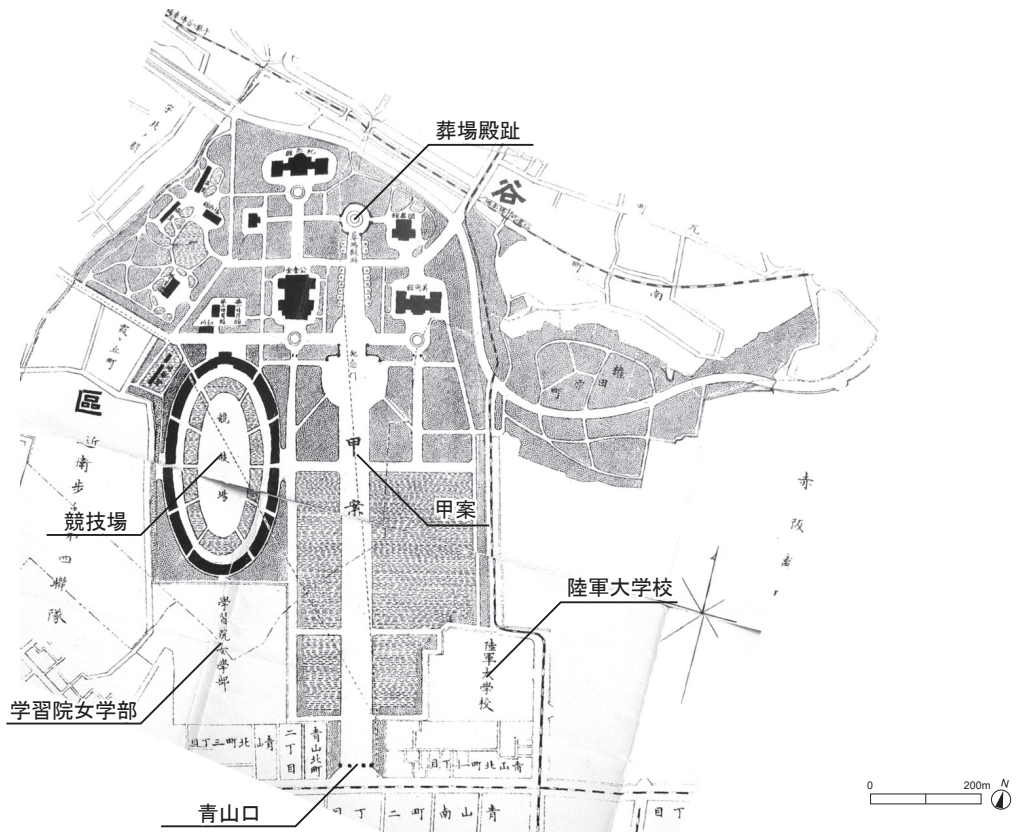


図 3-1-2 甲案

〔出典：内閣：神社奉祀調査会経過要領の件，国立公文書館蔵，1915（名称筆者加筆）〕

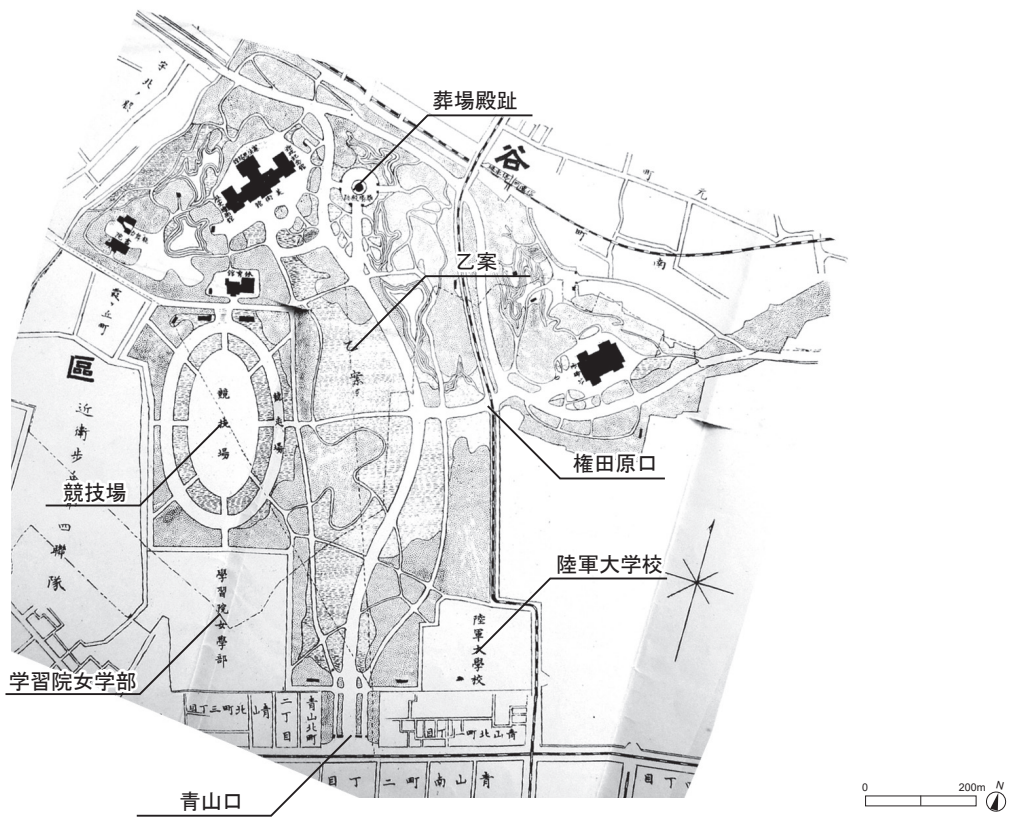


図 3-1-3 乙案

〔出典：内閣：神社奉祀調査会経過要領の件，国立公文書館蔵，1915（名称筆者加筆）〕

### 3.1.3 競技場及び主要道路の配置計画の検討過程

大規模な競技場の構想に際し、造営局技師の小林はドイツスタジアムや米国のヤンキーススタジアムなどの複合的な競技場を調査し、「兼用したるものあれども望ましからず」<sup>10)</sup>とした他、「特別な考究を要するもの」<sup>11)</sup>として複合的な競技場の計画を危惧していた。さらに小林は「此の運動場は成可く競馬野球等も出来る様にしたいのであるが、それには非常に広漠たる土地を要するのと、且つ是等の種類は、競技場として完全を期する上に於いて両立し難いものであるという点から、結局競走場として完全なるものを造り、(中略)一般公衆の體育場としても之を使用せらるゝやうにしたいと思うのである」<sup>12)</sup>と述べている。

一方、2.3.1及び3.1.1、3.1.2で指摘したように、嘉納は競馬場と競技場が同一の場所に作られたドイツスタジアムを視察しており、「日本でも一時明治神宮の外苑に同様のものを造ろうという考えがあって、前年阪谷男爵から相談を受けていろいろ工夫してみたことがある。当時青山ではとうてい無理だという結論になって、同所には競技場だけを造る案になったのである」<sup>13)</sup>と述べており、複合的な競技場の構想は、検討の結果、陸上競技場を建設する計画に変更されることになった。

1916(大正5)年12月、嘉納治五郎、岸清一、ブラウン、今村次吉、永井道明、明石和衛、森久保善太郎、金栗四三ら体育関係者は明治神宮奉賛会を訪れ、設計顧問委員らとの協議の結果、現代の要求と地形とを顧みて西北隅渋谷川沿い射的場趾(舊幕の烟硝藏趾)に陸上競技場を造ることが決定した<sup>14)</sup>。翌1917(大正6)年5月、同奉賛会は外苑の「設計及工事」のため、その専門となる顧問と委員を選出し「外苑計画要領」策定を囑託した。顧問は古市公威<sup>注10)</sup>、委員には、日下部辨二郎<sup>注11)</sup>、伊藤忠太、近藤虎五郎<sup>注12)</sup>、塚本靖<sup>注13)</sup>、佐野利器、関野貞、川瀬善太郎<sup>注14)</sup>、本多静六<sup>注15)</sup>、原熙<sup>注16)</sup>が選出された<sup>15)</sup>。同年『明治神宮奉賛会通信 第16号』に掲載された「外苑計画(図3-1-4)」には、敷地の西北隅に競技場が計画されている。

2.3.1及び3.1.1、3.1.2で指摘したように、嘉納はドイツスタジアムを視察しており、「ベルリンの郊外のは地面も広いし、土地の高低差を利用することが出来るので、(中略)参考上はなはだ面白く感じた」<sup>13)</sup>と述べていることから、嘉納が高低差のあった北西の敷地を建設地に提案したものと推察される。一方小林も、土地の高低差を利用した競技場の事例としてタコマ大学等の多数の競技場を調査しており<sup>16)</sup>、傾斜地を観客席に利用できることが考慮されて競技場の建設地が決定したものと考えられる。また、嘉納は「無論屋根を設け、貴賓席及び玉座等も内務省の都合で設けられる事と思ふ」<sup>6)</sup>と述べている。競技場の東側メインスタンド中央部に何らかの施設が計画されおり(図3-1-4)、貴賓席及び玉座がここに計画されていたものと推察される。主要道路は青山口から葬場殿趾を結ぶ直線道路と、権田原口から敷地の西側に配置された美術館を結ぶ直線道路を基調として計画されている。2.1.2で指摘したように権田原口には、明治天皇大喪儀の際に行幸啓道路が敷設されており(図2-1-10)、青山口と同様に権田原口も重要視されていたものと推察される。

その後、同年の『明治神宮奉賛会通信 第24号』に掲載された「外苑計画参考図(図3-1-



5)」では、一転して西側メインスタンドで北側の観客席の一部を解放させた競技場が計画されている。後に小林は、競技場の設計について「冬期北風を防ぐため、北側に建物又は樹木等を配することも望ましき事なり」<sup>11)</sup>と述べている。また、「観客席は西日を背に負ふ事」<sup>17)</sup>としており、冬季の季節風と西日を防ぐ為にメインスタンドを西側にする合理性から競技場の方位に関して再検討したものと考えられる。この他、絵画館（図3-1-4では美術館）は青山口からの直線道路の正面に配置され、権田原口からの直線道路に替わり、新たに千駄ヶ谷口、内苑との連絡道路、信濃町口、権田原口を結ぶような回遊性を持った楕円形状の主要道路と、絵画館の南側に楕円形状道路内を東西に結ぶ直線道路や楕円形状道路内に梯子状の苑路を配置する計画案が示された。

変更点の中でも外苑の造営計画全体の方向性に特に影響を与えたと考えられるのは、絵画館と主要道路の計画である。この主要道路の計画と絵画館の位置は現在の外苑の空間構成と類似することから、この時期に外苑の基本的な配置計画の骨格が形成されたものと推察される。

翌1918（大正7）年には、外苑造営計画の最終案となる「外苑大体計画（図3-1-6）」が決定され、競技場は西側を直線型スタンドに、楕円形状の主要道路は長円形に変更された計画案が示された。競技場の計画は、近代化という時代背景と西洋の先進性から欧米の競技場が参照され、嘉納が建設を提言しただけでなく建設地選定にも関わっていたことが明らかになった。一方、外苑の造営計画は明治天皇大喪儀の際に敷設された青山口からの直線の道路を基調として踏襲し、施設の配置計画の骨格が形成されたものと推察される。

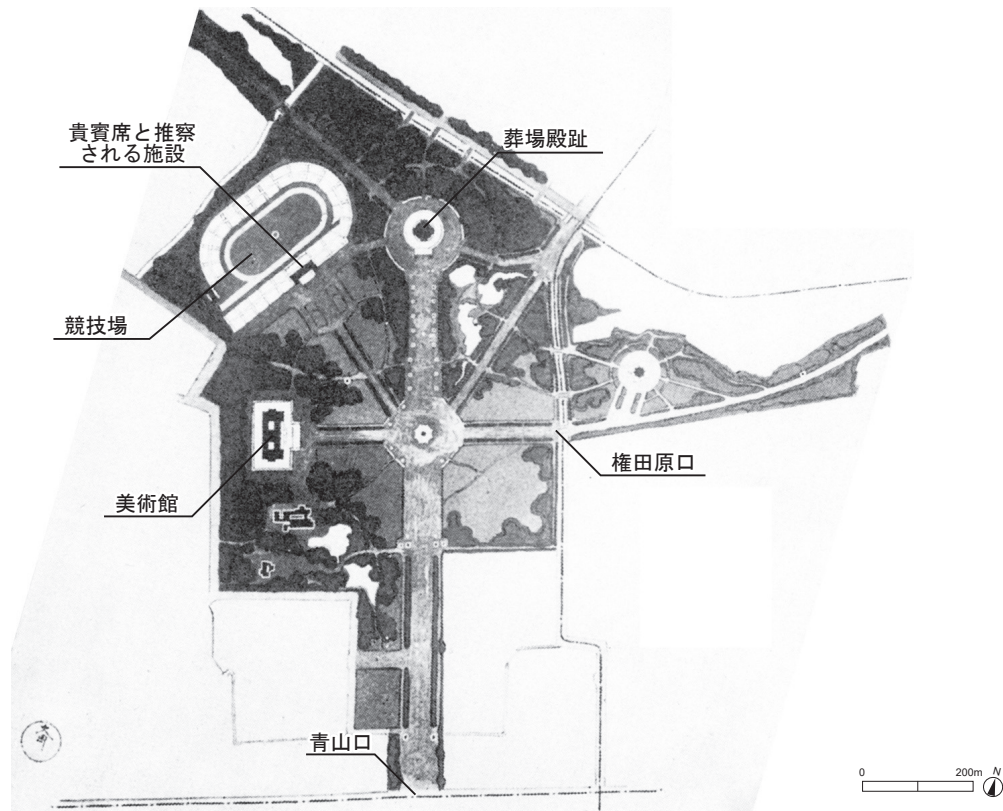


図3-1-4 外苑計画

〔出典：明治神宮：明治神宮叢書，第19巻，資料編（3），明治神宮社務所，2006（名称筆者加筆）〕

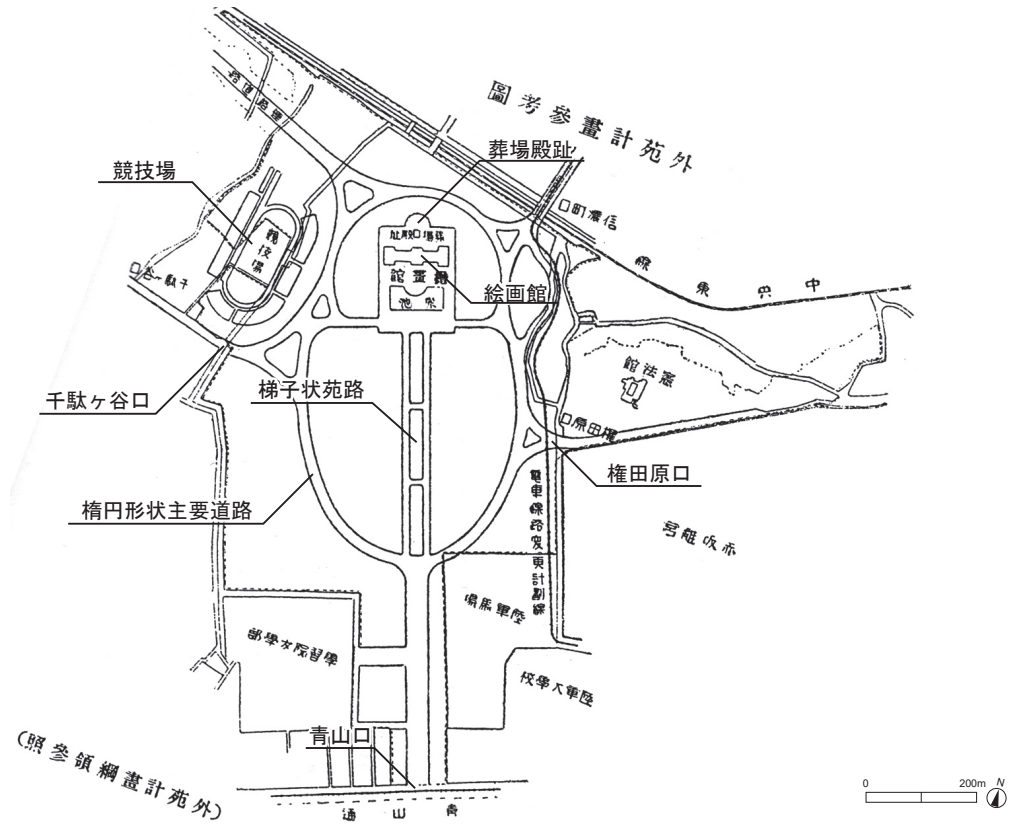


図 3-1-5 外苑計画参考図

[出典：明治神宮，明治神宮叢書，第 19 卷，資料編 (3)，明治神宮社務所，2006 (名称筆者加筆)]

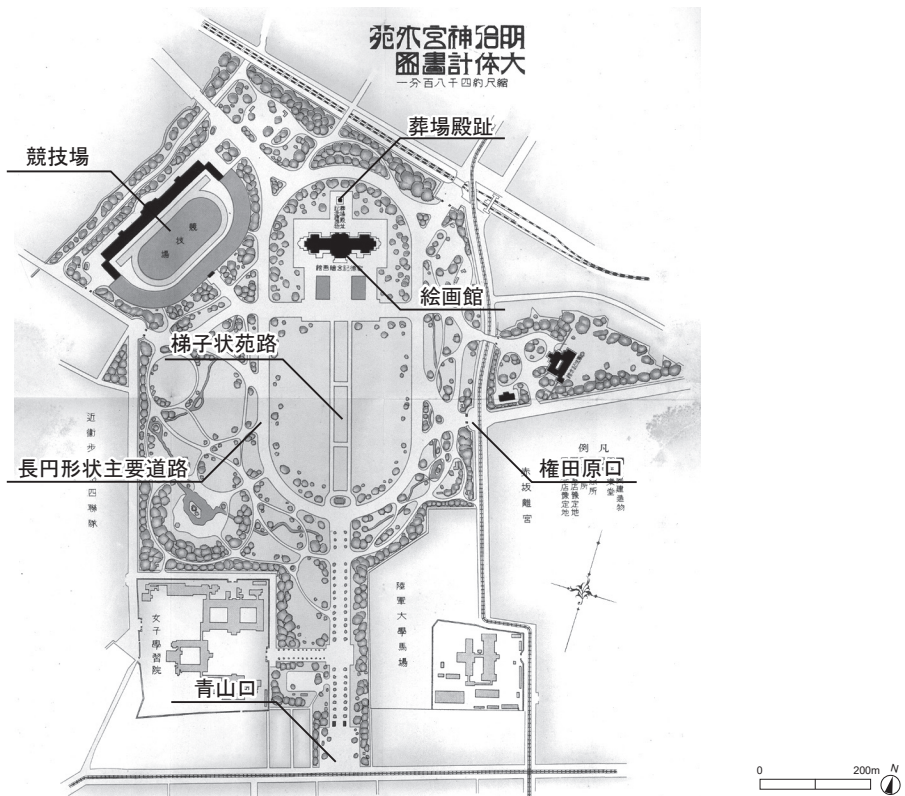


図 3-1-6 明治神宮外苑大體計画

[出典：明治神宮奉賛会，明治神宮外苑志，明治神宮奉賛会，1937 (名称筆者加筆)]

## 3.2 明治神宮外苑競技場の計画

本節では、造営局技師で外苑競技場設計者の小林政一の博士論文である『明治神宮外苑工事に就いて 第一輯』<sup>3)</sup>を主な基礎資料として、嘉納治五郎と小林が参照した主な競技場の計画と建設された外苑競技場の概要を整理し、小林の言説と関連付けながら外苑競技場西側スタンドの計画について述べる。また、外苑造営計画に際し計画された施設の変遷を整理して造営された外苑について述べる。

### 3.2.1 嘉納治五郎と小林政一が参照した主な競技場

2.3.1及び3.1.1、3.1.2、3.1.3で指摘したように、嘉納は競技場の長軸を東西に配し、南側スタンド中央に貴賓席を設け、競馬場と競技場が同一の場所に作られたドイツスタジアムを視察しており、外苑の造営構想に際して同様のものを計画構想していた〔ドイツスタジアムの長軸は東西に配していたのに対して、外苑の造営構想当初計画された競技場は長軸を北北西から南南東に配していた(図3-1-2、図3-1-3)〕。一方、小林は、競技場の設計に際し各国の様々な競技場を調査し比較検討を行っている<sup>18)</sup>(表3-1)。

また、3.1.1で指摘したように、競技場の建設構想に際して嘉納は「ストックホルム競技場」及び「シカゴの大運動場」を参考として図面を提出していた。2.3.1で指摘したように「ストックホルム競技場(図3-2-1、図3-2-2、図3-2-3、図3-2-4)」は日本が初めて参加した第5回オリンピック競技大会〔1912(明治45)年〕の会場として建設されたもので、トラック長軸を北北東から南南西に配し、北側スタンドの東西に大塔を配した構成の中世紀スウェーデン様式の煉瓦造である<sup>19)</sup>。

小林はストックホルム競技場について、「第5回国際オリンピック競技会を行うためこの競技場が造られたのであるが、当時としては善美を盡したもので全く世界から驚嘆の目を以て見られたものに違ひない。又これが手本となつて漸次各国に大競技場が建設せられるに至つたのである」<sup>20)</sup>。また、「ストックホルム競技場の建物は煉瓦造の舊式な様式のものであるが、(中略)この競技場の完成に依つて大いに世人の注意が喚起され、續いて各地に建設せられる様になつた競技場も、多く之を手本とせられたのである。この意味から言うとストックホルム競技場は、運動場建築方面に新紀元を劃した、歴史的に有意義なものである」<sup>20)</sup>と評している。

嘉納の提出した一方の「シカゴの大運動場」の特定はできないが、小林が調査した競技場の中にもシカゴの競技場があり、「レーク・フロント公園」、「同大學」の二つの競技場を調査してる(表3-1)。「レーク・フロント公園」の競技場は外苑競技場と同様に1924(大正13)年の竣工であることから、小林は計画案を参照していたものと推察される。一方、「シカゴ大学」の競技場の西側スタンド(図3-2-5、図3-2-6、図3-2-7)は1913(大正2)年竣工の直線型スタンドで、トラック長軸を南北とし、西側にメインスタンド設け、スタンド両翼には円柱形の塔状の諸室を設けた構成となっている。

3.1.1 で指摘したように、小林は最新式スタンドの競技場としてスタンド両翼の塔上に橋を架け、その上に諸室が設けられた米国イリノイ州ノースウェスタン大学の「Dyche stadium (図 3-2-8、図 3-2-9)」(長軸を南北に配し、西側にメインスタンドを配置。)を例に、「端部にはスタンドを設けずに解放させることで附近の風光と建物の輪郭が相まって壮大な美観を呈す<sup>7)</sup>と評していた。最終的に実施には至らなかったが、小林は外苑競技場の「両翼の入口塔上に橋を架け、上に奏樂臺等を設けて、雄大なる外観を備へしめたいと考えて居る。」<sup>21)</sup>としていたことから、ノースウェスタン大学の「Dyche stadium (図 3-2-8、図 3-2-9)」を良案として参照していたものと推察される。

嘉納と小林が参照した主な競技場のトラック長軸の方位とスタンド構成を整理した(表 3-2)。トラック長軸の方位は同様ではなく、貴賓席は大学の競技場には整備されていない。また、ドイツ競技場を除く他の競技場には、塔状の施設が整備されていたことから、これらの競技場のスタンド構成を参照して外苑競技場の計画・デザインについて検討したものと考えられる。

表 3-1 小林政一が参照した主要競技場一覧

名 称	場 所	建設年	収容人員	競技場の形
Harvard stadium	ハーバード大学	1909	50,000	U字型
Tacoma stadium	タコマ大学	1910	30,000	
Yale bawl	エール大学	1914	61,000	楕円形
Palmar stadium	プリンストン大学	1914	41,000	直線楕円形
Ohio stadium	オハイオ州立大学	1921	62,000	馬蹄形
Los Angeles stadium	ロサンゼルス市設	1923	75,000	楕円形
Chicago stadium	同市レークフロント公園 / 同大学	—	100,000	—
Pensylvania st.	フランクリンフィールド	1923	50,000(臨時 15,000)	U字型
Kansas stadium	ローレンス、カンザス大学	—	32,000(臨時 10,000)	U字型
New York stadium	ニューヨーク大学	1914	7,000	半楕円形
Seattle stadium	ウオシントン大学	—	—	U字型
Stanford stadium	スタンフォード大学	1924	61,000	楕円形
Pasadena stadium	フィラデルフィア	1924	100,000	馬蹄形
Yankee stadium	ニューヨーク	1925	85,000	不完形
Wembley stadium	ロンドン郊外同公園	1923	126,000	直線楕円形
London stadium	ロンドン市	1912	45,000	楕円形
Columbus stadium	佛国コロambo	1924	60,000	楕円形

(典拠：小林政一『明治神宮外苑工事に就いて第1輯』小林政一，p.67，1929をもとに作成)



図 3-2-1 ストックホルム競技場

(出典：THE SWEDISH OLYMPIC COMMITTEE：THE OFFICIAL REPORT OF THE OLYMPIC GAMES OF STOCKHOLM 1912，  
THE SWEDISH OLYMPIC COMMITTEE， 1912)



図 3-2-2 ストックホルム競技場の貴賓席

(出典：THE SWEDISH OLYMPIC COMMITTEE：THE OFFICIAL REPORT OF THE OLYMPIC GAMES OF STOCKHOLM 1912，  
THE SWEDISH OLYMPIC COMMITTEE， 1912)

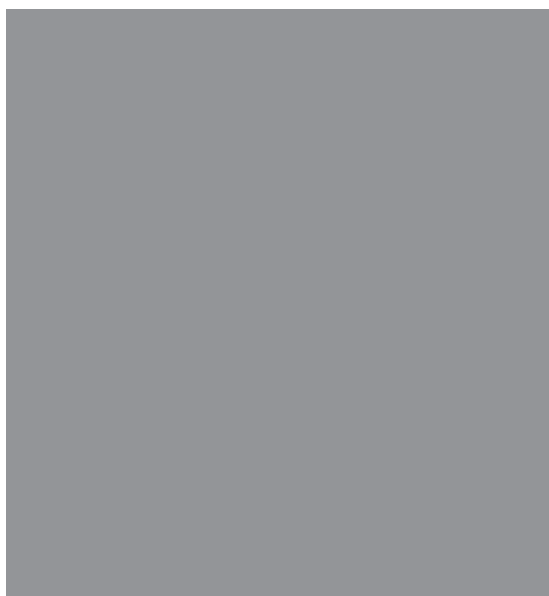


図 3-2-3 ストックホルム競技場配置図 (左) 図 3-2-4 ストックホルム競技場平面図 (右)

[出典：THE SWEDISH OLYMPIC COMMITTEE：THE OFFICIAL REPORT OF THE OLYMPIC GAMES OF STOCKHOLM 1912，  
THE SWEDISH OLYMPIC COMMITTEE， 1912 (名称筆者加筆)]



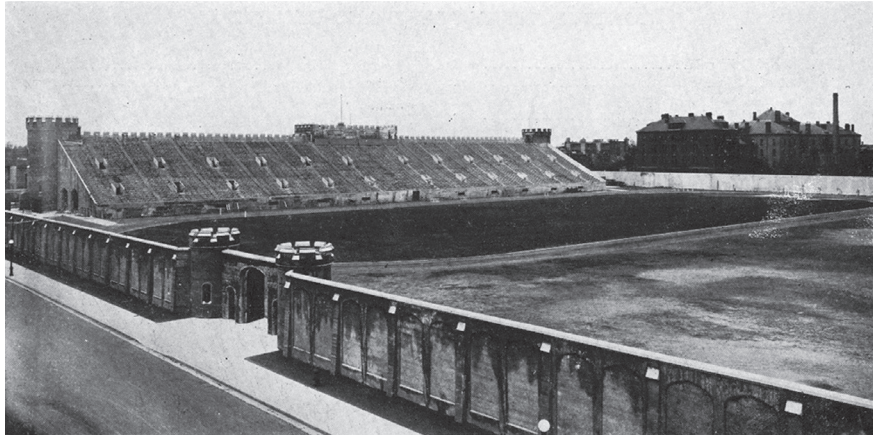


図 3-2-5 シカゴ大学 Stagg Field 西側スタンド  
(出典 : The University of Chicago Photographic Archive, apf2-07733, 1913)



図 3-2-6 シカゴ大学 Stagg Field 西側スタンド端部  
(出典 : The University of Chicago Photographic Archive, apf2-07756, 1913)

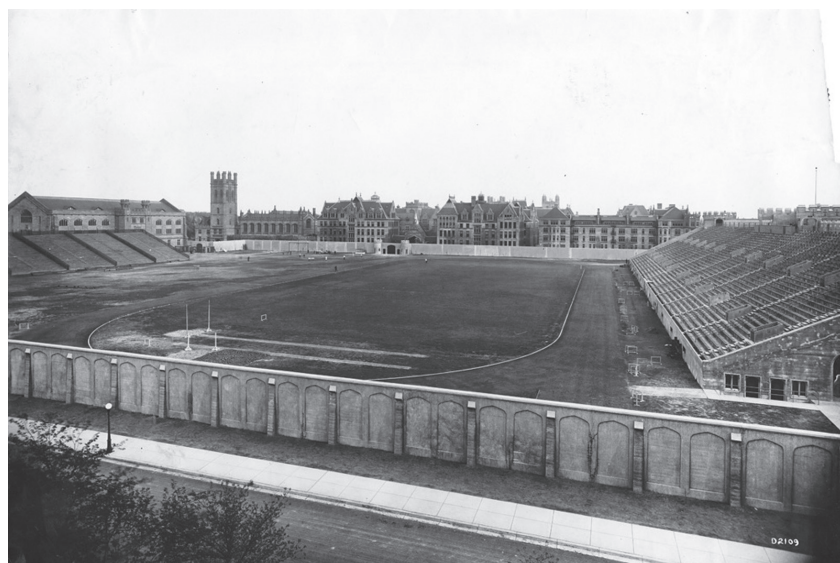


図 3-2-7 シカゴ大学 Stagg Field  
(出典 : The University of Chicago Photographic Archive, apf2-07610, 1913)





図 3-2-8 ノースウェスタン大学 Dyche stadium  
 (出典：小林政一：第 52 編 運動場，高等建築学 第 23 卷，常盤書房，1934)



図 3-2-9 ノースウェスタン大学 Dyche stadium 平面図  
 (出典：宮内嘉久編集事務所：アメリカの都市と高層建築 28 図，国際建築，第 5 卷，第 9 号，美術出版社，1929)

表 3-2 嘉納治五郎及び小林政一が参照した主な競技場の方位とスタンド構成  
 (メインスタンドの位置、貴賓席、塔状の施設) 一覧

名 称	トラック長軸の方位	スタンド構成		
		メインスタンドの位置	貴賓席	塔状の施設
ドイツスタジアム (図 2-3-2)	東西	南側	南側スタンド中央	—
ストックホルム競技場 (図 3-2-4)	北北東／南南西	東南側	東南側スタンド中央	北側スタンド両翼
シカゴ大学 Stagg Field (図 3-2-5)	南北	西側	—	西側スタンド両翼
ノースウェスタン大学 Dyche Stadium (図 3-2-8)	南北	西側	—	西側スタンド両翼

(典拠：図 2-3-2、図 3-2-4、図 3-2-5、図 3-2-6、図 3-2-7、図 3-2-8 をもとに作成)

### 3.2.2 明治神宮外苑競技場の建設

日本で最初の本格的な競技場の設計を統括したのが佐野利器、技師は小林政一、天羽馨、武藤豊吉、角南隆<sup>註17)</sup>である<sup>22)</sup>。1919(大正8)年12月、競技場の建設工事を着工したが、1923(大正12)年9月1日に起きた関東大震災による被災者たちの収容施設として使用され、物価高騰などもあって工事が中断された。翌1924(大正13)年3月に工事が再開されたが、物価高騰により労働力が確保できない等の理由から急遽青年団の勤労奉仕が企画され、全国から延べ十一万人の若者が明治神宮内苑及び外苑の造営に多大な貢献をした。こうして1924(大正13)年10月25日、外苑の造営に先駆けて日本で最初の本格的な陸上競技場である外苑競技場が竣工し、竣工式に際し閑院宮殿下によるテープカットが行われた<sup>23)</sup>。

建設当時の記録<sup>19)</sup>によると、1周400m、幅員10mのトラックで、トラック長軸を南北軸から27度、北北東から南南西に傾け、西側には200mの直線トラックが設けられた(図3-2-10、図3-2-11)。3.2.1で指摘したように、嘉納、小林ともに良案としたストックホルム競技場の方位は北北東から南南西であったことから、参照したものと考えられる。

一方、収容人数はメインスタンド約1万5,000人、他に芝生スタンド約3万5,000人で、当時東洋一を誇ったといわれている。スタンドの構成は、敷地の高低差を生かした東・南・北側の芝生スタンドと、西側の直線トラックに沿って南北約230m、東西18mのRC造の直線型スタンドで構成され、中央部に貴賓席が設けられた(図3-2-12、図3-2-13、図3-2-14、図3-2-15)他、スタンドの両端に塔を設けて内部を階段室とし、北側の塔の上部には大時計が設置された(図3-2-13)。

外苑競技場の西側スタンド中央の貴賓席に関して、3.1.3で指摘したように、嘉納は「無論屋根を設け、貴賓席及び玉座等も内務省の都合で設けられる事と思ふ」<sup>6)</sup>と述べていた他、2.3.1及び3.1.1、3.1.2、3.1.3で指摘したように、競技場の建設構想の際に参照された「ドイツスタジアム」は南側スタンド中央に貴賓席は設けられていた(図2-3-1、図2-3-2、図2-3-3)。さらに、嘉納が参考に提出した「ストックホルム競技場(図3-2-1)」の東側スタンド中央にも貴賓席が設けられている(図3-2-2、図3-2-4)。いずれの競技場もオリンピック競技大会会場〔1916(大正5)年のベルリンオリンピック競技大会は第一次世界大戦により中止〕で、国を代表する国際的な競技場のメインスタンドには貴賓席が設けられていたことから、日本を代表する競技場である外苑競技場の西側メインスタンドの中央部に貴賓席が整備されたものと推察される(図3-2-13、図3-2-14)。また3.2.1で指摘したように、嘉納が参考とし、小林が良案とした「ストックホルム競技場(図3-2-1)」や、小林が参照した「シカゴ大学」の競技場(図3-2-5、図3-2-6)及びノースウェスタン大学の「Dyche stadium(図3-2-8)」には、いずれもスタンド両翼に塔状施設が整備されており、小林は外苑競技場の西側メインスタンドの両端にも塔状施設を整備したものと考えられる(図3-2-10、図3-2-13)。

したがって、嘉納や小林が参照したドイツスタジアム(土地の高低差を利用して計画されていた他、スタンド中央に貴賓席が整備されていた)、ストックホルム競技場(トラック長軸を

北北東から南南西に配し、北側スタンドの東西に塔を整備して東側スタンドの中央部に貴賓席が設けられていた)、シカゴ大学の競技場（西側直線型スタンドの両翼に塔を整備されていた）、ノースウェスタン大学の Dyche stadium（西側スタンド両翼に塔を整備していた）などのスタンド構成が外苑競技場の西側メインスタンドの計画・デザインに影響を与えたものと考えられる。

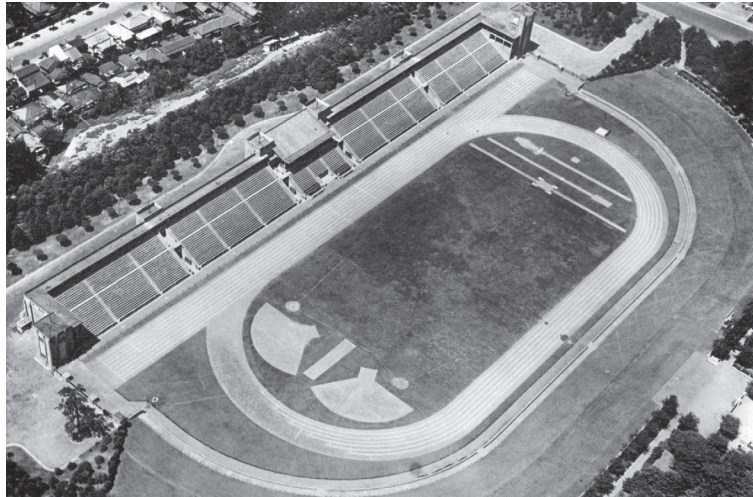


図 3-2-10 明治神宮外苑競技場  
(出典：明治神宮奉賛会：明治神宮外苑志，明治神宮奉賛会，1937)

**明治神宮外苑競技場：**

設計：佐野利器、小林政一、小林政一、天羽馨、武藤豊吉、角南隆  
楕円形トラック：1周 400m  
直線トラック：200m  
幅員：10m

**RC スタンド：**

収容人員：約 1 万 5 千人・RC 造、外壁は腰廻り石張り上部モルタル塗り。  
スタンド面積：4,191 m<sup>2</sup>・高さ：85.8m・最長部：125.4m・南北約 230m、東西 18m  
スタンド中央部：特別観覧席、休憩室、附属室、便所等、事務室、階段室等。  
両翼スタンド部：一般の入口、選手室、役員室、大食堂、料理室、浴室、便所等。

**芝生スタンド：**

収容人員：約 3 万 5 千人  
面積：7,920 m<sup>2</sup>  
高さ：7m  
幅 2.7m の昇降通路 7 ヲ所。

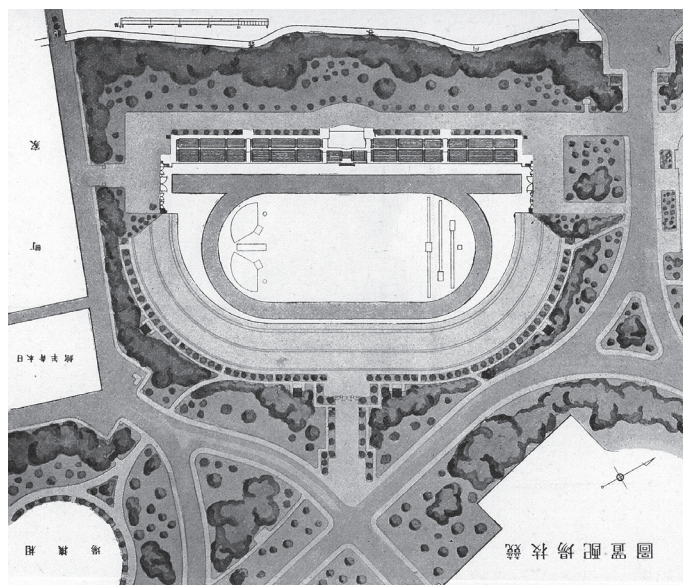


図 3-2-11 明治神宮外苑競技場配置図  
(出典：明治神宮奉賛会：明治神宮外苑志，明治神宮奉賛会，1937)



**図 3-2-12 明治神宮外苑競技場 西側メインスタンド正面**  
(出典：カール・ディーム著，奨健会訳：近代的都市の重要任務たる運動競技場の建造，奨健会，1927)



**図 3-2-13 明治神宮外苑競技場 西側メインスタンドの北側塔**  
(出典：カール・ディーム著，奨健会訳：近代的都市の重要任務たる運動競技場の建造，奨健会，1927)



**図 3-2-14 明治神宮外苑競技場 西側メインスタンド中央部貴賓席**  
(出典：カール・ディーム著，樊健会訳：近代的都市の重要任務たる運動競技場の建造，樊健会，1927)



**図 3-2-15 明治神宮外苑競技場 西側メインスタンド貴賓席**  
(出典：カール・ディーム著，樊健会訳：近代的都市の重要任務たる運動競技場の建造，樊健会，1927)



### 3.2.3 明治神宮外苑の造営

外苑競技場は、「外苑に於ける主要建造物の一つにして、明治天皇陛下が尚武の風を御奨励あらせられたる御趣旨に因み汎く一般公衆の体育競技の用に供するために建設せるもの」<sup>24)</sup>であることから、外苑競技場の建設（1924（大正13）年）を機に同年10月30日から11月3日の日程で、内務省主催の「第一回明治神宮競技大会」が開催された。明治神宮競技大会の趣旨は「明治大帝の御聖徳を景仰する所以なるのみならず國民の身體鍛鍊並精神の作興上其の効果尠少ならずと信じたるを以て此の年を初めとし毎年同神宮例祭を機とし明治神宮競技大会開催」<sup>25)</sup>することであった。

大会後、各種競技団体から競技施設建設の請願や陳述が相次いだ。明治神宮奉賛会は、「外苑創建の精神」に抵触しない範囲で「外苑大体計画（図3-1-6）」の一部を変更して、新たに野球場及び相撲場を建設し、1926（大正15）年、外苑（図3-2-16、図3-2-17）は造営された<sup>3)</sup>。

これまで外苑造営計画に際し計画された施設の変遷を表3-3に示す。2.1.3で指摘したように、明治聖代記念事業において「明治神社の建設」は構想されていたが「競技施設」は構想されていなかった。外苑の造営計画過程において様々な施設が構想される中、外苑造営計画の最終案であった「外苑大体計画（図3-1-6）」から大きく転換して競技施設（相撲場、野球場、水泳場）が集積することになったが、後に文部省の体育運動行政機関の整備に関する事項に「明治神宮外苑ニ各種運動場ヲ完成シ本邦体育運動ノ中心タラシムルコト」<sup>26)</sup>とされ、文字通り日本のスポーツ界の中心地となった。

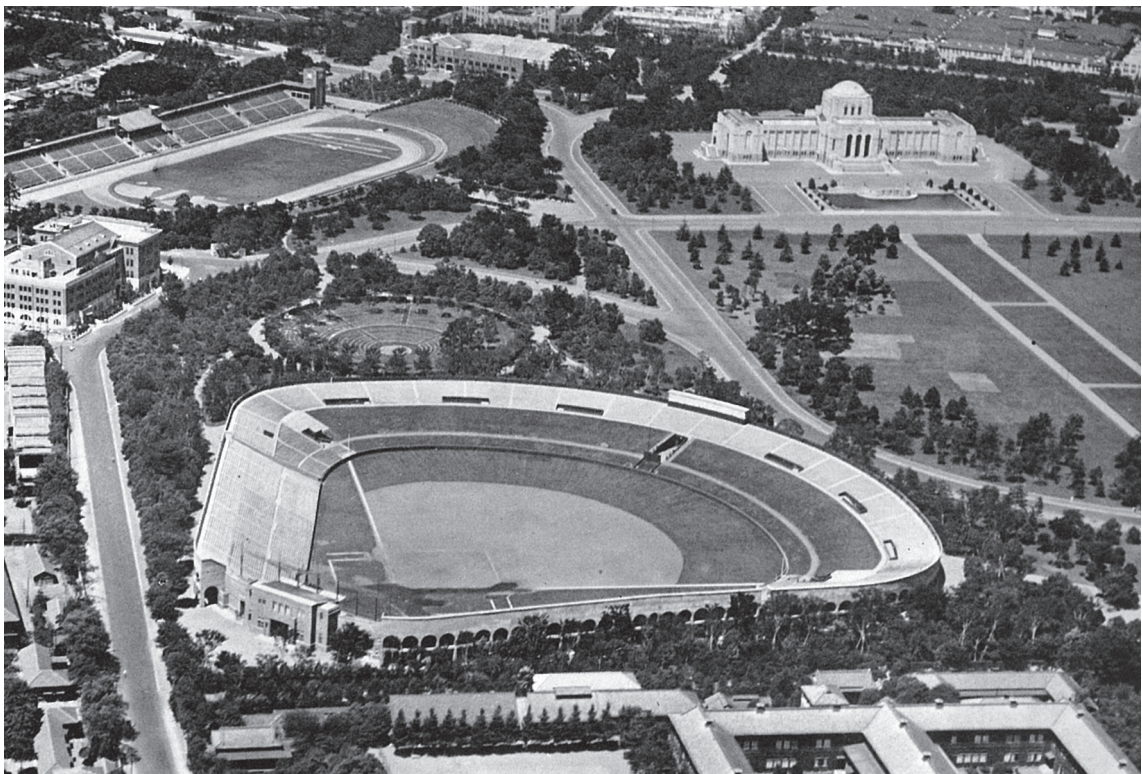


図3-2-16 明治神宮外苑  
 (出典：明治神宮奉賛会：明治神宮外苑志，明治神宮奉賛会，1937)

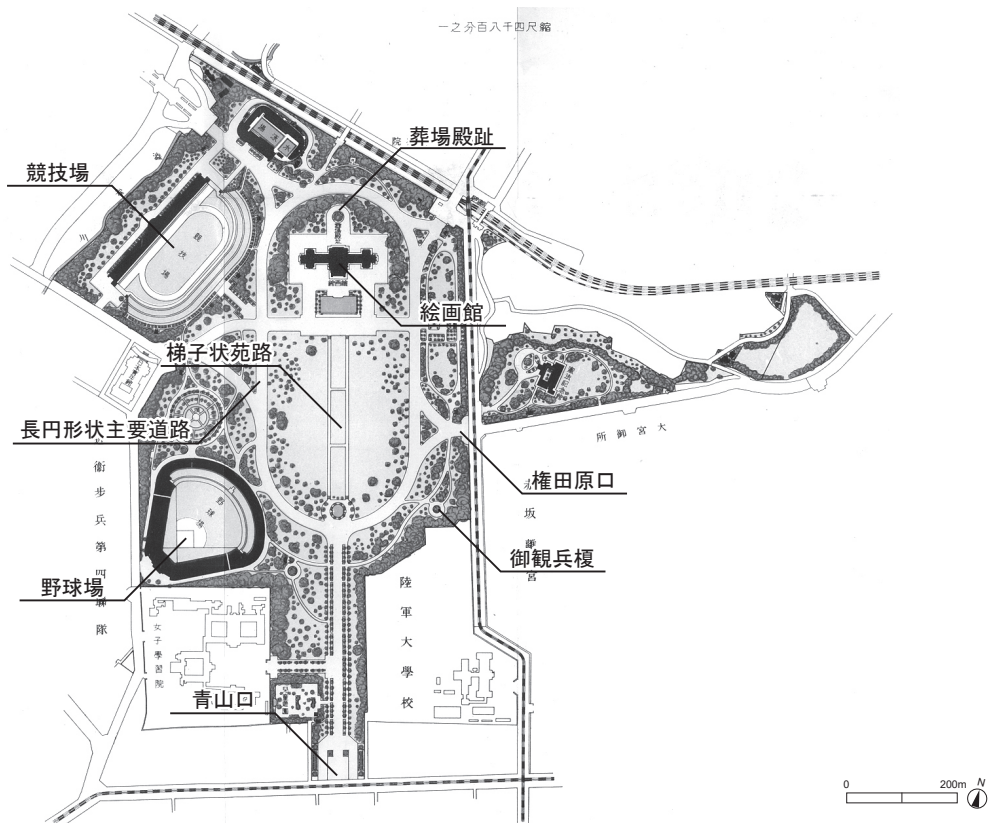


図 3-2-17 明治神宮外苑平面図

〔出典：明治神宮奉賛会：明治神宮外苑志，明治神宮奉賛会，1937（名称筆者加筆）〕

表 3-3 外苑造営計画に際して計画された施設の変遷一覧

番号	施設	図 3-1-2	図 3-1-3	図 3-1-4	図 3-1-5	図 3-1-6	図 3-2-14
①	記念館 (施政記念館・葬場殿跡・葬場殿記念建造物)	●	●	●	●	●	●
②	歴史絵画館 (聖蹟絵画館・聖徳記念絵画館)		●	●	●	●	●
③	美術館	●	●				
④	図書館(書院)	●	●				
⑤	体育館	●	●				
⑥	公会堂	●	●				
⑦	植物館、温室	●					
⑧	奏楽堂(音楽堂)			●			
⑨	競馬場、競技場	●	●	●	●	●	●
⑩	恩賜館 (憲法恩賜館・憲法記念館・憲法館)		●	●	●	●	●
⑪	立像街	●	●	●			
⑫	泉池(噴水)	●	●	●	●	●	●
⑬	樹林及芝生、花壇	●	●	●	●	●	●
⑭	記念門(記念門)	●		●			
⑮	正門及諸門、柵等	●	●	●		●	●
⑯	休憩所等	●	●			●	●
⑰	能舞台(能楽堂)		●	●			
⑱	相撲場						●
⑲	野球場						●
⑳	水泳場						●
㉑	児童遊園						●

(典拠：神社奉祀調査会経過要領の件，国立公文書館蔵，本館-2A-014-00・纂 01333100，1915 及び図 3-1-2、図 3-1-3、図 3-1-4、図 3-1-5、図 3-1-6、図 3-1-14 の各図版に記載されている施設をもとに作成)

### 3.2.4 明治神宮外苑競技場の方位の検証

明治天皇大喪儀式場及び外苑造営計画過程における道路の変遷を表3-4に示す。3.1.3で指摘したように、「外苑計画参考図（図3-1-5）」における主要道路の計画と絵画館の位置は現在の外苑の空間構成と類似することから、この時期に外苑の基本的な配置計画の骨格が形成されていた。その後、楕円形道路を長円形道路に変更した造営計画最終案である「外苑大体計画（図3-1-6）」を経て外苑は造営された。阪谷は「外苑設計大體ノ方針ハ 明治天皇葬場殿ノ御跡ヲ中心トシテソノ前ニ聖徳記念ノ「絵画館」ヲ建テ競技場、相撲場、野球場、水泳場等ヲ適当ニ配置」<sup>27)</sup>したとしている。

造営された外苑（図3-2-17）は「外苑大体計画（図3-1-6）」を基本としつつもいくつかの変更点を確認できる。具体的には、①新たな競技施設（水泳場・野球場・相撲場）を建設、②外苑競技場の形態及び方位と連絡路の位置、③絵画館南側の池の形態、④梯子状苑路の位置、⑤長円形主要道路東側の整備計画、⑥長円形道路南側の池の形態、⑦御観兵榎を整備、⑧児童遊園、⑨憲法記念館西側の施設及び連絡路などを変更している（図3-2-18）。

1.2で指摘したように、阪谷は外苑に設ける記念建造物について「此處に出来る建造物は心ずしも急いで工事に着手するには及ばぬ、(中略)、唯其趣旨が明治天皇を記念すると云ふにあれば夫れで十分である。」<sup>28)</sup>と述べていた。また、1.2及び3.1.1で指摘したように、阪谷は、「要するに青山練兵場全体の場所は之を一つの記念碑と看做して、其場所に記念として物を言はせると云う事が一つの理想に成つて居ります(後略)」<sup>5)</sup>としており、外苑における主要施設や主要道路の配置計画は明治天皇を記念することを意図して計画・デザインされたものと推察される。そこで、外苑競技場の配置計画の微調整について、明治天皇のゆかりに着目して検討する。

2.1.1で指摘したように、東京府には数多くの明治天皇の聖蹟が保存されていただけでなく、史蹟名勝天然記念物保存法に基づいて史蹟指定された東京府における明治天皇の聖蹟は15件であった。史蹟指定された明治天皇の聖蹟の一つである明治天皇行幸所の徳川邸は外苑の敷地

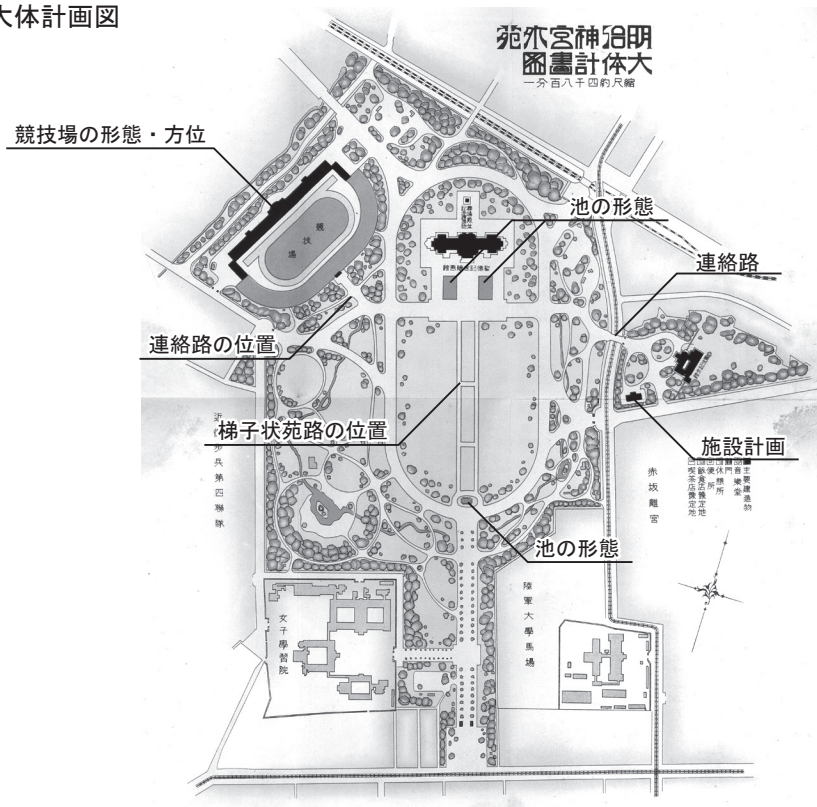
表3-4 明治天皇大喪儀式場及び外苑造営計画における主要道路の変遷一覧

番号	図	青山口からの主要道路	権田原口からの主要道路	その他の主要道路
1	明治天皇大喪儀式場 (図2-1-13)	直線道路	行幸経道路	—
2	甲案 (図3-1-2)	直線道路	—	—
3	乙案 (図3-1-3)	曲線道路	直線道路	—
4	外苑計画 (図3-1-4)	直線道路	直線道路	—
5	外苑計画参考図 (図3-1-5)	直線道路・梯子状苑路	—	楕円形主要道路
6	外苑大体計画 (図3-1-6)	直線道路・梯子状苑路	—	長円主要形道路
7	明治神宮外苑平面図 (図3-2-14)	直線道路・梯子状苑路	—	長円主要形道路

(典拠：図2-1-13、図3-1-2、図3-1-3、図3-1-4、図3-1-5、図3-1-6、図3-1-14の各図版をもとに作成)



外苑大体計画図



明治神宮外苑平面図

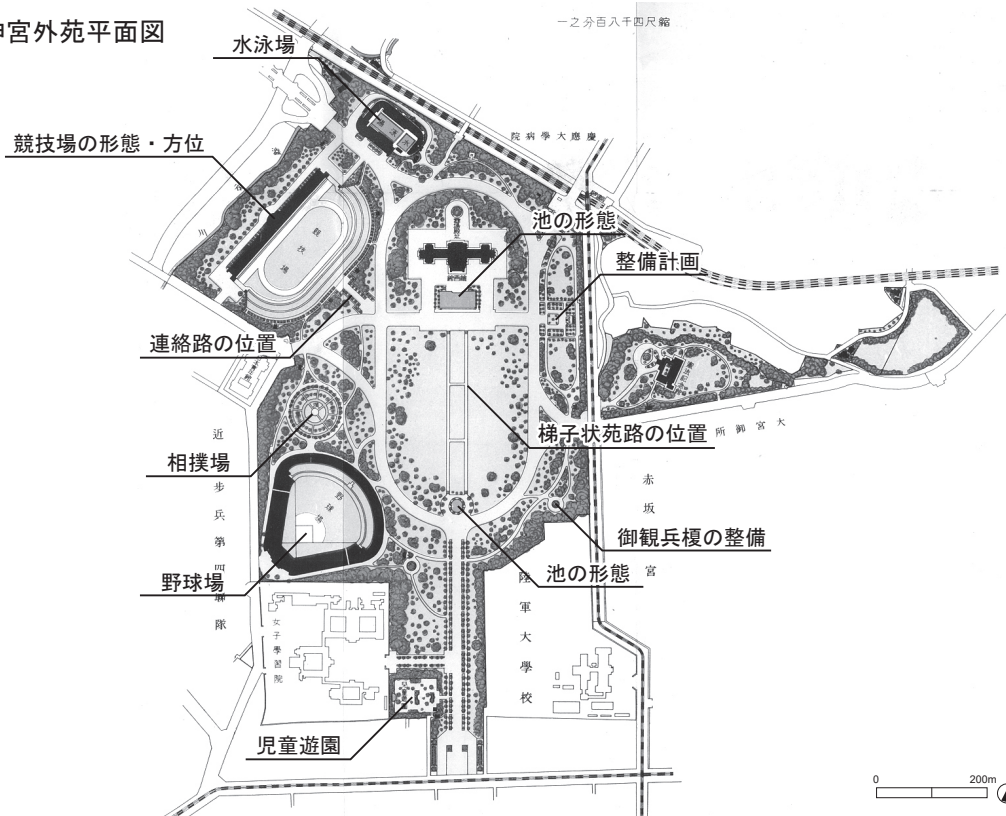


図 3-2-18 外苑大体計画図（上）及び明治神宮外苑平面図（下）における変更点の検証  
 [出典：図 3-1-6 及び図 3-2-17 (名称筆者加筆)]



の西側に位置している。そこで、外苑競技場と徳川邸の関連性を検討するために、東京都立中央図書館が収蔵する『一万分一東京近傍地形図』と「明治神宮外苑平面図（図3-2-17）」を重ね合わせ、外苑競技場のトラック長短軸に補助線を引いて徳川邸との関連性を検討した（図3-2-19）。その結果、外苑競技場のトラック短軸上に史蹟指定された徳川邸が位置することが明らかになった。

しかし、外苑競技場は1924（大正13）年に竣工し、外苑は1926（昭和元）年に造営されている。2.1.1で指摘したように、明治天皇の聖蹟は1933（昭和8）年から1939（昭和14）年にかけて史蹟指定されており、後に徳川邸が史蹟指定されたとはいえ外苑競技場の配置計画が徳川邸と関連付けることを意図して最終的に微調整したとは考えにくいことから、史蹟指定された東京府における他の14件の明治天皇の聖蹟との関連性も考えにくい。

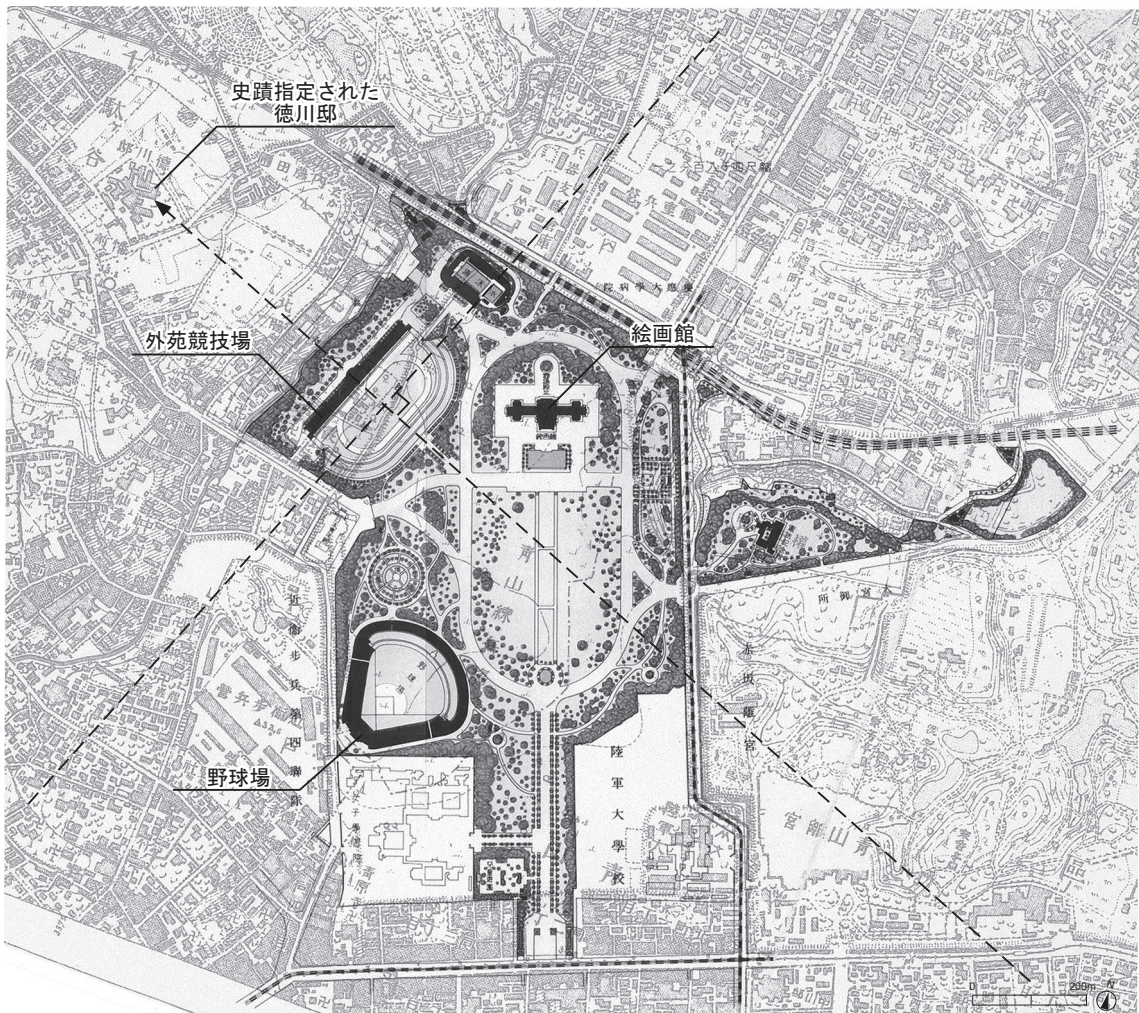


図3-2-19 明治神宮外苑競技場と徳川邸との関連性の検証

〔出典：陸地測量部編：一万分一東京近傍地形図 明治42年陸地測量部実測，大日本帝国陸地測量部，東京都立中央図書館蔵，刊行年不明と図3-2-17を重ね合わせて作成（名称筆者加筆）〕



2.5で指摘したように、この土地の明治天皇のゆかりは観兵式と明治天皇大喪儀であった。そこで、この土地の明治天皇のゆかりである観兵式と明治天皇大喪儀に着目して検討する。

### 観兵式

この土地の明治天皇のゆかりの一つで観兵式の際の玉座の位置であったエノキは「外苑大体計画図（図3-2-18上）」では整備されていないが、「明治神宮外苑平面図（図3-2-18下）」では整備されている。したがって「御観兵榎」は、外苑の造営に際して最終的に記念されたことが明らかになった。

### 明治天皇大喪儀

「明治神宮外苑平面図（図3-2-17）」に、この土地の明治天皇のゆかりの一つであった明治天皇大喪儀の際の「青山式場配置図（図2-1-6）」を重ね合わせて空間構成の比較検証を行った（図3-2-20）。その結果、長円形主要道路における2本の直線道路の間隔は明治天皇大喪儀式場の外廓の横幅と、長円形主要道路内を東西に結ぶ直線道路（絵画館の南側）は明治天皇大喪儀式場の内廓鳥居と、絵画館の周囲の長方形は明治天皇大喪儀式場の内廓の横幅と、中央広場の梯子状苑路は明治天皇大喪儀式場の外廓総門と一致することが明らかになった。3.1.3で指摘したように、造営計画最終案の「外苑大体計画（図3-1-6）」は楕円形状の主要道路を長円形に変更しており（表3-3）、長円形主要道路の位置が明治天皇大喪儀式場の空間構成を踏襲することを目的として変更されたものと推察され、造営計画の検討過程において、「外苑大体計画（図3-1-6）」を基本としつつも外苑競技場の方位や梯子状苑路の位置などは、明治天皇大喪儀式場の空間構成をより明確に反映することを目的として、最終的に微調整した可能性が考えられる。

一方、外苑競技場のトラック長軸と明治天皇大喪儀式場との関連性は見出せないが、トラック長軸と直交するトラック短軸上に明治天皇大喪儀式場の外廓総門（中央広場の梯子状苑路）が位置することが明らかになった他、明治神宮野球場の本塁と二塁を結ぶ軸線上にも外廓総門（中央広場の梯子状苑路）が位置する。外苑競技場のトラック短軸と明治神宮野球場の軸線は外廓総門（中央広場の梯子状苑路）の左側の門柱付近で交差しており、いずれも明治天皇大喪儀式場の空間構成を踏襲した絵画館周辺の空間構成と関連付けることを意図として配置計画された可能性が考えられる。

他方、3.1.3で指摘したように、競技場に貴賓席及び玉座を設置することが計画されていたが、外苑競技場に関する当時の記録<sup>19)</sup>には、玉座に関して記載されていない。2.4.2で指摘したように、摂政宮殿下（後の昭和天皇）はさまざまなかたちで体育御奨励の姿勢を示されたたていた。また、1926（大正15）年、文部省主催の第5回明治神宮体育大会<sup>29)</sup>（図3-2-21）、1939（昭和14）年、厚生省主催の第10回明治神宮国民体育大会<sup>30)</sup>（図3-2-22）、1942（昭和17）年の第13回明治神宮国民錬成大会<sup>31)</sup>（図3-2-23）に臨場している。そこで、当時の記録

が残る第10回明治神宮国民体育大会の報告書<sup>30)</sup>を参照し、外苑競技場における玉座の位置を確認する。

「明治神宮競技大会」は第3回大会から「明治神宮体育大会」に改称され、その後1939（昭和14）年の第10回大会から厚生省主催の「明治神宮国民体育大会」に改称して開催されることとなり、同年10月29日から6日間の日程で開催された<sup>30)</sup>。大会報告書<sup>31)</sup>には、大会五日目の同年11月2日、〔天皇陛下には午後一時半、（中略）競技場正面入口の着御、（中略）海軍々楽隊の「君が代」奏樂裡にスタンド中央の玉座に臨御（後略）（図3-2-22）〕されたと記載されている他、「整列隊形図（図3-2-24）」及び「退場要領図（図3-2-25）」が記載<sup>32)</sup>されており、直線型スタンドの中央に玉座が示されていることから、西側スタンド中央の貴賓席（図3-2-14、図3-2-15）は玉座の位置であることが明らかになり、外苑競技場は体育大会を天皇陛下に見せる為に玉座を整備したものと考えられる。したがってトラック短軸は、玉座（貴賓席）と外廓総門（中央広場の梯子状苑路）を結ぶ軸線と一致することが明らかになった。

次に、トラック短軸の断面図を作成し、目線の高さ1.5mとして貴賓席（玉座）からのアイレベルを検討した。その結果、貴賓席（玉座）からのアイレベルは、敷地の高低差からグラウンドレベルより低く（図3-2-26）、貴賓席（玉座）から外廓総門（中央広場の梯子状苑路）を認識することは出来ない為、トラック短軸は物理的には青山口と絵画館を結ぶ軸線のような視点を通じた関係性や効果はなく、この軸線のデザインは貴賓席（玉座）を訪れた人には認識できない潜在的な存在でしかない。しかし、阪谷は外苑に設ける記念建造物について「此處に出来る建造物は心ずしも急いで工事に着手するには及ばぬ（中略）、唯其趣旨が明治天皇を記念すると云ふにあれば夫れで十分である。」<sup>28)</sup>と述べていることから、小林は明治天皇大喪儀式場の空間構成を踏襲した絵画館周辺の空間構成と関連付けることを重要視し、トラック短軸に外苑の象徴性や記念的性格を持たせることを意図して玉座（貴賓席）と外廓総門（中央広場の梯子状苑路）を結ぶ軸線とトラック短軸を一致させた可能性が考えられる。

以上のことから、大正期の外苑における競技場計画での軸線は、他の主要な施設の軸線とともに明治天皇大喪儀式場の空間構成と関連付けられて計画されており、潜在的な存在ではあるものの重要な位置付けにあったことが明らかになった。



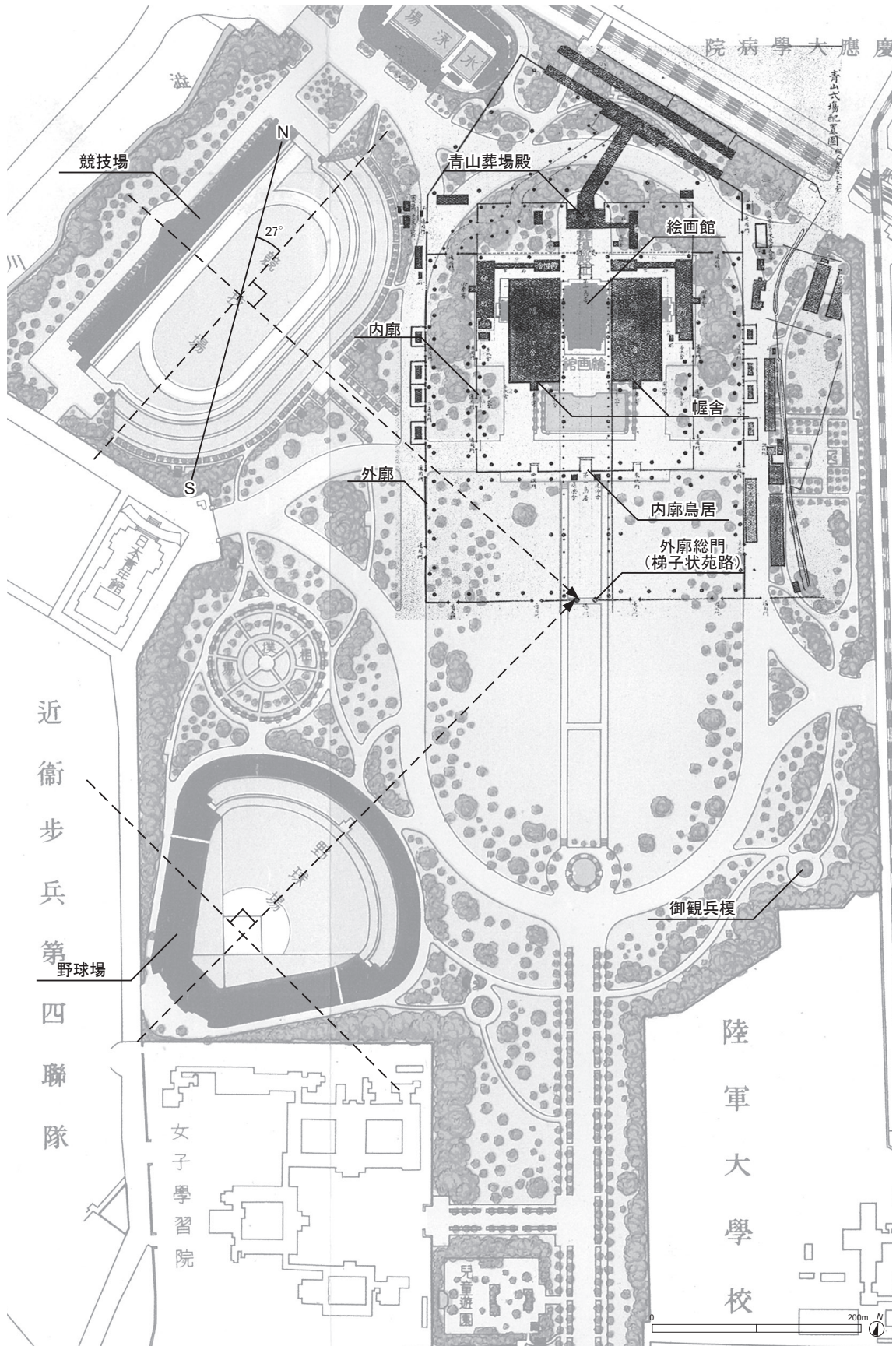


図 3-2-20 聖徳記念絵画館周辺の空間構成と明治神宮外苑競技場の方位の検証  
〔図 2-1-6 及び図 3-2-17 を重ね合わせて作成 (名称筆者加筆)〕



図 3-2-21 第 5 回明治神宮体育大会で貴賓席に臨場した天皇陛下（右）と秩父宮殿下（左）  
（出典：明治神宮体育会：第五回明治神宮体育大会報告書，明治神宮体育会，1930）



図 3-2-22 第 10 回明治神宮国民体育大会で貴賓席に臨場した天皇陛下  
（出典：厚生省編：第十回明治神宮國民體育大會報告書，厚生省，1940）

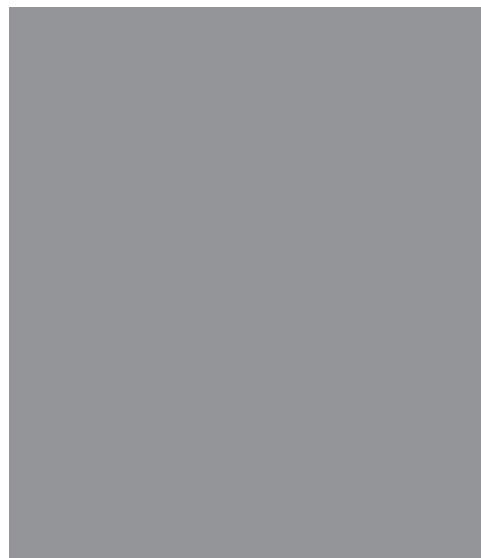


図 3-2-23 第 13 回明治神宮国民練成大会で貴賓席に臨場した天皇・皇后両陛下  
（出典：内閣情報部編：写真週報，第 246 号，内閣情報部，1942）



**図 3-2-24 第 10 回明治神宮国民体育大会 整列隊形図**  
〔出典：厚生省編：第十回明治神宮國民體育大會報告書，厚生省，1940（名称筆者加筆）〕



**図 3-2-25 第 10 回明治神宮国民体育大会 退場要領図**  
〔出典：厚生省編：第十回明治神宮國民體育大會報告書，厚生省，1940（名称筆者加筆）〕



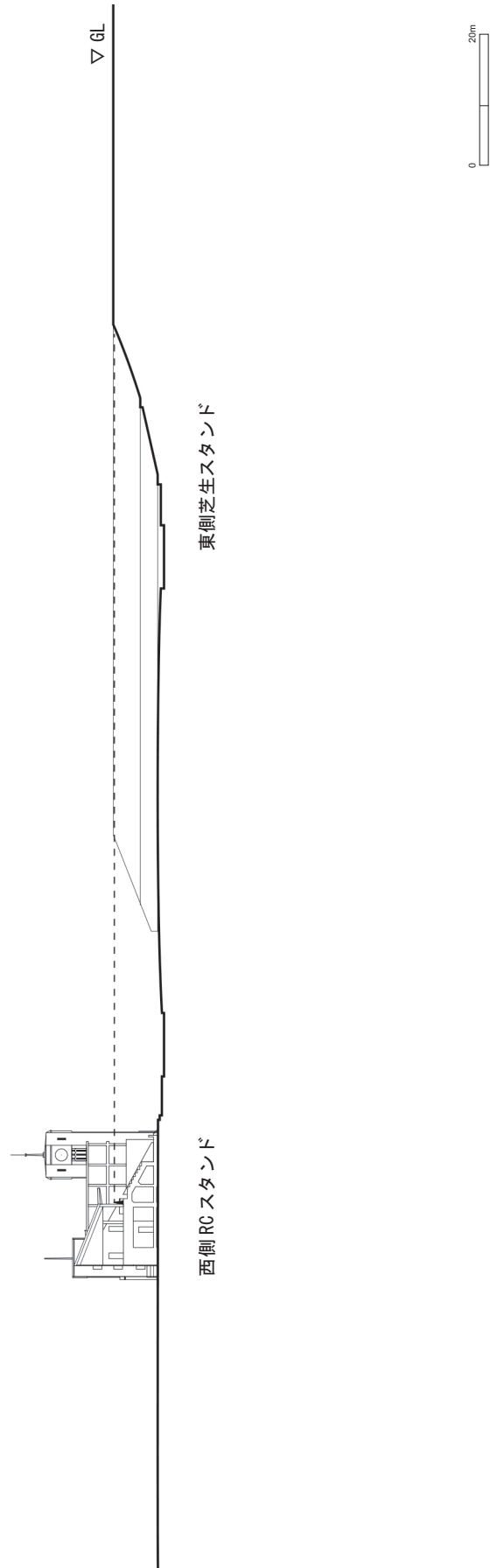


図 3-2-26 明治神宮外苑競技場断面図 (復元)  
[筆者作成]

### 3.3 本章のまとめ

本章では、外苑の造営計画の変遷を整理するとともに外苑競技場の配置計画における軸線の扱われ方について分析した。競技場の計画は近代化という時代背景と西洋の先進性から欧米の競技場が参照されたが、とりわけ嘉納が参考とした端典のストックホルム競技場及び小林が参照した米国のシカゴの大運動場は外苑競技場西側スタンドの計画・デザインに大きく影響を与えたものと考えられる。また、この土地の明治天皇のゆかりである観兵式と明治天皇大喪儀に着目して外苑競技場の方位の検証した結果、以下のことが明らかになった。

#### 観兵式

明治天皇のゆかりの一つで観兵式の際の玉座の位置であったエノキは、外苑の造営に際して最終的に「御観兵榎」として記念された。

#### 明治天皇大喪儀

外苑競技場の配置計画及び外苑の空間構成に反映された明治天皇ゆかりについて、以下のことが明らかになった。①長円形主要道路における2本の直線道路の間隔は明治天皇大喪儀式場の外廓の横幅と一致する。②長円形主要道路内を東西に結ぶ直線道路（絵画館の南側）は明治天皇大喪儀式場の内廓の鳥居と一致する。③絵画館の周囲の長方形は明治天皇大喪儀式場の内廓の横幅と一致する。④中央広場の梯子状苑路の位置は明治天皇大喪儀式場の外廓総門と一致する。

以上のことから外苑の絵画館周辺の空間構成は明治天皇大喪儀式場の空間構成を踏襲していることが明らかになった。造営計画の最終案決定後に変更された外苑競技場の方位及び中央広場の梯子状苑路の位置などは、この土地の明治天皇ゆかりの一つである明治天皇大喪儀式場の空間構成を、外苑の空間構成により明確に反映させることを意図して最終的に微調整された可能性が考えられる。

一方、外苑競技場西側スタンドの貴賓席は玉座の位置であることが明らかになり、外苑競技場は体育大会を天皇陛下に見せる為に玉座を整備したのと考えられる。また、外苑競技場のトラックの短軸は、玉座（外苑競技場の貴賓席）と明治天皇大喪儀式場の外廓総門（中央広場の梯子状苑路の位置）を結ぶ軸線と一致するとともに、明治神宮野球場の本塁と二塁を結ぶ軸線上にも外廓総門（中央広場の梯子状苑路）が位置する。貴賓席（玉座）からのアイレベルは、敷地の高低差からグラウンドレベルより低く（図3-2-26）、貴賓席（玉座）から外廓総門（中央広場の梯子状苑路）を認識することは出来ない為、トラック短軸は物理的には青山口と絵画館を結ぶ軸線のような視点を通じた関係性や効果はなく、この軸線のデザインは貴賓席（玉座）を訪れた人には認識できない潜在的な存在でしかない。しかし、小林は明治天皇大喪儀式場の空間構成を踏襲した絵画館周辺の空間構成と関連付けることを重要視し、トラック短軸に外苑の象

徴性や記念的性格を持たせることを意図して玉座（貴賓席）と外廓総門（中央広場の梯子状苑路）を結ぶ軸線とトラック短軸を一致させた可能性が考えられる。

以上のことから、大正期の外苑における競技場計画での軸線が他の主要な施設の軸線とともに明治天皇大喪儀式場の空間構成と関連付けて計画されており、潜在的な存在ではあるものの重要な位置付けにあったことが明らかになった。

---

注：

- 注 1) 小林政一:1891年-1973年。工学博士、建築家、構造学者。外苑造営では聖徳記念絵画館、明治神宮外苑競技場、明治神宮野球場などに携わる。
- 注 2) 嘉納が意見を聞いた専門家は、野口源三郎：1888年-1967年。日本の陸上競技選手・指導者、体育学者。東京教育大学・東京高等師範学校・埼玉大学名誉教授。選手としては十種競技を専門とし、第3回極東選手権競技大会で優勝、1920（大正9）年アントワープオリンピックに出場。／可兒徳：1874年-1966年。日本の体育指導者・教育者。東京高等師範学校助教授。／明石和衛：1888年-1956年。工学博士。第一回、第二回日本陸上競技選手権大会男子100m優勝者。明治神宮奉賛会：明治神宮外志，明治神宮奉賛会，p.153，1937
- 注 3) 神社奉祀調査会の委員については巻末の資料編表1を参照のこと。
- 注 4) 伊藤忠太：1867年-1954年。工学博士、建築家、建築史家。神社奉祀調査会委員、明治神宮造営局参与。
- 注 5) 佐野利器：1880年-1956年。工学博士、建築家、構造学者。鉄骨・鉄筋コンクリート構造学を研究し耐震構造学の基礎を築く。神社奉祀調査会委員、明治神宮造営局参与。
- 注 6) 安藤時蔵：1871年-1917年。内務省神社局技師の後、神社奉祀調査会委員、明治神宮造営局技師。
- 注 7) 関野貞：1868年-1935年。建築史学者。文化財の保存に努める。神社奉祀調査会特別委員、明治神宮造営局評議委員。
- 注 8) 明治神宮奉賛会の勤労者については巻末の資料編表2を参照のこと。
- 注 9) 明治神宮造営局の職員については巻末の資料編表3を参照のこと。
- 注 10) 古市公威：1854年-1934年。日本の学者。工学博士。帝国大学工科大学初代学長。東京仏学校初代校長。土木学会初代会長、日本工学会理事長（会長）、理化学研究所第2代所長。東京帝国大学名誉教授。男爵。帝国大学工科大学長・土木学会長・工学会理事長として、日本近代工学ならびに土木工学の制度を創った。
- 注 11) 日下部辨二郎：1861年-1934年。明治から昭和時代の土木技師、実業家。
- 注 12) 近藤虎五郎：1865年-1922年。明治から大正時代の土木技術者。内務省内務技師。河川改修や上下水道の普及につとめる。東京帝国大学教授、鉄道省技師なども兼務。
- 注 13) 塚本靖：1869年-1937年。日本の建築家。東京帝国大学において建築意匠・装飾・工芸の研究・指導。
- 注 14) 川瀬善太郎：1862年-1932年。日本の林学者。農学博士。営林主事・林務官補、東京帝国大学附属演習林長、農学部長を歴任。
- 注 15) 本多静六：1866年-1952年。日本の林学博士、造園家、株式投資家、東京帝国大学教授。日本の「公園の父」といわれる。
- 注 16) 原熙：1868年-1934年。日本の農学者。造園家。農学博士。日本の造園・園芸学界の指導的地位にあって初期の園芸学確立と発達に貢献、また社会緑化に尽力。
- 注 17) 角南隆：1887年-1980年。日本の建築家。社寺建築、神社建築で大正から昭和期に活躍。明治神宮造営局技師。

参考・引用文献：

- 1) 嘉納先生伝記編纂会編：嘉納治五郎，講道館，1964
- 2) 嘉納治五郎：嘉納治五郎著作集 第三卷，五月書房，1983
- 3) 小林政一：明治神宮外苑工事に就いて 第1輯，前掲書，1929
- 4) 嘉納先生伝記編纂会編：嘉納治五郎，講道館，pp. 589-591，1964
- 5) 阪谷芳郎：明治神宮奉賛会日記，明治神宮叢書，第19巻，資料編(3)，明治神宮社務所，pp.1144-1145，2006
- 6) 読売新聞，大正6年9月22日
- 7) 小林政一：明治神宮外苑工事に就いて 第1輯，前掲書，p. 76，1929
- 8) 神社奉祀調査会経過要領の件：国立公文書館蔵，本館-2A-014-00・纂 01333100.1915
- 9) 今泉宜子：明治神宮一「伝統」を創った大プロジェクト，新潮社，p. 191，2013. 2
- 10) 小林政一：明治神宮外苑工事に就いて 第一輯，小林政一，p. 66，1929. 11
- 11) 小林政一：明治神宮外苑工事に就いて 第一輯，小林政一，p. 68，1929. 11
- 12) 小林政一：明治神宮外苑建設の経過と聖徳記念絵画館及競技場，國學院雑誌，第28巻，第11号，國學院大學総合企画部，p. 9，1922
- 13) 嘉納治五郎：嘉納治五郎著作集 第三卷，五月書房，p. 320，1983
- 14) 明治神宮奉賛会編：明治神宮外苑奉獻概要報告，明治神宮奉賛会，p. 70，1926
- 15) 今泉宜子：明治神宮一「伝統」を創った大プロジェクト，新潮社，p. 203，2013. 2
- 16) 小林政一：明治神宮外苑工事に就いて 第一輯，小林政一，1929. 11
- 17) 小林政一：競技場の設計及び施設，庭園と風景，第11巻，第10号，日本庭園協会，p. 2，1929
- 18) 小林政一：明治神宮外苑工事に就いて 第一輯，小林政一，p. 67，1929. 11
- 19) W.S.D. 生：ストックホルムに於けるオリンピック競技場，建築雑誌，第26巻，第303号，日本建築学会，p. 137，1912
- 20) 小林政一：運動場建築の発達と新傾向，建築と社会，第17集，第9号，日本建築協会，p. 15，1934
- 21) 小林政一：明治神宮外苑建設の経過と聖徳記念絵画館及競技場，國學院雑誌，前掲書，p. 9，1922
- 22) 明治神宮奉賛会：明治神宮外苑志，明治神宮奉賛会，1937 / 明治神宮造営局：明治神宮外苑競技場概要，明治神宮奉賛会，1924 / 明治神宮造営局：明治神宮外苑工事概要，明治神宮奉賛会，1926
- 23) 明治神宮奉賛会：明治神宮外苑志，明治神宮奉賛会，p. 161，1937 / 明治神宮外苑七十年誌編纂委員会編：明治神宮外苑七十年誌，明治神宮外苑，1998を参照。
- 24) 明治神宮造営局：明治神宮外苑競技場概要，明治神宮奉賛会，p. 6，1926
- 25) 内務省衛生局編：第一回明治神宮競技大會報告書，内務省衛生局，p. 1，1925
- 26) 文部省編：現代体育の施設と管理，目黒書店，1932
- 27) 阪谷芳郎：明治神宮御造営ノ由来，明治神宮編，明治神宮叢書，第17巻・資料編(1)，明治神宮社務所，pp. 521，2006
- 28) 東京朝日新聞：1914年6月21日
- 29) 明治神宮体育会：第五回明治神宮体育大会報告書，明治神宮体育会，1930
- 30) 厚生省編：第十回明治神宮國民體育大會報告書，厚生省，1940
- 31) 厚生省編：第十回明治神宮國民體育大會報告書，厚生省，p. 46，1940
- 32) 厚生省編：第十回明治神宮國民體育大會報告書，厚生省，pp. 34-35，1940

図版典拠：

- 3-1-1 絵葉書（筆者所蔵）
- 3-1-2 内閣：神社奉祀調査会経過要領の件，国立公文書館蔵，本館 -2A-014-00・纂 01333100，1915（名称筆者加筆）
- 3-1-3 同上書，（名称筆者加筆）
- 3-1-4 明治神宮：明治神宮叢書，第 19 卷，資料編（3），明治神宮社務所，2006（名称筆者加筆）
- 3-1-5 同上書，（名称筆者加筆）
- 3-1-6 明治神宮奉賛会：明治神宮外苑志，明治神宮奉賛会，1937（名称筆者加筆）
- 3-2-1 THE OFFICIAL REPORT OF THE OLYMPIC GAMES OF STOCKHOLM 1912, THE SWEDISH OLYMPIC COMMITTEE, 1912
- 3-2-2 同上書
- 3-2-3 同上書
- 3-2-4 同上書
- 3-2-5 The University of Chicago Photographic Archive, apf2-07733, 1913
- 3-2-6 The University of Chicago Photographic Archive, apf2-07756, 1913
- 3-2-7 The University of Chicago Photographic Archive, apf2-07704, 1926
- 3-2-8 小林政一：第 52 編 運動場，高等建築学，第 23 卷，常盤書房，1934
- 3-2-9 宮内嘉久編集事務所：アメリカの都市と高層建築 28 図，国際建築，第 5 卷，第 9 号，美術出版，1929
- 3-2-10 明治神宮奉賛会：明治神宮外苑志，明治神宮奉賛会，1937
- 3-2-11 同上書
- 3-2-12 カール・ディーム著，奨健会訳：近代的都市の重要任務たる運動競技場の建造，奨健会，1927
- 3-2-13 同上書
- 3-2-14 同上書
- 3-2-15 同上書
- 3-2-16 明治神宮奉賛会：明治神宮外苑志，明治神宮奉賛会，1937
- 3-2-17 同上書
- 3-2-18 図 3-1-6 及び図 3-2-17（名称筆者加筆）
- 3-2-19 陸地測量部編：一万分一東京近傍地形図 明治 42 年陸地測量部実測，大日本帝国陸地測量部，東京都立中央図書館蔵，刊行年不明及び図 3-2-17 を重ね合わせて作成。（名称筆者加筆）
- 3-2-20 図 2-1-6 及び図 3-2-17 を重ね合わせて作成（名称筆者加筆）
- 3-2-21 明治神宮体育会：第五回明治神宮体育大会報告書，明治神宮体育会，1930
- 3-2-22 厚生省編：第十回明治神宮國民體育大會報告書，厚生省，1940
- 3-2-23 内閣情報部編：写真週報，第 246 号，内閣情報部，1942
- 3-2-24 厚生省編：第十回明治神宮國民體育大會報告書，厚生省，1940
- 3-2-25 同上書
- 3-2-26 筆者作成





## 第4章

# 国立霞ヶ丘陸上競技場の成立



## 4.1 明治神宮外苑競技場と第12回オリンピック東京大会

本節では、1940（昭和15）年、東京で開催予定の第12回オリンピック競技大会についてまとめられた『第十二回オリンピック東京大会東京市報告書』<sup>1)</sup>、『報告書』<sup>2)</sup>を主な基礎資料として、第12回オリンピック競技大会の招致について整理する。また、第12回オリンピック競技大会会場について岸田日出刀<sup>注1)</sup>の『第12回オリンピック東京大会会場論』<sup>3)</sup>『日支事変とオリンピック東京大会』<sup>4)</sup>と外苑競技場設計者の小林政一による『オリンピック競技施設に就いて』<sup>5)</sup>『オリンピック競技場として外苑改造に就いて』<sup>6)</sup>を基礎資料として、第12回オリンピック競技大会に伴う競技場の計画について整理する。

### 4.1.1 オリンピック競技大会の招致

我国は1912（明治45）年、ストックホルムで開催された第5回オリンピック競技大会に初参加した。その後、1920（大正9）年、アントワープで開催された第7回オリンピック競技大会においてテニスのシングル及びダブルスで銀メダルを獲得し、初めてメダルを獲得した。1924（大正13）年にパリで開催された第8回オリンピック競技大会では、レスリングで銅メダルを獲得。1928（昭和3）年にアムステルダムで開催された第9回オリンピック大会では、水泳の他、陸上男子・女子でメダルを獲得するなど合計5つのメダル（金メダル2個、銀メダル2個、銅メダル1個、）を獲得し、日本の女子選手ではオリンピック史上初のメダル獲得となった。続く1932（昭和7）年にロサンゼルスで開催された第10回オリンピック競技大会では、合計18個のメダル（金メダル7個、銀メダル7個、銅メダル4個、）を獲得し、オリンピック競技大会において有力な参加国としての地位を築いていた<sup>7)</sup>。

こうした中で開催国としてオリンピック競技大会の招致に動きだし、1936（昭和11）年7月31日、ベルリンで開催されたIOC総会で第12回オリンピック競技大会〔1940（昭和15）年〕の東京開催が決定する<sup>8)</sup>。同年、オリンピック東京大会組織委員会が結成され、委員にはIOC委員をはじめ、東京市長、大日本体育協会会長、官僚、軍人など総勢十八名で構成された。

構築委員会委員に選出された建築家は外苑競技場設計者の小林の他に岸田が選出された。また、競技場委員会委員に中山克己<sup>注2)</sup>が選出された<sup>8)</sup>。そこで収容人員10万人を目途にメイン会場となる競技場の建設をめぐり、東京市、内務省、神社局、IOCそれぞれの思惑から「月島」、「明治神宮外苑改造」、「代々木」、「駒沢」などを候補地とする議論がおこる。



#### 4.1.2 競技場の建設地

1936（昭和11）年、大会調査委員でもあった岸田は第11回オリンピック競技大会の視察のためにベルリンを訪れた。外苑競技場の建設構想の際に嘉納が視察し参照された「ドイツスタジアム〔1916（大正5）年の第6回オリンピック競技大会は第一次世界大戦により中止〕」を取り壊して新たな競技場が建設されていた（図4-1-1、図4-1-2、図4-1-3）。

2.3.1 で指摘したように、前身のドイツスタジアムは長軸を東西に配していたのに対して、新たに建設されたドイツスタジアムは長軸を西南西から東北東に配して、南側をメインスタンドとし、東側スタンドに掲示板を、西側スタンドには聖火台が整備された（図4-1-1、図4-1-2）。岸田は南側メインスタンドの貴賓席・競技統轄室・ラヂオ放送室・新聞記者席・外交官其他の招待者席等の配置について「オリンピック競技場ではこれら諸室や座席の配置計画といふことが重要な建築課題をなす（図4-1-3）」<sup>8)</sup>とした。また岸田は、「オリンピック主会場の規模はロスアンゼルス大会の時も定員10万人の観衆を容れうるものであったし、伯林大会のものも10万人であった。少しつめれば12万人位は入った日もあったと思う。東京大会に対する現在の計画では7万5,000人のよし、えらく刻んだ数にしたものである。7万5,000人のスタンドは風致を害しないが、10万人のスタンドは風致を害するというのは面白い」<sup>9)</sup>と述べている。

翌1937（昭和12）年1月、第12回オリンピック競技大会会場は外苑競技場を改造することで一旦は決着し、同年5月に岸田と前川國男<sup>註3)</sup>による外苑競技場改造案（図4-1-4）が示された<sup>10)</sup>。しかし岸田は、第12回オリンピック競技大会〔1940（昭和15）年〕が、神武天皇の即位からちょうど2600年の節目の年<sup>註4)</sup>にあたるがゆえに記念行事のひとつとして神宮外苑での開催にこだわる人々に共感しつつ一方で、①敷地面積の狭あい。②神宮外苑の風致を害すること。③既存スタンド（外苑競技場）の取り扱い。という3点を挙げ、メイン会場の再考を促し、駒沢に新たな競技場を建設することを推進するようになる<sup>11)</sup>。

岸田は、「本図の制作により、十万人と三万人の主競技場と水泳競技場とを今の神宮外苑の地に配するとかくも不調和のものとなり、あの辺一帯の風致を害することを間接に当事者に説明了解せしめたいと願ふ心からであつたのに、結果は反対に私が十万人の主競技場を神宮外苑今の地に計画することの正しさを技術的に肯定し、更に主張でもしているかの如くに誤り考へられるに至つては、笑止千万である」<sup>12)</sup>とした他、「神宮外苑以外の所に地を定め、一大総合競技場を新に建設して、一つはオリンピック大会の円満なる遂行を可能ならしめ、他は熱望強き国民体位の向上とスポーツの隆昌発展とに資すべき理想の実現を期するべき」<sup>13)</sup>とした。

さらに後記として付け加えられた一文には、「組織委員会の要求する主競技場10万人、水泳場3万人という規模の計画を神宮外苑今の地に実現するためには、敷地のみ今の地を当て、競技場はすべて新造しなければならない。新造ということは今ある競技場を全部撤去することを意味する。このことが果たして可能であるか否かに問題解決の鍵が秘められているといつてよい。競技当事者が満足し得る程度の改造——むしろ新造——の計画が諸種の事情から実現不可

能となった場合、考えられるのは、(1)現在のままでやる、(2)姑息な改造ですます、(3)新に地を定めて総合競技場を建設する。という3つの場合である。果たして何れの場合に落ち付くか<sup>11)</sup>として推移を見守った。

一方、外苑競技場設計者の小林は「山手方面の高燥の地を選ぶべきだと思ひます。或人は月島方面の埋立地がよいと主張する者がありますが、海岸は空気が重くつて運動場には大体に於て適さないと思ふ。特に低湿で深く掘下げることの出来ない所や、樹木、芝などの生えない所、工業地帯に近くて空気の悪い所などは全々資格がないと思ふ。(中略)私は斯様な次第で月島説に反対するのです。東京の山手方面に新に敷地を求めて建設するのが、最も理想的であるが、若しそれが出来ないならば已むを得ず外苑を拡張するより途がない」<sup>14)</sup>とした。また、外苑競技場改造案として、約35,000人を収容する高さ約75尺の鉄筋コンクリート造スタンドを西側に建設し、東南北の芝生スタンド上に約45,000人収容する仮設の木造スタンドを整備して南北端に門を設け、南門上には「神火壇」を、北側には国旗掲揚場やスコアボード、奏楽室を設けた私案(図4-1-5)を発表した<sup>15)</sup>。

岸田・前川や小林による外苑競技場改造案は、いずれも南北のスタンドに門や塔のような施設を計画して競技場の長軸を主軸として強調する計画案であった。

しかし、最終的に「東京市は、内務省や神社側の制約を受けやすい外苑競技場を改造するよりも、市自身が個別に競技場を建設したほうが得策と判断して、駒沢案を推進し」<sup>16)</sup>新たな競技場の建設地は「駒沢」に決着する。こうして駒沢に第12回オリンピック競技大会会場となる施設の計画が進められた(図4-1-6)。

1935(昭和10)年に刊行された『運動競技場設計』<sup>17)</sup>によると競技場の方位は、競技場の長軸を南北軸に対して北北西から南南東に向って配し、メインスタンドは西南側に設けて西日を背にするように設置することが好都合とされている。計画された駒沢の競技場は長軸を南北軸に対して北北西から南南東に向って配し、メインスタンドは西南側に設けて西日を背にするように設置されており、理想的ともいえる競技場の配置計画であった。



**図 4-1-1 ドイツスタジアム配置図**

〔出典:Werner March:REICHSSPORTFELD, 宮内嘉久編集事務所, 国際建築, 第13巻, 第1号, 美術出版社, 1937 (名称筆者加筆)〕



**図 4-1-2 ドイツスタジアム**

〔出典:岸田日出刀:第十一回オリンピック大会と競技場, 丸善, 1937 (名称筆者加筆)〕



**図 4-1-3 ドイツスタジアム南側スタンド**

〔出典:岸田日出刀:第十一回オリンピック大会と競技場, 丸善, 1937 (名称筆者加筆)〕



図 4-1-4 岸田日出刀・前川国男による明治神宮外苑競技場改造案  
〔出典：東京朝日新聞，昭和 12 年 5 月 16 日〕

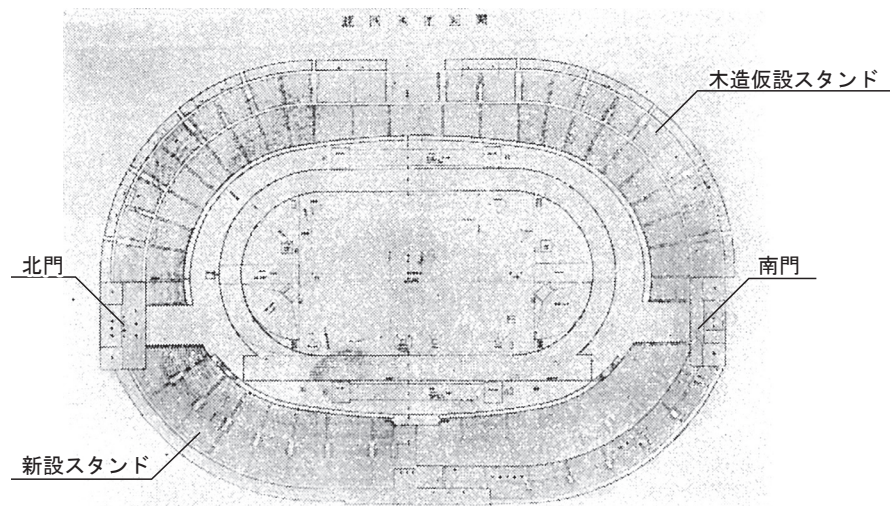


図 4-1-5 小林政一による明治神宮外苑競技場改造案  
〔出典：小林政一：オリンピック競技場として外苑改造に就いて，建築と社会，日本建築協会，第 20 輯，第 11 号，pp. 14-17，1937（名称筆者加筆）〕



図 4-1-6 駒沢オリンピック競技場配置図  
〔出典：永井松三：報告書，第 12 回オリンピック東京大会組織委員会，1939（名称筆者加筆）〕

## 4.2 戦中・戦後の明治神宮外苑と明治神宮外苑競技場

本節では、外苑競技場の建設を機に行われるようになった体育大会の報告書『紀元二千六百年奉祝 第十一回明治神宮国民体育大会報告書』<sup>18)</sup>と『第十二回明治神宮国民体育大会報告書』<sup>19)</sup>を主な基礎資料として、戦中の体育大会について述べる。また、外苑の造営から現在にかけてまとめられた『明治神宮外苑七十年誌』<sup>20)</sup>や国民体育大会の変遷についてまとめられた『国民体育大会 50年のあゆみ』<sup>21)</sup>を主な基礎資料として、これまであまり具体的な指摘はなされてこなかった戦中・戦後の外苑及び外苑競技場の利用状況について整理する。

### 4.2.1 戦中の体育大会について

1937（昭和12）年7月、日中戦争が勃発した。戦火が拡大する中、翌1938（昭和13）年、11月3日から四日間の日程で、大日本体育協会及び日本厚生協会主催で銃後体育運動の国策に添うものとして国民精神作興体育大会が開催された。その中で、伊勢神宮から「聖矛」をリレーして明治神宮に奉納する聖矛継走が行われた<sup>22)</sup>。東京高等師範学校教授の野口源三郎は、矛継走も元は聖火リレーであり「聖火は途中で消へる憂へがあるので、その他日本の国体の意義から言っても聖矛の崇厳貫徹こそ意味深<sup>23)</sup>」いとしている。

一方嘉納は、オリンピック競技大会の開催に向け最期まで奔走するが、1939（昭和14）年7月14日、拡大する戦火の影響から厚生省（現在の厚生労働省）は第12回オリンピック東京大会〔1940（昭和15）年〕の中止を決定した。

他方、明治神宮体育大会は同年の第十回大会から明治神宮体育会に代わって厚生省主催の「明治神宮国民体育大会」に改称して開催されることとなった。翌1940（昭和15）年、中止となったオリンピック東京大会に代わるべきものとして同年6月5日から五日間の日程で、紀元二千六百年奉祝東亜競技大会が開催され、開催国日本を含めた六つの国と地域から選手役員732名が参加した<sup>24)</sup>。また、同年10月27日から八日間の日程で、紀元二千六百年奉祝第十一回明治神宮国民体育大会が開催された<sup>25)</sup>。大会報告書<sup>26)</sup>には閉会式は日没後に挙行され、明治神宮から「神火」を捧持して荘厳厳粛に行われた（図4-2-2）と記載されている。

さらに翌1941（昭和16）年、10月31日から4日間の日程で、第十二回明治神宮国民体育大会が開催された。しかし、閉会式に関して〔一部で外国の模倣であると言はれていた華麗な閉会式を日本化する為に、前年大会には日没後「火」を利用して絢爛たるものであったが研究の結果「光」を用いざること<sup>27)</sup>とされ、日没時の荘厳さから午後4時に閉会式が挙行された。

戦火の影響により第12回オリンピック競技大会の開催には至らなかったが、戦中も体育大会は開催されていた。



#### 4.2.2 戦時体制下の明治神宮と明治神宮外苑競技場

1941（昭和16）年12月8日、太平洋戦争が勃発した。翌1942（昭和17）年3月、外苑は陸軍が占有することになり、外苑競技場は軍馬厩用場として利用された他、中央広場は防空陣地として高射砲が据えられただけでなく防空壕や兵舎などが設けられ<sup>28)</sup>るなど、非常事態性に応じることとなった。1943（昭和18）年10月21日、戦火の拡大にともなって文部省主催、陸海軍省の後援で、兵力不足を補うために高等教育機関に在籍する20歳以上の文系学生を中心とする「出陣学徒壮行会」が降りしきる秋雨の中、外苑競技場で挙行され、多くの学徒が出征して行った。

その後、連合軍による本土空襲が始まり、1945（昭和20）年4月の東京大空襲で明治神宮が被災しただけでなく、同年5月の大空襲で外苑も甚大な被害を受けた。同年8月15日、我が国はポツダム宣言を受入れ、終戦を迎えることになった<sup>29)</sup>。

#### 4.2.3 明治神宮外苑競技場からナイルキニック・スタジアムへ

1945（昭和20）年9月16日、外苑は連合軍総司令部（以下、「GHQ」という。）によって接収され、おもに「スポーツセンター」に充てられた。外苑競技場は「ナイルキニック・スタジアム（図4-2-1）」という名称に、中央広場は「神宮レクリエーションナル・フィールド」にそれぞれ改称され、GHQの管理下におかれた。

GHQは長円形主要道路の南側にある丸池付近に「自由の女神」像を設置した他、接収と同時に被災した施設の復旧に当たっており、外苑競技場には照明塔やサブトラック、芝生スタンドなどが整備された（図4-2-2）。一方、中央広場は整地され、木造スタンドを付設したソフトボールグラウンド（図4-2-3）の他、テニスコートやバレーボールコートなどが整備された<sup>30)</sup>ことで、中央広場の梯子状苑路は消失した。

3.3.2で指摘したように、中央広場の梯子状苑路は明治天皇大喪儀の際の外廓総門跡に位置していた。外苑の造営以来、良好な環境が保たれてきた中央広場は、戦中は戦時体制に應ずることを余儀なくされた他、戦後はGHQによる接収期間中に整地され新たに様々なスポーツ施設が整備されるなど、内的及び外的要因により中央広場の梯子状苑路は消失することになったが、GHQによる新たな競技施設の整備は現在の中央広場の利用形態の起点となった。

一方、外苑競技場の竣工当時に「明治神宮競技大会」が開催されて以降、その名称を改称しながら体育大会は開催されて来たが、1943（昭和18）年に開催された第14回明治神宮国民練成大会を最後に途絶えていた。戦後、我国の政治、経済、教育など一切の権限はGHQによって掌握されており、体育も例外なく活動はできなくなっていただけでなく、国際的なスポーツ大会にも参加できなかった。また、東京を初め、全国の主要都市は焼け野原となり、人心は荒廃し、茫然自失の状態に陥っていた。

こうした世相の中で、平沼亮三、末弘巖太郎、清瀬三郎、久富達夫などの大日本体育協会理事が集まり今後の体育の歩むべき道を懇談し始めた。1945年12月26日の会合で、石田啓次

郎理事が「この際、全国体育大会を開いてはどうか」と発言した。翌1946（昭和21）年には名称を「国民体育大会」として再出発することとなり、夏季、秋季、冬季に分けて行うことなどの大綱が決定された。こうして同年11月1日からの3日間の日程で、戦災を免れた京都で第1回国民体育大会が開催された。しかし、GHQによる集团的行動や宗教的行動及び国旗や国歌は規制されていたため、式典は各会場でしめやかに執り行われた<sup>31)</sup>。

1947（昭和22）年4月4日、復活第1回東西対抗サッカー試合が開催され、天皇陛下、皇太子殿下がナイルキニック・スタジアム（外苑競技場）の貴賓席に臨場された<sup>32)</sup>。天皇陛下は試合後選手に「きょうは見事な試合を見せてもらって有難う、スポーツ再建のため今後とも努力して欲しい」<sup>32)</sup>とお言葉を述べられた（図4-2-4）。また、同年5月5日には、東京都民体育大会が開催され、開会式に際し天皇・皇后両陛下、皇太子殿下、義宮、考宮、順宮、清宮各殿下御一家おそろいで<sup>33)</sup> ナイルキニック・スタジアム（外苑競技場）の貴賓席に臨場された（図4-2-5）。

その後、第4回国民体育大会（1949（昭和24）年）は東京開催に決定する。しかし、大会会場となるナイルキニック・スタジアム（外苑競技場）はGHQに接収されており、厳しい制約の中で開催することになった。

こうして1949（昭和22）年10月30日から5日間の日程で、東京を中心に神奈川、千葉、埼玉、山梨の1都4県25会場で第4回国民体育大会東京大会は開催された<sup>34)</sup>。開会式は、戦中、東京大空襲で消失し、GHQの駐車場となっていた学習院女学部の跡地に建設された神宮外苑東京



図4-2-1 ナイルキニック・スタジアムに改称された明治神宮外苑競技場  
 (出典：日本体育協会監修：国民体育大会の歩み，都道府県体育協会連絡協議会，1978)

ラグビー場〔1947（昭和22）年竣工、後の秩父宮ラグビー場〕で举行された。

開会式に際し天皇・皇后両陛下が神宮外苑東京ラグビー場（後の秩父宮ラグビー場）に臨場され（図4-2-6）、天皇陛下は「此処に全国より選ばれた諸子と相会し、潑刺たる元気な姿を見ることは、喜びに堪えません。体育は心身健康の鍵であります。諸子の公明な健闘を期待し、健全明朗な心身をもって、日本再建のため努力されんことを望みます。」<sup>34)</sup>とお言葉を述べられた。

GHQによる接收期間中にもかかわらず再びこの地で体育大会が開催されたことで、戦禍にあえぐスポーツ再建の足掛かりとなった。

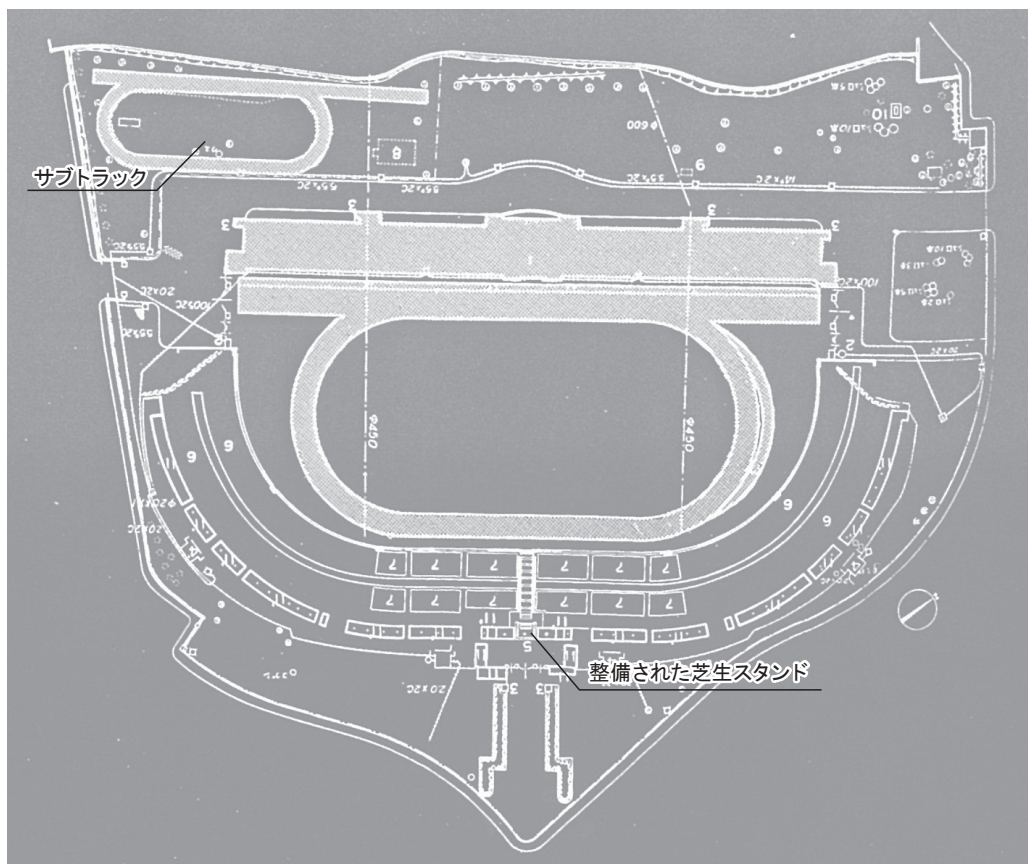


図4-2-2 明治神宮外苑競技場配置図

〔出典：新建築社：新建築，第33巻，第6号，新建築社，1958（名称筆者加筆）〕



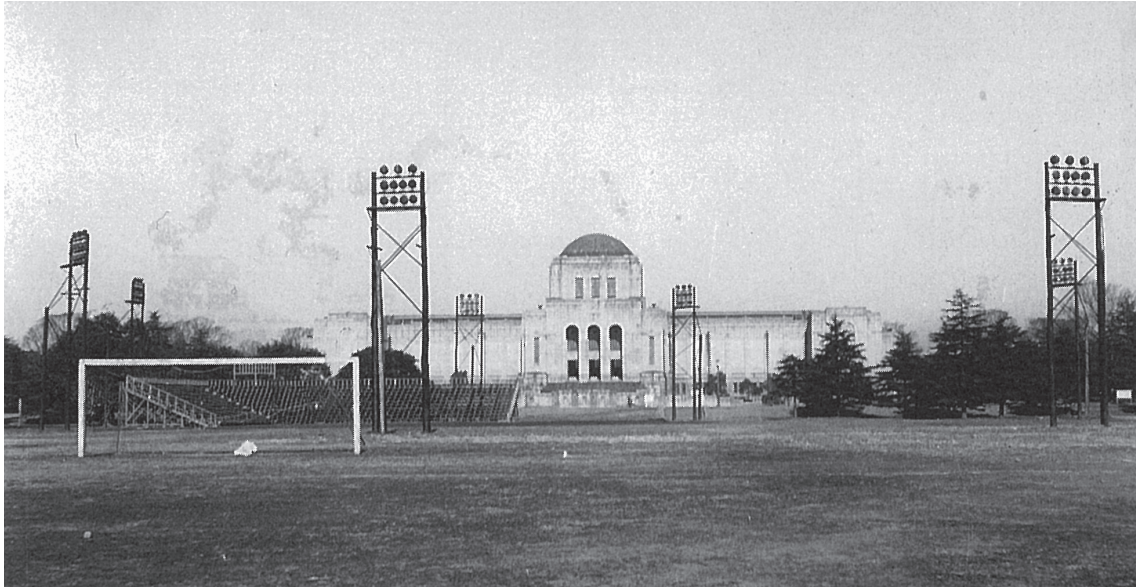


図 4-2-3 中央広場に敷設された照明塔と木製スタンド付のソフトボールコート  
(出典：明治神宮外苑七十年誌編集委員会編，明治神宮外苑七十年誌，明治神宮外苑，1998)



図 4-2-4 復活第1回東西対抗サッカー試合に臨場された天皇陛下と皇太子殿下  
(出典：日本蹴球協会：SOCCER 復刊第一号，日本蹴球協会，1948)



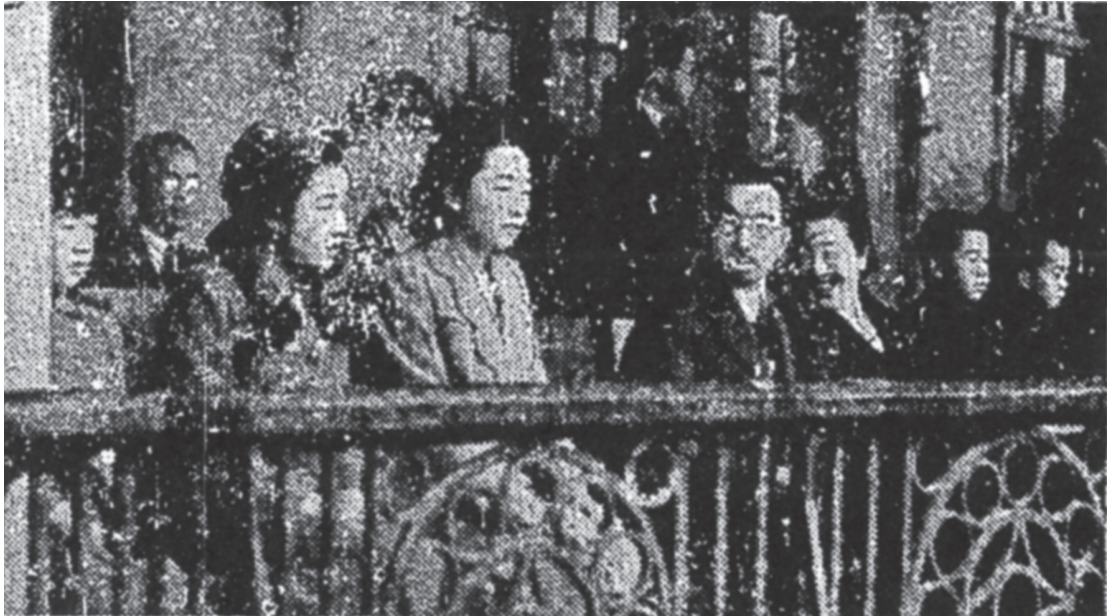


図 4-2-5 東京都民体育大会で外苑競技場の貴賓席に臨場された天皇皇后両陛下、皇太子殿下、義宮、考宮、順宮、清宮各殿下  
(出典：朝日新聞，昭和 22 年 5 月 5 日)



図 4-2-6 神宮外苑東京ラグビー場に臨場された天皇・皇后両陛下  
(出典：東京都，日本体育協会：第四回国民体育大会記録，第四回国民体育大会準備委員会，1949)



### 4.3 国立霞ヶ丘陸上競技場の建設

本節では、国立競技場の建設経緯と建設計画の変遷について、国立競技場の計画から現在に至る沿革が概観できる『国立競技場十年史』<sup>35)</sup>、『国立競技場の30年 - オリンピックからJリーグまで -』<sup>36)</sup>、『国立競技場50年の歩み』<sup>37)</sup>と東京都立公文書館が収蔵する図版等を関連付けながら再整理する。また、国立競技場の建設を機に開催された体育大会や国際大会について『第三回アジア競技大会報告書』<sup>38)</sup>、『第十四回国民体育大会報告書』<sup>39)</sup>などをもとに述べる。

#### 4.3.1 国際大会の招致と競技場の建設地

1951（昭和26）年10月、日本体育協会理事でアジア競技連盟委員の浅野均一は、安井誠一郎東京都知事らと会談を重ね、第3回アジア競技大会を東京に招致することを決定して招致活動をおこなっていた<sup>40)</sup>。こうした中で、翌1952（昭和27）年、外苑はGHQによる接收が解除された。

一方、同年ヘルシンキで開催された第15回オリンピック競技大会から、戦後ようやく日本も参加を認められるようになった。また、同所で開催されたアジア競技連盟評議員会で、第3回アジア競技大会〔1958（昭和33）年〕は東京で開催することが決定した<sup>41)</sup>。

東京都は第17回オリンピック競技大会〔1960（昭和35）年〕を東京に招致したい旨をIOCに申請し、衆議院においてもオリンピック招致のための促進運動を推進することを決議した。これを受けて東京都議会は、メインスタジアムを国費で建設する旨の意見書を文部大臣だけでなく国会にも陳情を提出し受理された<sup>41)</sup>。

こうして1954（昭和29）年12月20日、衆議院において国費をもって建設することが決議され、競技場の建設地として接收解除された外苑や三鷹グリーンパーク、駒沢都立総合グラウンド、砧緑地、東京湾埋立地が候補地に挙げられた。アジア競技大会組織委員会発会式〔1955（昭和30）年12月19日〕において、戦前から日本のスポーツの振興の場として長い伝統を持つ外苑競技場を母体として国立競技場を建設することが最も適切であるとされた<sup>41)</sup>。

他方、戦後GHQの「神道指令」<sup>注5)</sup>によって、宗教は国家から分離されることとなる。宗教活動に使われていた土地が、もともと社有地であるならば無償譲渡となるが、もともと国有地だった土地を社有地とする場合は時価の半額で払い下げられることになっており、外苑はもともと青山練兵場（国有地）であった為、無償譲渡の対象ではなかった。こうしたことから、外苑を管理下に置こうとする文部省と明治神宮当局とで議論がおこる。最終的に、競技場の敷地のみを国有地として残すことで明治神宮当局と合意した<sup>41)</sup>。

こうして外苑競技場を取り壊して新たな競技場が建設されることになったが、競技場の敷地は外苑から切り離されることになった。

#### 4.3.2 国立霞ヶ丘陸上競技場の計画

東京都議会議員及び日本体育協会を中心とする第17回オリンピック競技大会〔1960（昭和35）〕招致において、東京都立公文書館が収蔵する1955（昭和30）年までに構想された計画案を図4-3-1、図4-3-2に示す。また、図4-3-1を基調として構想されたものと考えられる計画案を図4-3-3に示す。図4-3-1、図4-3-2及び図4-3-3いずれも施設の計画に参加していた中山克己による<sup>42)</sup>ものと推察される。また、第17回オリンピック競技大会〔1960（昭和35）〕招致において重要な会議となるパリでのIOC総会〔1955（昭和30）〕はフランス語でPRする<sup>43)</sup>ことになっていたことから図4-3-3には、『PROJET DU PARC OLIMPIQUE (PLAN OF THE OLYMPIC PARK)』と複数の言語で表記されたものと考えられる。

図4-3-1、図4-3-2及び図4-3-3のいずれも外苑の構成に大きな変更はないが、図4-3-2では新たな競技場の南北のスタンドには門や塔のような施設が構想されている他、図4-3-3では中央広場にサブトラックが計画された。図4-3-1、図4-3-2及び図4-3-3のいずれも野球場の西側に大規模な水泳場が構想された。

3.4.2で指摘したように、第12回オリンピック競技大会の際に岸田・前川や小林によって構想された南北のスタンドに門や塔を計画した外苑競技場改造案と同様に南北のスタンドに門や塔のような施設が構想されており、競技場の長軸を主軸として強調する計画案が示された。

最終的にパリでのIOC総会で第17回オリンピック競技大会〔1960（昭和35）〕はローマ開催が決定したが、1958（昭和33）年のIOC総会を東京で開催することが決定された<sup>44)</sup>。こうしたことから次の第18回オリンピック競技大会〔1964（昭和39）〕の招致に向けて、1956（昭和31）年、文部省（現在の文部科学省）に国立競技場設立協議会が設けられた<sup>45)</sup>。また、下部組織として競技部会及び建設部会が設けられ、建設省（現在の国土交通省）が技術サービスをする事になり、関東地方建設局第一課長の角田栄<sup>注6)</sup>が担当となった他、委員は片山光生<sup>注7)</sup>、丸山重良、高橋恒、室橋正太郎、杉浦介方であった<sup>46)</sup>。

同年3月5日、第1回国立競技場設立協議会が開催され、風致の維持やサブトラックをどうするかなどのアウトラインが話し合われた<sup>47)</sup>。同年3月23日、聖徳記念絵画館で競技部及び建設部の合同部会が開催され、同年3月29日までに腹案を作成することになった<sup>48)</sup>。競技場の設計に関する最初の会議には角田の他に、建築家は外苑競技場設計者の小林、第17回オリンピック競技大会招致の際に施設の計画に参加していた中山、今井兼次<sup>注8)</sup>が出席している<sup>49)</sup>。

国立競技場を建設する目的は、第一に第3回アジア競技大会の主会場として、第二に国際的な競技大会や全国的規模の競技大会会場として、第三に家族レクリエーションにも役立つようにすることであった。こうしたことから国立競技場内に、①スポーツ美術館、②オーディトリウム及び会議室、③室内プール、④室内体育館、⑤宿泊施設などを整備することが計画された<sup>50)</sup>。

こうして国立競技場は、競技施設としてだけでなく広く一般にも開かれ、多目的に利用しよ

うという国立競技場独特の性格が位置付けられた。

国立競技場の収容人員は、まず5万人収容とし、オリンピック招致決定の際に10万人収容とすることを前提に計画された。その際、メインスタンドを絵画館側の東側に設けるか、外苑競技場と同様に西側スタンドとするかが検討され、西側をメインスタンドとすることは風致という観点から競技場の表玄関としての風格がないことが懸念された<sup>50)</sup>。

一方、明治神宮当局は絵画館を中心とする外苑の景観に調和できるのかを懸念し、敷地周辺の樹木をできるだけ伐採しないことと絵画館側のスタンドを明治神宮野球場の外野スタンドの高さ地上8.6m程度に抑えることを要望した。角田らは方位に関する検討(図4-3-4)を行い、競技場のメインスタンドを東側の絵画館側に設けると明治神宮当局による高さの制限と西日の影響を受けることなどを考慮して、最終的に図4-3-4の(I)案に決定した<sup>50)</sup>。

また、綿密な計算を行い東側スタンド(絵画館側)の高さを7.91mに収めた<sup>51)</sup>基本設計案をとりまとめた(図4-3-5)。南北のスタンド中央には門のようなゲートが設けられ、南側スタンドには炬火台と階段が、北側スタンドには掲示板が計画された。

3.4.2で指摘したように、第12回オリンピック競技大会の際の岸田・前川や小林による計画案や、第17回オリンピック競技大会招致の際の中山による計画案(図4-3-2)と同様に、競技場の長軸を主軸とする計画案が示された。

角田は「グラウンドだけでも競技場ということが出来る。しかし、私達のあつかう競技場は、

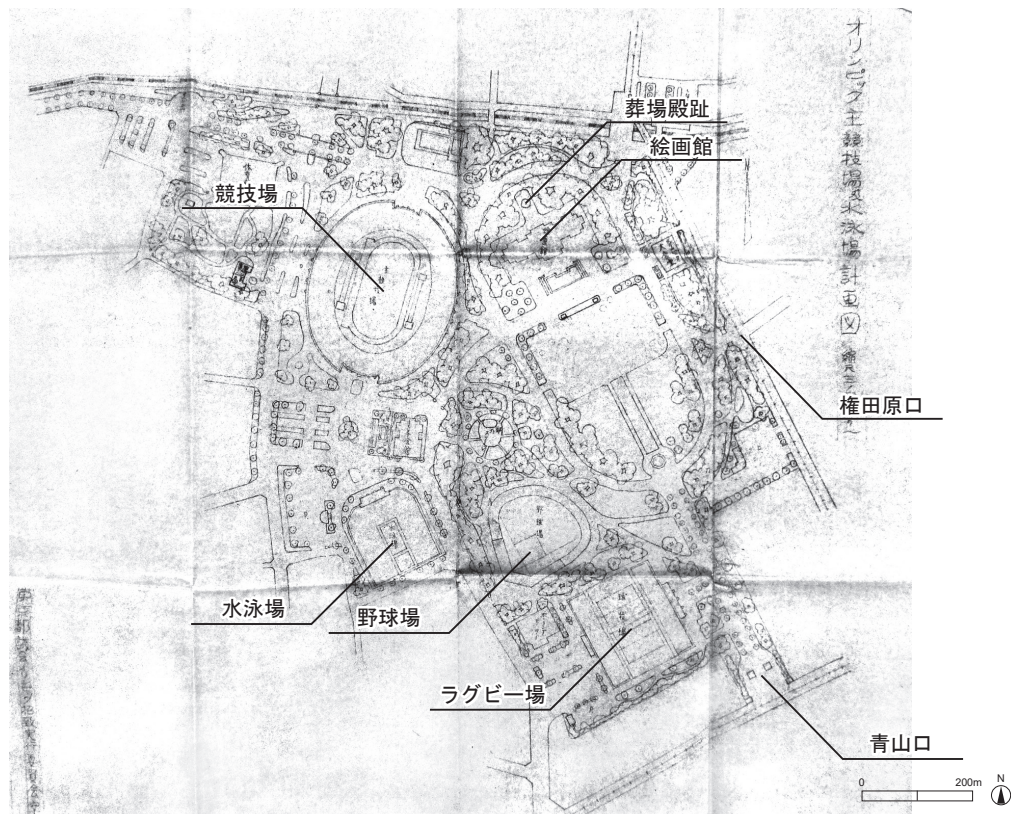


図4-3-1 東京都議会オリンピック招致実行委員会案  
オリンピック主競技場及水泳場計画図

[出典:東京都:オリンピック大会東京招致に関する事務委託について, 東京都立公文書館蔵, M04.04.07.1954 (名称筆者加筆)]



大規模なスタンドをもつ競技場だ。建築家にとっては、スタンドが何といても最も興味深い。巨大な構築物であるだけに、そのあつかい方によって、いろんな表現が可能だからだ。全体の配置や、内外の動線、形は建築的意欲をそそる」<sup>52)</sup> としている。

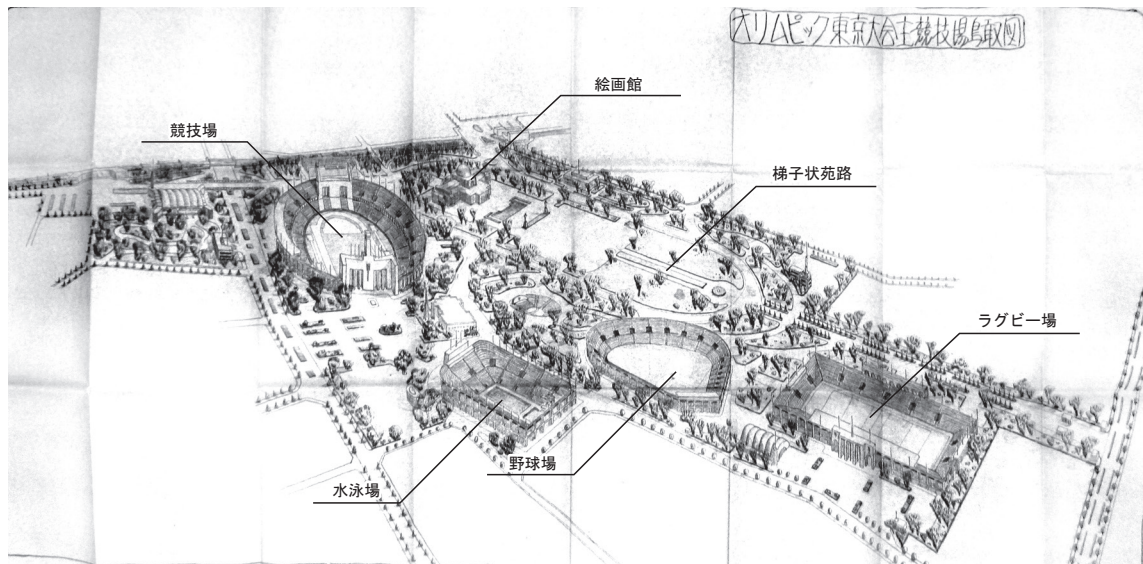


図 4-3-2 東京都議会オリンピック招致実行委員会案  
オリンピック東京大会主競技場鳥観図

[出典:東京都:オリンピック大会東京招致に関する事務委託について, 東京都立公文書館蔵, M04.04.07.1954 (名称筆者加筆)]

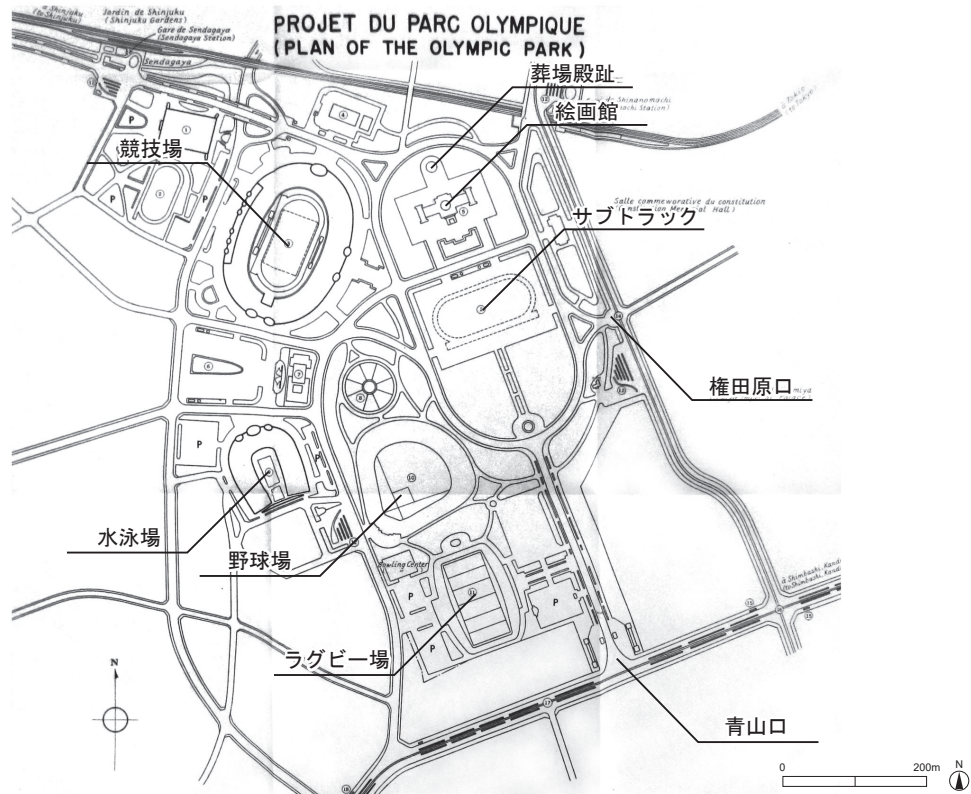


図 4-3-3 オリンピックパーク計画案 1955

[出典:東京都:Tokyo, 東京都立公文書館蔵, オリンピック-173.1955 (名称筆者加筆)]



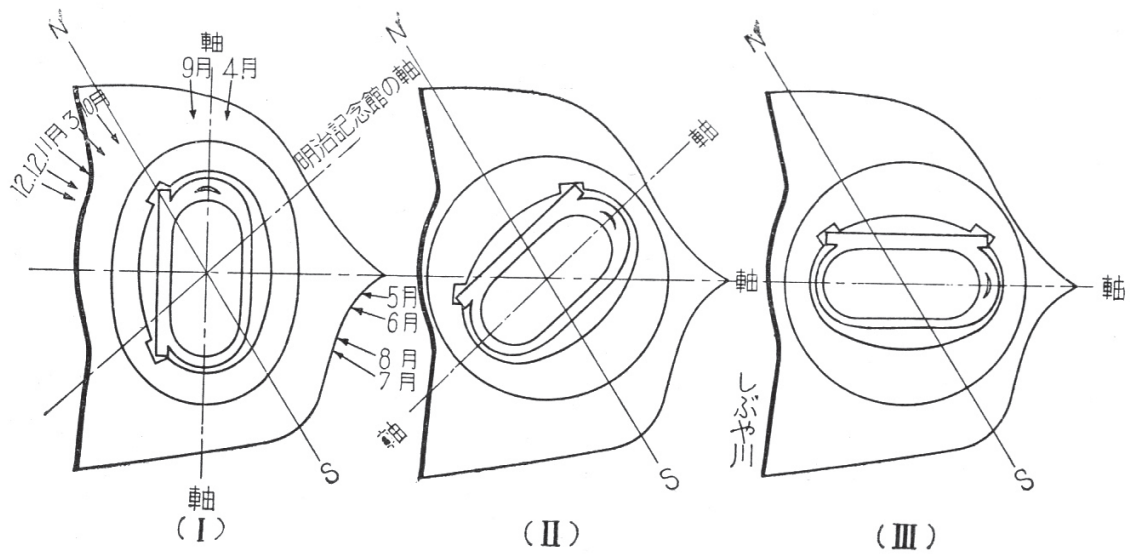


図 4-3-4 国立霞ヶ丘陸上競技場の方位に関する検討  
 (出典：新建築社：新建築，第33巻，第6号，新建築社，1958)

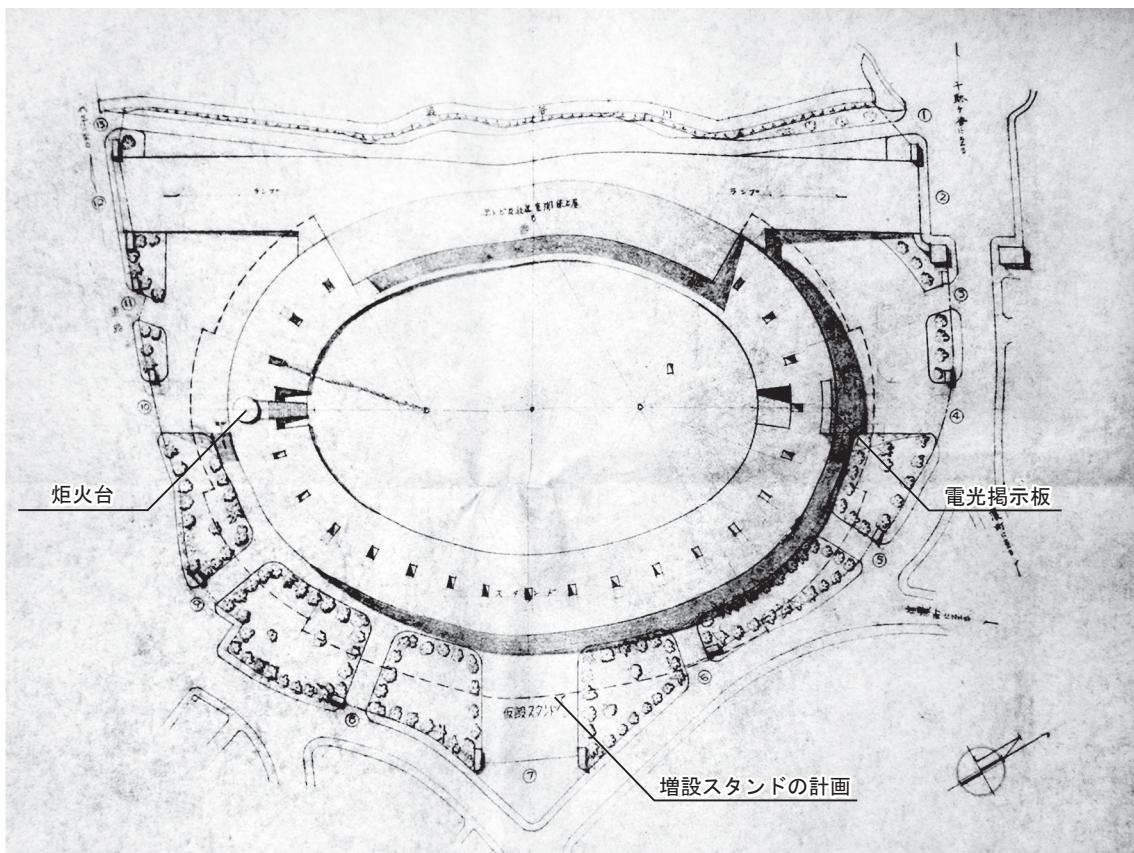


図 4-3-5 国立霞ヶ丘陸上競技場 基本設計配置図  
 (出典：特殊法人国立競技場：国立競技場の建設について，国立公文書館蔵，本館-3D-002-00，平15文化00196100，1956)

#### 4.3.3 第3回アジア競技大会と第14回国民体育大会東京大会の開催

1956（昭和31）年12月13日、国立競技場建設協議会は総会を開き、設計案を承認した<sup>53)</sup>。翌1957（昭和32）年、外苑競技場の解体と並行して国立競技場の基礎工事が着工された。こうして1958（昭和33）年3月30日、竣工式が執り行われ、外苑競技場は国立競技場へと変貌を遂げた。最終的に国立競技場（図4-3-6、図4-3-7、図4-3-8、図4-3-9、図4-3-10、図4-3-11）の方位はトラック長軸を南北軸から32度<sup>54)</sup>振れた方向にとり、西側を屋根付きのメインスタンドとし、南側スタンド上部に炬火台を、北側スタンド上部には電光掲示板をそれぞれ設置して収容人員は5万8,000人であった<sup>55)</sup>。

3.4.2で指摘したように、第12回オリンピック競技大会の際に小林によって構想された外苑競技場改造案では南北端に門を設け南門上には「神火壇」を、北側には国旗掲揚場やスコアボード、奏楽室を計画して競技場の長軸を主軸として強調する計画案であった。建設された国立競技場の南北のスタンドに門や塔のような施設は整備されていないが、小林による外苑競技場改造案と同様に南側スタンド上部に炬火台（小林の外苑競技場改造案では神火壇）を、北側スタンド上部には電光掲示板（小林の外苑競技場改造案では国旗掲揚場やスコアボード、奏楽室）をそれぞれ整備して競技場の長軸を主軸とするものであった。また、4.3.2で指摘したように、国立競技場の基本設計配置図では、南北スタンドにはゲートが設けられていたが、最終的に西側直線トラックの端部にゲートは整備された。

一方、アジア競技大会組織委員会〔1957（昭和32）年10月7日〕において、「開会式にあたり、天皇・皇后両陛下の行幸啓を奏請すること」が満場一致で決議された<sup>56)</sup>。翌1958（昭和33）年5月24日、20の国と地域から1,800人が参加し、第3回アジア競技大会は9日の日程で開催された<sup>57)</sup>。大会報告書<sup>58)</sup>には、開会式にあたり天皇・皇后両陛下は国立競技場の正面玄関に到着され、東龍太郎日本体育協会会長らの案内で西側スタンドの貴賓席にお着きになった。開会式のファンファーレが吹奏され、天皇陛下はご自席より開式のご宣言をなされた後、エキシビジョンをご覧になったと記載されている（図4-3-12）。

翌1959（昭和33）年10月25日には6日の日程で第14回国民体育大会東京大会が開催された<sup>59)</sup>。大会報告書<sup>60)</sup>には、大会初日、開会式にあたり天皇・皇后両陛下は国立競技場北車門から正面玄関に到着され、津島壽一東京国体大会会長の案内で西側スタンドの貴賓席（図4-3-13）にお着きになり、天皇・皇后両陛下はエキシビジョンなどをご覧になったと記載されている。さらに大会3日目の同年10月27日、天皇・皇后両陛下は再び国立競技場を訪れ、西側スタンドの貴賓席から一般女子80mハードルの他、主にトラック競技をご覧になった<sup>60)</sup>と記載されている。

当時の記録<sup>61)</sup>によると国立競技場の西側スタンド中央の新聞記者席の向いは皇族席と記載されており、天皇・皇后両陛下が臨場することを想定して整備されたものと考えられる。



図 4-3-6 国立霞ヶ丘陸上競技場  
〔出典：絵葉書（筆者所蔵）〕

**国立霞ヶ丘陸上競技場**

設 計：建設省関東地方建設局

角田栄、片山光生、丸山重良、室橋正太郎、高橋恒、杉浦介方

構造設計：渡延甫、小谷師走、中野清司、小川三郎

構 造：鉄筋コンクリート造一部鉄骨5階建て

敷地面積：72,778 m<sup>2</sup>

建築面積：19,882 m<sup>2</sup>

グラウンド面積：17,820 m<sup>2</sup>

収容人員：48,000人

全天候型、1周400m、8レーン日本陸上競技連盟公認第1種陸上競技場



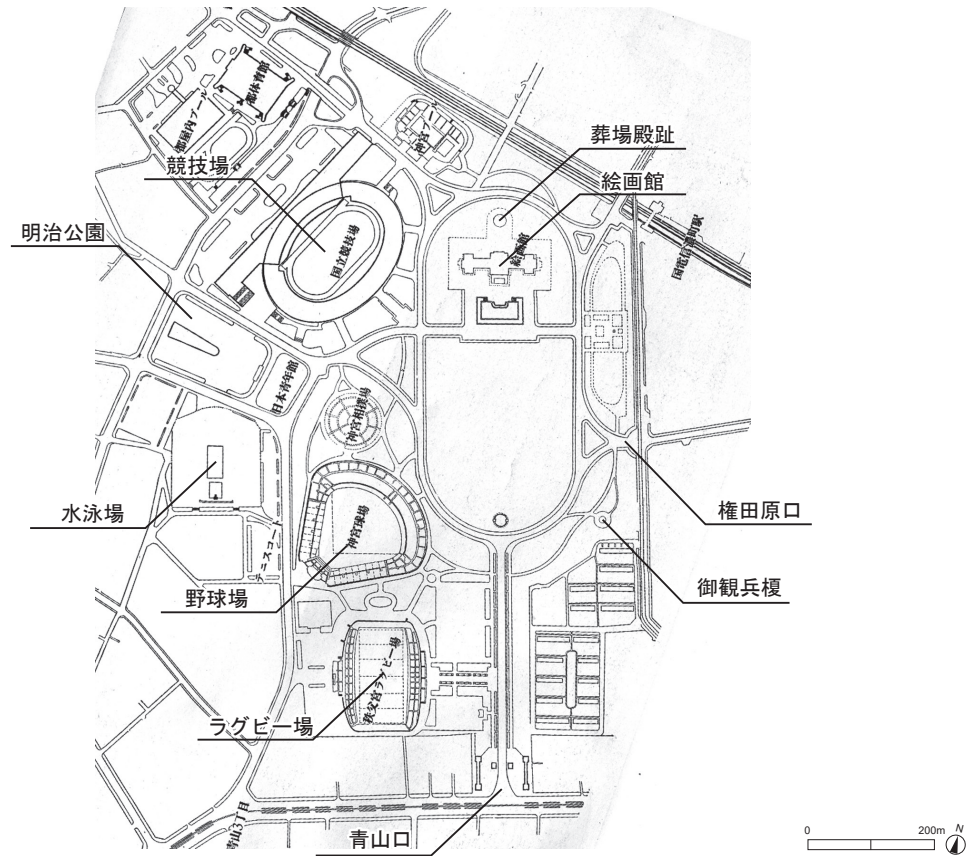


図 4-3-7 明治神宮外苑配置図 1958

〔出典：新建築社：新建築，第 33 卷，第 6 号，新建築社，1958（名称筆者加筆）〕



図 4-3-8 国立霞ヶ丘陸上競技場配置図

〔出典：宮内嘉久編集事務所編：国立競技場・明治神宮外苑，国際建築，第 25 卷，第 7 号，美術出版社，1958（名称筆者加筆）〕



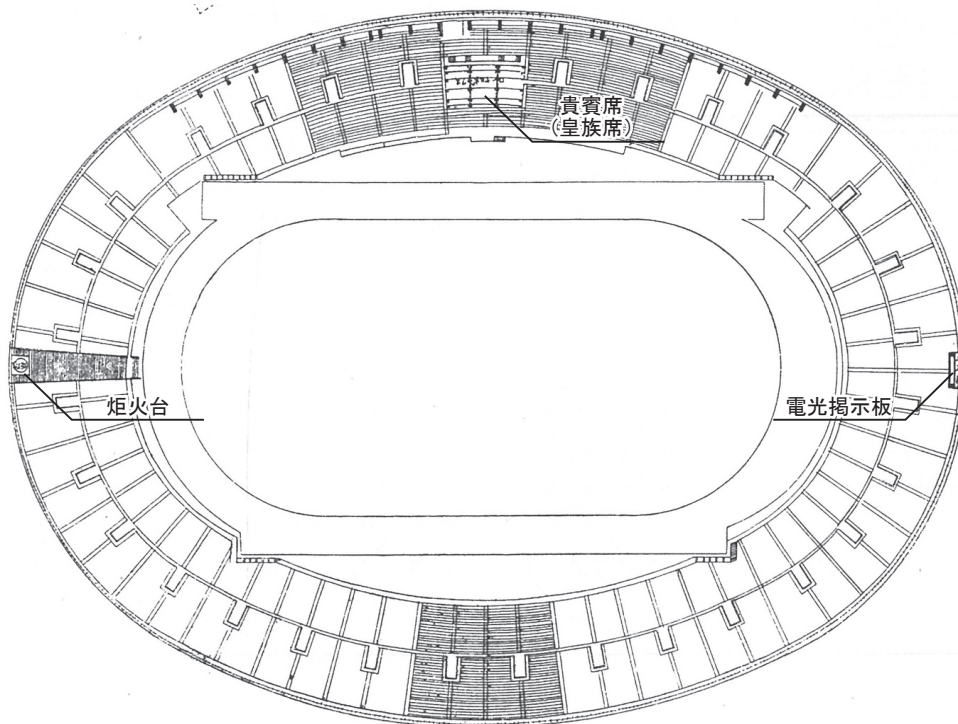


図 4-3-9 国立霞ヶ丘陸上競技場 平面図

〔出典：角田栄：国立競技場について建築界，第6巻，第5号，理工図書，1957（名称筆者加筆）〕



図 4-3-10 国立霞ヶ丘陸上競技場 西側スタンド  
〔出典：新建築社：新建築，第 33 卷，第 6 号，新建築社，1958（名称筆者加筆）〕

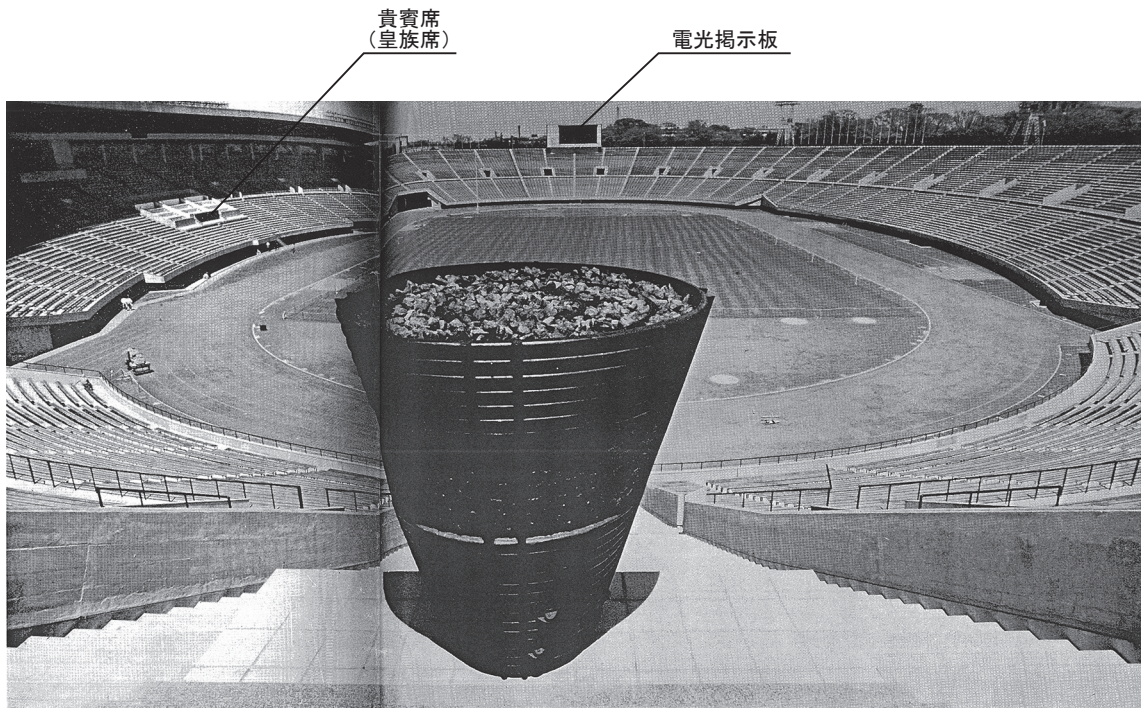


図 4-3-11 国立霞ヶ丘陸上競技場 南側スタンドの炬火台からトラックを望む  
〔出典：新建築社：新建築，第 33 卷，第 6 号，新建築社，1958（名称筆者加筆）〕





図 4-3-12 第3回アジア競技大会で国立霞ヶ丘陸上競技場の貴賓席（皇族席）に臨場した天皇・皇后両陛下

（出典：第3回アジア競技大会組織委員会：第3回アジア競技大会報告書 1958，第3回アジア競技大会組織委員会，1959）



図 4-3-13 第14回国民体育大会で国立霞ヶ丘陸上競技場の貴賓席に臨場した天皇・皇后両陛下

（出典：第14回国民体育大会東京都実行委員会：第14回国民体育大会報告書，第14回国民体育大会東京都実行委員会，1959）

## 4.4 国立霞ヶ丘陸上競技場の改修

本節では、国立競技場で開催された第18回オリンピック競技大会の記録をまとめた『第18回オリンピック競技大会公式報告書 上』<sup>62)</sup>、『第18回オリンピック競技大会東京都報告書』<sup>63)</sup>や当時の記録<sup>64)</sup>をもとに、国立競技場の改修計画と開催された第18回オリンピック競技大会について、国立競技場設計者の角田の言説と図版を関連付けながら再整理し、本研究の主題である国立競技場の配置計画について検証する。

### 4.4.1 国立霞ヶ丘陸上競技場の改修計画

1958（昭和33）年1月22日、東京オリンピック大会準備委員会が設立され、下部組織として専門委員会に競技場部及び施設設計部が設けられ、角田、中山の他に建築家は高山英華<sup>注9)</sup>が選出された<sup>65)</sup>。

翌1959（昭和34）年、ドイツのミュンヘンで開催予定のIOC総会に向けて構想された計画案を図4-4-1に示す。西側メインスタンド以外の在来スタンドを取り囲むように既存スタンドを上方に拡張する延長式のスタンド増設方法で構想された計画案が示されている他、国立競技場と絵画館の西側、相撲場の北側、明治公園とをそれぞれ接続するブリッジが計画された。同年5月23日、ミュンヘンで開催されたIOC総会で、第18回オリンピック大会の東京開催が決定した<sup>66)</sup>。その後、新たなスタンド増設方法として、在来スタンドにオーバーラップさせる二階式（図4-4-2）<sup>67)</sup>の計画案（図4-4-3）<sup>68)</sup>が示された。

翌1960（昭和35）年4月、文部省（現在の文部科学省）に国立競技場の拡充計画に関する事項を調査、審議する国立競技場拡充計画協議会が設置され、文部大臣により委嘱された競技団体、組織委員会、学識経験者、関係各省庁、国立競技場関係者の総勢69名で構成された<sup>注10)</sup>。その際、同協議会副会長に岸田日出刀組織委員会施設特別委員会委員長が選出された<sup>69)</sup>。また、一般施設に関する事項及び全体施設計画作成に関する事項を調査、審議する第一分科会、競技施設に関する事項を調査、審議する第二分科会、報道関係施設に関する事項を調査、審議する第三分科会、周辺施設に関する事項を調査、審議する第四分科会がそれぞれ設置された。第一分科会の会長に建築家の中山、同分科会委員に高山が選出された他、角田はそれぞれの分科会委員となった<sup>70)</sup>。

同年5月9日、第1回国立競技場拡充計画協議会総会が開催されたのを期に同協議会総会及び分科会の開催を重ね、同年11月1日の第7回総会で最終答申がなされた<sup>71)</sup>。第一分科会の主な答申は競技場正面玄関の整備やスタンドを上方に延長して座席を拡張する他、増設スタンドの関係を考慮して炬火台を移設することなどであった。とりわけ最大の問題はスタンドの増設方法である。

西側メインスタンドには大きな改造は加えずに残りの三方のスタンドを大きくするのが当初からの方針であったが、東北側スタンドと敷地境界線との距離が著しく狭く、スタンド増設方



法の懸案となっていた<sup>72)</sup>。まず、スタンドを延長式(図4-4-1)か二階式(図4-4-2、図4-4-3)で増設するか検討された。

角田は広いバックスタンド側に大きな増設部分をもってくるのできる三日月形が得策であるが、在来のシンメトリーのスタンドにシンメトリーの三日月形のスタンド増設では敷地の条件を無視して道路にはみだして計画しないかぎり所要の規模のものはできないとした。その上で、在来スタンドの東西の中心線から僅かに南よりに増設スタンドの中心線をずらすことが可能なのは三日月形以外に方法がなく、僅かな形の非対称であれば気にする程のこともないことから、三日月形にスタンドを増設することをひそかに決意し強く主張した。こうして観覧席のどの部分からでも競技場で行われているすべてが見える三日月形の延長式が採用された<sup>73)</sup>。

また、スタンドの増設にともない、炬火台をバックスタンド中央の一番高いところに移すこととした<sup>74)</sup>。この他、角田は競技場の環境について、環境がその競技場の風格を決定する重大な問題であるとして、施設の周辺環境整備も重要事項の一つとした<sup>75)</sup>。

4.3.2で指摘したように、西側メインスタンドは表玄関としての風格がないことを懸念されていた。こうしたことから角田は競技場に正面性と同時に風格を与えようとする試みとして、競技場西側の低地に直接競技場の主出入口に通じる通路を通して池や噴水、巨大な彫刻を敷



図4-4-1 オリンピックパーク計画案 I 1959

〔出典：古山利雄編：東京オリンピック準備委員会報告書，東京オリンピック準備委員会，1959（名称筆者加筆）〕

設することを計画した他、競技場西側正面に競技場2階席と同じ高さの規模の凱旋門のような建物（図4-4-4、図4-4-5）を計画し、「万難を排して計画通り実施されるのがのぞましい」<sup>76)</sup>とした。

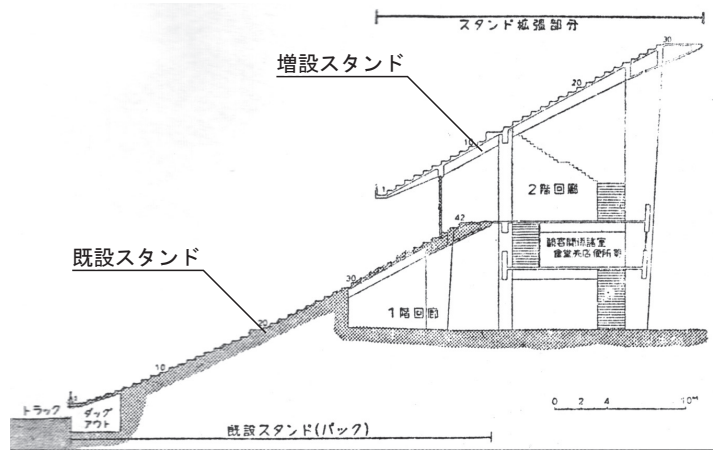


図4-4-2 国立競技場東側増設スタンド計画案断面図

〔出典：角田栄：オリンピックに備える国立競技場の拡張，月刊国立競技場，第9号，国立競技場，pp. 4-5，1959（名称筆者加筆）〕



図4-4-3 オリンピックパーク計画案 II 1959

〔出典：新建築社：新建築，第34巻，第8号，新建築社，1959（名称筆者加筆）〕

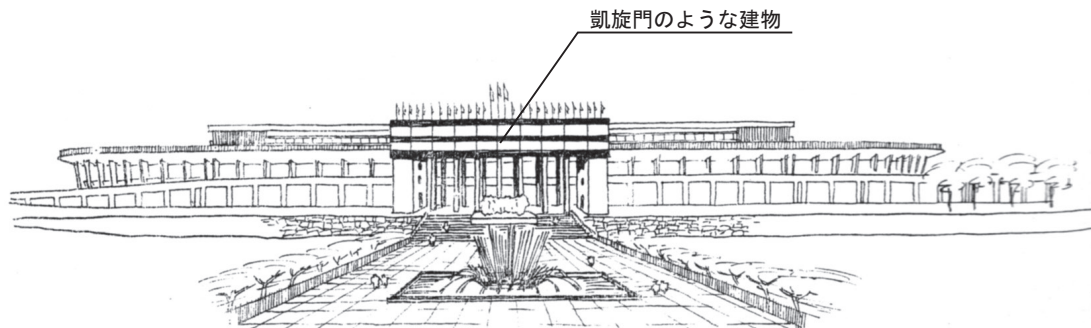


図 4-4-4 国立霞ヶ丘陸上競技場西側正面オリンピックパーク案イメージ図  
〔出典：角田栄：オリンピックに備える国立競技場の拡張，月刊国立競技場，第9号，国立競技場，pp. 4-5，1959  
(名称筆者加筆)〕

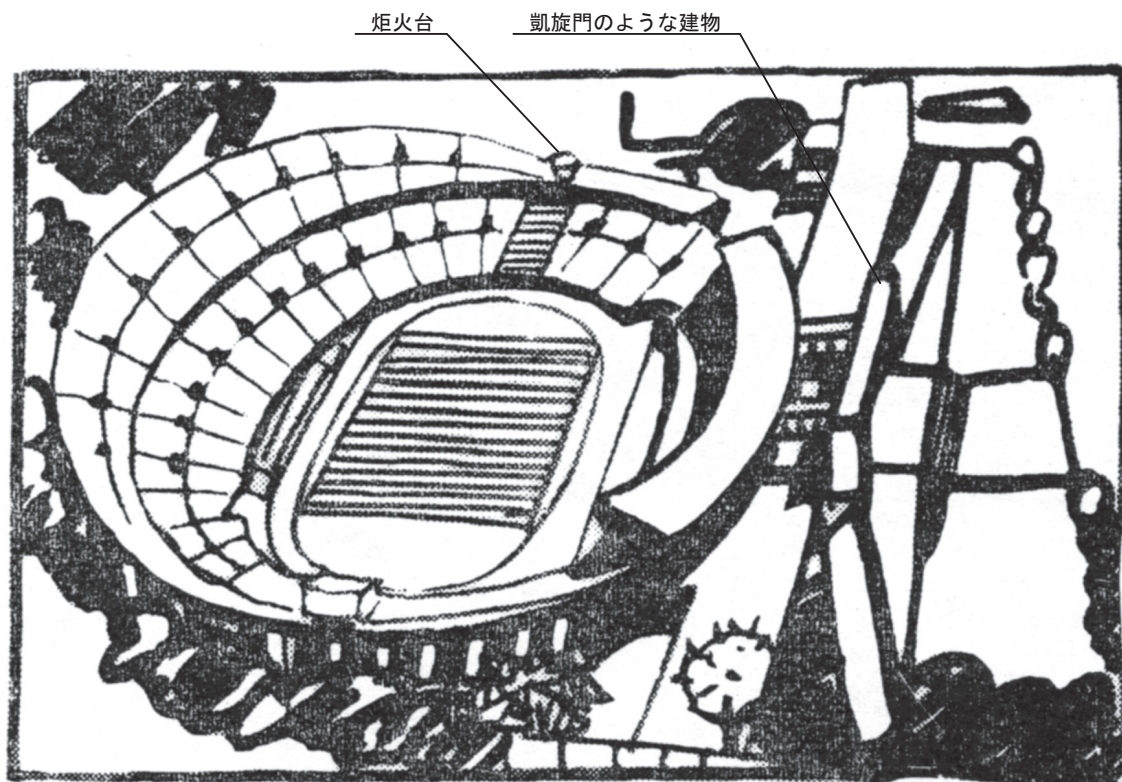


図 4-4-5 国立霞ヶ丘陸上競技場の改修計画案イメージ図  
〔出典：角田栄：オリンピックに備える国立競技場の拡張，月刊国立競技場，第9号，国立競技場，pp. 4-5，1959  
(名称筆者加筆)〕



#### 4.4.2 第18回オリンピック東京大会の開催

1962（昭和37）年5月28日、オリンピック東京大会組織委員会は会議を開き、天皇陛下を東京大会の名誉総裁に仰ぐことを満場一致で決議した<sup>77)</sup>。その後、国立競技場の東側（絵画館側）に恒久的なスタンドを増設した他、オリンピック大会期間中に聖火が競技場外からも眺められるように炬火台を東側増設スタンド中央の最上部に移設した<sup>78)</sup>。

1963（昭和38）年10月までにはすべての改修工事が完了した。最終的に国立競技場は長径262m、短径213m。収容人員7万5,000人となった<sup>79)</sup>（図4-4-6、図4-4-7、図4-4-8）。嘉納が実現できなかったオリンピック競技大会は、1964（昭和39）年10月10日から24日までの15日間、94の国と地域から選手5,558人、役員1,937人が参加して開催された<sup>80)</sup>。

大会報告書<sup>81)</sup>には同年10月10日、開会式にあたって、天皇・皇后両陛下が競技場にご到着され、西側メインスタンド中央の貴賓席に臨場された（図4-4-9）。天皇陛下がオリンピック東京大会の開会を宣せられた後、東側増設スタンド中央最上部の炬火台に点火され、オリンピック東京大会は開幕したことが記載されている。国立競技場西側スタンドの貴賓席（皇族席）は、施設改修後も大きな変更はなく更新された。

こうして国立競技場は日本を代表する国際的な競技場としてその存在を国内外に示しただけでなく、オリンピック競技大会の東京開催は日本の戦後の復興を象徴するものとなった。

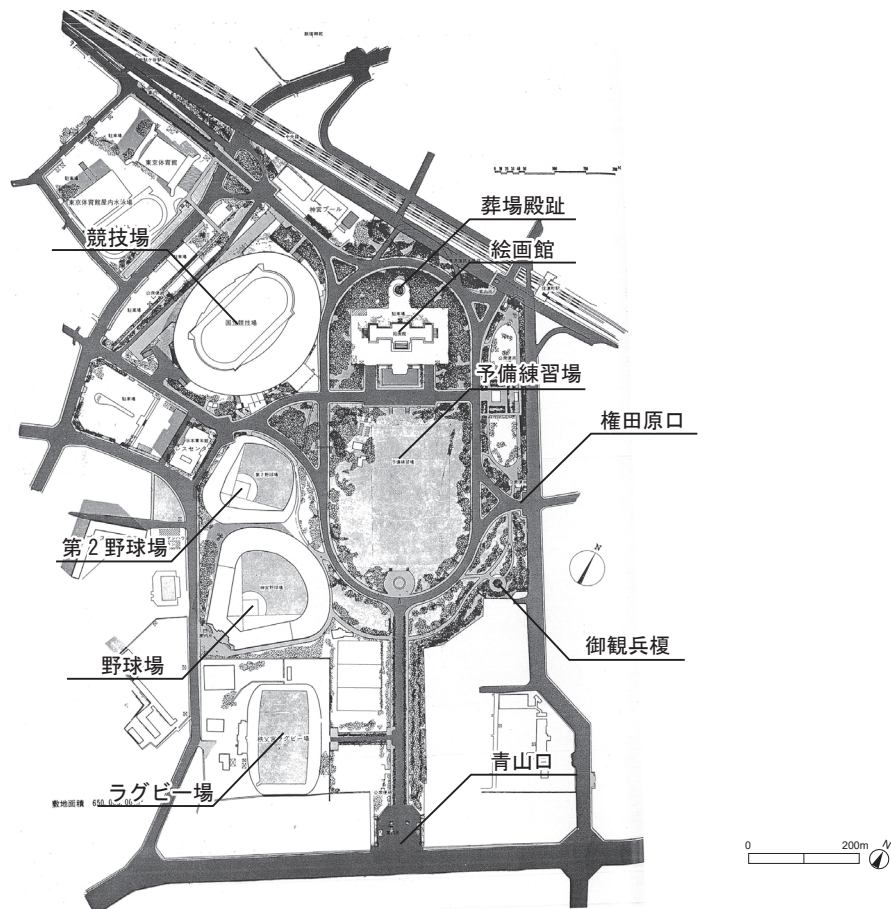


図4-4-6 施設改修後の国立霞ヶ丘陸上競技場と明治神宮外苑配置図  
〔出典：新建築社：新建築，第39巻，第10号，新建築社，1964（名称筆者加筆）〕





図 4-4-7 施設改修後の国立霞ヶ丘陸上競技場

(出典：第1回日本建築祭実行委員会：オリンピック東京大会施設作品集，第1回日本建築祭実行委員会，1964)

### 国立霞ヶ丘陸上競技場

設 計：建設省関東地方建設局／角田栄

構 造：鉄筋コンクリート造一部鉄骨5階建て

敷地面積：72,778 m<sup>2</sup>

建築面積：19,882 m<sup>2</sup>

構 造：鉄筋コンクリート造一部鉄骨4階建て

グラウンド面積：17,820 m<sup>2</sup>

収容人員：75,000人

全天候型、1周400m、8レーン日本陸上競技連盟公認第1種陸上競技場



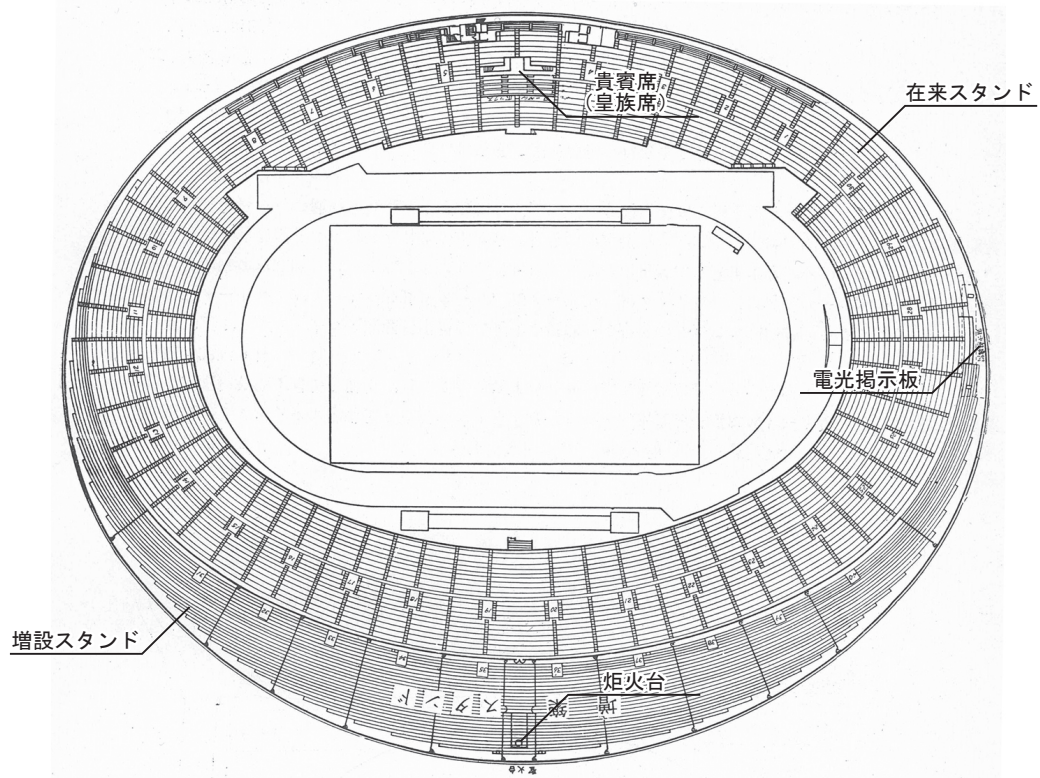


図 4-4-8 スタンド増築後の国立霞ヶ丘陸上競技場 スタンド平面図  
(出典：文部省：オリンピック東京大会と政府機関等の協力，文部省，1965（筆者加筆）)



図 4-4-9 第 18 回オリンピック東京大会で国立霞ヶ丘陸上競技場の貴賓席に臨場した  
天皇・皇后両陛下

(出典：朝日新聞社編：'64 東京オリンピック，朝日新聞社，1964)

#### 4.4.3 国立霞ヶ丘陸上競技場の方位の検証

1.2で指摘したように、国立競技場は建設に際し「立地的にも一つのモニュメンタルな建造物として位置付けられ」<sup>82)</sup> ていた。「国立霞ヶ丘陸上競技場基本設計配置図（図4-3-5）」と国立競技場の建設当初の配置図（図4-3-8）を比較すると（図4-4-10）、基本設計配置図を基調としつつもいくつかの変更点を確認できる。具体的には、①南北スタンドのゲートの位置、②南側陸橋の形状や幅、③競技場の方位、を微調整している。そこで国立競技場の配置計画について検討する。

4.1.2で指摘したように、競技場の設計に際してその方位は競技場の長軸を南北軸に対して北北西から南南東に向って配し、メインスタンドは南西側に設けて西日を背にするように設置することが好都合<sup>17)</sup>とされていることから、外苑競技場配置図（図3-2-11）に、長軸を南北軸に対して北北西から南南東に向って配した建設当初の国立競技場（図4-3-9）を重ね合わせて、敷地における配置可能な位置を検討した。その結果、建設当初の国立競技場の規模であれば、おおよそ6カ所に配置が可能であった（図4-4-11）。しかし、敷地の中央付近に配置した図4-4-11（Ⅲ）以外の位置では、将来的なスタンド増設が困難となる。

そこで、図4-4-11（Ⅲ）に補助線を加え、スタンド増設可能な範囲を検討した（図4-4-12）。その結果、西南西及び東北東に大きく拡張することができ、将来的なスタンド増設を考慮しつつもこの敷地においても好都合とされる競技場の方位に配置することが可能であった。また、スタンド増設後の国立競技場（図4-4-8）であっても、好都合とされる方位で敷地内に配置可能であったが、角田のいう内外の動線を考慮するとバックスタンド側に比べ、メインスタンド側へのアクセスが悪くなる（図4-4-13）。

しかし、建設当初の国立競技場で図4-4-11（Ⅲ）の位置であれば、補助線内は全ての方位に配置することが可能であった（図4-4-14）。一方、スタンド増設後の国立競技場は図4-4-15（Ⅱ）（Ⅲ）（Ⅳ）（Ⅴ）の方位には敷地内に配置できないが、図4-4-15（Ⅰ）（Ⅵ）（Ⅶ）（Ⅷ）では配置することが可能であることが明らかになった。

次に、国立競技場の建設に際してなされた角田による基本設計配置図と方位の検討図について検討する。

#### 基本設計配置図

基本設計配置図（図4-3-5）の方位を検証する為に、外苑競技場配置図（図3-2-11）に基本設計配置図（図4-3-5）を重ね合わせた（図4-4-16）。その結果、基本設計配置図は外苑競技場の方位と同様に配置計画されていたことが明らかになった。したがって角田は、基本設計に際して外苑競技場の配置計画を踏襲したものと考えられる。



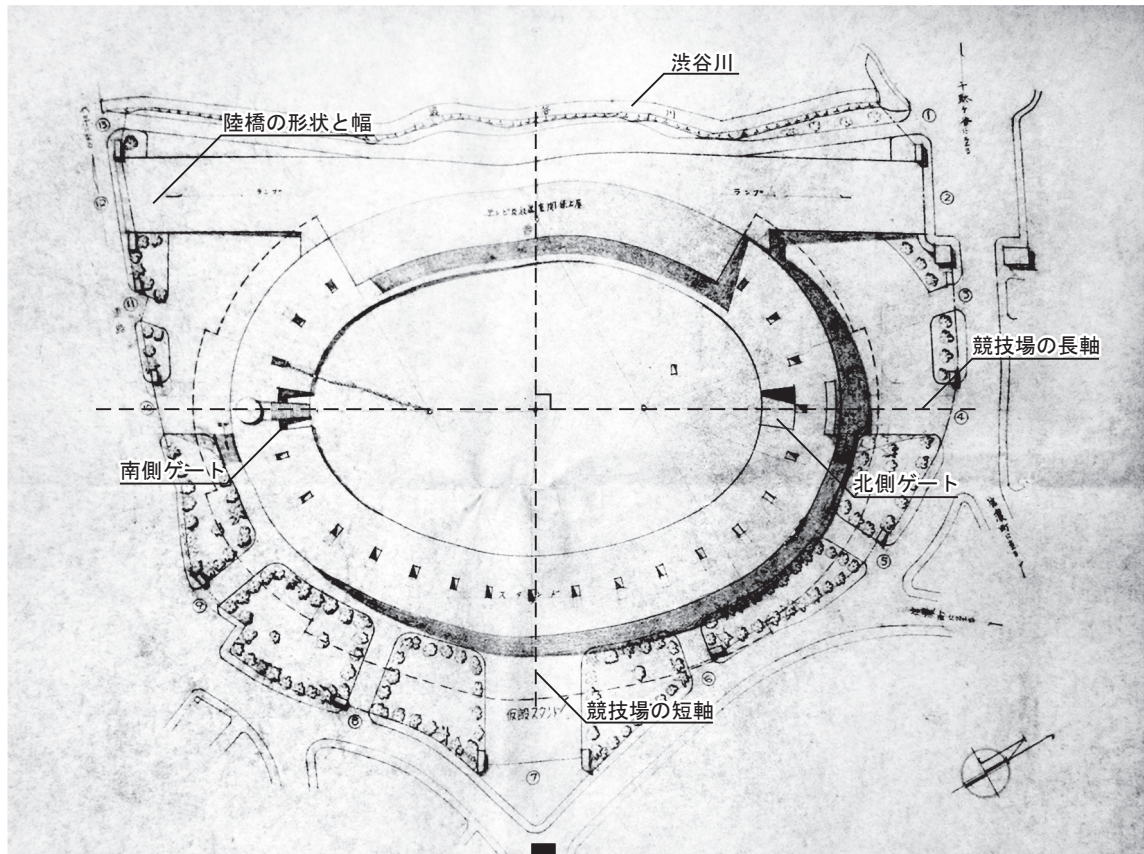


図 4-4-10 国立霞ヶ丘陸上競技場 基本設計配置図(上)及び  
国立霞ヶ丘陸上競技場配置図(下)における変更点の検証  
〔出典：図 4-3-5 及び図 4-3-8 (名称筆者加筆)〕



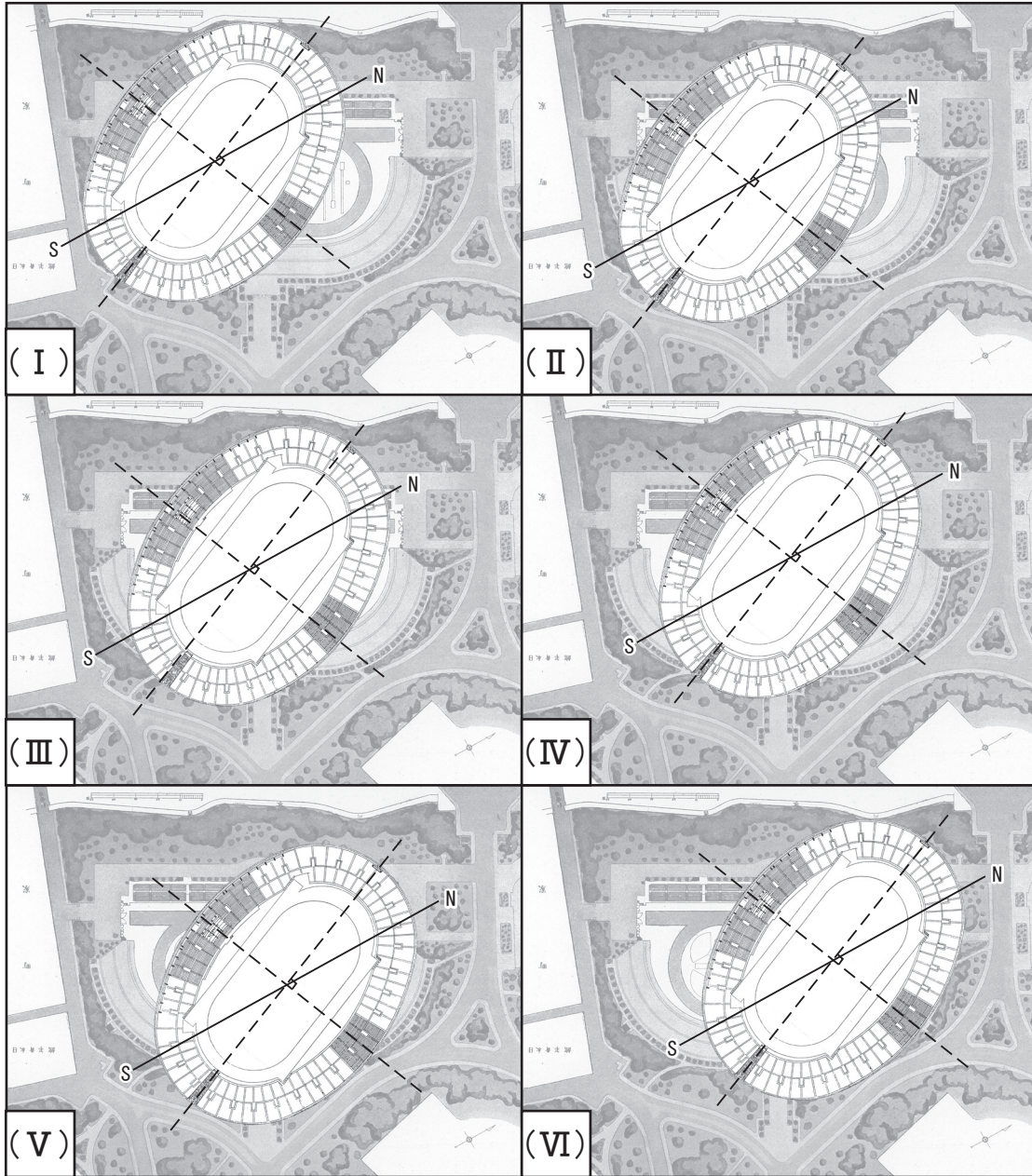


図 4-4-11 好都合とされる競技場の方位で配置を検証  
〔出典：図 3-2-11 と図 4-3-9 を重ね合わせて作成（筆者加筆）〕



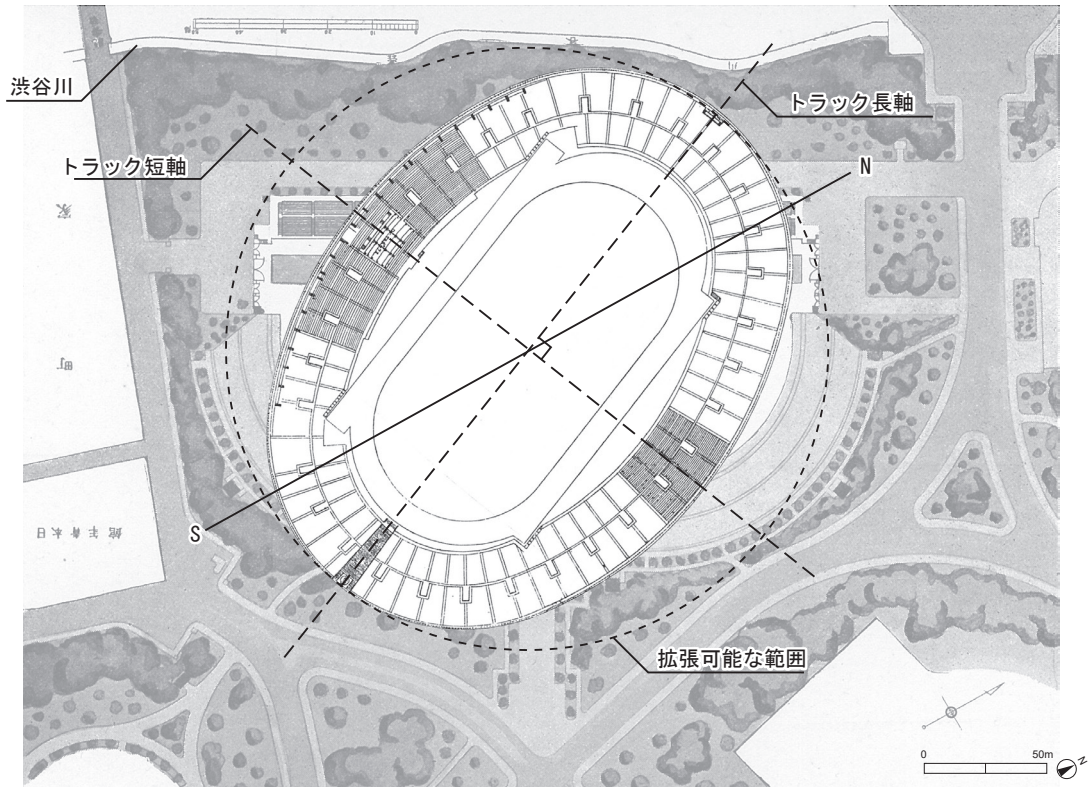


図 4-4-12 好都合とされる競技場の方位で拡張可能な範囲の検証  
 [出典：図 3-2-11 と図 4-3-9 を重ね合わせて作成 (筆者加筆)]

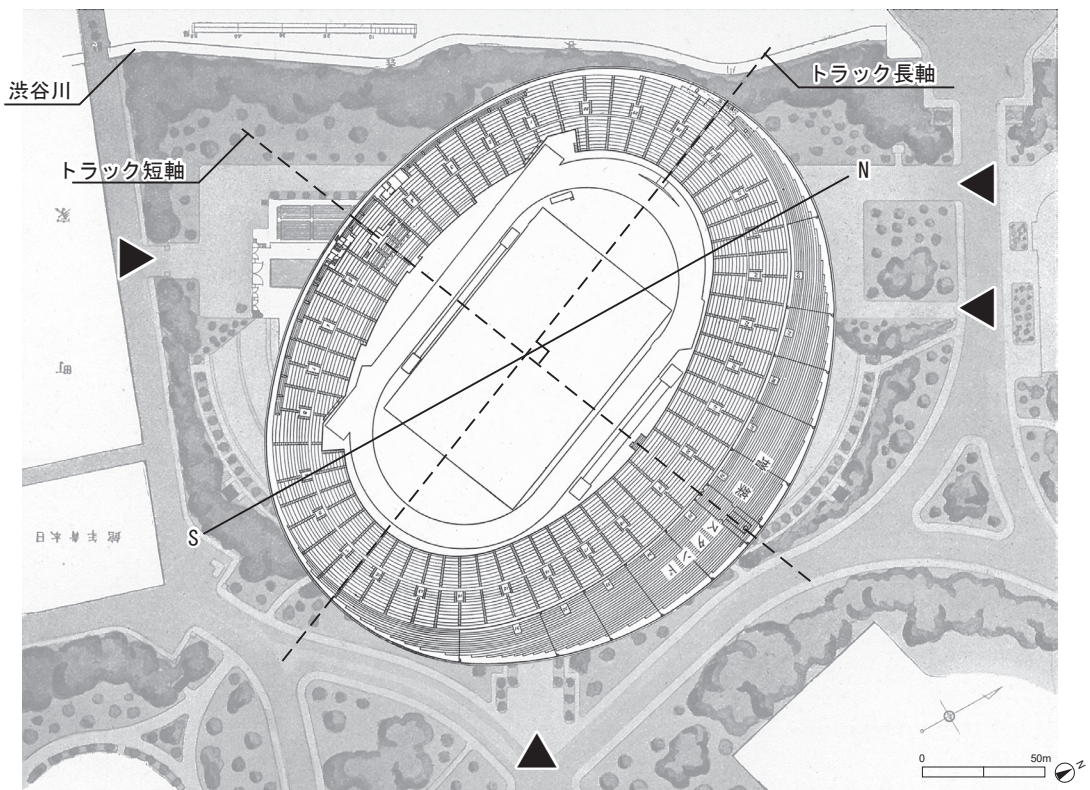


図 4-4-13 好都合とされる競技場の方位で拡張後の配置を検証  
 [出典：図 3-2-11 と図 4-4-8 を重ね合わせて作成 (筆者加筆)]



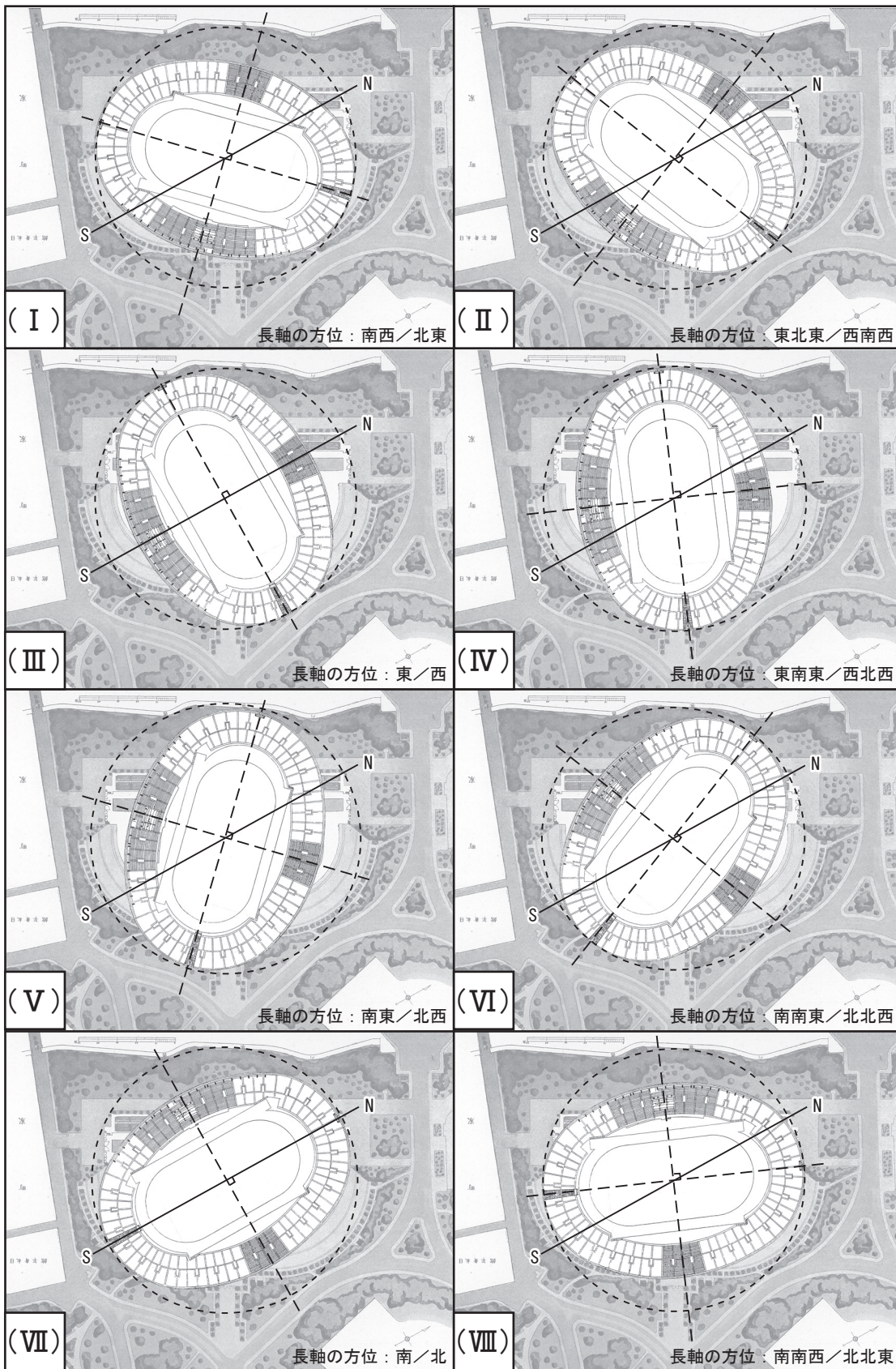


図 4-4-14 建設当初の国立競技場の配置可能な方位の検証  
 [出典：図 3-2-11 と図 4-3-9 を重ね合わせて作成 (筆者加筆)]



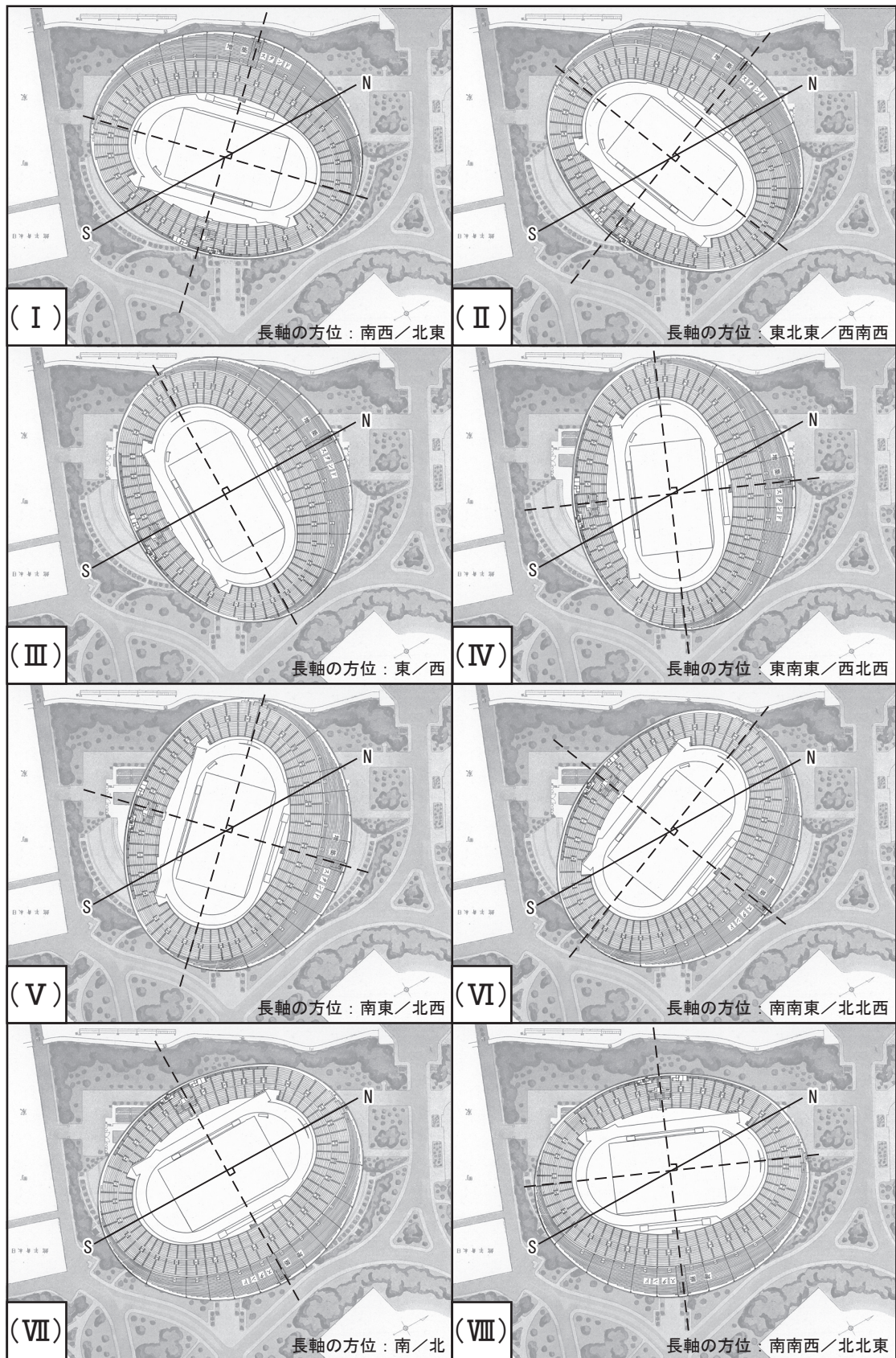


図 4-4-15 スタンド増設後の国立競技場の配置可能な方位の検証  
 【出典：図 3-2-11 と図 4-4-8 を重ね合わせて作成（筆者加筆）】



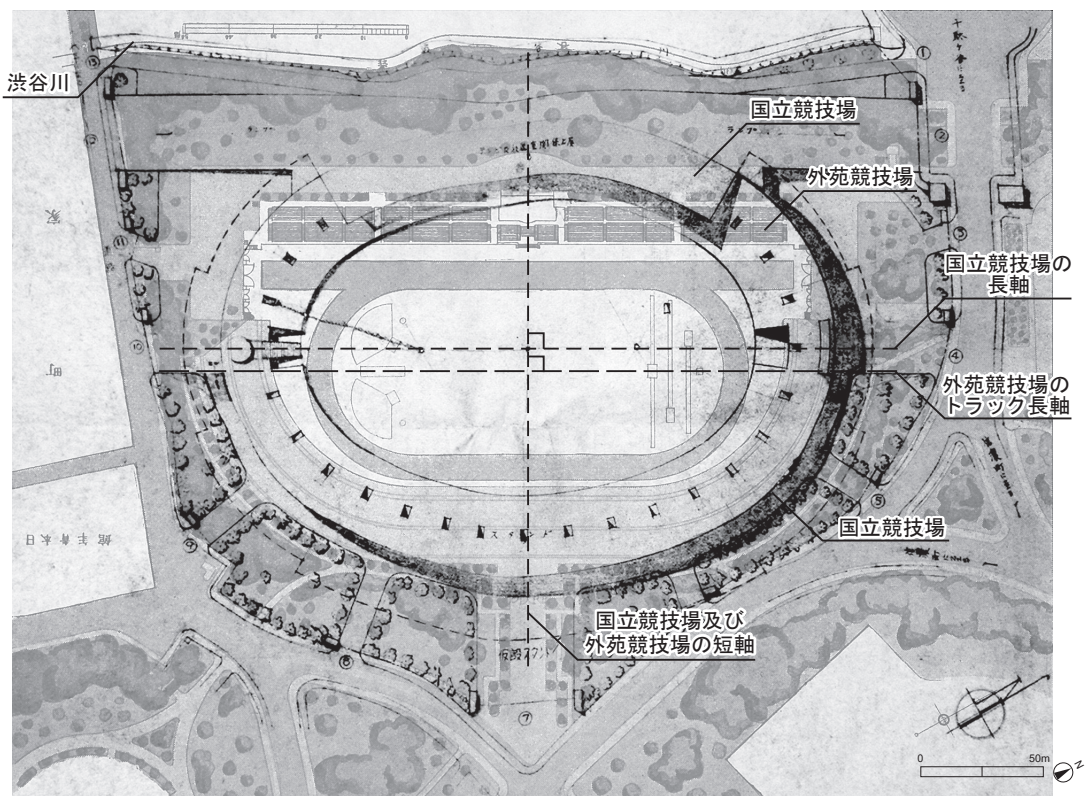


図4-4-16 国立霞ヶ丘陸上競技場 基本設計配置図の方位の検証  
〔出典：図3-2-11と図4-3-5を重ね合わせて作成（筆者加筆）〕

## 方位の検討図

4.2.2で指摘したように、国立競技場の具体的な計画に際して方位の検討がなされており、まず、検討された方位について検証する。

方位の検討案〔図4-3-4（Ⅰ）（Ⅱ）（Ⅲ）〕にはそれぞれ南北軸とトラック長軸が記載されている他、図4-3-4（Ⅰ）にのみ「明治記念館の軸」と月ごとに矢印が記載されている。図4-3-4（Ⅰ）（Ⅱ）（Ⅲ）をそれぞれ図4-4-6と重ね合わせて検証を行った〔図4-4-17（Ⅰ）（Ⅱ）（Ⅲ）〕。その結果、最終的に採用された図4-4-17（Ⅰ）案は4.2.2で指摘したように、西日を防ぐ合理性や季節風による環境要因を考慮して西側メインスタンドとしたものの、「明治記念館の軸」と記載されている軸は国立競技場の方位そのものには反映されていない。図4-4-17（Ⅱ）案は図4-4-17（Ⅰ）案の「明治記念館の軸」にトラック長軸を配したものと考えられる。図4-4-17（Ⅲ）案はトラック長軸を図4-4-17（Ⅰ）案のトラック短軸と一致させている。したがって国立競技場の方位の検討案〔図4-2-4（Ⅰ）（Ⅱ）（Ⅲ）〕は、明記されていないが図4-2-4（Ⅰ）〔図4-4-17（Ⅰ）〕のトラック短軸〔図4-2-4（Ⅲ）〔図4-4-17（Ⅲ）〕のトラック長軸〕と「明治記念館の軸〔図4-2-4（Ⅱ）〔図4-4-17（Ⅱ）〕のトラック長軸〕の2つの軸線を検討したものと考えられる。

そこで、最終的に採用された図4-2-4（Ⅰ）案のトラック短軸〔図4-2-4（Ⅲ）のトラック長軸〕の検証を行った（図4-4-18）。その結果、トラック短軸上には「御観兵榎」が位置することが明らかになった。この場所は青山練兵場当時、天皇陛下が臨御して軍隊の行進を展覧する観兵式が行われた際に、常にこのエノキの前に玉座が設置されたことから外苑の造営に際して「御観兵榎」として記念された場所であった。

3.3.2で指摘したように、外苑競技場の方位は、トラック短軸を明治天皇大喪儀式場の空間構成を踏襲した絵画館周辺の空間構成と関連付けることを意図して配置されたものと考えられるが、4.2.3で指摘したように、外苑競技場のトラック短軸と関連付けられていた梯子状苑路（明治天皇大喪儀式場の外廓総門の位置）はGHQによる接收期間中に消失しており、外苑競技場のトラック短軸が持っていた象徴性や記念的性格の重要性は低くなっていた。

こうした中で国立競技場の計画は、西日を防ぐ合理性や季節風による環境要因、動線、スタンドの拡張、競技場としての機能を考慮して行われ、外苑競技場のような軸線によって明治天皇のゆかりと相互に関連付けられた施設計画ではなかった。しかし、最終的にトラック短軸の延長線上に、この土地の明治天皇のゆかりの一つとして記念された御観兵榎（青山練兵場当時の玉座の位置）が位置していた。

そこで、トラック短軸の断面図を作成し、目線の高さ1.5mとして貴賓席からのアイレベルを検討した。その結果、貴賓席〔皇族席（外苑競技場の貴賓席は玉座の位置）〕からの視線はバックスタンドによって遮られ（図4-4-19）、貴賓席〔皇族席（外苑競技場の貴賓席は玉座の位置）〕から御観兵榎（青山練兵場当時の玉座の位置）を認識することは出来ない。

また、この軸線は外苑競技場のトラック短軸とは異なり、他の主要な施設の軸線等との関連性もなく、この地を訪れた人が軸線を認識できる可能性は極めて低い。

以上のことから、戦後の外苑における競技場計画での軸線は、主に競技場の機能的なデザインに基づいて決定されたことが明らかになった。即ち、戦後に外苑の空間構成が変化するとともに大型スポーツ施設の設計に関する技術や知見が構築されていった中で、国立競技場の軸線は、外苑全体の空間構成や明治天皇のゆかりとは関係なく計画されたことが明らかになった。しかし、国立競技場のトラック短軸の延長上に御観兵榎が位置することから明治天皇のゆかりと関連付けた精神的な軸線として計画された可能性も考えられる。



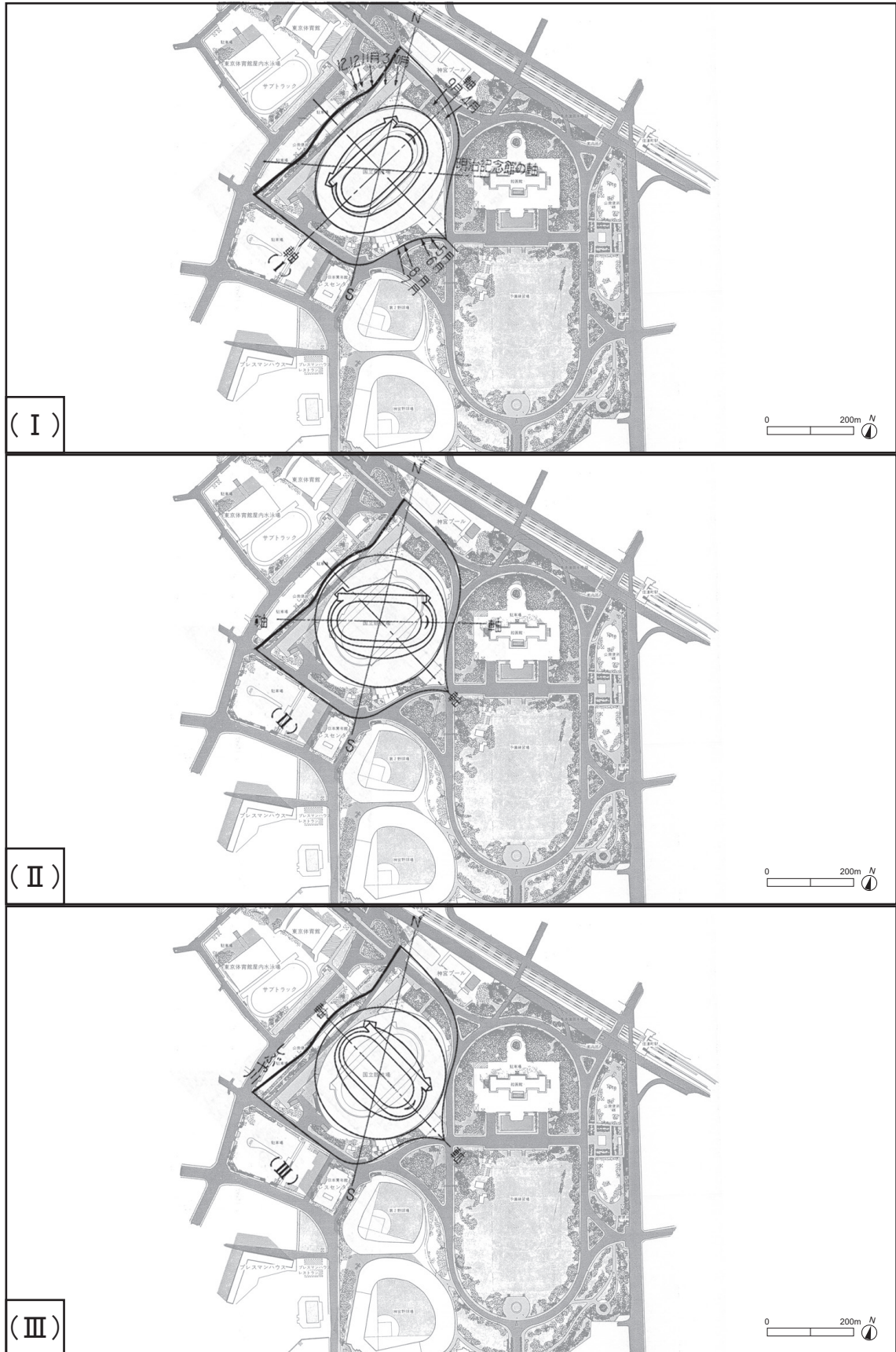


図 4-4-17 国立霞ヶ丘陸上競技場の方位に関する検討の検証  
 [出典：図 4-3-4 と図 4-4-6 を重ね合わせて作成。(名称筆者加筆)]



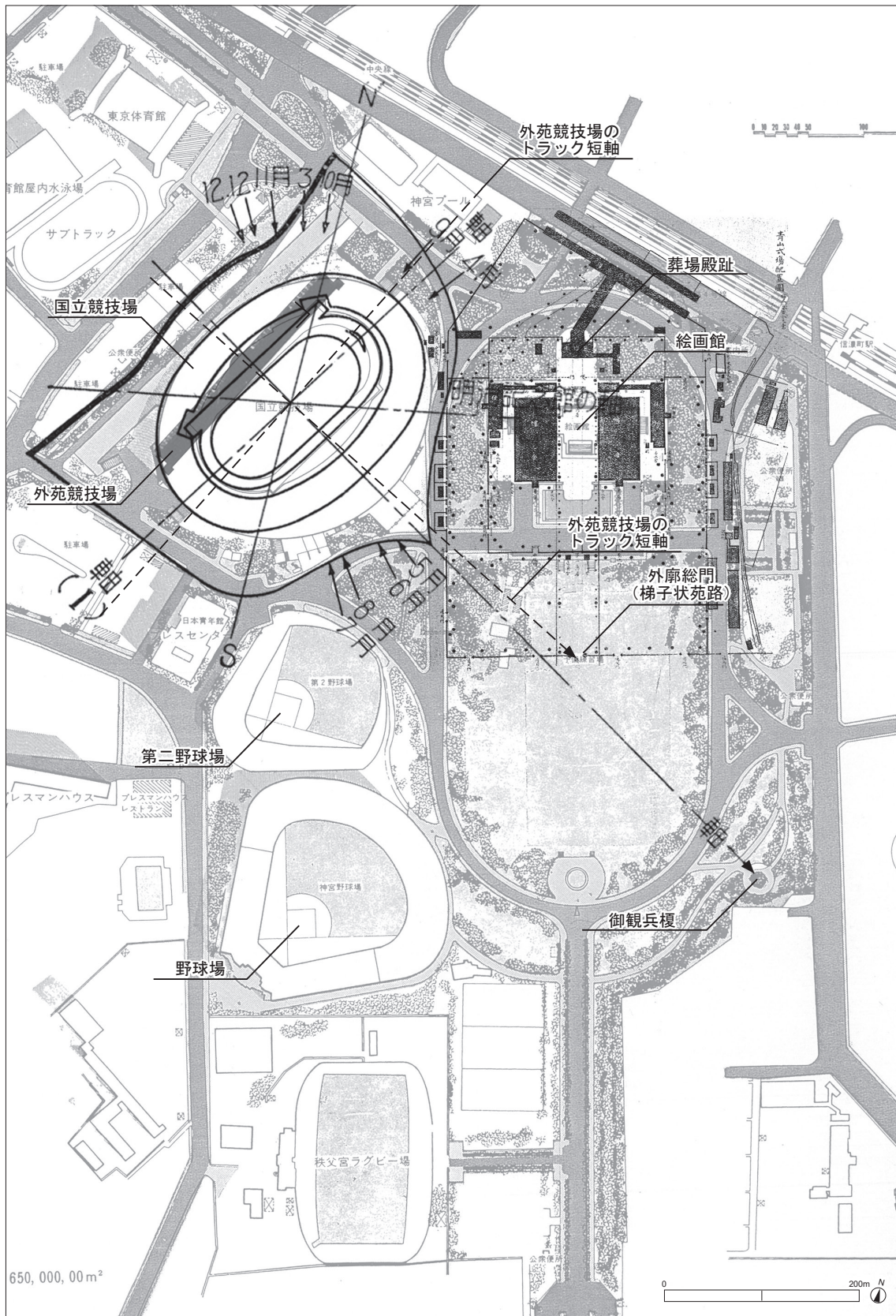


図 4-4-18 国立霞ヶ丘陸上競技場の方位の検証  
 [出典：図 2-1-8、図 3-2-17、図 4-3-4、図 4-4-6 を重ね合わせて作成。(名称筆者加筆)]

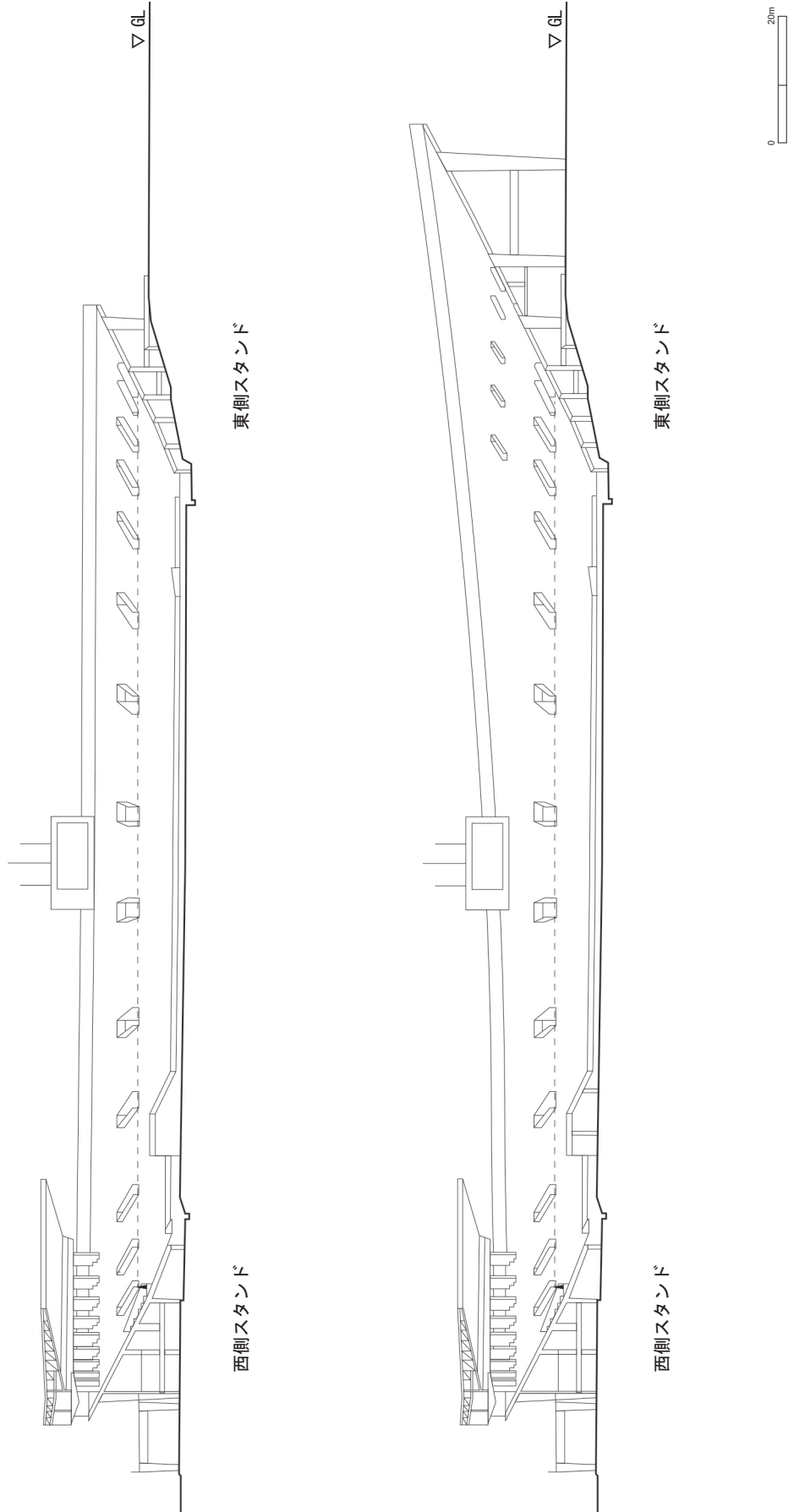


図 4-4-19 国立霞ヶ丘陸上競技場断面図 1958 (上) 1964 (下) (復元)  
[出典：筆者作成]

## 4.5 本章のまとめ

本章では、国立競技場の成立前史を含めた国立競技場の計画の変遷を整理し、国立競技場の配置計画における軸線の扱われ方について分析した。その結果、以下のことが明らかになった。

### 国立競技場の成立前史

1935（昭和10）年に刊行された『運動競技場設計』<sup>17)</sup>によると競技場の方位は、競技場の長軸を南北軸に対して北北西から南南東に向って配し、メインスタンドは西南側に設けて西日を背にするように設置することが好都合とされている。計画された駒沢の競技場は長軸を南北軸に対して北北西から南南東に向って配し、メインスタンドは西南側に設けて西日を背にするように設置されており、理想的ともいえる競技場の配置計画であった。

一方、外苑の造営以来、良好な環境が保たれてきた中央広場の梯子状苑路は、戦後、GHQによる接收期間中に消失しており、外苑競技場のトラック短軸が持っていた象徴性や記念的性格の重要性は低下した。こうした中で外苑競技場を取り壊して国立競技場を建設することとなり、外苑競技場の敷地が外苑から切り離された。

### 好都合とされる競技場の方位で配置可能な位置

①敷地中央付近であれば将来的なスタンド増設を考慮しつつも好都合とされる競技場の方位に配置することが可能であった。②スタンド増設後の国立競技場も好都合とされる方位で敷地内に配置することが可能であった。③好都合とされる競技場の方位に配置するとメインスタンド側へのアクセスが悪い。④建設当初の国立競技場は図4-4-11（Ⅲ）の位置であれば、全ての方位に配置することも可能であった。⑤スタンド増設後の国立競技場は図4-4-15（Ⅱ）（Ⅲ）（Ⅳ）（Ⅴ）の方位には敷地内に配置できないが、図4-4-15（Ⅰ）（Ⅵ）（Ⅶ）（Ⅷ）では配置することが可能であった。

### 基本設計配置図

基本設計配置図で計画された国立競技場の方位は、外苑競技場と同様の配置計画であった。

### 方位の検討図

①西日を防ぐ合理性や季節風による環境要因、競技場としての機能性を考慮して全体の配置をした。②国立競技場のトラック短軸の延長上に、この土地の明治天皇のゆかりの一つである御観兵塚（青山練兵場当時に玉座の位置）が位置する。

国立競技場の方位は、駒沢の競技場と同様に好都合とされる競技場の方位に配置することも可能であったが、角田は基本設計で外苑競技場の配置計画を基調として全体の配置をしたもの

と考えられる。その後、西日を防ぐ合理性や季節風による環境要因、動線、スタンドの拡張、競技場としての機能性を考慮しつつ国立競技場の計画が行われ、外苑競技場のような軸線によって明治天皇のゆかりと関連付ける施設計画ではなかった。

以上のことから、戦後の外苑における競技場計画での軸線は、主に競技場の機能的なデザインに基づいて決定されたことが明らかになった。即ち、戦後に外苑の空間構成が変化するとともに大型スポーツ施設の設計に関する技術や知見が構築されていった中で、国立競技場の軸線は、外苑全体の空間構成や明治天皇のゆかりとは関係なく計画されたことが明らかになった。しかし、国立競技場のトラック短軸の延長上に御観兵榎が位置することから明治天皇のゆかりと関連付けた精神的な軸線として計画された可能性も考えられる。



注：

- 注1) 岸田日出刀:1899年-1966年。東京帝国大学大教授。建築家の前川國男（1905年-1986年）や丹下健三（1913年-2005年）といった戦後日本の建築界をけん引する建築家を育てた。
- 注2) 中山克己:1901年-1987年。建築家。第十八回では東京オリンピック準備委員会競技場部及び施設設計部委員、国立競技場拡充計画協議会第一分科会会長。
- 注3) 前川國男:1905年-1986年。建築家。モダニズム建築の旗手として、戦後の日本建築会を牽引した。
- 注4) 第2章、注5)に同じ。
- 注5) 神道指令：1945年12月にGHQが日本政府に発した国家神道の禁止と政教分離、また軍国主義や超国家主義からの脱却を命じた指令。新村出編：広辞苑、第6版、岩波書店、2008
- 注6) 角田栄：生没年不明。京都帝国大学工学部建築学科卒、陸軍、建設省、奥村組その他不詳。
- 注7) 片山光生：1918年-1985年。愛知県名古屋出身。京都帝国大学工学部建築学科卒。海軍技術見習尉官、海軍技術大尉を経て建設省入省。（株）グリーン・アーキ研究所設立
- 注8) 今井兼次：1895年-1987年。建築家、早稲田大学教授。
- 注9) 高山英華：1910年-1999年。東京都出身。都市計画家、建築家、工学博士。東京大学工学部名誉教授。近代都市計画学の創始者。建築系の都市計画学者で都市工学の先駆者として都市再開発から広く地域開発、都市防災の推進等を通しまちづくり事業に貢献し、都市計画分野に大きな足跡を残す。
- 注10) 国立競技場拡充計画協議会の委員については巻末の資料編表4を参照のこと。

参考・引用文献：

- 1) 東京市役所：第十二回オリンピック東京大会東京市報告書，東京市役所，1939
- 2) 永井松三：報告書，第12回オリンピック東京大会組織委員会，1939
- 3) 岸田日出刀：第12回オリンピック東京大会会場論，建築雑誌，第51巻，第626号，日本建築学会，1937
- 4) 岸田日出刀：日支事変とオリンピック東京大会，建築と社会，日本建築協会，第20巻，第11号，pp5-13，1937
- 5) 小林政一：オリンピック競技施設に就いて，建築と社会，日本建築協会，第19巻，第10号，1936
- 6) 小林政一：オリンピック競技場として外苑改造に就いて，建築と社会，日本建築協会，第20巻，第11号，1937
- 7) 日本体育協会編：オリンピックと日本スポーツ史，日本体育協会，1952
- 8) 岸田日出刀：第11回オリンピック大会と競技場，丸善，p.41，1937
- 9) 岸田日出刀：第11回オリンピック大会と競技場，丸善，p.46，1937
- 10) 東京市役所:第十二回オリンピック東京大会東京市報告書，東京市役所，1939／永井松三:報告書，第12回オリンピック東京大会組織委員会，1939などを参照。
- 11) 岸田日出刀：第12回オリンピック東京大会会場論，建築雑誌，第51巻，第626号，日本建築学会，pp.622-623，1937
- 12) 岸田日出刀：日支事変とオリンピック東京大会，建築と社会，日本建築協会，第20巻，第11号，pp5-13，1937
- 13) 岸田日出刀：第12回オリンピック東京大会会場論，建築雑誌，前掲書，pp615-623，1937
- 14) 小林政一：オリンピック競技施設に就いて，建築と社会，日本建築協会，第19巻，第10号，pp.43-44，1936
- 15) 小林政一：オリンピック競技場として外苑改造に就いて，建築と社会，日本建築協会，第20巻，第11号，pp.14-17，1937
- 16) 橋本一夫：幻の東京オリンピック，日本放送出版協会，p.205-206，1994
- 17) 出口林次郎：運動競技場設計，体育運動協会，pp.101-103，1935
- 18) 厚生省：紀元二千六百年奉祝 第十回明治神宮国民体育大会報告書，厚生省，1940
- 19) 厚生省：第十二回明治神宮国民体育大会報告書，厚生省，1942
- 20) 明治神宮外苑七十年誌編纂委員会編：明治神宮外苑七十年誌，明治神宮外苑，1998
- 21) 日本体育協会：国民体育大会50年のあゆみ，日本体育協会，1998
- 22) 内閣情報部編輯：写真週報，第40号，内閣情報部，pp.3-4，1938
- 23) 野口源三郎：戦捷祈願予リレーに走りて，学校体育，第20巻，第5号，p.140，1938
- 24) 紀元二千六百年奉祝東亜競技大会委員会：紀元二千六百年奉祝東亜競技大会報告書，紀元二千六百年奉祝東亜競技大会委員会，1941

- 25) 厚生省：紀元二千六百年奉祝 第十一回明治神宮国民体育大会報告書，厚生省，1940
- 26) 同上書，p. 699，1940
- 27) 厚生省：第十二回明治神宮国民体育大会報告書，厚生省，p. 254，1942
- 28) 明治神宮外苑七十年誌編纂委員会編：明治神宮外苑七十年誌，明治神宮外苑，p. 70，1998
- 29) 同上書，pp. 70-74，1998
- 30) 同上書，pp. 81-86，1998
- 31) 日本体育協会：国民体育大会 50 年のあゆみ，日本体育協会，pp. 100-103，1998
- 32) 毎日新聞：昭和 22 年 4 月 4 日
- 33) 朝日新聞：昭和 22 年 5 月 5 日
- 34) 日本体育協会：国民体育大会 50 年のあゆみ，前掲書，p. 108-109，1998
- 35) 国立競技場：国立競技場十年史，国立競技場，1969
- 36) 体育施設出版：国立競技場の 30 年 - オリンピックから J リーグまで -，1994
- 37) 国立競技場 50 年史編集委員会：国立競技場 50 年の歩み，日本スポーツ振興センター国立競技場，2012
- 38) 第 3 回アジア競技大会組織委員会：第 3 回アジア競技大会報告書，第 3 回アジア競技大会組織委員会，1959
- 39) 第 14 回国民体育大会東京都実行委員会：第 14 回国民体育大会報告書，第 14 回国民体育大会東京都実行委員会，1959
- 40) 波多野勝：東京オリンピックへの遙かな道 招致活動の軌跡 1930 - 1964，草思社，p.100，2004
- 41) 国立競技場：国立競技場十年史，国立競技場，1969 / 体育施設出版編：国立競技場の 30 年 オリンピックから J リーグまで，体育施設出版，1994 / 国立競技場 50 年史編集委員会編：国立競技場 50 年の歩み，日本スポーツ振興センター，国立競技場，2012 などを参照。
- 42) 座談会 オリンピック施設計画を展望する：新建築，第 39 巻，第 7 号，新建築社，p.137，1964
- 43) 波多野勝：東京オリンピックへの遙かな道 招致活動の軌跡 1930-1964，前掲書，p. 102，2004
- 44) 東京都：第 18 回オリンピック競技大会東京都報告書，東京都，p.5，1965
- 45) 国立競技場：国立競技場十年史，国立競技場，p.4，1969
- 46) 新建築社：新建築，第 33 巻，第 6 号，新建築社，p.46，1958
- 47) 朝日新聞，1956.3.6
- 48) 読売新聞，1956.3.24
- 49) 角田栄：国立競技場建設当初の思い出，国立競技場十年史，国立競技場，p.240，1969
- 50) 新建築社：新建築，第 33 巻，第 6 号，新建築社，pp. 44-45，1958 / 第 3 回アジア競技大会組織委員会：第 3 回アジア競技大会報告書 1958，第 3 回アジア競技大会組織委員会，p.50，1959 / 角田栄：国立競技場について，建築界，理工図書，第 6 巻，第 5 号，p.62，1957 を参照。
- 51) 角田栄：国立競技場建設当初の思い出，国立競技場十年史，前掲書，p.241，1969
- 52) 角田栄：国立競技場設計雑感，建築界，理工図書，第 7 巻，第 5 巻，p.30，1958
- 53) 日本経済新聞，1956.12.13
- 54) 角田栄：国立競技場について，建築界，第 6 巻，第 5 号，理工図書，p. 75，1957
- 55) 体育施設出版編：国立競技場の 30 年：オリンピックから J リーグまで，体育施設出版，1994
- 56) 第 3 回アジア競技大会組織委員会：第 3 回アジア競技大会報告書 1958，前掲書，p.6，1959
- 57) 同上書，p.240，1959
- 58) 同上書，p.189，1959
- 59) 第 14 回国民体育大会東京都実行委員会事務局：第 14 回国民体育大会報告書，第 14 回国民体育大会東京都実行委員会，1959
- 60) 同上書，p. 11，1959
- 61) 新建築社：新建築，第 33 巻，第 6 号，前掲書，p.44，1958
- 62) オリンピック東京大会組織委員会編：第 18 回オリンピック競技大会公式報告書 上，オリンピック東京大会組織委員会，1966
- 63) 東京都：第 18 回オリンピック競技大会東京都報告書，東京都，1965

## 第4章

- 64) 古山利雄編:東京オリンピック準備委員会報告書, 東京オリンピック準備委員会, 1959 / 新建築社:新建築, 第34巻, 第8号, 新建築社, 1959 / 新建築社:新建築, 第39巻, 第10号, 新建築社, 1964 / 国立競技場:月刊国立競技場, 第9号, 国立競技場, 1959
- 65) 古山利雄編:東京オリンピック準備委員会報告書 昭和卅四年七月, 東京オリンピック準備委員会, 1959
- 66) 東京都:第18回オリンピック競技大会東京都報告書, 東京都, p.7, 1965
- 67) 角田栄:オリンピックに備える国立競技場の拡張, 月刊国立競技場, 第9号, 国立競技場, pp.4-5, 1959
- 68) 新建築社:新建築, 第34巻, 第8号, p.71, 1959
- 69) 文部省:オリンピック東京大会と政府機関の協力, 文部省, p.72, 1965 / 角田栄:国立競技場の増築について, 月刊国立競技場, 第23号, 国立競技場, p.9, 1959を参照。
- 70) 文部省:オリンピック東京大会と政府機関の協力, 文部省, p.69, 1965 / 国立競技場:装いを新たに 東京オリンピックを目指し今秋より国立競技場を拡充, 月刊国立競技場, 第23号, 国立競技場, p.2, 1959 / 角田栄:国立競技場の増築について, 月刊国立競技場, 第23号, 国立競技場, p.9, 1959を参照。
- 71) 文部省:オリンピック東京大会と政府機関の協力, 文部省, p.69, 1965
- 72) 角田栄:国立競技場建設当初の思い出, 国立競技場十年史, 国立競技場, pp.239-242, 1969 / 角田栄:国立競技場の増築について, 月刊国立競技場, 第23号, 国立競技場, pp.6-9, 1959を参照。
- 73) 角田栄:国立競技場建設当初の思い出, 国立競技場十年史, 国立競技場, p.242, 1969 / 角田栄:国立競技場の増築について, 月刊国立競技場, 第23号, 国立競技場, pp.6-9, 1959を参照。
- 74) 角田栄:国立競技場の増築について, 月刊国立競技場, 第23号, 前掲書, p.8, 1959
- 75) 角田栄:ヨーロッパのスポーツ施設, 建築界, 理工図書, 第9巻, 第9号, p.15, 1960
- 76) 角田栄:オリンピックに備える国立競技場の拡張, 月刊国立競技場, 第9号, 国立競技場, pp.4-5, 1959
- 77) オリンピック東京大会組織委員会:第十八回オリンピック競技大会公式報告書 上, オリンピック東京大会組織委員会, p.39, 1966
- 78) 文部省:オリンピック東京大会と政府機関の協力, 文部省, p.71, 1965
- 79) 新建築社:新建築, 第39巻, 第10号, pp.220-225, 1959
- 80) 東京都:第18回オリンピック競技大会東京都報告書, 東京都, p.25, 1965
- 81) 同上書, p.27, 1965
- 82) 体育施設出版編:国立競技場の30年:オリンピックからJリーグまで, 体育施設出版, p.30, 1994

### 図版典拠:

- 4-1-1 Werner March: REICHSSPORTFELD, 宮内嘉久編集事務所, 国際建築, 第13巻, 第1号, 美術出版社, 1937
- 4-1-2 岸田日出刀:第十一回オリンピック大会と競技場, 丸善, 1937 (名称筆者加筆)
- 4-1-3 岸田日出刀:第十一回オリンピック大会と競技場, 丸善, 1937 (名称筆者加筆)
- 4-1-4 東京朝日新聞, 昭和12年5月16日, 1937
- 4-1-5 小林政一:オリンピック競技場として外苑改造に就いて, 建築と社会, 日本建築協会, 第20巻, 第11号, pp.14-17, 1937 (名称筆者加筆)
- 4-1-6 永井松三:報告書, 第12回オリンピック東京大会組織委員会, 1939 (名称筆者加筆)
- 4-2-1 日本体育協会監修:国民体育大会の歩み, 都道府県体育協会連絡協議会, 1978
- 4-2-2 新建築社:新建築, 第33巻, 第6号, 新建築社, 1958.6
- 4-2-3 明治神宮外苑七十年誌編纂委員会編:明治神宮外苑七十年誌, 明治神宮外苑, 1998
- 4-2-4 日本蹴球協会:SOCCER 復刊第一号, 日本蹴球協会, 1948
- 4-2-5 朝日新聞:昭和22年5月5日
- 4-2-6 東京都, 日本体育協会:第四回国民体育大会記録, 第四回国民体育大会準備委員会, 1949
- 4-3-1 東京都:オリンピック大会東京招致に関する事務委託について, 東京都立公文書館蔵, M04.04.07.1954 (名称筆者加筆)
- 4-3-2 同上書
- 4-3-3 東京都:Tokyo, 東京都立公文書館蔵, オリンピック-173.1955 (名称筆者加筆)

- 4-3-4 新建築社：新建築，第33巻，第6号，新建築社，1958
- 4-3-5 特殊法人国立競技場：国立競技場の建設について，国立公文書館蔵，本館-3D-002-00，平15文化00196100，1956
- 4-3-6 絵葉書（筆者所蔵）
- 4-3-7 新建築社：新建築，第33巻，第6号，新建築社，1958.6（名称筆者加筆）
- 4-3-8 宮内嘉久編集事務所編：国立競技場・明治神宮外苑，国際建築，第25巻，第7号，美術出版社，1958（名称筆者加筆）
- 4-3-9 新建築社：新建築，第33巻，第6号，新建築社，1958.6（名称筆者加筆）
- 4-3-10 新建築社：新建築，第33巻，第6号，新建築社，1958.6（名称筆者加筆）
- 4-3-11 新建築社：新建築，第33巻，第6号，新建築社，1958.6（名称筆者加筆）
- 4-3-12 第3回アジア競技大会組織委員会：第3回アジア競技大会報告書1958，第3回アジア競技大会組織委員会，1959
- 4-3-13 第14回国民体育大会東京都実行委員会：第14回国民体育大会報告書，第14回国民体育大会東京都実行委員会，1959（名称筆者加筆）
- 4-4-1 古山利雄編：東京オリンピック準備委員会報告書 昭和卅四年七月，東京オリンピック準備委員会，1959（名称筆者加筆）
- 4-4-2 角田栄：オリンピックに備える国立競技場の拡張，月刊国立競技場，第9号，国立競技場，pp.4-5，1959（名称筆者加筆）
- 4-4-3 新建築社：新建築，第34巻，第8号，新建築社，1959（名称筆者加筆）
- 4-4-4 角田栄：オリンピックに備える国立競技場の拡張，月刊国立競技場，第9号，国立競技場，pp.4-5，1959（名称筆者加筆）
- 4-4-5 同上書（名称筆者加筆）
- 4-4-6 新建築社：新建築，第39巻，第10号，新建築社，1964
- 4-4-7 新建築社：新建築，第39巻，第10号，新建築社，1964
- 4-4-8 文部省：オリンピック東京大会と政府機関等の協力，文部省，1965（筆者加筆）
- 4-4-9 朝日新聞社編：'64 東京オリンピック，朝日新聞社，1964
- 4-4-10 図4-3-5及び図4-3-8（名称筆者加筆）
- 4-4-11 図3-2-11と図4-3-9を重ね合わせて作成（筆者加筆）
- 4-4-12 図3-2-11と図4-3-9を重ね合わせて作成（筆者加筆）
- 4-4-13 図3-2-11と図4-4-8を重ね合わせて作成（筆者加筆）
- 4-4-14 図3-2-11と図4-3-9を重ね合わせて作成（筆者加筆）
- 4-4-15 図3-2-11と図4-4-8を重ね合わせて作成（筆者加筆）
- 4-4-16 図3-2-11と図4-3-5を重ね合わせて作成（筆者加筆）
- 4-4-17 図4-3-4と図4-4-6を重ね合わせて作成。（名称筆者加筆）
- 4-4-18 図2-1-8、図3-2-17、図4-3-4、図4-4-6を重ね合わせて作成。（名称筆者加筆）
- 4-4-19 筆者作成





第5章

結 論



## 5.1 各章のまとめ

### 5.1.1 第1章のまとめ

第1章では、研究の背景で明治・大正期の都市計画において、バロック様式の軸線となる並木道（ヴィスタ）の先に記念建造物を配置する都市計画手法は一般的かつ重要な設計手法の一つであった<sup>1)</sup>ことを示した。本研究の目的は、既往研究で明治神宮史研究の歴史的経緯を示した上で、外苑競技場及び国立競技場の配置計画のプロセスについて、①青山練兵場から外苑への変容の過程、②外苑に競技場が建設された経緯や外苑競技場の建設計画の変遷、③国立競技場の建設計画及び施設改修の変遷、④外苑競技場及び国立競技場の配置計画における軸線の位置付け、以上の4点について検討することにより、明治・大正期から戦後にかけての外苑での競技場計画における軸線の扱われ方の変化について明らかにすることである。本研究は近代の都市計画において重要な設計手法であった軸線の扱われ方が現代への過渡期においてどのように変化したのかを示す点において学術的意義が有る。

本研究は外苑の成立前史を踏まえた上で、研究の蓄積が充分ではない外苑の造営計画における競技場の建設経緯に関して検討を行う点や、外苑競技場の建設計画の変遷を分析して、外苑競技場の配置計画について検討し、大正期の軸線の扱われ方について明らかにする点で独自性を有しているものと考えられる。また、外苑競技場の配置計画について考察を行った上で、同時代の具体的な資料に基づいて国立競技場の建設計画と施設改修を分析して、国立競技場の配置計画について検討し、戦後の軸線の扱われ方について明らかにする点でも独自性を有しているものと考えられる。

また、本章では研究の方法を示した。関連する既往研究、同時代の資料、建築家らの言説や図版等を渉猟して、それらを関連付けながら分析することにより、第2章では外苑の成立前史について、第3章では外苑競技場の成立について、第4章では国立競技場の成立について考察し、第5章で各章で得られた知見をまとめ、明治・大正期から戦後にかけての施設計画における軸線の扱われ方の変化について明らかにし、結論とする。

### 5.1.2 第2章のまとめ

第2章では、まず、青山練兵場設立以前から外苑への変容過程における土地利用や日本大博覧会構想計画の実態と、この土地における明治天皇のゆかりについて整理した。その結果、この土地における明治天皇のゆかりは、青山練兵場開設当初から継続的に行われていた観兵式と明治天皇大喪儀式場として使用されたことであった。また、日本大博覧会会場として構想されるなど、広く一般にも開かれた場所であったことが土地の性格の形成に大きく関係するものと考えられる。その際、青山会場は道路を幾何学的とし青山口からの線とこれに直交する線に対して相対的に西洋風の施設を配置することとされており<sup>2)</sup>、軸線を用いたバロック様式の設計手法で計画することが要件であった。また、明治天皇大喪儀式場は青山口からの直線道路の先



に葬場殿を配置する空間構成であったことを含め、明治期における青山練兵場を対象とした施設計画での軸線の扱われ方について明らかになった。

次に、明治神宮の創建を請願した渋沢栄一と阪谷芳郎、外苑に競技場の建設を提言した嘉納治五郎を含め、それぞれの思想的な背景を当時の世相と関連付け整理した。

嘉納は諸外国を歴訪した際、教育者として運動場における無言の道德教育の重要性を認識し、欧州から帰国後、「体育」に「道德思想」として「教育勅語」を編入れ、「国民精神を養う」「道德教育」として「国民体育の普及」を国策として位置付け、外苑造営に際し「国民精神を養う」無言の道德教育の場として阪谷に競技場の建設を提言したものと推察される。

一方、阪谷は東京市長就任以前から「精神教育」や「明治園（明治五十年記念）」を市民の為にすべきものとしていた。また、明治聖代記念事業構想において「明治神社」は構想されていたが、競技施設は構想されなかった。こうした中で嘉納から「国民精神を養う」無言の道德教育の場として競技場建設の提言を受け、競技場の建設趣旨を了承しただけでなく外苑全体を「国体上無言ノ教育ヲ一般国民ニ興フルヲ目的トシ同時ニ敬神ノ念ヲ自然ニ養成セシムル」<sup>3)</sup>場と位置付け、これを外苑の造営趣旨としたものと考えられる。

将来天皇となる裕仁親王（後の昭和天皇）のための教育機関として設置された「御学問所」では、裕仁親王（後の昭和天皇）の体育の御向上に深く注意が払われた他、裕仁親王（後の昭和天皇）は欧州外遊、とりわけイギリスでの視察を通して、イギリス人の体格や紳士的人格は運動場で養われるものと認識し、運動の奨励を重要視したものと推察され、欧州歴訪から帰国後、さまざまなかたちで体育御奨励されたものと考えられる。

### 5.1.3 第3章のまとめ

第3章では、外苑の造営計画の変遷を整理するとともに外苑競技場の配置計画における軸線の扱われ方について分析した。競技場の計画は近代化という時代背景と西洋の先進性から欧米の競技場が参照されたが、とりわけ嘉納が参考とした端典のストックホルム競技場及び小林が参照した米国のシカゴの大運動場は外苑競技場西側スタンドの計画・デザインに大きく影響を与えたものと考えられる。また、この土地の明治天皇のゆかりである観兵式と明治天皇大喪儀に着目して外苑競技場の方位の検証した結果、以下のことが明らかになった。

#### 観兵式

明治天皇のゆかりの一つで観兵式の際の玉座の位置であったエノキは、外苑の造営に際して最終的に「御観兵榎」として記念された。

#### 明治天皇大喪儀

外苑競技場の配置計画及び外苑の空間構成に反映された明治天皇ゆかりについて、以下のことが明らかになった。①長円形主要道路における2本の直線道路の間隔は明治天皇大喪儀式場

の外廓の横幅と一致する。②長円形主要道路内を東西に結ぶ直線道路（絵画館の南側）は明治天皇大喪儀式場の内廓の鳥居と一致する。③絵画館の周囲の長方形は明治天皇大喪儀式場の内廓の横幅と一致する。④中央広場の梯子状苑路の位置は明治天皇大喪儀式場の外廓総門と一致する。

以上のことから外苑の絵画館周辺の空間構成は明治天皇大喪儀式場の空間構成を踏襲していることが明らかになった。造営計画の最終案決定後に変更された外苑競技場の方位及び中央広場の梯子状苑路の位置などは、この土地の明治天皇ゆかりの一つである明治天皇大喪儀式場の空間構成を、外苑の空間構成により明確に反映させることを意図して最終的に微調整された可能性が考えられる。

一方、外苑競技場西側スタンドの貴賓席は玉座の位置であることが明らかになり、外苑競技場は体育大会を天皇陛下に見せる為に玉座を整備したものと考えられる。また、外苑競技場のトラックの短軸は、玉座（外苑競技場の貴賓席）と明治天皇大喪儀式場の外廓総門（中央広場の梯子状苑路の位置）を結ぶ軸線と一致するとともに、明治神宮野球場の本塁と二塁を結ぶ軸線上にも外廓総門（中央広場の梯子状苑路）が位置する。貴賓席（玉座）からのアイレベルは、敷地の高低差からグラウンドレベルより低く（図 3-2-26）、貴賓席（玉座）から外廓総門（中央広場の梯子状苑路）を認識することは出来ない為、トラック短軸は物理的には青山口と絵画館を結ぶ軸線のような視点を通じた関係性や効果はなく、この軸線のデザインは貴賓席（玉座）を訪れた人には認識できない潜在的な存在でしかない。しかし、小林は明治天皇大喪儀式場の空間構成を踏襲した絵画館周辺の空間構成と関連付けることを重要視し、トラック短軸に外苑の象徴性や記念的性格を持たせることを意図して玉座（貴賓席）と外廓総門（中央広場の梯子状苑路）を結ぶ軸線とトラック短軸を一致させた可能性が考えられる。

以上のことから、大正期の外苑における競技場計画での軸線が他の主要な施設の軸線とともに明治天皇大喪儀式場の空間構成と関連付けて計画されており、潜在的な存在ではあるものの重要な位置付けにあったことが明らかになった。

#### 5.1.4 第4章のまとめ

第4章では、国立競技場の成立前史を含めた国立競技場の計画の変遷を整理し、国立競技場の配置計画における軸線の扱われ方について分析した。その結果、以下のことが明らかになった。

#### 国立競技場の成立前史

1935年に刊行された『運動競技場設計』<sup>4)</sup>によると競技場の方位は、競技場の長軸を南北軸に対して北北西から南南東に向って配し、メインスタンドは西南側に設けて西日を背にするように設置することが好都合とされている。計画された駒沢の競技場はトラック長軸を南北軸に対して北北西から南南東に向って配し、メインスタンドは西南側に設けて西日を背にするよ

うに設置されており、理想的ともいえる競技場の配置計画であった。

一方、外苑の造営以来、良好な環境が保たれてきた中央広場の梯子状苑路は、戦後、GHQによる接收期間中に消失しており、外苑競技場のトラック短軸が持っていた象徴性や記念的性格の重要性は低下した。こうした中で外苑競技場を取り壊して国立競技場を建設することとなり、外苑競技場の敷地が外苑から切り離された。

#### 好都合とされる競技場の方位で配置可能な位置

①敷地中央付近であれば将来的なスタンド増設を考慮しつつも好都合とされる競技場の方位に配置することが可能であった。②スタンド増設後の国立競技場も好都合とされる方位で敷地内に配置することが可能であった。③好都合とされる競技場の方位に配置するとメインスタンド側へのアクセスが悪い。④建設当初の国立競技場は図4-4-11(Ⅲ)の位置であれば、全ての方位に配置することも可能であった。⑤スタンド増設後の国立競技場は図4-4-15(Ⅱ)(Ⅲ)(Ⅳ)(Ⅴ)の方位には敷地内に配置できないが、図4-4-15(Ⅰ)(Ⅵ)(Ⅶ)(Ⅷ)では配置することが可能であった。

#### 基本設計配置図

基本設計配置図で計画された国立競技場の方位は、外苑競技場と同様の配置計画であった。

#### 方位の検討図

①西日を防ぐ合理性や季節風による環境要因、競技場としての機能性を考慮して全体の配置をした。②国立競技場のトラック短軸の延長上に、この土地の明治天皇のゆかりの一つである御観兵榎(青山練兵場ときに玉座の位置)が位置する。

国立競技場の方位は、駒沢の競技場と同様に好都合とされる競技場の方位に配置することも可能であったが、角田は基本設計で外苑競技場の配置計画を基調として全体の配置をしたものと考えられる。その後、西日を防ぐ合理性や季節風による環境要因、動線、スタンドの拡張、競技場としての機能性を考慮しつつ国立競技場の計画が行われ、外苑競技場のような軸線によって明治天皇のゆかりと関連付ける施設計画ではなかった。

以上のことから、戦後の外苑における競技場計画での軸線は、主に競技場の機能的なデザインに基づいて決定されたことが明らかになった。即ち、戦後に外苑の空間構成が変化するとともに大型スポーツ施設の設計に関する技術や知見が構築されていった中で、国立競技場の軸線は、外苑全体の空間構成や明治天皇のゆかりとは関係なく計画されたことが明らかになった。しかし、国立競技場のトラック短軸の延長上に御観兵榎が位置することから明治天皇のゆかりと関連付けた精神的な軸線として計画された可能性も考えられる。

## 5.2 結語及び今後の展望と課題

### 5.2.1 結語

本研究では、外苑競技場及び国立競技場を研究対象として、外苑競技場及び国立競技場の配置計画のプロセスについて検討し、①青山練兵場から外苑への変容の過程、②外苑競技場の建設経緯と建設計画の変遷、③国立競技場の建設計画及び施設改修の変遷、④外苑競技場及び国立競技場の配置計画における軸線の位置付け、以上の4点について明らかにした上で、明治・大正期から戦後にかけての外苑における競技場の軸線の扱われ方の変化について述べ、本研究の結語とする。

#### ①青山練兵場から外苑への変容の過程

青山練兵場設立以前から外苑への変容過程における土地利用の実態と、この場所における明治天皇のゆかりについて整理した結果、以下のことが明らかになった。①この場所特有の「明治天皇のゆかり」は、青山練兵場開設当初から継続的に行われていた観兵式と明治天皇大喪儀式場として使用されたことであった。②日本大博覧会会場として構想されるなど、広く一般にも開かれた場所であったことが土地の性格の形成に大きく関係するものと考えられる。その際、青山会場は道路を幾何学的とし青山口からの線とこれに直交する線に対して相対的に西洋風の施設を配置することとされており<sup>2)</sup>、軸線を用いたバロック様式的设计手法で計画することが要件であった。一方、明治天皇大喪儀式場は青山口からの直線道路の先に葬場殿を配置する空間構成であった。③阪谷は競技場の建設を了承しただけでなく、外苑全体を「国体上無言ノ教育ヲ一般国民ニ興フルヲ目的トシ同時ニ敬神ノ念ヲ自然ニ養成セシムル」<sup>3)</sup> 場と位置付け、外苑の造営趣旨としたものと考えられる。

#### ②外苑競技場の建設経緯と建設計画の変遷

まず、外苑の造営計画の検討過程における競技場の配置計画について、明治神宮奉賛会副会長の阪谷芳郎と競技場の建設を提言した嘉納治五郎及び造営局技師の小林政一の言説と図版を関連付けながら、外苑造営計画の変遷を整理して検討した。その結果、以下のことが明らかになった。①競技場の建設を提言した嘉納は諸外国を歴訪した際、教育者として運動場における無言の道德教育の重要性を認識し、帰国後、「体育」に「道德思想」として「教育勅語」を編入れ、「国民精神を養う」「道德教育」として「国民体育の普及」を国策として位置付け、外苑造営に際し「国民精神を養う」無言の道德教育の場として阪谷に競技場の建設を提言したものと推察される。②競技場の計画は近代化という時代背景と西洋の先進性から欧米の競技場が参照されたが、嘉納が参考とした端典のストックホルム及び小林が参照した米國のシカゴの大運動場は外苑競技場西側スタンドの計画・デザインに大きく影響を与えたものと考えられる。

また、外苑競技場の配置計画及び外苑の空間構成について、この土地の明治天皇のゆかりで



ある観兵式と明治天皇大喪儀に着目して検討した。その結果、以下のことが明らかになった。

①明治天皇のゆかりの一つで観兵式の際の玉座の位置であったエノキは、外苑の造営に際して最終的に「御観兵榎」として記念された。②絵画館周囲の計画は、大喪儀式場の空間構成を踏襲している。③外苑競技場のトラックの短軸は玉座（外苑競技場の貴賓席）と明治天皇大喪儀式場の外廓総門（中央広場の梯子状の苑路の位置）を結ぶ軸線と一致し、明治神宮野球場の本塁と二塁を結ぶ軸線上にも外廓総門（中央広場の梯子状苑路）が位置する。

### ③国立競技場の建設計画及び施設改修の変遷

国立競技場の計画の変遷を再整理し、検証した。その結果、以下のことが明らかになった。

①敷地中央付近であれば将来的なスタンド増設を考慮しつつも好都合とされる競技場の方位に配置することが可能であった。②スタンド増設後の国立競技場も好都合とされる方位で敷地内に配置することが可能であった。③基本設計配置図で計画された国立競技場の方位は、外苑競技場と同様の配置計画であった。④西日を防ぐ合理性や季節風による環境要因、動線、スタンドの拡張、競技場としての機能性を考慮しつつ国立競技場の計画を行った。⑤国立競技場のトラック短軸の延長上に御観兵榎（青山練兵場時代に玉座の位置）が位置する。

### ④外苑競技場及び国立競技場の配置計画における軸線の位置付け

造営計画の最終案決定後に変更された外苑競技場の方位及び中央広場の梯子状苑路の位置などは、この土地の明治天皇ゆかりの一つである明治天皇大喪儀式場の空間構成を、外苑の空間構成により明確に反映させることを意図して最終的に微調整された可能性が考えられる。検討の結果、外苑競技場のトラック短軸は明治天皇大喪儀式場の外廓総門（中央広場の梯子状苑路）と関連付けられていたことが明らかになった。外苑競技場及び国立競技場の貴賓席（外苑競技場の貴賓席は玉座の位置、国立競技場の貴賓席は皇族席）からのアイレベルは敷地の高低差やバックスタンドによって遮られ、物理的には視点を通じた関係性や効果はない。従って、この軸線のデザインは貴賓席を訪れた人には認識できない潜在的な存在でしかない。一方で、明治天皇大喪儀式場の外廓総門（中央広場の梯子状苑路）の位置に立った人には、聖徳記念絵画館、外苑競技場、明治神宮野球場の軸線がそこで交わることが認識できていたと推察され、その地に何らかの重要性があることを意識できた可能性がある。

基本設計では外苑競技場の配置計画を基調として全体の配置が検討された。その後、西日を防ぐ合理性や季節風による環境要因、動線、スタンド拡張、競技場としての機能性を考慮しつつ国立競技場の計画が行われ、国立競技場のトラック短軸は主に機能的なデザインに基づいて決定されたことが明らかになった。一方で、国立競技場のトラック短軸の延長上に御観兵榎が位置することが明らかになった。意図的なデザインであることを裏付ける資料等は現時点では確認できていないが、明治天皇のゆかりと関連付けることを意図して最終的に国立競技場の方位を微調整した可能性が考えられる。

以上を踏まえ、明治・大正期から戦後にかけての外苑における競技場の軸線の扱われ方の変化について述べる。明治・大正期において、バロック様式の軸線となる並木道（ヴィスタ）の先に記念建造物を配置する手法は、一般的かつ重要な設計手法の一つであった。実際に、青山練兵場で計画された日本大博覧会会場の計画や、外苑の造営計画は主にバロック様式であり、軸線は重要な位置付けにあった。

大正期に建設された外苑競技場の軸線は、他の主要な施設と関連付けて計画されていた。更に、その計画は明治天皇大喪儀式場の空間構成とも関連付けられており、この土地の明治天皇のゆかりを反映させる重要な手法として軸線が位置付けられていたことが明らかになった。

しかし、戦後に建設された国立競技場の軸線は、外苑の空間構成が変化するとともに大型スポーツ施設の計画に関する技術や知見が蓄積されていった中で、主に機能的なデザインに基づいて決定された。国立競技場のトラック短軸の延長上に御観兵榎が位置することから精神的な軸線として継承されている可能性も考えられるが、外苑の施設計画における軸線の重要性は相対的に低くなっていた。

結論として、本研究では、明治・大正期には外苑の持つ精神的な意味を表現する重要な位置付けにあった競技場の軸線が、戦後においてはその重要性が変化し、機能的なデザインを重視して競技場の軸線が計画されるようになったことを明らかにした。

### 5.2.2 今後の展望と課題

以上に示した外苑競技場及び国立競技場の配置計画の検討は外苑の空間構成の仮説的な一側面でしかない。軸となる並木道の先に記念建造物を配置するバロック様式の一般的かつ重要な設計手法の一つで配置計画された聖徳記念絵画館は、外苑の中心的記念建造物であるにも関わらず、その配置計画に関する検証は課題として残っている。また、外苑の造営計画当初は計画されていなかったにもかかわらず最終的に建設された明治神宮野球場の軸線は、外苑競技場のトラック短軸と同様に明確な軸線として認識することはできないが、聖徳記念絵画館周辺の空間構成と関連付けることを意図して計画・デザインされた可能性が考えられることから、明治神宮野球場の建設経緯や配置計画に関する検証も課題であり、より総合的に外苑の空間構成について考究する必要がある。

一方、外苑の造営後、各地の神社境内あるいは神社に付属する敷地に競技施設が整備された他、運動公園が造成されている。とりわけ神社境内や神社に付属する敷地における競技施設の配置計画の特質を解明する作業は課題として残されている。また、神社境内や神社に付属する敷地に競技施設が整備された経緯や土地の変容過程の把握とともに、都市計画的な視点からの検討は競技施設の整備を問う上で重要な視角となる。そして、競技施設の整備後に行われた各種の競技大会についても注目すべきであろう。

外苑における競技施設の配置計画は、各地の神社境内や神社に付属する敷地及び運動公園に整備された競技施設にどのような影響を与えたのか。競技施設に関する多くの検討課題が残されている。

---

#### 参考・引用文献：

- 1) 村松伸, 深見奈緒子, 山田協太, 内山愉太, 編：メガシティ＝Megacities2 メガシティの進化と多様性, 東京大学出版会, 2016.9
- 2) 日本大博覧會工事計畫應募説明書：建築雑誌, 第26巻, 第301号, 日本建築学会, pp.43-47, 1912
- 3) 阪谷芳郎：明治神宮御造営ノ由来, 明治神宮編, 明治神宮叢書, 第十七巻・資料編(1), 明治神宮社務所, pp.521-522, 2006
- 4) 出口林次郎：運動競技場設計, 体育運動協会, pp.101-103, 1935

謝辞

本研究に関する研究業績

参考文献リスト





## 謝辞

本研究は、筆者が筑波大学大学院人間総合科学研究科博士後期課程芸術専攻在学中に本学准教授 橋本剛先生の指導のもとで研究した内容をまとめたものである。本研究に関して、終始ご指導ご鞭撻を頂きました橋本剛先生に心より深謝の意を表します。博士論文の主査を担当して頂いた本学教授 野中勝利先生には多くの有用な御助言を賜りました。また、博士論文の副査を引き受けて頂いた本学准教授 山田協太先生ならびに本学教授 藤川昌樹先生には大変貴重な御助言を賜りましたことに心より深謝の意を表します。また、筆者が博士後期課程に在籍中に日常の議論を通じて多くの知識や示唆を頂いた栗原広佑氏、伊藤梨沙氏をはじめ、橋本研究室の皆様にも心より深謝いたします。

本研究を始めるに当たって、筆者が本学人間総合科学研究科博士前期課程在籍時に本学名誉教授 鶴沢隆先生の指導の下でまとめた修士論文がきっかけとなった。

本研究の主要な資料に関して、明治神宮国際神道文化研究所の間島誉史秀様より格別のご高配を賜りました。また、同研究所主任研究員の今泉宜子様より大変有益な資料提供など、多大なるご協力を賜りました。明治神宮の平尾旨鏡様より一方ならぬご厚情を賜りましたことを記して心より深謝の意を表します。

この他、以下の公文書館、図書館、大学において、関係資料や文献の閲覧、複写させて頂いたことを記して深謝の意を表します。

- ・国立公文書館
- ・東京都立公文書館
- ・国立国会図書館
- ・東京都立中央図書館
- ・東京都立多摩図書館
- ・東京都港区立図書館
- ・秩父宮記念スポーツ博物館・図書館
- ・日本スポーツ協会資料室
- ・筑波大学附属図書館中央図書館
- ・筑波大学附属図書館体芸図書館
- ・筑波大学附属図書館図書館情報学図書館
- ・シカゴ大学図書館フォトアーカイブ The University of Chicago Library Photographic Archive
- ・東京大学附属図書館農学生命科学図書館
- ・日本体育大学図書館
- ・順天堂大学さくらキャンパス学術メディアセンター

最後に、長年にわたり多大なる御支援を頂いた家族に深く感謝するとともに、本研究の完成を前に遠くの地へ旅立った父に捧げたい。

2020年3月 今 和俊

## 本研究に関する研究業績

### 査読付き論文

- ・今和俊，橋本剛：  
明治神宮外苑競技場の配置計画に関する研究，  
日本建築学会計画系論文集，第 83 巻，第 746 号，pp. 795-803，2018
- ・今和俊：  
明治神宮外苑競技場の成立経緯に関する研究 国立霞ヶ丘陸上競技場の成立前史として，  
芸術学研究，第 21 巻，筑波大学大学院人間総合科学研究科，pp. 21-30，2016

### 学会発表

- ・今和俊，橋本剛：  
国立霞ヶ丘陸上競技場に関する研究 その 5 国立霞ヶ丘陸上競技場の配置について，  
日本建築学会大会学術講演梗概集，歴史意匠，pp. 1045-1046，2018
- ・今和俊，橋本剛：  
国立霞ヶ丘陸上競技場に関する研究 その 4 明治神宮外苑競技場の配置について，  
日本建築学会大会学術講演梗概集，歴史意匠，pp. 179-180，2017
- ・今和俊，加藤研，橋本剛，鶴沢隆：  
国立霞ヶ丘陸上競技場に関する研究 その 3 明治神宮外苑競技場の計画について，  
日本建築学会大会学術講演梗概集，歴史意匠，pp. 459-460，2016
- ・今和俊，加藤研，鶴沢隆：  
国立霞ヶ丘陸上競技場に関する研究 その 2 明治神宮外苑競技場の成立経緯について，  
日本建築学会大会学術講演梗概集，歴史意匠，pp. 795-796，2015
- ・今和俊，鶴沢隆：  
国立霞ヶ丘陸上競技場に関する研究，その歴史の変遷と展望について，  
日本建築学会大会学術講演梗概集，歴史意匠，pp. 189-190，2014

### その他著書

- ・今和俊：SAYONARA 国立競技場〔〈連載〉住むことから考える東京 2020(5)〕，  
建築雑誌 (1666)，日本建築学会，pp. 40-41，2015

## 参考文献リスト

### 外苑・皇室関連

- ・明治神宮：大御心 明治天皇御製教育勅語緊解，明治神宮社務所，1973
- ・神社奉祀調査会経過要領の件：国立公文書館蔵，本館-2A-014-00・纂 01333100，1915
- ・明治神宮造営局：明治神宮外苑競技場概要，明治神宮奉賛会，1924
- ・明治神宮造営局：明治神宮外苑工事概要，明治神宮造営局，1926
- ・聖徳奉賛会：再版 聖上御聖徳録，聖徳奉賛会，1931
- ・明治神宮奉賛会：明治神宮外苑志，明治神宮奉賛会，1937
- ・明治神宮奉賛会編：明治神宮外苑奉獻概要報告，明治神宮奉賛会，1926
- ・明治神宮造営局：明治神宮外苑工事概要，明治神宮奉賛会，1926
- ・明治神宮外苑七十年誌編纂委員会編：明治神宮外苑七十年誌，明治神宮外苑，1998
- ・明治神宮：明治神宮叢書，第19巻，資料編(3)，明治神宮社務所，2006
- ・憲法顕彰会：明治憲法発布式典絵画帖，神奈川県立図書館蔵，11692753，721.8 47，出版年不明
- ・東洋堂：風俗画報，東洋堂，1894年4月号
- ・坂本辰之助：明治天皇，至誠堂書店，1912
- ・日本大博覧會工事計畫應募説明書：建築雑誌，第21巻，第301号，日本建築学会，pp.43-44，1912
- ・小川一真：御大喪儀写真帖，小川一真出版部，1912
- ・木子幸三郎：青山葬場殿建築談，建築雑誌，第26巻，第312号，日本建築学会，pp.553-569，1912
- ・事業之日本社：事業之日本，第15巻，第17号～第22号，事業之日本社，1912
- ・滋野清武著・桑野桃華編：通俗飛行機の話，日東堂書店，1913
- ・東京大正博覧會協賛社編：東京大正博覧會遊覧案内，東京大正博覧會協賛社協賛社出版部，1913
- ・東京大正博覧會案内編輯局編：東京大正博覧會觀覧案内，文洋社，1914
- ・万分堂出版部：大正博覧會案内，万分堂出版部，1914
- ・東陽堂：風俗画報，5月号，東陽堂，1914
- ・宮内大臣官房庶務課：皇太子殿下海外御巡遊日誌，宮内大臣官房庶務課，1923
- ・ニ荒芳徳，澤田節蔵：皇太子殿下御外遊記，朝陽会，1924
- ・新潮社編：週刊新潮，新潮社，4月30日・5月7日ゴールデンウィーク特大号，1998
- ・新潮社編：週刊新潮，新潮社，4月22日号，1999
- ・木村秀政：私の見てきた航空50年，別冊航空情報 航空秘話復刻版シリーズ(3) 生きている航空日本史外伝(上巻) 日本の航空ルネサンス，酣燈社，pp.11-15，2000
- ・今泉宜子：明治神宮一「伝統」を創った大プロジェクト，新潮社，2013
- ・高島航：帝国日本とスポーツ，塙書房，2012
- ・坂上康博：昭和天皇とスポーツ〈玉体〉の近代史，吉川弘文館，2016
- ・波多野勝：裕仁皇太子ヨーロッパ外遊記，草思社，1998
- ・長谷川香：明治神宮外苑の成立過程に関する研究 軍事儀礼・日本大博覧會構想・明治天皇大喪儀，建築史学，第61号，建築史学会，pp.54-86，2013

### 識者関連

- ・元田永孚(東野)：経筵進講録，鉄華書院，p.49，1900
- ・高橋原：婦一協会の理念とその行方—昭和初期の活動，東京大学宗教学年報，東京大学宗教学研究室，pp.43-44，2002
- ・沖田行司：国際交流を推進する平和主義教育構想，公益の追求者・渋沢栄一 新時代の創造，山川出版，1999
- ・婦一協会編：婦一協会会報，第一号，婦一協会，1913
- ・婦一協会編：婦一協会会報，第六号，婦一協会，1925
- ・渋沢青淵記念財団竜門社編：渋沢栄一伝記資料，第43巻，渋沢栄一伝記資料刊行会，1962



- ・渋沢青淵記念財団竜門社編：渋沢栄一伝記資料，第46巻，渋沢栄一伝記資料刊行会，1962
- ・嘉納治五郎：嘉納治五郎著作集，第一巻，五月書房，1983
- ・嘉納治五郎：嘉納治五郎著作集 第三巻，五月書房，1983
- ・嘉納先生伝記編纂会編：嘉納治五郎，講道館，1964
- ・嘉納先生伝記編纂会編：嘉納治五郎，講道館，1964
- ・嘉納治五郎著，講道館監修：嘉納治五郎大系，第六巻，本の友社，1988
- ・嘉納治五郎：国民の体育に就いて，愛知教育雑誌，愛知教育会，第356号，pp.15-16，1917
- ・嘉納先生伝記編纂会編：嘉納治五郎，講道館，pp.589-591，1964
- ・阪谷芳郎：明治神宮奉賛会日記，明治神宮叢書，第17巻，資料編(1)，明治神宮社務所，p.637，2006
- ・阪谷芳郎：明治神宮御造営ノ由来，明治神宮編，明治神宮叢書，第十七巻・資料編(1)，明治神宮社務所，pp.521-522，2006

### 競技場関連

- ・W.S.D. 生：ストックホルムに於けるオリンピック競技場，建築雑誌，第26巻，第303号，日本建築学会，p.137，1912
- ・The University of Chicago Photographic Archive，apf2-07733，1913
- ・The University of Chicago Photographic Archive，apf2-07756，1913
- ・The University of Chicago Photographic Archive，apf2-07610，1913
- ・小林政一：明治神宮外苑建設の経過と聖徳記念絵画館及競技場，國學院雑誌，第28巻，第11号，國學院大學総合企画部，pp.1-10，1922
- ・小林政一：明治神宮外苑工事に就いて 第一輯，小林政一，1929.11
- ・小林政一：競技場の設計及び施設，庭園と風景，第11巻，第10号，日本庭園協会，p.178，1929
- ・小林政一：運動場建築の発達と新傾向，建築と社会，第17集，第9号，日本建築協会，p.15，1934
- ・小林政一：第52編 運動場，高等建築学，第23巻，常盤書房，1934
- ・小林政一：オリンピック競技施設に就いて，建築と社会，日本建築協会，第19巻，第10号，pp.43-48，1936
- ・小林政一：オリンピック競技場として外苑改造に就いて，建築と社会，日本建築協会，第20巻，第11号，pp.14-17，1937
- ・カール・デイム著，奨健会訳：近代的都市の重要任務たる運動競技場の建造，奨健会，1927
- ・文部省編：運動競技場要覧，文部省，1927
- ・牧野正己：競技場建築，丸善，1932
- ・文部省編：現代体育の施設と管理，目黒書店，1932
- ・出口林次郎：運動競技場設計，体育運動協会，1935
- ・安田広嗣：運動の施設経営，學校体育文庫第六巻，一成社，1930
- ・安田広嗣：陸上競技場の設備と設管理法，師範大学講座・体育・第七巻 体操競技上の施設経営，建文館，1936
- ・山本勝造：陸上競技場の設計-上-，体育，体育研究会編，日本陸上競技連盟，pp.24-54，1949
- ・山本勝造：陸上競技場の設計-下-，体育，体育研究会編，日本陸上競技連盟，pp.24-31，1949
- ・厚生省体力局：体力向上施設参考資料，社会体育スポーツ基本史料集成，第20巻，大空社，1993
- ・日本陸上競技連盟普及部編：陸上競技読本，日本陸上競技連盟，1950
- ・角田栄：国立競技場について，建築界，理工図書，第6巻，第5号，pp.59-76，1957
- ・角田栄：国立競技場設計雑感，建築界，第7巻，第5号，理工図書，1958
- ・角田栄：国立陸上競技場と庭球場の建設について，公園緑地，第20巻，第1号，日本公園緑地協会，pp.4-13，1958
- ・新建築社：新建築，第33巻，第6号，新建築社，1958
- ・新建築社：新建築，第34巻，第8号，新建築社，1959
- ・角田栄：オリンピックに備える国立競技場の拡張，月刊国立競技場，第9号，国立競技場，pp.4-5，1959
- ・角田栄：国立競技場の増築について，月刊国立競技場，第23号，国立競技場，pp.6-9，1959
- ・国立競技場：装いを新たに 東京オリンピックを目指し今秋より国立競技場を拡充，月刊国立競技場，第23号，国立競技場，1959

- ・角田栄：ヨーロッパのスポーツ施設，建築界，理工図書，第9巻，第9号，pp.10-15，1960
- ・座談会 オリンピック施設計画を展望する：新建築，第39巻，第7号，新建築社，pp.136-142，1964
- ・新建築社：新建築，第39巻，第10号，新建築社，1964
- ・国立競技場編：国立競技場十年史，国立競技場，1969
- ・角田栄：国立競技場建設当初の思い出，国立競技場十年史，国立競技場，pp.239-242，1969
- ・片山光生一その創造編集委員会：片山光生一その創造，みくに書房，1985
- ・体育施設出版編：国立競技場の30年：オリンピックからJリーグまで，体育施設出版，1994
- ・国立競技場50年史編集委員会編：国立競技場50年の歩み，日本スポーツ振興センター国立競技場，2012

### 体育・スポーツ・オリンピック関連

- ・THE OFFICIAL REPORT OF THE OLYMPIC GAMES OF STOCKHOLM 1912, THE SWEDISH OLYMPIC COMMITTEE, 1912
- ・大日本体育協会：アスレチックス，第2巻，第1号，大日本体育協会，1922
- ・明治神宮体育会：第五回明治神宮体育大会報告書，明治神宮体育会，1930
- ・日本陸上連盟：聖火リレーに対する注文，陸上日本，海と空社，第78巻，第79巻，1937
- ・岸田日出刀：第11回オリンピック大会と競技場，丸善，p.46，1937
- ・岸田日出刀：第12回オリンピック東京大会会場論，建築雑誌，第51巻，第626号，日本建築学会，pp.622-623，1937
- ・岸田日出刀：日支事変とオリンピック東京大会，建築と社会，日本建築協会，第20巻，第11号，pp5-13，1937
- ・内閣情報部編輯：写真週報，第40号，内閣情報部，1938
- ・野口源三郎：戦捷祈願予リレーに走りて，学校体育，第20巻，第5号，pp.140-142，1938
- ・永井松三：報告書，第12回オリンピック東京大会組織委員会，1939
- ・東京市役所：第十二回オリンピック東京大会東京市報告書，東京市役所，1939
- ・厚生省編：第十回明治神宮国民体育大会報告書，厚生省，1940
- ・厚生省：紀元二千六百年奉祝 第十一回明治神宮国民体育大会報告書，1941
- ・厚生省：第十二回明治神宮国民体育大会報告書，1942
- ・同盟通信社：同盟グラフ，第284号，同盟通信社，1942
- ・内閣情報部編：写真週報，第246号，内閣情報部，1942
- ・第四回国民体育大会準備委員会：第四回国民体育大会記録，東京都，日本体育協会，1949
- ・東京都：オリンピック大会東京招致に関する事務委託について，東京都立公文書館蔵，M04.04.07.1954
- ・東京都：Tokyo，東京都立公文書館蔵，オリンピック-173.1955
- ・日本体育協会編：スポーツ八十年史，日本体育協会，1958
- ・日本体育協会：アジアのオリンピック・第三回アジア競技大会，日本体育協会，1958
- ・第3回アジア競技大会組織委員会：第3回アジア競技大会報告書1958，第3回アジア競技大会組織委員会，1959
- ・第14回国民体育大会東京都実行委員会事務局：第14回国民体育大会報告書，第14回国民体育大会東京都実行委員会，1959
- ・古山利雄編：東京オリンピック準備委員会報告書 昭和卅四年七月，東京オリンピック準備委員会，1959
- ・日本体育協会：日本体育協会五十年史，日本体育協会，1963
- ・世界文化社：世界文化社版 東京オリンピック，世界文化社，1964
- ・朝日新聞社編：XVIII Olympiad Tokyo 1964，朝日新聞社，1964
- ・文部省：オリンピック東京大会と政府機関等の協力，文部省，1965
- ・東京都：第18回オリンピック競技大会東京都報告書，東京都，1965
- ・オリンピック東京大会組織委員会編：第18回オリンピック競技大会公式報告書 上，オリンピック東京大会組織委員会，1966
- ・日本蹴球協会：日本サッカーのあゆみ，講談社，1974
- ・日本体育協会監修：国民体育大会の歩み，都道府県体育協会連絡協議会，1978
- ・日本体育協会：国民体育大会50年のあゆみ，日本体育協会，1998
- ・橋本一夫：幻の東京オリンピック，日本放送出版協会，p.96，1994

- ・波多野勝：東京オリンピックへの遙かな道 招致活動の軌跡 1930-1964, 草思社, 2004
- ・高島航：戦時下の平和の祭典 ー幻の東京オリンピックと極東スポーツ界ー, 京都大學文學部研究紀要, 第 49 号, pp.25-72, 2010.3
- ・小林繁：幻の第 12 回オリンピック東京大会, 四天王寺女子大学紀要, 四天王寺女子大学, pp.1-21, 1975.8
- ・中村哲夫：第 12 回オリンピック東京大会研究序説 ( I ), 三重大学教育学部研究紀要, 人文・社会科学, 三重大学, pp.101-112, 1985
- ・中村哲夫：第 12 回オリンピック東京大会研究序説 ( II ) その招致から返上まで, 三重大学教育学部研究紀要, 人文・社会科学, 三重大学, pp.129-138, 1989
- ・中村哲夫：第 12 回オリンピック東京大会研究序説 ( III ), 三重大学教育学部研究紀要, 人文・社会科学, 三重大学, pp.67-79, 1993

## 新聞

- ・朝日新聞：1012 年 8 月 3 日
- ・読売新聞：1915 年 2 月 22 日
- ・読売新聞：1917 年 9 月 22 日
- ・東京日日新聞：1921 年 11 月 25 日
- ・東京朝日新聞, 1937 年 5 月 16 日, 1937
- ・毎日新聞：1943 年 10 月 21 日, 1943
- ・毎日新聞：1947 年 4 月 4 日
- ・朝日新聞：1947 年 5 月 5 日
- ・朝日新聞：1956. 3. 6
- ・読売新聞：1956. 3. 24
- ・日本経済新聞：1956. 12. 13

## その他

- ・宮内庁：昭和天皇実録, 第二巻, 東京書籍, 2016
- ・宮内庁：昭和天皇実録, 第三巻, 東京書籍, 2016
- ・宮内庁：昭和天皇実録, 第十二巻, 東京書籍, 2016
- ・宮内庁：昭和天皇実録, 第十三巻, 東京書籍, 2016
- ・鈴木博之：日本のく地霊, 講談社現代新書, 1999
- ・鈴木博之：東京の地霊 ( ゲニウス・ロキ ), 筑摩書房, 2009
- ・榎文彦：記憶の形象 都市と建築との間で, 筑摩書房, 1992
- ・エイモス・ラポポート著, 高橋鷹志監訳, 花里俊廣訳：構築環境の意味を読む, 彰国社, 2006
- ・黒田泰介：ティポロジアと積層する都市組織 空間形成の原点を求めて, 10 + 1 第 37 巻, INAX 出版, 2004
- ・飯島洋一：王の身体都市 昭和天皇の時代と建築, 青土社, 1996
- ・井上章一：都市と建築のファシズム, 國文學, 學燈社, pp.10-19, 2004
- ・井上章一：夢と魅惑の全体主義, 文芸春秋, 2006
- ・多木浩二：天皇の肖像, 岩波新書, 1988
- ・多木浩二：都市の政治学, 岩波新書, 1994
- ・多木浩二：スポーツを考える 身体・資本・ナショナリズム, ちくま書房, 1995
- ・T フジタニ：天皇のページェント, 日本放送出版協会, 1994
- ・原武史：可視化された帝国 近代日本の行幸啓 [増補版], みすず書房, 2011

## 資料編

明治神宮外苑競技場図面，国立霞ヶ丘陸上競技場図面

神社奉祀調査会委員一覧，明治神宮造営局職員一覧，国立競技場拡充計画協議会委員一覧

## 略式年表



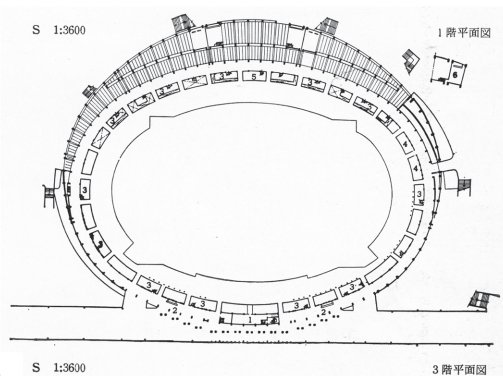
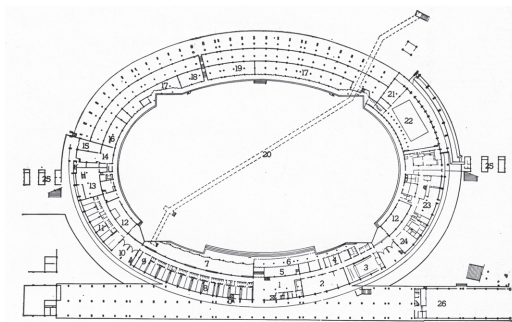
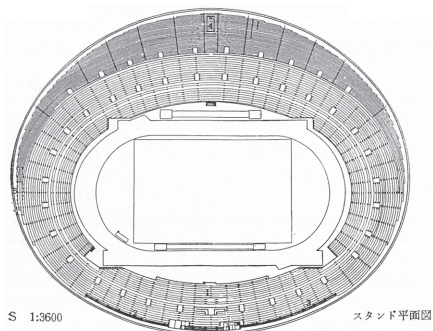
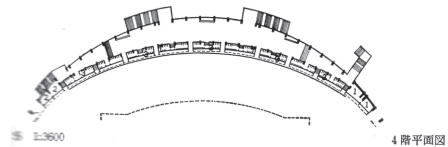
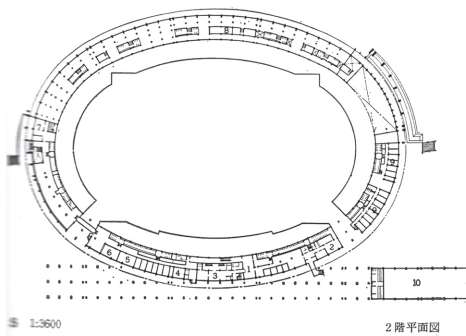
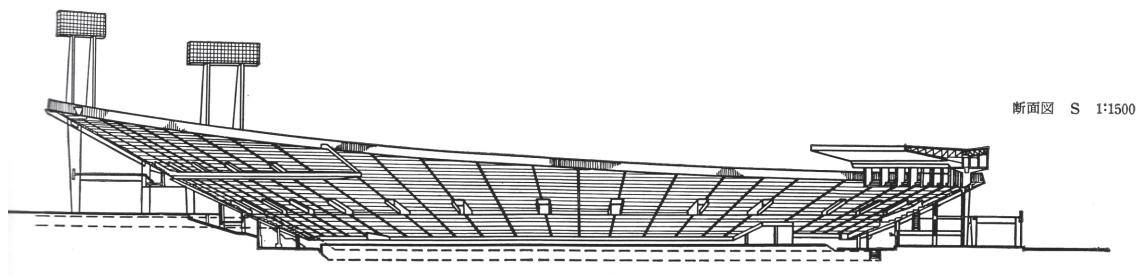




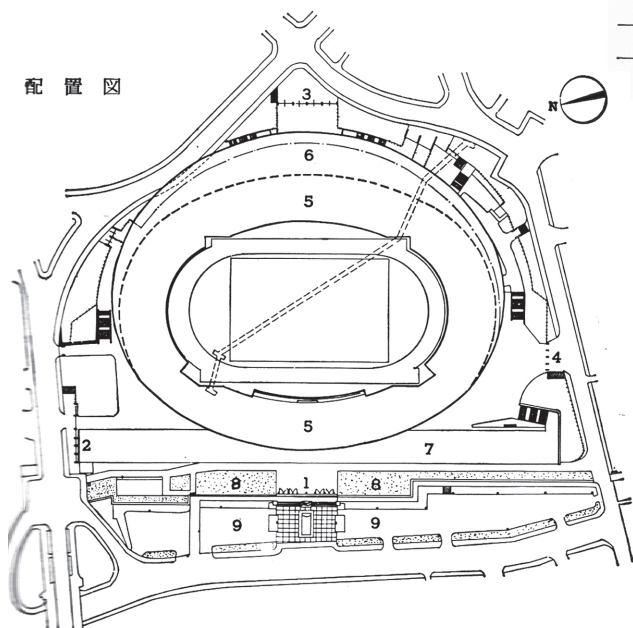
**資料 1 明治神宮外苑競技場平面図**

出典：明治神宮奉賛会：明治神宮外苑志，明治神宮奉賛会，1937





配置図



- 1 正門
- 2 千駄谷門
- 3 青山門
- 4 代々木門
- 5 既設スタンド
- 6 新設スタンド
- 7 陸橋
- 8 芝生
- 9 駐車場

資料4 国立霞ヶ丘陸上競技場断面図及び平面図・配置図

出典：新建築社：新建築，第39巻，第10号，新建築社，1964.10



表1 神社奉祀調査会委員一覧

称号	氏名	その他の職務
内務大臣伯爵	大隈重信	教育者、枢密顧問官、貴族院議員、内閣総理大臣、外務大臣、農商務大臣、内務大臣を歴任。
伯爵	奥保 鞏	陸軍
子爵	井上良馨	海軍
侯爵	蜂須賀茂韶	文部大臣、東京府知事、貴族院議長
公爵	徳川家達	貴族院議員
伯爵	戸田氏共	オーストリア・ハンガリー全権公使、式部長官
勳四等	大岡育造	弁護士、政治家、文部大臣、衆議院議長
男爵	渋沢栄一	官僚、事業家、日本資本主義の父
理学博士	山川健次郎	物理学者、九州・東京・京都帝国大学総長を歴任
法学博士	水野錬太郎	内務官僚、内務大臣、朝鮮総督府政務総監、貴族院議員
内務省神社局長法学博士	井上友一	内務官僚、東京府知事
勳四等	奥繁三郎	衆議院議長
法学博士男爵	阪谷芳郎	大蔵官僚、大蔵大臣、東京市長、貴族院議員
子爵	福羽逸人	農学者、造園家、内務省宮廷園芸技師
勳三等	大谷 靖	貴族院勅選議員
文学博士	三上参次	日本史学者 東京帝国大学教授
文学博士	萩野由之	日本の歴史学者・国文学者、東京帝国大学名誉教授
工学博士	伊藤忠太	建築家、建築史家、東京帝国大学名誉教授
工学博士	関野 貞	建築史学者、東京帝国大学教授
従五位	萩野仲三郎	国宝保存会委員、重要美術品等調査委員会委員、史蹟名勝天然記念物調査委員会委員
	山田準次郎	内務省参事官
工学博士	近藤虎五郎	土木技術者、内務省内務技師、東京帝大教授、鉄道省技師なども兼務
	市来乙彦	大蔵官僚、政治家、大蔵大臣、日本銀行総裁、貴族院議員、参議院議員などを歴任
従五位	堀田 貢	内務官僚、警視總監、内務次官
勳三等	下岡忠治	内務・農商務官僚、政治家。衆議院議員、朝鮮総督府政務総監
勳四等	牧野正雄	造神宮主事
従五位	安藤時蔵	内務省神社局技師
	宮地直一	内務官僚、神道学者
文学博士	関根正直	国文学者
勳六等	大貫眞浦	京都石清水八幡宮宮司、伏見稲荷大社宮司
勳六等	多村知興	賀茂別雷神社宮司
勳六等	久保恵鄰	日枝神社宮司
勳六等	今井清彦	皇典講究所幹事兼国学院大主事、伊勢神宮少宮司、京都伏見稲荷大社宮司
林学博士	川瀬善太郎	営林主事・林務官補、東京帝国大学農科大学教授、農商務省技師、山林局森林監査官、東京帝国大学附属演習林長、農学部長を歴任
勳三等	久保田政周	栃木県知事、三重県知事、東京府知事、内務次官を歴任
林学博士	本多静六	造園家、東京帝国大学教授
勳四等	小橋一太	士族、官僚、政治家
従六位	佐野利器	建築家、建築構造学者、東京帝国大学教授、日本大学教授、清水組副社長を歴任
文学博士	黒板勝美	歴史学者、東京帝国大学名誉教授
	中川忠順	美術史家、文部省技師、帝室博物館学芸委員、御物管理委員会臨時委員
	関保之助	有職故実研究家、東京帝室博物館学芸委員

(出典：国立公文書館蔵『神社奉祀調査会経過要領ノ件』をもとに作成)

表2 明治神宮奉賛会勤労者一覽1 (主事以上)

職位	称号	氏名	職位	称号	氏名
総裁	—	伏見宮貞愛親王	常議員	—	豊川良平
〃	—	閑院宮載仁親王	〃	—	土居通夫
副総裁	公爵	山縣有朋	〃	侯爵	徳川頼倫
〃	公爵	松方正義	〃	—	大谷嘉兵衛
顧問	公爵	大山巖	〃	男爵	奥田義人
〃	〃	徳大寺實	〃	—	和田豊治
〃	侯爵	東郷平八郎	〃	—	川西清兵衛
〃	〃	大隈重信	〃	—	田所美治
〃	伯爵	土方久元	〃	—	高田慎藏
〃	男爵	波多野敬直	〃	—	田中源太郎
〃	〃	一木喜徳郎	〃	男爵	團 琢磨
〃	伯爵	後藤新平	〃	—	塚本清治
〃	—	水野錬太郎	〃	男爵	奈良武次
〃	—	床次竹次郎	〃	—	久保田政周
〃	男爵	中村雄次郎	〃	—	山田新一郎
〃	伯爵	牧野仲顯	〃	男爵	藤田平太郎
〃	男爵	若槻禮次郎	〃	子爵	藤波言忠
〃	—	濱口雄幸	〃	男爵	古河虎之助
会長	公爵	徳川家達	〃	—	古市公威
副会長兼理事	子爵	渋沢栄一	〃	—	近藤廉平
副会長兼理事長	男爵	阪谷芳郎	〃	—	秋山眞之
副会長兼理事	—	三井高棟	〃	伯爵	清棲家教
〃	—	中野武營	〃	子爵	三島彌太郎
理事	—	大橋新太郎	〃	—	斯波淳六郎
〃	—	柿沼谷雄	〃	—	肥後八次
〃	—	朝吹英二	〃	男爵	森村市左衛門
〃	—	木村久壽彌太	〃	—	鈴木摠兵衛
〃	—	早川千吉郎	〃	—	赤司鷹一郎
〃	—	日下部辨二郎	〃	—	井出謙治
〃	—	池田成彬	〃	—	西野 元
常務理事	—	水上浩躬	〃	子爵	田尻稻次郎
〃	—	榎忠一郎	〃	—	小橋一太
理事	—	和田豊治	〃	—	阿部 浩
〃	男爵	大倉喜八郎	〃	—	鈴木松太郎
〃	—	安田善三郎	〃	—	佐藤愛麿
〃	—	志村源太郎	〃	—	宇佐美勝夫
〃	—	梶原仲治	〃	—	山田準次郎
繪畫題立案囑託	伯爵	金子堅太郎	〃	—	川村竹治
繪畫委員	—	三上参次	〃	—	田 昌
〃	—	正木直彦	〃	—	堀田貢
主事	—	爲貝敬昌	〃	—	大海原重義
〃	—	山元彌内	〃	—	井上孝哉
〃	—	高雄 晋	〃	—	關屋貞三郎
〃	—	秋庭義次	〃	—	佐上信一
常議員	—	井上友一	〃	男爵	平山成信
〃	—	井上準之助	〃	—	田内三吉
〃	—	市來乙彦	〃	—	服部金太郎

(出典：明治神宮奉賛会『明治神宮外苑志』明治神宮奉賛会、1937 をもとに作成)

表2 明治神宮奉賛会勤労者一覽2（主事以上）

職位	称号	氏名	職位	称号	氏名
常議員	—	馬越恭平	常議員	—	平塚廣義
〃	—	浅野總一郎	〃	—	伊澤多喜男
〃	男爵	森村市左衛門	〃	—	赤木朝治
〃	—	河田 烈	〃	—	松井修徳
〃	—	藤山雷太	〃	—	内田信保
〃	—	中村是公	〃	—	有馬良橋
〃	—	一戸兵衛	〃	—	大谷正男
〃	—	江見清風	〃	—	白根松介
〃	—	松本 學			

（出典：明治神宮奉賛会『明治神宮外苑志』明治神宮奉賛会、1937をもとに作成）

表3 明治神宮造営局職員一覽1

職位	氏名	職位	氏名
総裁	伏見宮貞愛親王	参与	伊藤忠太
〃	閑院宮載仁親王	〃	原 漑
副総裁	後藤新平	〃	塚本 靖
〃	水野鍊太郎	〃	佐野利器
〃	床次竹二郎	〃	塚本清治
〃	若槻禮次郎	〃	牧野正雄
〃	濱口雄幸	〃	荻野仲三郎
局長	塚本清治	〃	中山斧吉
〃	小橋一太	〃	前田多門
〃	山田準次郎	〃	宮地直一
〃	大海原重義	〃	桐山平太郎
〃	佐上信一	〃	池田 宏
〃	松本 學	〃	菊池忠三郎
〃	赤木朝治	〃	山縣治郎
書記官	田澤義鋪	〃	齋藤守園
〃	吉田 茂	〃	加藤久米四郎
〃	丸鬼三郎	〃	瀧 正雄
〃	平島敏夫	〃	山田準次郎
〃	丹羽七郎	〃	内田信保
〃	池田 清	〃	後藤文夫
〃	足立 收	〃	堀切善太郎
事務官	足立 收	〃	河原田稼吉
主事	高橋豊太郎	〃	佐上信一
〃	野島勝七	〃	赤木朝治
〃	藺田守晴	〃	池田 清
〃	工藤哲英	〃	木村小左衛門
〃	梶杜吉次	〃	田島達介
〃	山中道政	技師	牧 彦七
〃	龍 金次郎	〃	大江新太郎
参与	近藤虎五郎	〃	折下吉延
〃	川瀬善太郎	〃	本郷高德
〃	本多静六	〃	角南 隆

（出典：明治神宮奉賛会『明治神宮外苑志』明治神宮奉賛会、1937をもとに作成）

表3 明治神宮造営局職員一覽2

職位	氏名	職位	氏名
技師	藤井眞透	評議委員	堀田 貢
"	小林政一	"	小橋一太
"	高橋貞太郎	"	岡田忠彦
"	志知勇次	"	松本蒸治
"	林 助一	"	湯地幸平
"	天羽 馨	"	小野義一
"	山崎林志	"	沖野忠雄
"	高木一三	"	馬場三郎
"	田阪美德	"	岡本英太郎
"	井上 清	"	渡邊勝三郎
"	佐野源次郎	"	中川 望
評議委員	阪谷芳郎	"	中野武營
"	渋沢栄一	"	井上友一
"	南部光臣	"	有松英義
"	三上參次	"	岡田文次
"	關星貞三郎	"	水野鍊太郎
"	市瀬恭次郎	"	杉山四五郎
"	宇佐美勝夫	"	添田敬一郎
"	潮 惠之輔	屬	田尻稻次郎
"	中井勵作	"	鶴見左吉雄
"	關野 貞	"	大熊武司
"	永田秀次郎	"	里藤 積
"	長岡隆一郎	"	青木仁藏
"	堀切善次郎	"	森下亮一
"	山田準次郎	"	荒井重松
"	井上孝哉	"	伊東順彦
"	湯淺倉平	"	寺田保太郎
"	塚本清治	"	佐伯芳彦
"	川崎卓吉	"	鳥海 剛
"	太田政弘	"	中島清治郎
"	西野 元	"	副島次郎
"	佐竹三吾	"	關 惣右衛門
"	藤沼庄平	"	増田作太郎
"	赤池 濃	"	進藤太重郎
"	原田貞介	"	稻葉清之助
"	萩野由之	"	高田虎次郎
"	馬場鏝一	"	矢野泰也
"	長谷川久一	"	正岡義光
"	後藤文夫	技手	安井大吉
"	横山助成	"	村越 進
"	後藤新平	"	武藤豊吉
"	石原健三	"	横山信二
"	阿部 浩	"	小澤栄之助
"	岡 喜七郎	"	江口日出松
"	川村竹治	"	難波辰雄
"	横田千之助	"	栢森治平

(出典：明治神宮奉賛会『明治神宮外苑志』明治神宮奉賛会、1937をもとに作成)



表3 明治神宮造営局職員一覽3

職位	氏名	職位	氏名
技手	高島隆一	囑託	安倍邦男
"	石神甲子郎	"	山崎太千治
"	桐山平太郎	"	中島卯三郎
"	松室成貞	"	竹村勘吾
"	狩野 力	"	大山松次郎
"	袴田進一郎	"	野口源三郎
"	眞田辰次郎	"	二見秀雄
"	木村武一	"	濱田 稔
"	桐山均一	"	三橋喜久雄
"	渡邊榮治	"	高橋貞太郎
"	太田謙吉	"	天羽 馨
"	村山義男	"	石原嘉助
"	矢部金太郎	"	大木清治
"	新島菊次郎	"	入江善太郎
"	木戸 皎	"	吉野園八
"	服部憲治	"	水谷駿一
"	平野喜八郎	"	林 脩己
"	佐々木榮一	"	山田清之助
"	中村一俊	"	田中慎三
"	松下壽吉	"	角田錦六
"	八里賢二	"	藤田 稔
囑託	小島徳太郎	"	長谷川佐次郎
"	大溝 勇	"	長野一男
"	大熊武司	"	松村菊次郎
"	田阪美徳	"	北村弘一
"	關 時太郎	"	押見斧次郎
"	佐野源次郎	"	高梨三五郎
"	武藤豊吉	"	田中恂治
"	工藤哲英	"	相杜吉次
"	稻住張吉	"	橋口長一
"	大江齋治	"	窪田哲之助
"	菊永保身	"	山本岩雄
"	金子霸吉	"	伊東泰介
"	齋藤操政	"	小阪拓次郎
"	大野菊次郎	"	藺田守晴
"	信澤金吾	"	中西精一
"	伊東祐元	"	宇佐美保
"	朝熊一緒	"	齋藤知一
"	小春 錫	"	蘆田公平
"	古橋厚五郎	"	武満國男
"	林田榮藏		

(出典：明治神宮奉賛会『明治神宮外苑志』明治神宮奉賛会、1937をもとに作成)

表4 国立競技場拡充計画協議会委員一覧

所属	氏名	所属	氏名
日本陸上競技連盟副会長	浅野均一	大蔵省管財局管理課長	結城義人
日本体育協会総務主事	東 俊郎	東京消防庁予防部長	芦浦義雄
郵政省電波管理局長	甘利正吾	第2分科会委員	
建設省関東地方建設局長	川村満雄	日本陸上競技連盟副会長	浅野均一
オリンピック東京大会組織委員会 施設特別委員長	岸田日出刀	日本陸上競技連盟参与	織田幹雄
建設省営繕局長	桜井良雄	日本馬術連盟技術専門委員	木戸俊三
文部省体育局長	杉江 清	文部省体育局運動競技課長	佐々木吉蔵
建設省計画局長	関森吉雄	日本陸上競技連盟常務理事	白瀬二郎
東京大学教授	高山英華	日本蹴球協会常務理事	竹腰重丸
日本体育協会専務理事	竹田恒徳	建設省関東地方建設局建築第一課長	角田 栄
文部省管理局教育施設部長	田中徳治	文部省体育局体育官	中島 茂
オリンピック東京大会組織委員会 事務総長	田畑政治	日本ホッケー協会常務理事	広 堅太郎
明治神宮権宮司	伊達 巽	第3分科会委員	
国立競技場理事長	寺中作雄	郵政省電波監理局次長	浅野賢登
中山建築設計事務所長	中山克己	国際電信電話株式会社施設課長	有竹秀二
国立競技場理事	野津 謙	国立競技場常務理事	北沢 清
国立競技場会長	久富達夫	日本放送協会技術現業局長	五嶋丙午郎
東京都オリンピック準備事務局長	御子柴博見	民間放送関係代表	新谷武四郎
大蔵省官房長	宮川新一郎	共同通信運動部長	菅俊俊哉
第1分科会委員		建設省関東地方建設局建築第一課長	角田 栄
建設省関東地方建設局計画課長	荒 敏雄	民間放送連盟	西出 武
明治神宮外苑部長代理	伊丹安広	郵政省電気通信監理官室参事官	西原林之助
大蔵省主計局主計官	大村筆雄	文部省体育局体育課長	西田 剛
東京都建築局指導部長	大河原春雄	日本電信電話公社施設課長	橋本真澄
建設省関東地方建設局機械課長	川口与四郎	第4分科会委員	
国立競技場常任理事	北沢 清	東京都教育委員会体育部長	尾崎剛毅
建設省計画局施設課長	木村英夫	建設省計画局都市建設課長	奥田教朝
文部省体育局運動競技課長	佐々木吉蔵	大蔵省関東財務局管財部長	岸本 哲
日本体育協会理事	塩沢 幹	建設省計画局施設課長	木村英夫
日本陸上競技連盟理事長	鈴木良徳	東京体育館館長	児島金一
東京都オリンピック準備事務局次長	関 晴香	東京都建設局道路管理部長	近藤竜一
東京大学教授	高山英華	建設省営繕局計画課長	建部仁彦
建設省営繕局計画課長	建部仁彦	国立競技場常任監事	辻田 力
警察庁警備部長	玉村四一	警視庁四谷警察署長	墳崎 正
文部省管理局教育施設部長	田中徳治	建設省関東地方建設局建築第一課長	角田 栄
建設省関東地方建設局建築第一課長	角田 栄	文部省体育局体育課長	西田 剛
文部省体育局体育官	中島 茂	東京都下水道本部技術部長	中野八郎
文部省管理局教育施設部計画課長	中尾竜彦	東京都建設局河川部長	長谷川義彦
中山建築設計事務所長	中山克己	東京消防庁四谷消防署長	広田七郎
文部省体育局体育課長	西田 剛	明治神宮外苑主事	三浦敬三
東京電力株式会社新宿支社長	増井 靖	大蔵省主計局主計官	宮崎 仁
建設省関東地方建設局電気設備課長	三浦善三郎	東京都建設局公園緑地部長	森脇竜雄
		東京都建設局都市計画部長	山田正男

(出典：文部省『オリンピック東京大会と政府機関等の協力』文部省、1965をもとに作成)

## 青山練兵場・明治神宮外苑競技場・国立霞ヶ丘陸上競技場史（略年表1）

西暦	和暦		月日		青山練兵場・明治神宮外苑競技場・国立競技場で過去に開催された主な出来事・大会・イベント
1887年	明治	20年			日比谷練兵場に代わる新練兵場として青山練兵場開設
1889年		22年	2月	11日	大日本帝国憲法発布観兵式
1897年		30年	2月	7・8日	英照皇太后大喪儀
1906年		39年	4月	30日	日露戦役凱旋大観兵式
1911年		44年	2月	8日	山田式2号飛行船、大崎から青山練兵場まで自由飛行に成功
1912年		45年	9月	13日	明治天皇大喪儀
	大正	元年			
1913年		2年	3月	28日	貴族院議員・衆議院議員、陸軍飛行機3機・ドイツ製飛行船観覧式
1914年		3年	3月		東京大正博覧會第3開場として陸軍飛行機の編隊飛行や軍艦三笠の原寸大模型、展示
1915年		4年	5月	1日	明治神宮奉賛会設立
			12月	2日	大礼観兵式
1916年		5年			大日本體育協會會長・嘉納治五郎らにより競技場の建設が決定
			4月		米国人飛行士チャールズ・F・ナイルス、アート・スミス、カザリン・ステンソンらによる曲芸飛行・自動車レース
1917年		6年	2月		明治神宮奉賛会が明治神宮造営局に外苑の設計・施工を依頼
1919年		8年	8月		明治神宮奉賛会の計画承認
1922年		11年	11月	9日	定礎式
1923年		12年	9月	1日	関東大震災により一時工事中止（翌年再開）
1924年		13年	10月	25日	明治神宮外苑競技場竣工式
			10月	30日～11月3日	第1回明治神宮競技大会開催
1925年		14年	11月	1～3日	第2回明治神宮競技大会開催
1926年		15年	10月	22日	明治神宮外苑竣工奉獻式
				31日～11月3日	第3回明治神宮體育大会開催
	昭和	元年	12月	25日	大正天皇崩御のためFA杯全日本蹴球選手権大会中止
1927年		2年			第4回明治神宮體育大会開催
1928年		3年			
1929年		4年	10月	31日～11月3日	第5回明治神宮體育大会開催
1930年		5年			
			5月	24～31日	第9回極東選手権大会開催
1931年		6年	10月	27日～11月3日	第6回明治神宮體育大会開催
			10月	27日	第6回明治神宮體育大会において織田幹雄（三段跳び）と南部忠平（走り幅跳び）が世界新記録を樹立
1932年		7年			
1933年		8年	11月	1～3日	第7回明治神宮體育大会開催
1934年		9年			日本初のアメリカンフットボールの公式試合（日本学生選抜対横浜外国人チーム）
1935年		10年	11月	1～3日	第8回明治神宮競技大会開催
1936年		11年			ベルリンでのIOC総会で1940年国際オリンピック大会の東京開催が決定
1937年		12年	10月	28日～11月3日	第9回明治神宮體育大会開催
			4月	19日	明治神宮奉賛会解散
1938年		13年	6月	7日	東京オリンピック開催中止決定
1939年		14年	10月	31日～11月3日	第10回明治神宮国民體育大会開催
					満蒙開拓青年少年義勇軍壮行会
1940年		15年	10月		紀元二千六百年奉祝第11回明治神宮国民體育大会
1941年		16年	11月	2・3日	第12回明治神宮国民體育大会開催
1942年		17年	10月	29日～11月3日	第13回明治神宮国民錬成大会開催
1943年		18年	10月	21日	出陣学徒壮行会
			11月	7日	第14回明治神宮国民錬成大会開催
1945年		20年			進駐軍の接収により「ナイルキニック・スタジアム」と呼称される。
1951年		26年			第31回天皇杯全日本サッカー選手権大会（天皇杯の授与開始）
1952年		27年			接収解除後、明治神宮が神宮外苑とあわせ宗教法人となる。
					明治神宮外苑競技場大改修。日本で初めてアンツーカー舗装を行う。

※明治神宮外苑競技場と国立競技場に関連深い、陸上競技・サッカー・ラグビーを中心に国際的な試合や選手権、その他スポーツ以外のイベントなどを中心に採録。  
 （『明治神宮外苑誌』、『明治神宮外苑七十年誌』、『国立競技場十年史』、『国立競技場50年の歩み』を基に作成）

## 青山練兵場・明治神宮外苑競技場・国立霞ヶ丘陸上競技場史（略年表2）

西暦	和暦	月日	青山練兵場・明治神宮外苑競技場・国立競技場で過去に開催された主な出来事・大会・イベント
		10月15日	保安隊発足、創立記念観閲式が明治神宮外苑競技場で行われる
			第32回天皇杯全日本サッカー選手権大会（天皇杯の授与開始）
1953年	28年		第33回天皇杯全日本サッカー選手権大会
		3月7・14日	サッカー、スイスワールドカップアジア地区予選（日本対韓国）
1954年	29年		第34回天皇杯全日本サッカー選手権大会
		12月20日	アジア大会の東京開催決定をうけ、衆議院で国立競技場建設決議
1955年	30年		第35回天皇杯全日本サッカー選手権大会
1956年	31年		明治神宮から文部省（現文部科学省）に譲渡。
			第36回天皇杯全日本サッカー選手権大会
		11月25日	明治神宮外苑競技場惜別奉告祭
		12月28日	国立霞ヶ丘陸上競技場（国立競技場）起工式
1957年	32年		第37回天皇杯全日本サッカー選手権大会
		1月～4月	明治神宮外苑競技場解体
1958年	33年	3月30日	国立霞ヶ丘陸上競技場（国立競技場）竣工
		5月7日	工事状況視察のため皇太子殿下ご来場
		24日～6月11日	第3回アジア競技大会
		30日	天皇・皇后両陛下、皇太子殿下競技ご観覧のためご来場
		7月24日	「7万人の夕涼み」
		8月16日	野外オペラ「アイダ」上演
		10月11日	日本陸上競技選手権大会
			第38回天皇杯全日本サッカー選手権大会
1959年	34年	1月	第39回天皇杯全日本サッカー選手権大会
		6日	秩父宮スポーツ博物館に秩父宮妃殿下をお迎えして開館
		15日	ゴルフ練習場、ローラースケート場開場
		17日	卓球練習場開館
		4月10日	「皇太子ご成婚記念祝賀の夕」皇太子夫妻ご来場
		5月10日	屋内プール、スポーツマンホテル、文部大臣を迎えて開場
		17日	文部省主催「国民体育デー」
		26日	IOC総会で第18回五輪が「東京」に決定
		7月24日	「7万人の夕涼み」（花火大会・民謡舞踊など）
		8月16日	野外オペラ「アイダ」上演
		10月25～30日	第14回国民体育大会
			日本陸上競技選手権大会
1960年	35年	1月1日	ライスポウル
			第40回天皇杯全日本サッカー選手権大会
		7月24日	「7万人の夕涼み」
		10月7日	アジア庭球大会
			日本陸上競技選手権大会
1961年	36年		第41回天皇杯全日本サッカー選手権大会
		2月12日	総合スポーツ教室を主催
		7月24日	「7万人の夕涼み」
		10月	日本陸上競技選手権大会
1962年	37年		第42回天皇杯全日本サッカー選手権大会
		3月30日	拡充工事着工式。文部・建設大臣来場
1963年	38年		第43回天皇杯全日本サッカー選手権大会
		10月4日	文部大臣主催、国立競技場・新装完成披露会開催
		11～16日	東京国際スポーツ大会（プレオリンピックデー）、皇太子夫妻ご来場
			日本陸上競技選手権大会
1964年	39年		第44回天皇杯全日本サッカー選手権大会

※明治神宮外苑競技場と国立競技場に関連深い、陸上競技・サッカー・ラグビーを中心に国際的な試合や選手権、その他スポーツ以外のイベントなどを中心に採録。  
（『明治神宮外苑志』、『明治神宮外苑七十年誌』、『国立競技場十年史』、『国立競技場50年の歩み』を基に作成）



## 青山練兵場・明治神宮外苑競技場・国立霞ヶ丘陸上競技場史（略年表3）

西暦	和暦	月日	青山練兵場・明治神宮外苑競技場・国立競技場で過去に開催された主な出来事・大会・イベント
		7月2日	日本陸上競技選手権大会
		10月10～24日	第18回オリンピック東京大会（開会式・閉会式・陸上競技・馬術）
1965年			第45回天皇杯全日本サッカー選手権大会
		4月3日	秩父宮記念スポーツ博物館、秩父宮妃殿下をお迎えして再開
		10月	日本陸上競技選手権大会
1966年			第46回天皇杯全日本サッカー選手権大会
			トレーニングセンター開場
			「体育の日」を祝い日制定記念中央大会開催
			日本陸上競技選手権大会
1967年			第47回天皇杯全日本サッカー選手権大会
	42年	8月27日～9月4日	第5回ユニバーシアード東京大会
		9月27日,10月10日	メキシコオリンピックサッカー競技アジア地区予選
		11月13日	創立10周年記念式典
			日本陸上競技選手権大会
1968年	43年	1月14日	第48回天皇杯全日本サッカー選手権大会
			スポーツサウナ開場
		10月	日本陸上競技選手権大会
1969年	44年	1月1日	第49回天皇杯全日本サッカー選手権大会
		31日	第1回スポーツ写真展
		9月27・28日	第1回太平洋沿岸五カ国陸上競技大会
1970年	45年	1月1日	第50回天皇杯全日本サッカー選手権大会
		10月	日本陸上競技選手権大会
1971年	46年	1月1日	第51回天皇杯全日本サッカー選手権大会
		10月	日本陸上競技選手権大会
1972年	47年	1月1日	第52回天皇杯全日本サッカー選手権大会
		10月	日本陸上競技選手権大会
1973年	48年	1月1日	第53回天皇杯全日本サッカー選手権大会
1974年	49年	1月1日	第54回天皇杯全日本サッカー選手権大会
			ラグビー大学選手権大会
		4月6日	第1回プロ陸上競技大会
		10月	日本陸上競技選手権大会
1975年	50年	1月1日	第55回天皇杯全日本サッカー選手権大会
			ラグビー大学選手権大会
		15日	第13回日本ラグビーフットボール選手権大会（明治大学対三菱自動車工業京都）
		9月15日	国際ラグビー（日本代表対ウェールズ）
		10月	日本陸上競技選手権大会
		18日	第1回ジャパンボウル（全米学生選抜アメリカンフットボール）
1976年	51年	1月1日	第56回天皇杯全日本サッカー選手権大会
			ラグビー大学選手権大会
		15日	第14回日本ラグビーフットボール選手権大会（新日本製鐵釜石対早稲田大学）
		9月24日	メインスタンド改築工事完成。秩父宮妃殿下ご来場
		10月	日本陸上競技選手権大会
1977年	52年	1月1日	第57回天皇杯全日本サッカー選手権大会
			ラグビー大学選手権大会
		15日	第15回日本ラグビーフットボール選手権大会（トヨタ自動車工業対明治大学）
		9月10日	SAYONARA GAME IN JAPAN ベレ引退記念試合（ニューヨーク・コスモス対古河電工）
		14日	SAYONARA GAME IN JAPAN ベレ引退記念試合（ニューヨーク・コスモス対日本代表）
		10月	日本陸上競技選手権大会
1978年	53年	1月1日	第58回天皇杯全日本サッカー選手権大会

※明治神宮外苑競技場と国立競技場に関連深い、陸上競技・サッカー・ラグビーを中心に国際的な試合や選手権、その他スポーツ以外のイベントなどを中心に採録。  
（『明治神宮外苑誌』、『明治神宮外苑七十年誌』、『国立競技場十年史』、『国立競技場50年の歩み』を基に作成）

## 青山練兵場・明治神宮外苑競技場・国立霞ヶ丘陸上競技場史（略年表4）

西暦	和暦	月日	青山練兵場・明治神宮外苑競技場・国立競技場で過去に開催された主な出来事・大会・イベント
		15日	第16回日本ラグビーフットボール選手権大会（新日本製鐵釜石対日本体育大学）
		4月1日	国立競技場創立20周年記念日
		5月25・27・29日	第1回ジャパンカップ・サッカー
		9月10日	第3回日中対抗陸上競技大会
		25日	八ヶ国対抗陸上競技大会（14年ぶりに聖火台点灯）
		10月	日本陸上競技選手権大会
		8日	日本商工会議所百年祭。天皇・皇后両陛下ご来場
1979年	54年	1月1日	第59回天皇杯全日本サッカー選手権大会
			ラグビー大学選手権大会
		15日	第17回日本ラグビーフットボール選手権大会（新日本製鐵釜石対明治大学）
		5月31日～6月3日	アジア陸上競技大会
		6月14日～8月24日	改修工事のため全施設休業
		8月25日～9月7日	サッカー ワールドユース選手権（グループA6 試合、準々決勝1 試合、準決勝1 試合、3 位決定戦、決勝）
		10月	日本陸上競技選手権大会
		11月18日	第1回東京国際女子マラソン
1980年	55年	1月1日	第60回天皇杯全日本サッカー選手権大会
			ラグビー大学選手権大会
		15日	第18回日本ラグビーフットボール選手権大会（新日本製鐵釜石対同志社大学）
		10月	日本陸上競技選手権大会
		11月16日	第2回東京国際女子マラソン
			トヨタ ヨーロッパ/サウスアメリカ カップ（ナショナル対ノッティンガム・フォレスト）
1981年	56年	1月1日	第61回天皇杯全日本サッカー選手権大会
			ラグビー大学選手権大会
		15日	第19回日本ラグビーフットボール選手権大会（新日本製鐵釜石対明治大学）
		2月8日	第1回東京国際マラソン
		3月1日	第2回東京国際マラソン
		10月	日本陸上競技選手権大会
		11月15日	第3回東京国際女子マラソン
			トヨタ ヨーロッパ/サウスアメリカ カップ（フラメンゴ対リヴァプール）
1982年	57年	1月1日	第62回天皇杯全日本サッカー選手権大会
			ラグビー大学選手権大会
		15日	第20回日本ラグビーフットボール選手権大会（新日本製鐵釜石対同志社大学）
		1月31日	第3回東京国際マラソン
		10月	日本陸上競技選手権大会
		11月14日	第4回東京国際女子マラソン
			トヨタ ヨーロッパ/サウスアメリカ カップ（ベニヤロール対アストン・ヴィラ）
			第4回全日本女子サッカー選手権大会決勝戦（清水第八スポーツクラブ対FC ジンナン）
1983年	58年	1月1日	第63回天皇杯全日本サッカー選手権大会
			ラグビー大学選手権大会
		15日	第21回日本ラグビーフットボール選手権大会（新日本製鐵釜石対同志社大学）
		2月13日	第4回東京国際マラソン
		10月	日本陸上競技選手権大会
		11月20日	第5回東京国際女子マラソン
			トヨタ ヨーロッパ/サウスアメリカ カップ（グレミオ対ハンブルガー SV）
			第5回全日本女子サッカー選手権大会決勝戦（清水第八スポーツクラブ対高槻女子FC）
			ライスボウル
1984年	59年	1月1日	第64回天皇杯全日本サッカー選手権大会
			ラグビー大学選手権大会
		15日	第22回日本ラグビーフットボール選手権大会（新日本製鐵釜石対同志社大学）

※明治神宮外苑競技場と国立競技場に関連深い、陸上競技・サッカー・ラグビーを中心に国際的な試合や選手権、その他スポーツ以外のイベントなどを中心に採録。  
（『明治神宮外苑志』、『明治神宮外苑七十年誌』、『国立競技場十年史』、『国立競技場50年の歩み』を基に作成）

## 青山練兵場・明治神宮外苑競技場・国立霞ヶ丘陸上競技場史（略年表5）

西暦	和暦	月日	青山練兵場・明治神宮外苑競技場・国立競技場で過去に開催された主な出来事・大会・イベント	
		2月 12日	第5回東京国際マラソン	
		10月	日本陸上競技選手権大会	
		11月 18日	第6回東京国際女子マラソン	
			トヨタ ヨーロッパ/サウスアメリカ カップ（インデペンディエンテ対リヴァプール）	
			第6回全日本女子サッカー選手権大会決勝戦（清水第八スポーツクラブ対高槻女子FC）	
			ライスボウル	
1985年	60年	1月 1日	第65回天皇杯全日本サッカー選手権大会	
			ラグビー大学選手権大会	
		15日	第23回日本ラグビーフットボール選手権大会（慶応義塾大学対トヨタ自動車）	
		2月 10日	第6回東京国際マラソン	
		10月	日本陸上競技選手権大会	
		11月 17日	第7回東京国際女子マラソン	
			トヨタ ヨーロッパ/サウスアメリカ カップ（ユヴェントス対アルヘンティノス・ジュニアーズ）	
			第7回全日本女子サッカー選手権大会決勝戦（清水第八スポーツクラブ対高槻女子FC）	
			ライスボウル	
			国際青年年記念 ALL TOGETHER NOW（はっぴいえんど、サディスティック・ユーマン・バンドなどが出演）	
1986年	61年	1月 1日	第66回天皇杯全日本サッカー選手権大会	
			ラグビー大学選手権大会	
		15日	第24回日本ラグビーフットボール選手権大会（トヨタ自動車対大東文化大学）	
		2月 9日	第7回東京国際マラソン	
		10月	日本陸上競技選手権大会	
		11月 16日	第8回東京国際女子マラソン	
			トヨタ ヨーロッパ/サウスアメリカ カップ（リーベル・プレート対ステアウア・ブカレスト）	
			第8回全日本女子サッカー選手権大会決勝戦（清水第八スポーツクラブ対読売サッカークラブ女子・ベレーザ）	
			ライスボウル	
1987年	62年	1月 1日	第67回天皇杯全日本サッカー選手権大会	
			ラグビー大学選手権大会	
		15日	第25回日本ラグビーフットボール選手権大会（早稲田大学対東芝府中）	
		2月 8日	第8回東京国際マラソン	
		10月	日本陸上競技選手権大会	
		21日	ラグビー国際試合（オールブラックス初来日）	
		11月 15日	第9回東京国際女子マラソン	
			トヨタ ヨーロッパ/サウスアメリカ カップ（ボルト対ベニヤロール）	
			第9回全日本女子サッカー選手権大会決勝戦（清水第八スポーツクラブ対読売サッカークラブ女子・ベレーザ）	
			ライスボウル	
1988年	63年	1月 1日	第68回天皇杯全日本サッカー選手権大会	
			ラグビー大学選手権大会	
		15日	第26回日本ラグビーフットボール選手権大会（神戸製鋼対大東文化大学）	
		2月 14日	第9回東京国際マラソン	
		10月	日本陸上競技選手権大会	
		11月 20日	第10回東京国際女子マラソン	
			トヨタ ヨーロッパ/サウスアメリカ カップ（ナショナル対PSV）	
			第10回全日本女子サッカー選手権大会決勝戦（読売サッカークラブ女子・ベレーザ対高槻女子FC）	
			ライスボウル	
1989年	64年	1月 1日	第69回天皇杯全日本サッカー選手権大会	
	平成	元年	1月 8日	昭和天皇崩御のためサッカー高校選手権決勝等延期
				ラグビー大学選手権大会
			15日	第27回日本ラグビーフットボール選手権大会（神戸製鋼対早稲田大学）
		3月 19日	第10回東京国際マラソン	

※明治神宮外苑競技場と国立競技場に関連深い、陸上競技・サッカー・ラグビーを中心に国際的な試合や選手権、その他スポーツ以外のイベントなどを中心に採録。  
 （『明治神宮外苑誌』、『明治神宮外苑七十年誌』、『国立競技場十年史』、『国立競技場50年の歩み』を基に作成）

## 青山練兵場・明治神宮外苑競技場・国立霞ヶ丘陸上競技場史（略年表6）

西暦	和暦	月日	青山練兵場・明治神宮外苑競技場・国立競技場で過去に開催された主な出来事・大会・イベント
		10月	日本陸上競技選手権大会
		11月19日	第11回東京国際女子マラソン
			トヨタ ヨーロッパ/サウスアメリカ カップ (ミラン対ナショナル・メデジン)
			ライスボウル
1990年	2年	1月1日	第70回天皇杯全日本サッカー選手権大会
			ラグビー大学選手権大会
		15日	第28回日本ラグビーフットボール選手権大会 (神戸製鋼対明治大学)
		2月12日	第11回東京国際マラソン
		12月9日	第12回東京国際女子マラソン (唯一の神宮球場発着大会)
			トヨタ ヨーロッパ/サウスアメリカ カップ (ミラン対オリンピック)
1991年	3年	1月1日	第71回天皇杯全日本サッカー選手権大会
			ラグビー大学選手権大会
		15日	第29回日本ラグビーフットボール選手権大会 (神戸製鋼対明治大学)
		2月10日	第12回東京国際マラソン
		8月23～31日, 9月1日	第3回世界陸上競技選手権大会
		10月	日本陸上競技選手権大会
		11月17日	第13回東京国際女子マラソン
		12月	トヨタ ヨーロッパ/サウスアメリカ カップ (レッドスター・ベオグラード対コロコロ)
1992年	4年	1月1日	第72回天皇杯全日本サッカー選手権大会
			ラグビー大学選手権大会
		15日	第30回日本ラグビーフットボール選手権大会 (神戸製鋼対法政大学)
		2月9日	第13回東京国際マラソン
		10月	日本陸上競技選手権大会
		11月15日	第14回東京国際女子マラソン
			トヨタ ヨーロッパ/サウスアメリカ カップ (サンパウロ対バルセロナ)
1993年	5年	1月1日	第73回天皇杯全日本サッカー選手権大会
			ラグビー大学選手権大会
		15日	第31回日本ラグビーフットボール選手権大会 (神戸製鋼対明治大学)
		2月14日	第14回東京国際マラソン
		5月15日	Jリーグ開幕戦 (ヴェルディ川崎対横浜マリノス)
		10月	日本陸上競技選手権大会
		11月21日	第15回東京国際女子マラソン
		12月	トヨタ ヨーロッパ/サウスアメリカ カップ (サンパウロ対ミラン)
			FIFA U-17 世界選手権
1994年	6年	1月1日	第74回天皇杯全日本サッカー選手権大会
		9・16日	第1回Jリーグチャンピオンシップ戦
			ラグビー大学選手権大会
		15日	第32回日本ラグビーフットボール選手権大会 (神戸製鋼対大東文化大学)
		2月13日	第15回東京国際マラソン
		10月	日本陸上競技選手権大会
		11月20日	第16回東京国際女子マラソン
			トヨタ ヨーロッパ/サウスアメリカ カップ (ベレス対ミラン)
1995年	7年	1月1日	第75回天皇杯全日本サッカー選手権大会
			ラグビー大学選手権大会
		15日	第33回日本ラグビーフットボール選手権大会 (サントリー対明治大学)
		2月12日	第16回東京国際マラソン
		10月	日本陸上競技選手権大会
		11月19日	第17回東京国際女子マラソン
			トヨタ ヨーロッパ/サウスアメリカ カップ (アヤックス対グレミオ)

※明治神宮外苑競技場と国立競技場に関連深い、陸上競技・サッカー・ラグビーを中心に国際的な試合や選手権、その他スポーツ以外のイベントなどを中心に採録。  
 (『明治神宮外苑誌』、『明治神宮外苑七十年誌』、『国立競技場十年史』、『国立競技場50年の歩み』を基に作成)



## 青山練兵場・明治神宮外苑競技場・国立霞ヶ丘陸上競技場史（略年表7）

西暦	和暦	月日		青山練兵場・明治神宮外苑競技場・国立競技場で過去に開催された主な出来事・大会・イベント	
1996年	8年	1月	1日	第76回天皇杯全日本サッカー選手権大会	
					ラグビー大学選手権大会
				15日	第34回日本ラグビーフットボール選手権大会（東芝府中对明治大学）
		2月	12日	第17回東京国際マラソン	
			10月		日本陸上競技選手権大会
			11月	17日	第18回東京国際女子マラソン
1997年	9年	1月	1日	第77回天皇杯全日本サッカー選手権大会	
					ラグビー大学選手権大会
			15日	第35回日本ラグビーフットボール選手権大会（全試合開催）（東芝府中对トヨタ自動車）	
		2月	9日	第18回東京国際マラソン	
			10月		日本陸上競技選手権大会
			11月	30日	第19回東京国際女子マラソン
1998年	10年	1月	1日	第78回天皇杯全日本サッカー選手権大会	
					ラグビー大学選手権大会
			2月	8日	第19回東京国際マラソン
		10月			日本陸上競技選手権大会
			11月	15日	第20回東京国際女子マラソン
					トヨタ ヨーロッパ/サウスアメリカ カップ（レアル・マドリッド対ヴァスコ・ダ・ガマ）
			第20回全日本女子サッカー選手権大会決勝戦（プリマハムFCくノ一対日興証券ドリームレディース）		
1999年	11年	1月	1日	第79回天皇杯全日本サッカー選手権大会	
					ラグビー大学選手権大会
			2月	14日	第20回東京国際マラソン
		10月			日本陸上競技選手権大会
			11月	21日	第21回東京国際女子マラソン
					トヨタ ヨーロッパ/サウスアメリカ カップ（マンチェスターU. 対バルメイラス）
			第21回全日本女子サッカー選手権大会決勝戦（田崎ペルレーFC対プリマハムFCくノ一）		
2000年	12年	1月	1日	第80回天皇杯全日本サッカー選手権大会	
					ラグビー大学選手権大会
			2月	13日	第21回東京国際マラソン
		10月			日本陸上競技選手権大会
			11月	19日	第22回東京国際女子マラソン
					トヨタ ヨーロッパ/サウスアメリカ カップ（ボカ・ジュニアーズ対レアル・マドリッド）
			第22回全日本女子サッカー選手権大会決勝戦（日テレ・ベレーザ対田崎ペルレーFC）		
2001年	13年	1月	1日	第81回天皇杯全日本サッカー選手権大会	
					ラグビー大学選手権大会
			15日	第39回日本ラグビーフットボール選手権大会（サントリー対神戸製鋼（決勝戦のみ開催））	
		2月	18日	第22回東京国際マラソン	
			10月		日本陸上競技選手権大会
			11月	18日	第23回東京国際女子マラソン
			トヨタ ヨーロッパ/サウスアメリカ カップ（バイエルン・ミュンヘン対ボカ・ジュニアーズ）		
			第23回全日本女子サッカー選手権大会決勝戦（伊賀FCくノ一対田崎ペルレーFC）		
2002年	14年	1月	1日	第82回天皇杯全日本サッカー選手権大会	
					独立行政法人日本スポーツ振興センター法（平成14年法律第162号）が公布
					ラグビー大学選手権大会
			15日	第40回日本ラグビーフットボール選手権大会（NEC対サントリー（決勝戦のみ開催））	
	2月	10日	第23回東京国際マラソン		

※明治神宮外苑競技場と国立競技場に関連深い、陸上競技・サッカー・ラグビーを中心に国際的な試合や選手権、その他スポーツ以外のイベントなどを中心に採録。  
（『明治神宮外苑誌』、『明治神宮外苑七十年誌』、『国立競技場十年史』、『国立競技場50年の歩み』を基に作成）

## 青山練兵場・明治神宮外苑競技場・国立霞ヶ丘陸上競技場史（略年表8）

西暦	和暦	月日	青山練兵場・明治神宮外苑競技場・国立競技場で過去に開催された主な出来事・大会・イベント
1996年	8年	1月1日	第76回天皇杯全日本サッカー選手権大会
			ラグビー大学選手権大会
		15日	第34回日本ラグビーフットボール選手権大会（東芝府中対明治大学）
		2月12日	第17回東京国際マラソン
		10月	日本陸上競技選手権大会
		11月17日	第18回東京国際女子マラソン
			トヨタ ヨーロッパ/サウスアメリカ カップ（ユヴェントス対リーベル・プレート）
1997年	9年	1月1日	第77回天皇杯全日本サッカー選手権大会
			ラグビー大学選手権大会
		15日	第35回日本ラグビーフットボール選手権大会（全試合開催）（東芝府中対トヨタ自動車）
		2月9日	第18回東京国際マラソン
		10月	日本陸上競技選手権大会
		11月30日	第19回東京国際女子マラソン
			トヨタ ヨーロッパ/サウスアメリカ カップ（ドルトムント対クルゼイロ）
1998年	10年	1月1日	第78回天皇杯全日本サッカー選手権大会
		2月8日	第19回東京国際マラソン
		10月	日本陸上競技選手権大会
		11月15日	第20回東京国際女子マラソン
			トヨタ ヨーロッパ/サウスアメリカ カップ（レアル・マドリッド対ヴァスコ・ダ・ガマ）
			第20回全日本女子サッカー選手権大会決勝戦（プリマハムFCくノ一対日興証券ドリームレディース）
			1000万人ラジオ体操祭中央大会（誕生70周年を記念して開催）
1999年	11年	1月1日	第79回天皇杯全日本サッカー選手権大会
		2月14日	第20回東京国際マラソン
		10月	日本陸上競技選手権大会
		11月21日	第21回東京国際女子マラソン
			トヨタ ヨーロッパ/サウスアメリカ カップ（マンチェスターU. 対パルメイラス）
			第21回全日本女子サッカー選手権大会決勝戦（田崎ベルレーFC対プリマハムFCくノ一）
		2000年	12年
2月13日	第21回東京国際マラソン		
10月	日本陸上競技選手権大会		
11月19日	第22回東京国際女子マラソン		
	トヨタ ヨーロッパ/サウスアメリカ カップ（ボカ・ジュニアーズ対レアル・マドリッド）		
	第22回全日本女子サッカー選手権大会決勝戦（日テレ・ベレーザ対田崎ベルレーFC）		
2001年	13年		
			ラグビー大学選手権大会
		15日	第39回日本ラグビーフットボール選手権大会（サントリー対神戸製鋼（決勝戦のみ開催））
		2月18日	第22回東京国際マラソン
		10月	日本陸上競技選手権大会
		11月18日	第23回東京国際女子マラソン
			トヨタ ヨーロッパ/サウスアメリカ カップ（バイエルン・ミュンヘン対ボカ・ジュニアーズ）
2002年	14年	1月1日	第82回天皇杯全日本サッカー選手権大会
			独立行政法人日本スポーツ振興センター法（平成14年法律第162号）が公布
			ラグビー大学選手権大会
		15日	第40回日本ラグビーフットボール選手権大会（NEC対サントリー（決勝戦のみ開催））
		2月10日	第23回東京国際マラソン

※明治神宮外苑競技場と国立競技場に関連深い、陸上競技・サッカー・ラグビーを中心に国際的な試合や選手権、その他スポーツ以外のイベントなどを中心に採録。  
（『明治神宮外苑志』、『明治神宮外苑七十年誌』、『国立競技場十年史』、『国立競技場50年の歩み』を基に作成）

## 青山練兵場・明治神宮外苑競技場・国立霞ヶ丘陸上競技場史（略年表9）

西暦	和暦	月日	青山練兵場・明治神宮外苑競技場・国立競技場で過去に開催された主な出来事・大会・イベント
		10月	日本陸上競技選手権大会
		11月17日	第24回東京国際女子マラソン
			第24回全日本女子サッカー選手権大会決勝戦（田崎ブルーレFC対日テレ・ベレーザ）
			Dynamite! 史上最大の格闘技ワールド・カップ（プロレス・格闘技イベントで初開催）
2003年	15年	1月1日	第83回天皇杯全日本サッカー選手権大会
			独立行政法人日本スポーツ振興センター設立。管理団体になる。
		2月9日	第24回東京国際マラソン
		10月	日本陸上競技選手権大会
		11月18日	第25回東京国際女子マラソン
			第25回全日本女子サッカー選手権大会決勝戦（田崎ブルーレFC対日テレ・ベレーザ）
			第1回A3チャンピオンズカップ2003
			第55回全国社会人ラグビーフットボール大会決勝（サントリー対東芝府中）
			ジャパンラグビートップリーグ開幕戦（東芝府中对神戸製鋼）
2004年	16年	1月1日	第84回天皇杯全日本サッカー選手権大会
		2月8日	第25回東京国際マラソン
		10月10日	東京オリンピック40周年イベント
			日本陸上競技選手権大会
		11月21日	第26回東京国際女子マラソン
			第26回全日本女子サッカー選手権大会決勝戦（日テレ・ベレーザ対さいたまレイナスFC）
2005年	17年	1月1日	第85回天皇杯全日本サッカー選手権大会
		2月13日	第26回東京国際マラソン
		10月	日本陸上競技選手権大会
		11月20日	第27回東京国際女子マラソン
			第27回全日本女子サッカー選手権大会決勝戦（日テレ・ベレーザ対TASAKIブルーレFC）
			SMAPとイク？ SMAP SAMPLE TOUR FOR 62 DAYS.（単独公演としては史上初）
		9月3・4日	FIFAクラブワールドカップ
2006年	18年	1月1日	第86回天皇杯全日本サッカー選手権大会
		2月12日	第27回東京国際マラソン
		4月	AFCチャンピオンズリーグ（東京V対アレマ・マラン）
		5月16日	映画『GOAL!』ジャパンプレミア
		7月26日, 8月26日	各都府県推進の「子供見学デー」の一環として文部科学省から依頼を受け「スタジアム見学会」を初めて開催
		8月2～5・8日	A3チャンピオンズカップ
		10月8日	初の結婚式「スタジアムウェディング」
			日本陸上競技選手権大会
		11月19日	第28回東京国際女子マラソン
		12月11・13・15日	FIFAクラブワールドカップジャパン
			第28回全日本女子サッカー選手権大会決勝戦（TASAKIブルーレFC対岡山湯郷Belle）
2007年	19年	1月1日	第87回天皇杯全日本サッカー選手権大会
		9月22・23日	DREAMS COME TRUE コンサート「史上最強の移動遊園地 DREAMS COME TRUE WONDERLAND 2007」
		10月	日本陸上競技選手権大会
		11月18日	第29回東京国際女子マラソン
		12月7・9・12日	FIFAクラブワールドカップジャパン
			第29回全日本女子サッカー選手権大会決勝戦（日テレ・ベレーザ対TASAKIブルーレFC）
2008年	20年	1月1日	第88回天皇杯全日本サッカー選手権大会
		6月8日	パシフィックネーションズカップラグビー（日本代表対フィジー代表）
		8月2日	JOMO CUP（Jリーグ選抜とKリーグ選抜チームの間で行われるオールスターゲーム）
		9月6日	嵐 コンサート「arashi marks ARASHI AROUND ASIA 2008」
		10月	日本陸上競技選手権大会
		11月16日	第30回東京国際女子マラソン

※明治神宮外苑競技場と国立競技場に関連深い、陸上競技・サッカー・ラグビーを中心に国際的な試合や選手権、その他スポーツ以外のイベントなどを中心に採録。  
 （『明治神宮外苑志』、『明治神宮外苑七十年誌』、『国立競技場十年史』、『国立競技場50年の歩み』を基に作成）

## 青山練兵場・明治神宮外苑競技場・国立霞ヶ丘陸上競技場史（略年表 10）

西暦	和暦	月日	青山練兵場・明治神宮外苑競技場・国立競技場で過去に開催された主な出来事・大会・イベント
		12月 11・13・17日	FIFA クラブワールドカップ
			第30回全日本女子サッカー選手権大会決勝戦（日テレ・ベレーザ対 INAC レオネッサ）
2009年	21年	1月 1日	第89回天皇杯全日本サッカー選手権大会 東京都が2016年夏季オリンピック開催都市として立候補
		2月 4日	キリンチャレンジカップ2009（日本代表対フィンランド代表）
		19日	日本ラグビーフットボール協会会長の森喜朗元首相が国立霞ヶ丘の改修に言及
		5月 31日	キリンカップ（日本代表対ベルギー代表）
		9月 5・6日	第31回全日本女子サッカー選手権大会決勝戦（日テレ・ベレーザ対浦和レッドダイヤモンズ・レディース）
		11～13日	東京2009アジアユースパラゲームズ（陸上競技）
		7月 5日	石原裕次郎23回忌法要
		10月 31日	NISSUI TOKYO 2009 BLEDISLOE CUP（ニュージーランド・オールブラックス対オーストラリア・ワラビース）
		10月	日本陸上競技選手権大会
		11月 7日	AFC チャンピオンズリーグ決勝戦（アル・イテハド対浦項スティーラース）
2010年	22年	1月 1日	第90回天皇杯全日本サッカー選手権大会
		2月 7・11・14日	第4回東アジアサッカー選手権2010 第32回全日本女子サッカー選手権大会決勝戦（INAC 神戸レオネッサ対浦和レッドダイヤモンズ・レディース）
			スルガ銀行チャンピオンシップ2010（FC東京対LDUキト）
		8月 4日	嵐 コンサート「10-11 Tour "Scene" ～君と僕の見ている風景～」（史上初の4日公演）
		9月 10～12日	天皇賜杯第79回日本学生陸上競技対校選手権大会
		10月	日本陸上競技選手権大会
		31日	第50回東京女子陸上競技大会（東京レディース陸上2010）
		11月 13日	AFC チャンピオンズリーグ決勝戦（城南一和天馬対ゾブ・アハン）
2011年	23年	1月 1日	第89回天皇杯全日本サッカー選手権大会
		3月 29日	キリンチャレンジカップ（日本代表対ニュージーランド代表） 東京都は2020年の夏季オリンピック開催都市への立候補を表明
		8月 21・22日, 9月 3・4日	第33回全日本女子サッカー選手権大会決勝戦（INAC 神戸レオネッサ対アルビレックス新潟レディース）
		10月	日本陸上競技選手権大会
		11月 3日	国立競技場ファンラン DAY2011～走食体感～ The road to LONDON!
2012年	24年	1月 1日	第91回天皇杯全日本サッカー選手権大会
		2月 16日	国立霞ヶ丘陸上競技場（国立競技場）を8万人収容のスタジアムに改築を正式に発表
		17日	日本スポーツ振興センターの河野一郎理事長が「世界一のものをつくりたい」とコメント
		5月 2日	AFC チャンピオンズリーグ2012
		26・27日	L' Arc ～ en ～ Ciel 「WORLD TOUR 2012 THE FINAL」
		7月 11日	キリンチャレンジカップ（なでしこジャパン対オーストラリア代表）
		20日	「新国立競技場」（仮称）デザインの国際デザインコンクールの詳細を発表し公募
		8月 26・30日, 9月 4・8日	FIFA U-20 女子ワールドカップジャパン（グループリーグ2試合、準々決勝2試合、準決勝3位決定戦、決勝）
		9月 20・21日	嵐 コンサート「ARAFES」
		10月	日本陸上競技選手権大会
		11月 15日	国際デザインコンクール応募作品46（国内12点、海外34点）の中からザハ・ハジド・アーキテクトが最優秀賞
2013年	25年	1月 1日	第92回天皇杯全日本サッカー選手権大会
		3月 19日	新国立競技場国際デザインコンクール表彰式
		6月 16日	東日本大震災復興支援 2013Jリーグスペシャルマッチ（Jリーグ TEAM AS ONE 対 Jリーグ選抜）
		9月 7日	ブエノスアイレスでの第125次 IOC 総会にて2020年夏季オリンピック開催都市が東京に決定
		20・21日	嵐 コンサート「ARAFES」
		10月	日本陸上競技選手権大会
			IAAF 認定陸上競技場クラス2 検定実施
2014年	26年	1月 1日	第93回天皇杯全日本サッカー選手権大会
		3月 5日	キリンチャレンジカップ2014（日本代表対ニュージーランド代表）
		9日	第51回 日本ラグビーフットボール選手権大会 決勝

※明治神宮外苑競技場と国立競技場に関連深い、陸上競技・サッカー・ラグビーを中心に国際的な試合や選手権、その他スポーツ以外のイベントなどを中心に採録。  
（『明治神宮外苑誌』、『明治神宮外苑七十年誌』、『国立競技場十年史』、『国立競技場50年の歩み』を基に作成）



## 青山練兵場・明治神宮外苑競技場・国立霞ヶ丘陸上競技場史（略年表 11）

西暦	和暦	月日	青山練兵場・明治神宮外苑競技場・国立競技場で過去に開催された主な出来事・大会・イベント
		15・16日	ももいろクローバーZ (ももクロ) コンサート「ももクロ春の一大事 国立競技場大会 NEVER ENDINGADVENTURE 夢の向こうへ」
		21・22日	L' Arc ～ en ～ Ciel LIVE 2014 at 国立競技場
		29・30日	AKB48 単独コンサート「AKB48 単独&グループ春コン in 国立競技場～思い出は全部ここに捨てていけ!～」
		5月 11日	セイコーゴールデンランプリ陸上 2014 東京
		17・18日	ポール・マッカートニー (アウト・ゼアー ジャパン・ツアー 2014) 中止
		25日	ラグビー・アジア五カ国対抗 2014 第4戦 (日本代表 対 香港代表)
		28・29日	SAYONARA 国立競技場 FINAL WEEK JAPAN NIGHT
		31日	SAYONARA 国立競技場 FINAL “FOR THE FUTURE”

※明治神宮外苑競技場と国立競技場に関連深い、陸上競技・サッカー・ラグビーを中心に国際的な試合や選手権、その他スポーツ以外のイベントなどを中心に採録。  
 (『明治神宮外苑志』、『明治神宮外苑七十年誌』、『国立競技場十年史』、『国立競技場 50年の歩み』を基に作成)